

うちのカルデアに星5の
鯖がようやく来たんだ
けど、全クラス揃える
とか夢物語だよね？

四季燦々

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最近、FGOにはまっていたので本当に久しぶりに1本書いてみました。

ちなみにタイトルはうちのカルデアの状況そのままです。

追記

星5がようやく来てくれたため、タイトル変更。今後ともよろしく願います。

旧：『うちのカルデアに星5の鯖が来ないんだけど、あれって都市伝説だよね?』

目次

第1部

うちのカルデアに星5の鯖が来ないんだけど、あれって都市伝説だよな？

1

ハロウィンよりも後輩の礼装について話があるんだけど、あれって最高だよな

?

14

単発呼符って意外と星5当たるらしいんだけど、あれって冗談だよな？

28

定期的にピックアップガチャあるんだけど、あれって普通のガチャと同じだよ

ね？

42

つい先日クリスマスイベとかあったんだけど、流星に時期が早すぎだよな？

58

年末になってもうちのカルデアに星5の鯖が来ないんだけど、あれって来年また出直して来いってことだよな？

75

冠位時間神殿ソロモン

前編

—

92

冠位時間神殿ソロモン

後編

—

110

うちのマスターがお年玉をもらったんだけど、これって小説のタイトルのアウトだよな？

133

第1・5部

ガチャは舞えば出るってフアラオに言われたんだけど、あれってやっぱり迷信だよな？

149

待ちに待ったバレンタインガチャが来たんだけど、やっぱり眼鏡女子って至高だよな？

167

ちよつと新宿に行ってきたんだけど、今回の話でオルタ勢の魅力が爆発だよな？

193

ぐだぐだイベントで魔神セイバーの噂が出てたけど、いつか実装されるはずだよな？

214

お花見の季節になったんだけど、カルデアのメンツで普通にやるとか無理だよな？

234

ぐだぐだ明治維新すごく面白かったんだけど、あれってぐだぐだじゃなくてシリ阿斯だよな？

257

快樂の海に危うく沈みかけたんだけど、まさかの展開に予想とか不可能だよな？

278

羅生門と鬼ヶ島で鬼退治に行ってきたんだけど、鬼って容赦なさすぎだよな？

308

アガルタって女性の国だったんだけ

ど、主人公の周りには女の子いなかったって嘘だよな？

331

無人島の開拓をしてきたんだけど、それよりも水着美女の方が重要だよな？

358

星5確定ガチャって有償だったんだけど、それをふまえても破格のガチャだよな？

386

女神って威厳を感じたりするんだけど、神話を見ると善悪が酷く極端だよな？

404

番外編 Matthews Diana ry

427

剣に生きた者の行く末を見届けたんだけど、やっぱり零に至るは美しき華だよな？

441

狂気の地に足を踏み入れたんだけど、絶望を乗り越えることこそ人間の底力だよな？

471

今年もお正月召喚に挑戦してきたんだけど、新年だし大盤振る舞いで大丈夫だよな？（前編）

489

今年もお正月召喚に挑戦してきたんだけど、新年だし大盤振る舞いで大丈夫だよな？（後編）

510

百重塔を登ってきたんだけど、踏破

云々よりも英霊達の温泉シーンの方が魅

力的だよね？

530

番外編 Matthews Dia

ry 2

551

第2部

極寒の地で奪う覚悟を決めたんだけ

ど、生の意味を証明することも戦う理由

だよね？

568

夢幻の聖杯大戦を駆け抜けてきたんだ

けど、採集大戦になったのは不可抗力だ

よね？

604

ぐだぐだ帝都で斬り結んできたんだけ

ど、魔神とか言うわりには沖田オルタつ

て純粹さの塊だよね？

626

神々の黄昏を越えた女神の世界で手を

取りあつたんだけど、人の可能性は無限

大だよね？

648

女神ピックアップと福袋で盛り上がつ

たんだけど、思い通りにいかないからこ

その縁だよね？

676

南国の島で水着を堪能する予定だつた

んだけど、いつの間にか同人誌で世界を

救うことになってるとか意味不明だよね

？

703

番外編 Matthews Dia

ry 3

737

絶対統治の世界で憎悪に囚われた人と
邂逅したんだけど、変わらぬ想いこそ真
実の愛だよね？

第1部

うちのカルデアに星5の鯖が来ないんだけど、あれって都市伝説だよな？

部屋中を明るく照らす光が触媒となっている十字盾の上へと収束していく。何かに対して呼びかけるように優しく集っていくその光は、折り重なるようにその力強さを増していき、やがて大きな光体へと変質していった。

その前に立つ人物が2名いる。1人は少年、よくて青年といった若年の人物。日本人らしい黒髪は光から発せられる圧力と風によって揺れ、同じく日本人らしい黒い眼はこの眩さの中これでもかと言わんばかりに見開かれている。

もう1人の人物は薄い桃色の髪を揺らす眼鏡をかけた少女だ。おそらく少年と同じ年ぐらいだろう。どちらかというところ平凡な顔立ちの少年とは違い、紛れもなく10人に聞けば10人が美少女と答える容姿。平時であれば柔らかな雰囲気零れているであろうその表情は、今は緊張の面持ちで光の中心地を凝視していた。

そんな2人が見守る中、ついに光の中心から今までで一番の光が爆発するかのよう

輝きだした。あまりの光量に2人は目を潰されないように反射的に目を閉じる。大気中に溶けていくように光は霧散していき2人はようやくやくその中心地を確認。そして――

「――バーサーカー、スパルタクス。早速で悪いが、君は圧制者かな？」

「――帰れえええええ!!!」

とりあえず少年は目の前の人物に全力を持って飛び蹴りをぶちかますのだった。

「もうスパルタクスはいいわ!! 宝具レベルもとつくに5だよっ! 何回出てくんだよ!?! と
いうか、どうせ出てくるならマタ・ハリさんとか出て来いやっ! いや、それもとつくに
宝具のレベル5だけでも! こう絵面的な意味で筋肉達磨とエロい姉ちゃんとかじやまだ
マシなんだよ!!」

「せ、先輩落ち着いてください! スパルタクスさんは何も悪くないです! それに、ここま
で英霊に好かれるなんてすごく良いことじゃないですか!」

「筋肉ムキムキの変態パンツに好かれても嬉しくないよっ!?! ちくしょうめ!」

召喚したスパルタクスをマッドで美人で、実は大本は男でいろいろぶっ飛んでいる天
才の下へと送り出したオレは荒れていた。後輩系超天使な我が相棒にして最初のサー
ヴァントであるマシユに宥められ、徐々に落ち着きを取り戻していくが、召喚の度にこ
うも同じことが繰り返されると気が滅入るといふものだ。

「はあく、どうしてうちにはこう星5のサーヴァントつて来ないんだろ。オレ彼らにな
んか悪いことしたかな……」

「特に何もしてないと思いますけど、やはりそこは先輩のリアルラックの問題なので
はないでしょうか?」

「人生やり直してラックにステ極振りしてこいつてか」

やだ、うちの後輩系小悪魔なサーヴァント辛辣すぎ。世の中の不平等さと相棒の悪意

のない言葉に突き刺されていたオレは辺りを見渡す。今回召喚したものがゴロゴロと転がるその風景を今一度確認してみた。

赤の黒鍵、緑の黒鍵、青の黒鍵、アゾット剣、アゾット剣、ライオンのぬいぐるみ、激辛麻婆豆腐、赤の黒鍵、青の黒鍵……

剣系の概念礼装多すぎイ!!うちのカルデアにはアーチャーのエミヤすらいねえんだぞ?!つか、黒鍵と麻婆とかどこの愉悦神父だこらあ?!むしろここまできるとなんでライオン出てきた!?!サーヴァント出て来いサーヴァント!!

「もうマジでなんでだよ。なんでここには同じサーヴァントしか出てこないんだよ。おかげでキヤメロットじゃ火力不足で仕方なく令呪でブーストしまくったんだぞ……」

「エウリュアレさんとロビンフッドさんが異様なほど活躍しましたよね」

「あの2人いなかったら確実に途中で詰んでたわ。特にガウエインで」

魔力もカツツカツになりまくって干からびるかと思っただわ、と出てきた礼装を事前に持ってきていた箱に回収しながら愚痴る。とりあえずライオンは最近来たばかりの褐色白髪の小悪魔娘にでもやるとしよう。普段は無駄に妖艶な大人ぶっているが意外とこういうかわい系好きそうだし。

「先輩、このあとどうしますか?まだ挑戦してみます?」

「いや、もう今日はいいや。というかどうせ星5なんて出ないだろうから今いる戦力の

強化でも考えよう。主に種火とか再臨素材の優先度を」

「なら私も」一緒にしてもよろしいですか？この後は特に用事もないので」

「もちろんいいぞー。というか、マシユも一緒に考えてくれるとありがたい」

オレの返答の何かがお気に召したのかマシユは嬉しそうに笑う（可愛い）。彼女は礼装の入った2つある箱のうち1つを持ってくれた。本来であれば力仕事は男であるオレの役目なのだが、彼女はサーヴァントであるためその細い体つきからは想像もつかないほど力持ちだ。つか、ただの一般人であるオレよりも普通に力がある。腕相撲しようものなら瞬殺されるレベルで。

隣で楽しそうに笑う彼女に癒されつつ、オレ達は清潔感溢れる廊下を談笑しながら歩き始めた。

きつかけはほとんど偶然だった。人理継続保障機関、通称カルデアに足を運んだのは。そもそも魔術の家系に生まれはしたものの、ほぼ没落状態であったため魔術などに

は関わらず普通の生活を送っていたオレの下にカルデアから連絡がきたのだ。マスター候補の1人として選ばれた、と。

唐突な招待状になんでよりにもよってオレが、とまるで意味が分からんぞ的な状態だったが、退屈な生活に飽き飽きしていたため、思い切って遠路はるばる標高6000メートルもの雪山の地下に作られたこの施設へと訪れたのだ。もつとも交通費はカルデア持ちだったからというのものもある。実費だったのなら絶対にこんな辺境な地には来ない。

なんか、長くなってきたな……。簡潔にまとめよう。

カルデアで事故に巻き込まれて他のマスター候補もろとも人理が滅ぶ（なお事故ではなく事件だったもよう）

←

「お前これから人類最後のマスターな」

「フアッ!？」

←

「サーヴァントと時代修正の旅へレッツゴー!」

「MA☆TTE!」

←

魔術王が人理を滅ぼした？なにおー！ゆ”る”ざん”！

←

とりあえず第七特異点待ち↑今ココ！

というわけで、最初のサーヴァントであるマシユとともに今日まで何とか生きてきたのである。いや、ほんと今まで何度死にかけたことか。こちとら魔術の家系とはいえただのパンピーなんよ？魔力とかほぼ無いんだぞ？魔術とかカルデアの礼装使つてようやくレベルよ？しかも1度使つたらリチャージに滅茶苦茶かかるんだぜ……。

こんなへっぽこマスターであるオレが手っ取り早く戦力を得ようと考えた場合、行きつくのは英霊召喚である。要は強いサーヴァントを召喚してそいつらに戦闘とか全部任せちゃおうぜというわけである。

そんなわけで聖晶石やら呼符やら使つて召喚を行うわけだが、何故かオレのところには星5のサーヴァントが来ない。星4ですら100回引いて1回出るかどうかの割合で来ない。マジで来ない。呪われてるんじゃないかってレベルで来ない。

ただでさえクソザコマスターであるオレだが、おまけに運もないとかダメっぷりに拍車がかかりすぎて。よくもまあこんな奴に人類の未来を託したものだとか誰か笑つてくれ。ほら、笑えよ。早く笑えよ！いいから笑つてくれよお……！

「せ、先輩？いきなり笑いだしてどうしたんですか？というか泣いてるっ!」

「なんかもう死にたくなってきた……」

「本気でどうしたんですか!?! ああ、もうそんな顔して……」

そういつてハンカチを差し出してくるのは、マイルームのテーブルを挟んで前に座る後輩系超天使（2回目）。うう、今はその優しさが身に染みるぜい……。

男としてもマスターとしても情けない姿を晒したオレは渡されたハンカチで今更恥も外聞も無いと目からの水を拭き取る。それを見てはマシユはしようがないですねと苦笑しながら眼鏡越しにオレを眺めてきた。うちの相棒が天使過ぎて辛い。

そもそも、別に今のサーヴァント達に不満があるわけではない。聖人悪人狂人変人ともはやなんでもありな連中ではあるが、ここまで共に戦ってきた大切な仲間なのである。苦しい戦いを一緒に戦い抜き、死にそうなところを何度も助けてもらったりした。そんな奴らに不満など抱くわけがない。

「それにしても、本当にどうしたんですか。いきなり泣き出すなんてさっきスパルタクスさんに突撃したときにどこか痛めましたか?」

「い、いやそうじゃなくて……」

「そうじゃなくて?」

「なんと言うか、オレって頼りないマスターだよなあって思ってた。魔術もろくに扱えないし、戦闘なんかじゃサーヴァントの後ろに隠れているだけの案山子だし、じゃあ戦力

を強化して皆の負担を減らそうって思って召喚しても強いサーヴァント呼べないし……」

「先輩……」

「オレには皆を直接守る力なんてない。だから、強いサーヴァントを呼んで、少しでも皆の危険性が無くなればいいと思っただけど、それらには見向きもされない。これから戦いはさらに厳しくなるってのに、オレは皆の為にできることが……」

アカン、言っててさらに死にたくなってきた。自分で自分の不甲斐なさを列挙してみたけどこれは酷い。いつまでたっても魔術師として成長の欠片も見えず、戦力補給もできず、終いには後輩にこんな愚痴をこぼすオレをマシユや他のサーヴァントの皆も呆れるよなあ……。

「——そんなことありません！」

「はえっ?」

「先輩は頼りないマスターなんかじゃないです!他の方達もきつと同じ気持ちです!」

またもや自嘲した笑いがこみ上げてきそうになっていたその瞬間、オレの意識を引き

上げるようにマッシュが鋭い声を上げた。あまりに勢いが強かったため思わず変な声が出てしまった。

「私達サーヴァントが戦えるのは先輩というマスターがいるからです。どんなに強い相手が立ち塞がるうと先輩と一緒に乗り越えられる、後ろから私達を支えてくれる。そう信じているから私達は負けないんです。諦めずに立ち上がれるんです」

「支えるって……でもオレにはそんな力なんか……」

「確かに先輩の魔力はマスター候補の中でもぶつちぎりですらないですし、ダヴィンチちゃんも『むしろなんで魔力持つてんの？アクセサリーかなんか？』と言っていました」
「ここで上げて叩き落すうちの先輩マジパネエ。油断しているときに渾身のボディーブローとかノックアウト必至だぜ……！」

「メドユーサさんみたいに美人な方にはデレデレしますし、ブルーティカさんみたいに胸の大きい人を見つけるとすぐ凝視してますし、ナーサリーさんみたいな小さい子達には異様に優しいですし……！」

「待てい！今それ関係ないよね!?あと最後のやつは誤解を招くからやめてくんないっ!?
そして具体的に名前出すと信憑性が増しちゃうから！」

「上げて上げてその後全力で叩き落すなんてドSティックな技術どこで学んできたのっ！お父さんそんなの許しませんよ！」

「それでも先輩は私達のマスターなんです。私達が最も信頼して、一緒に人理を救いたいと思える、そんな人なんです」

「マシユ……」

「だからそんな悲しいこと言わないでください。本当に先輩の言う通り先輩に何の力もなかったとしたら、私達はこれまでの六つの特異点のいずれかで倒れていたはずですよ。そうならないのは何より、私達のマスターが先輩だったからです。強力なサーヴァントがいなくても、カルデアの皆さんの力を存分に引き出せる先輩だからこそ私達は勝つことができているんです。こんなマスター、どの時代どの場所を探しても先輩以外いませんよ」

力強い瞳だった。けどそれは思わず目を逸らしたくなるような強さではなく、守りの力を持つ彼女だからこそその温かさと包容力のある瞳。そんな、優しい強さだった。その優しさに包まれていたら、なんだかさっきまでの自分が情けなくなってきた。

「ごめん。ちよつとオレ自棄になつてたかもしれないねえ。そうだよな。星5のサーヴァントなんかいなくても皆がいるんだ。それさえあれば、誰にも負けないよな。例えあの魔術王だろうと」

そうだ、なに弱気になつてんだオレは。戦力が少ないのは百も承知。魔力が圧倒的に少ないオレが切れる手札も限られてる。そんなの初めからずつと変わっていないじゃ

ないか。今更楽な道に逃げようなんて発想がすでに間違ってるんだ。できることを100%やりきる、そんな基本的なことを忘れそうになつていたとは。

星5がなんだ。星4や星3、星2でも星5に負けない力を発揮してくれる奴らはいらぬ。例えばステータスで劣つていようとも、それをどうにかするのがマスターであるオレの役目だ。力が無くても考えるんだ。大事な仲間達と最善で最良で最高の結末を迎えるために。

「——ありがとな、マシユ。こんな頼りないダメダメマスターだけど、これからもその背中預けてくれるか？」

「——はいっ！もちろんです！」

美しく咲き誇る花。その髪色もあつて満開の桜のように咲き誇つた笑顔を見せる彼女はとても美しかった。その笑顔は迷つてうじうじしてばかりのオレに、再び固い決意をさせる。

——この笑顔が溢れる世界を守るためならオレはいくらでも立ち上がろう。弱くても無様でも醜くとも歴史という大きな壁に抗おう。仲間たちと共に人類の未来だつて救つてやろう。

「それじゃ、誰を優先的に強化するか考えるか」

「そうですね。最近入ってきたクロさんはどうでしょうか？ 宝具の回転率もいいらしい

ですし、強化していけばアーチャーとして秀でた力を発揮できると思います」

——行くぞ、魔術王。特異点^{聖杯}の貯蔵は十分か。

「あつ、そういうえば先輩。聖杯転臨って知ってますか？なんでも星5じゃないサーヴァントでも星5以上の性能にレベルアップできるそうですよ？」

「マシユ、さすがにこの話の流れでそれは台無しだと思っんだ……」

ハロウィンよりも後輩の礼装について話があるんだけど、あれって最高だよな？

グルグル回して、はい、ドオーン！

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。ここに参上仕った」

「はい、ダヴィンチちゃんはあつちですよ。もうドラゴンスレイヤーさんはいらんとですよ。できればすまないさん来てくださいよー」

出てきた人物が誰か分かった瞬間、オレは親指を立てて部屋の扉を指差す。そんな適当すぎるオレの態度に思わず漏れてしまった苦笑を隠そうともせず小次郎さんは朗らかに口を開いた。

「主殿や、貴殿の心中は重々承知の上で敢えて問うが、少々自棄が過ぎぬか？そのようでは主殿の為に振るう我が刃も鈍ってしまうというものだ」

「心中察してくれるならもう少し出てくるの抑えてくんない？小次郎さんの口上何度聞いたと思ってるの？そして、このやり取り何回目だと思ってるの？」

少なくとも顕現口上に関しては50回は余裕で聞いているぞ。お前さんとスパさんとアーラシユさんはオレの中で顕現回数トップ争いしてるわ。

それから数回言葉を交わし、美丈夫で雅な侍をダヴィンチちゃんの元へと送り出したオレ。

いや、仲が悪いわけじゃないよ？あんなやり取りしたけど、奇人変人が多いサーヴァントの中でも小次郎さん滅茶苦茶良い人だし、偶に共に将棋差したりすることもある。こういうフレンドリーな態度も親しい間柄だからこそその空気つてやつだ。

それに一番いいのはあの宝具だ。他の次元から斬撃持つてくるとか超かっこいい。星1だけどオルレアンでは大活躍してくれたしね。

そんなわけで、今日も今日とてガンガン回します。しかし、相変わらず英霊の座に嫌われているのか分かんが星1、2ばかり出て来ます。前回マシユと話して今いる皆と一緒に頑張ろうとは思いつたものの、やはり戦力が強化できるのであればそれに越したことはないとりあえず回しているがやつぱり出ない。

この前ネロ祭なるものが開かれ、こりやネロちやまにゲットできるチャンスだと思いき意気揚々と回したものの、出て来たのは赤でも嫁でもなく、何故かカーミラさん。ねえ、アイドルの奴含めて何度も出て来て恥ずかしくないんですか？（真顔）

「あつ、先輩。ここに居たんですか」

ウイーンと未来的な音を奏でて召喚部屋に入つて来たのは我らが守り女神のマシユ。いつものカルデア内での服装で眼鏡を着用した彼女はオレの姿を見つけるやいなやト

テトテと小動物の如く歩み寄って来た（可愛い）。

「どうしたマシユ。何かあったか？」

「エリザベートさんが先輩の事探してましたので私もそのお手伝いを。何でも新しい特異点についてお話ししたい事があるとか」

「うへえ、とうとう気づきやがったかあのドラ娘」

マシユが言ってるのは、先日我がカルデアに来たドラゴンバカ娘（ハロウィンver）のことだ。この前ハロウィンイベントを終わらせて、ようやくあの滅びの歌から解放されたと思っていたのだが、また何かあの城で起こっているらしい。いい加減呪われてんじやねえかと思うぐらいあのバカ娘には縁がある。

今回の特異点に関しても少し前から見つかってはいたのだが、どうせ碌なことにならんと黙っていたのだ。まあ、小さくとも間違いない特異点であるためどうせ近いうちに行かなければならなかったわけだが。ほら、少しくらい現実逃避しても罰は当たらないと思うんだ。

「あつ、そういうやまだ召喚サークルに影響が出てるかどうか調べてなかった。ちようど10連1回分の石もあるし試しにやってみるか。そんなに時間は取らせないし、マシユも見ていかないか？」

「そうですね。エリザベートさんののも急ぎというわけではなさそうですし、お付き合い

します先輩」

あつ、今の『お付き合います』にちよつとトキめいた。仕方ねえだろう。うちの後輩は超可愛いのだ（直球）。

さて、召喚サークルに影響が出るということだがこれはどういう意味なのか。魔力のせいなのかサーヴァントの力なのかはたまたカルデアのシステムによるものなのか分からないが、変な特異点が発生するたびにその特異点に関連するサーヴァントが召喚されやすくなるのだ。何でだろうね。

ポイポイポイっともはや手慣れた動作で聖晶石を30個サークルの中へと放り投げた。全て入ったのを待っていたかのようにグルグルと回転し始める召喚サークルは、やがて目を眩ませるような派手な閃光を放った。

「どうなりますかね?」

「うーん、白、白、白……普通の反応ばつかで金色はねえな。見事に外れだ」

まあ、残念な結果ではあるがそもそもオレの下に金鱈が来る事自体おかしいのだ。そう、つまりはこれは正常な反応であり何もおかしくはない。いいね?」

とりあえず、出て来た奴らを確認しますか。もしかしたら星5とか星4でなくとも初めて会う奴もいるかもしれない。

そう思っていたら、やがて光が収束していき、1つの人影を残しカシャンだのゴトン

だのボトンだの様々な不協和音を奏でて礼装が落ちて来た。

「すべて、すべて、貴方の御心のままに。私はすべてを捧げます。この体も。この心も、全て……」

発光が終わり、いつもの召喚部屋が目の前に広がる。少しだけ違うのは、そこにはすでに慣れてしまった少女がいた事だった。青いショートに骸の仮面、やや露出が多い闇と同化しているような少女。というか、静謐のハサンちゃんだった。

ちなみに我がカルデアでは呪腕のハサンを『ハサン先生』。百の貌のハサンを『ハサンさん』。そしてこの静謐のハサンを『ハサンちゃん』と呼んでいる。本名は……あまり本人達がいい顔をしないので呼ばないようにしている。サーヴァントとして、そして『ハサン』を継ぐものとしてのプライドのようなものらしい。

「あー、ハサンちゃん。せっかく来てくれたところ悪いんだけどよ……」

「マスターのおっしゃりたいことは分かっています。ここにはもう私がいるみたいですし、ダヴィンチさんの下へと向かいますね」

ハサンちゃんは骸の仮面を外し、わずかに口元に弧を描きながら答える。

「すまんな。わざわざ来てくれたってのにすぐに追い返すような真似して」

なに？ 同じアサシンである小次郎と比べて扱いに差があるって？ 可愛いのは正義だからいいんだよ。というか、あんな風来坊と違ってこの子は繊細なの！ 扱いミスるとすぐ

捨てられた子犬みたいな顔するからオレも慎重になるの！そこも可愛かったりするんだけどね！

「いえ、マスターのためですから。あなたに全てを捧げている私には、これくらい何ということありません」

「相変わらず変に固い奴だなあ。そこまで肩肘張らなくてもいいんだよ？まあ、お詫びと言つちやなんだけど、この後美味しい物でも作るからぜひ食べていつて」

こう見えて料理は得意なんだ。うちにはおかんことエミヤがいないから、現在うちの料理長をしているブーデイカさんに教わりながら結構な頻度でサーヴァント達に料理を振舞っている。特異点先じゃサーヴァントの状態を最高に保つのがマスターの仕事だ。食事が仮に必要でなくとも、お腹を満たしておけば戦う活力ぐらいにはなってくれるしな。

「いえ、マスターにそのようなお手を煩わせるようなことをしてもらおうわけには……」

「いーからいーから。こういう時は素直に甘えとけて。じゃあ、礼装片付けるからちよつと待つてくれ」

「お心遣い、感謝しますマスター。それでは片付け、私も手伝います」

「本当か？助かるよ」

そんなじゃ、相変わらずゴロゴロと転がっている礼装を集めますか。今回は実体化して

ない礼装もあるしな。

礼装は実体化して召喚されるものとそうでないものがある。主に実体化されるのは黒鍵だのぬいぐるみだのアゾット剣だのと言った小物ばかりだが、礼装の中には人物や建物といったものまで幅広く存在している。

英霊でもないただの人間が召喚されるわけもないし、建物みたいな馬鹿でかいものまでこの召喚部屋で召喚されようものなら、カルデアが崩壊しかねない。なので、召喚サークルが自動で処理してくれるのかそういうものは実体化していないカードのようなものに表記されて召喚されるのだ。今だに仕組みについてはまるで意味が分からんぞだが。

長くなったが、さっさと片付けて食堂にでも行こうか。ハサンちゃんは先に回収を始めてしまっていたのでオレもすぐに始めようと行動を開始しようとした瞬間、クイッとカルデアの制服の袖が引かれた。

「……どつたの、マシユ？」

「ハサンちゃんさんだけズルいです……」

袖を引いてきたのはムスツと頬を膨らませたマシユだった。というかハサンちゃんさんって……。

不機嫌になっているのか、眼鏡の奥の可愛らしい瞳からジト〜つとした視線を向けら

れる。これはこれで興奮しないでもないが、流石にそんな表情をされて意図が分からないほどオレは鈍くはない。どれだけ一緒にいたと思ってるんだ。

ポンポンと、その桜色の髪を数度宥めるように優しく撫でる。柔らかな感触と女の子らしい良い匂いに思わずクラつとなりかけてしまった。

「えっと、そのマシユにも是非食べてつて欲しい。ちゃんと心を込めて作らせてもらおうよ」

「——はいっ！」

ペアと表情を明るくしたマシユの笑顔に思わずオレも笑顔になってしまう。守りた
い、この笑顔。

天使と見間違えるマシユの笑顔に癒されたオレは落ちていた礼装を拾う。えっと、『鋼の鍛錬』？誰このおっさん。というかおっさんの上裸なんて見たつて微塵も嬉しくない。ああ、また水着礼装とか出てこないかなあ……。あとは、んん？『ロマニ・アーキマン伯爵の歓待』に『月夜の魔女』？——ちよつと待てや。

思わず口に出たツツコミにマシユとハサンちゃんが反応し、運搬用の箱に自身の持っていた礼装を入れて近づいてきた。

「先輩どうかしたんですか？」

「ねえ、なにこの礼装。この2人何しちやつてんの？あれか、ハロウィンだからか」

「これはDr. ロマンとダヴィンチちゃんですね」

「くそ、何気にロマンもイケメンだからな。似合ってるのが地味にムカつく。ダヴィンチちゃんに関しては彼女（彼）の考える美そのものだから、まだ納得できるけど。というかダヴィンチちゃん、いつの間にハロウィン仕様の礼装作ってたんだよ……」

あつ、でもロマンが持つてるやつってソフトドリンクかよ。そんなところでロマンらしさ発揮せんでもよかるうに。つか、魔女って性別関係なかったんだ、始めて知った。……う？どうかしました？マシユさん」

礼装に記された情報を読んでいると、ハサンちゃんが隣に立つマシユの様子がおかしいことに気付く。オレも礼装に向けていた顔を上げ彼女の様子を確認した。

「……………」

「マシユ?」

「はえっ!? えっ! な、ななななんでしょうか先輩!？」

「いや、なんか固まってたしどうしたのかと思って。それにすごい汗だぞ、大丈夫か?」
「だ、だだ大丈夫です! 全く問題ありません! オールクリア、ミツシヨンコンプリートです!」

どう見ても問題ありまくりなんだが、そこんとどうなんよ? 日頃の彼女からは想像もできない狼狽えぶり——あつ、意外とそうでもないな。マシユも狼狽える時はかなり

狼狽えるわ。でも、さすがに今回の反応は気になる。

考えろ。六つの特異点を潜り抜けてきたその頭で考えろ。彼女は何を心配している？ マシユはロマンとダヴィンチちゃんの礼装を見て過剰に反応していた。まるで知られたくないことを思い出したような……。

礼装……礼装……。ロマンとダヴィンチちゃんの礼装がある。——ということとはだ。もしかしてマシユの礼装もあるのではないか？ そして、今オレの手の中にはロマンとダヴィンチちゃんのせいで確認していない礼装が1枚だけある。

「——ハサンちゃん」

「はい、マスター」

「せ、先輩？ 何故ジリジリと私から距離をとるんですか？ そしてハサンちゃんはどのように私の背後に？」

何故、どうしてだつて？ そりゃ決まってる。

「ハサンちゃん！ 令呪をもつて命ずる！ マシユを拘束！ オレはこの最後の礼装を確認するっ！」

「了解です、マスター！」

「きやあ！ ハサンちゃん、いきなり何をつ！？ そして先輩もそれだけはっ！ それだけは勘弁してくださいっ！ 後生ですから！」

「ふはははっ！そこまで言われてはさらに気になるというもの！悪いが確認させてもらうぞマシユ！」

「や、やめてください！というか、ハサンちゃん力強くないですかっ!?一応筋力値の値的に私の方が上なのですが！」

「令呪の力ってホントすごいよね」

「とんでもない悪人顔ですよ先輩!?こんなしょうもない事に貴重な令呪を使わないでください！」

「じゃあ、確認しまーす」

「ああっ！聞いてない！」

マシユの静止の声を振り切りつつ少しだけ距離をとる。まあ、マシユのことだしそこまで過激なやつじゃないだろ。せいぜい魔女っ子とかそこらへんでしょ。きつと可愛いんだらうなーと思い、礼装を確認。

——その手は獲物を逃がさないといわんばかりに獰猛に。ピヨコンと頭から出ていく耳は可愛げに。腰をくねらせ挑発的なポーズをとるその姿は何よりも妖艶に。悪戯するぞと言わんばかりにこちらを誘う視線を向ける姿は小悪魔的に。衣装を彩る紫は

高貴で淫靡でそして無垢に。

そこにはオレが見たことがないマシユがいた。今まで礼装関係でマシユがコスプレのようなことをすることはあつたが、ここまで露出の激しい衣装はなかった。もはや肌面積より毛皮のような布の面積の方が少ない。おそらく同い年の女子と比べても発育のよいであろう豊満な身体をこれでもかと思せつけてくる。

情報のところではフオウ君が何か暴走して変なこと口走ってるし、もうわけ分からん。だが、とりあえず言えることがある。

——概念礼装『デンジャラス・ピースト』。早い話、尋常じゃないくらいエロかつた。

ギギギツとさびび付いたようにマシユを見る。おそらく今のオレの顔は真っ赤になつており、オレの顔色を見てマシユは全てを察したのだろう。マシユはその色白の肌を一瞬にして林檎のように真っ赤に染め上げた。マシユを拘束していたハサンちゃんはそのようなオレ達の様子をキョトンとした表情で見つめており、何とも言えない微妙な空気が室内には漂っていた。

——この空気は、いい加減待ちきれなくなつたドラゴン娘が召喚ルームに突撃してくるまで続くのだった。今回に関してはマジで感謝するぜドラ娘。今度お菓子でも作っ

てやるよ。

——その後

「なあ、マシユ。さつきはごめん。嫌がってたのに無理矢理見ちゃって……」

「……いえ、いつかはバレるものだと分かっていたので大丈夫です」

「あと、こ、この礼装なんだけども……」

「何も聞かないでください何も考えないでください何も言わないでください」

「いや、あの……ちよつと驚いたけど、その……すげえ、か、可愛いよ」

「……………ありがとうございます」

そんな互いに顔真つ赤なオレ達の姿を、ニヤニヤとしたダヴィンチちゃんに写真で撮られていたことを知るのはまた別の話。

付け加えるとしたら、その全ての元凶がマシユにこの仮装をさせてマイルームに突撃してくるのもまた、別の話。

単発呼符って意外と星5当たるらしいんだけど、あれって冗談だよな？

『物欲センサー』という言葉をご存じだろうか？

それは全てのハンターの、全ての神機使いの、そして全てのマスターの天敵であり、しかし決して切っても切れないものである。自分の欲しいものがあり、それを得ようとする度に『物欲センサー』はひよっこりと顔を出し、ありとあらゆる妨害を実行してくるのだ。

今まで何度遠ざけようとしただろうか。今まで何度逃げ出そうとしただろうか。それでも『物欲センサー』は決して逃してはくれない。ありとあらゆる場所、時間、人物へと執着し、超絶とも言える絶望を振りまいていくのだ。

まあ、冒頭からつらつらと無意味な主張を展開してきたわけだが、それは何故かというと――

「——なんでじゃあああああ！なんで掠りもしねえんじやあああああ!!!」
オレことカルデアのマスターが見事にその沼にはまってしまったからである。

「別の世界の聖杯戦争？」

魔術をコントロールする訓練の途中、ロマンの仕事部屋に呼び出されたオレは彼から

聞かされた話に思わず首を傾げる。

「そう、別の世界。つまりは平行世界だね。その月面電脳空間で行われた聖杯戦争が通称『月の聖杯戦争』と呼ばれるらしいんだ。君が今やっている人理修復のようなものではなく、文字通りマスターとサーヴァントが手を組み他のマスターやサーヴァントと戦う聖杯戦争のことだ」

「随分とぶつ飛んだ戦争ですね。というか、月面でどうやって戦争するんですか？」

「まあ、概要としては『ムーンセル』だの靈子虚構世界『S.E. R.A. P.H』だのといったものがあるんだけど、一応聞かない？もつともさすが平行世界のことだけあって情報は不十分だし、どこまでが本当でどこまでが間違いか分からないけどね」

「遠慮しときます。別の世界のこととか今のオレに理解できるとは思えませんし」

「はっはっは！そうだよ、——君は考えるよりも行動するタイプだしね。こういう小難しいことは気にしなくてもいいよ。考えるのは僕やレオナルドの仕事だ」

「じゃあなんでわざわざ部屋に呼び出してこんな話したんですかねえ。こちららマシユとの訓練を早々に切り上げて来たんですが。」

「なるほど。つまりロマンはマシユとの訓練を妨害して特に関係ない話をしたかったと。……丁度今カルデア戦闘服の礼装装備してるんでガンドでも撃ち込んでやりましょうか？」

「やめて！ガンドって一応呪いだからねっ!? 僕みたいな貧弱な人間に撃ち込もうものなら一週間は倒れちゃうよ！」

ちやんと君にも関係あることもあるから！と椅子に座りながらワタワタと焦るいい年こいた男を見て思わずため息をつく。一応現カルデアのトップなんだしもう少し威厳があつてもいいものだと思っただけだなあ。

「で、結局のところ要件は何なんですか」

「君、僕に対して遠慮が無さ過ぎない？一応僕今のところカルデアのトップだよ？」

「はい、発射まで5、4、3、2——」言う！言うからその指を下ろしてえ！」早くしてください」

「うう、僕の部下が辛辣すぎて辛い……」

よよよ、と泣き崩れそうになっているロマン。彼はオレの指先に若干ビクつきながら呼び出した経緯を説明し始めた。

要件の内容をまとめるとこうである。先ほどの『月の聖杯戦争』とやらが最近活性化していて、その影響がこの世界にも表れているらしい。新たな特異点でも起こったのかと思つたがそうではなく、また召喚サークルに影響が出てその戦争に関連するサーヴァントが召喚されやすくなっている、ということだった。

「ここに新たな呼符が何枚かある。ぜひ召喚してみてください。きっと君の力になってくれ

ると思うよ」

「……………」

「どうしたの?」

「……ロマンのくせに普通に面白い話で驚いた」

「君、日ごろ僕のことどう思ってるの!?!」

いや、だってロマンだぞ? オペレートだと微妙な活躍しかできてないロマンだぞ? 本当に時々あるガチシリアスモード以外はポワポワしてるような奴だぞ? いや、影でオレ達のことを真剣に考えてくれていることは知ってるけどさ! 頼りにはしてるけどさ!

まあ、とりあえずロマンのことはいいや。それよりも召喚だ!

「はあ。じゃあ、とりあえず呼符渡すから召喚部屋に行つてきてくれるかい?」

「了解。サンキューロマン! いつも助かってるぜ!」

「なかなか現金な子だよな、君」

オレの変わりようにため息をつくロマン。とにもかくにも、こうして新しい仲間を得るチャンスがきたんだ。聞くところによると、色々と強い星5のサーヴァントがいるらしい。これは今度こそうちに星5のサーヴァント来るんじゃないか!?

——そう考えていた時期がオレにもありました。

こうして序盤の悲鳴に戻るわけです。

「おいしいおいしい！呼符7枚も使って1体しかサーヴァントが出ないってどういうことじゃああああ!?!」

おのれ物欲センサーめええ！またオレの前に立ちふさがるかああああ！いい加減星5のサーヴァントよこせやああああ！

「まあまあ、落ち着けよマスター。こういう時もあるさ」

「槍ニキイイイ!!しかも出てきた1体がお前ってどういうことだよお!?!とつくに宝具レベルもMaxだつて言ってるんだろが!!」

こんの幸運Eがあああ！と槍ニキの胸倉を掴もうとするが、さすが敏捷A。矢除けの加護もあってヒョイヒョイと躲される。

ちなみに出てきたものは1つを除いてすでに持つてる礼装ばかり。新しい礼装は『月の勝利者』と書かれてあり、これだけは使えそうだなと思った。

「はっはっは！鍛錬が足りねえな、マスター」

「うっせえ速度馬鹿！お前らみたいな英霊と一般ピーポーを比べるんじやありません！」

「何なら稽古でもつけてやろうか？それなりに動けるようになるぜ」

「ケルト式ブートキャンプとか普通に死ぬわこの野郎！お前らみたいな戦闘キチなケルトとただの人間を一緒にするなっつーの！」

オレの苛立ちもどこ吹く風と言わんばかりに受け流していく槍ニキ。ちくしょう、戦闘だと滅茶苦茶頼りになるこの身軽さが今は憎い！

「こくなつたら残ってる石も注ぎ込んでやらあ！」

「おいおい、マスター。そいつはやめといたほうがいいんじやねえか？」

「ここまで来て引けるかあ！オレはっ！星5のっ！新しい仲間がっ！欲しいのっ!!」

「まあ、好きにすればいいと思うけどよ。賭け事つてのはタイミングが命だぜ。計画面のない博打は自滅へ一直線だ」

「今がその時っ！」

「あつ、もうこりやダメだな」

おりやあ！と10連には足りないがあるだけの石を注ぎ込んでみる。グルグルと召喚サークルの光の輪が回転しだし、やがて爆発するようなお馴染みのエフェクトを散ら

して召喚されたものが出てきた。

「三流サーヴァント、アンデルセンだ。本棚の隅にでも放り込んでおいてくれ」

小柄な体躯に似合わない皮肉めいた顕現口上。青い髪の隙間からはどこか疲れているようにも見える眼光が光っている。その少年のようなサーヴァントの召喚と同時にカシヤンと礼装が落ちてくる。

「アンデルセンかよ!? レアリティ下がってんじやねえかつ!？」

「なんだ、マスター。つまらん雑音を聞かせるために俺を再び召喚したのか? そんなことはすでにここにいる俺にでも聞かせてやれ。もつとも相手も俺である以上、まともな返しには期待しないことだな」

「相変わらずの皮肉っぷりだな、おい。そんなこと言うとな今の種火周回で酷使すんぞ」「好きにするといい。働くのはすでにここにいる俺であつて、俺自身ではない」

「いやー元からいる奴じゃなくて今召喚されたお前を絶対使つてやる! ひたすら『人間観察』と『高速詠唱』と『貴方メルヒエン・マイネスレーベンスのための物語』を使いまわしてやる!」

「おい、きちんと休みぐらい取らせろ! この鬼めがつ!」

「うるせえ! 普通に強い自分の力を恨めつ! あといつもサポートありがとよつ!」

ガルルツ! と睨み合いをしているオレ達2人の喧嘩は、あまりの五月蠅さに業を煮やした槍ニキが『刺し穿つ死棘の槍』を発動させようするところまで続いた。というか、

普通に止めてくれませんか？それだとオレの心臓が止まるんですが。令呪使わなかったら普通に撃つてましたよね。

「うう……青王ー、文明絶対破壊するウーマンさーん、マハーバーラタの大英雄さーん、船長ー、狐巫女さーん、聖女さーん。どうして来てくれないんだー」

「先輩、元気出してください。また呼符と石を貯めて次頑張ればいいじゃないですか」「でも、そろそろ第七特異点も定まりそうだし、戦力の補充は早めにしないと間に合わないしー」

「確かにそうですが……」

マイルームにて。自身のベッドの上でゴロゴロとしているオレの様子にどうしたらよいのか分からないマシユはアワアワしていた。彼女から見たら、オレは相当落ち込ん

でいるように見えるらしい。

実際のところ、そこまでシヨックが大きいわけでもなかった。そもそも星5なんて今まで来てないわけだし、要はいつも通りなのだ。ぶっちゃけ今回の召喚で来た槍ニキとアンデルセンもレアリティこそ低いものの非常に頼りになる英霊達である。

槍ニキは言わずもがなひたすら敵の攻撃を躲した持久戦ができるし、アンデルセンもサポート役としては申し分のないスキルを持つている。どちらも少々火力不足は否めないが、他のサーヴァント次第ではそこらへんも十分補える。まあ、せっかく『月の聖杯戦争』に関する者達が召喚されやすい状態になっていたのだから、できれば召喚したかったがこの際しようながない。自身の幸運Eを恨むしかないのだ。

……そろそろマシユが本当に困った表情をし始めているので悪ふざけはここまでにしようか。

「——なんてな。大丈夫、そこまで気にしてないよ」

「ほ、本当ですか？でもさつきまですごい落ち込みようでしたが……」

「こんな結果いつものこといつものこと。むしろ全部礼装じゃなくてよかったよ。だからいいんだ」

「先輩がそうおっしゃるなら……」

さて、困らせてしまった詫びでもしようか。とりあえずあと一時間ほどでおやつ時だ

し、気晴らしに食堂でお菓子でも作ってマシユに振る舞うかな。

「マシユ、今から食堂に行かないか？心配してくれた礼にクツキーでも焼くよ」

「とても嬉しい提案ですが、わざわざ先輩の手を煩わせる——「令呪を持つて命じ……」分かりました！分かりましたから！こんなことに貴重な令呪を使わないでください！前にも言ったじゃないですか！」

まったく強引なんですから……と桜色の髪によって片眼が隠れてる状態でジト目をするマシユ。いや、だってここまでしないとマシユって素直にお礼受け取ってくれないじゃん。いつも遠慮しちゃうじゃん。オレのことを敬ってくれているんだなって分かるんだけど、ちよつとばかりそれは寂しい気もする。マシユとはできるだけ対等でいたいんだよなあ。マスターとサーヴァントではなく、2人のただの人間として。

マシユはとんでもなく良い子なんだし、もう少し我儘になっても罰なんか当たらないと思う。むしろ当たらせない。こんなにも優しく生きていくことに対して真摯な女の子なんだ。多少の我儘だって許される。というか、オレが許す。

……って、あれ？何の話してたっけ？ああ、そうだ。食堂に行こうって話だった。

「んじゃ、行こうか」

「分かりましたよ、もう。先輩は意地悪ですね」

「なんだ、今気づいたのか」

「ふうんだ。そんな強引な先輩なんか知りません」

そう言うのと彼女は先にマイルームから出て行ってしまった。

あちやー。こりや詫びしようと思つたのに逆効果だったか。流星に令呪を使おうとした（フリ）のはマズったか？

マシユを追いかけて部屋から出る。1人少し先を歩くマシユ。そんな彼女の背中を眺めながら思わず頭を掻く。お礼がしたかつたのにその結果これでは意味が無いじゃないかと先ほどの行為を後悔していると、突然後輩である少女は立ち止まりクルリと振り返った。

眼鏡の越しに見える彼女の董のような紫の瞳は弓形に細められ、口元は柔らかく微笑んでいた。後ろに手を組み、こちらの顔を覗きこむように上体を少し曲げた少女は弧を描いていた口を開く。

「——でも、先輩のクツキー。私大好きです」

楽しみにしてますねと言ひ残し、スカートを翻してタツタツと爽快に走って行ってしまった。おそらく先に食堂へと向かつたのだろう。遠くなつていく背中を見送りながら、しかしオレはすぐにその場から動けなかつた。バクバクといつも以上に高鳴る胸元を押させ、思わずその場にしゃがみこんでしまう。

やっべえええええ！うちの後輩超可愛い！！なにあの子！天使っ!?天使なの!?心臓止まるよ！槍ニキの宝具より身の危険を感じるよ！『私大好きです』だつてよ！というかなに都合よくそだけピックアップしちゃってんの!?クツキーが好きなんだよ！オレじゃないよクツキーだよ！いいなクツキーそこ変われ！

ああああもうっ！うちの後輩ホントにもうっ！と、さつきよりもより激しく廊下でゴロゴロしたオレは、数分後ようやく気持ちを落ち着けて食堂へと向かった。

ようし、こうなったら先輩頑張っちゃうぞー！

「あれ、マシユ？」

「あつ、ブーディカさん。こんな時間にどうしたんですか？まだ夕飯の時間にはだいぶ早いですけど」

「ナーサリーや子ギル達にお菓子を強請られてね。プリンでも作ろうかと思っただけど、それよりも……」

「どうかしましたか？」

「マシユ、顔真っ赤だよ」

「……えっ？」

「もしかして風邪？ダメだよ体調が悪いならちゃんと言わなきゃ」

「い、いえ！風邪とかではないです！むしろすこぶる健康体です！」

「そう？でもじゃあなんでそんなに顔真っ赤なの？」

「えっと、その、意地悪された仕返しをしようとしたら、じ、自爆してしまいました……」
「……………？」

定期的にピックアップガチャあるんだけど、あれって普通のガチャと同じだよな？

極光に照らされた獅子王の玉座。そこだけ世界から切り離されたのではないと錯覚してしまうほど異様な空気を感じる空間。否、錯覚してしまうのは空間のせいだけではない。

——聖槍によって降臨したワイルドハント、『女神ロンゴミニアド』。異質すぎる空間にその異質さをさらに塗り替えるような存在がそこにはいた。幾度の戦場を駆け抜けた白馬に跨り、悠々と佇むその姿はその名に恥じぬ神々しさを醸し出し、思わずひれ伏したくなるほどだった。

先程までとは遥かに違うその威圧感にオレは内から湧き上がる恐怖を抑え込む。カルデアの、人類最後のマスターとはいえ自分は多少魔術を齧った程度の凡才な人間ではない。女神がその手に持つ聖槍を軽く振るえば、それだけでオレの命など塵屑同然に消し飛ばされるだろう。

しかし、現在の状況においてひれ伏すような真似は決してしない。折れてはいけな
い、逃げてはいけない、屈してはいけない。何故ならそれは人理の消滅を意味する——

ということではない。幾多の犠牲や戦い、別れを積み重ねてオレはここに立っているのだ。この世界で出会った全ての者達の為にも、そして何より自分の傍らで必死に奮い立ちとうとしている大切な存在の為に、ここで敗北を認めるわけにはいかなかった。

「終わりだ。お前たちの消滅を以て、最果てを解き放つ。私は嵐の王。常世から大地を飲む荒波。世界の果て、そのものである」

人間を超越した美貌から聞く者を魅了するかのような言の葉が紡がれる。大いなる力は他者を圧倒するだけではなくその虜にすらしてしまふと聞くが、放たれる一言一言にそれを感じずにはいられなかった。重りのようにその口元から流れでるものに心が折れそうになる。

だがそれでも――

「それは違う！違う、ことです！」

盾を持つ一人の少女――マシユ・キリエライトが己を奮い立たせて鋭い一声を放つ。彼女だってこれだけ圧倒的な存在を前にして怖くて仕方がないはずだ。マシユは優しい女の子だということは知っている。だからこそ誰かを傷つけることを恐れ、誰かが傷つけられることを恐れる。戦いだって、本当はしたくないはずだ。

「終わりは無意味ではないのです。命は先に続くもの、その場限りのものではなく！」
震える身体を叱咤し、世界そのもののような相手にも決死屈せず立ち向かう。

「ロンゴミニアド！あなたが荒波……世界の果てだというのなら！私は、全力でこれと戦います！」

「——いいだろう。では見せてやろう！」

今まで戦い抜いてきた盾を、これが自分の騎士としての『剣』だと見せつけるように構える。その姿に、敵対するに値すると考えたのだろうか。ロンゴミニアドはその手に持つ聖槍を構えた。

「聖槍、抜錨。そは空を裂き地をつなぐ嵐の錨——最果てより光を放て……！ロンゴ、ミニアド——!!」

天空から降り注ぐのは世界すら容易く滅ぼすことのできる究極の矛。暴風のような風が巻き起こり、玉座の床にピシピシと細かな亀裂が走る。その絶対的な一撃がオレ達に向かつて放たれた。彼女のことを心から敬愛している銀色の腕を持つ騎士と共に思わず息を飲む。

「それは全ての疵、全ての怨恨を癒やす我らが故郷——顕現せよ、ロード、キャメロット——！」

そんな時代ごと屠るような一撃をオレの後輩であり始まりのサーヴァントである彼女は真つ向から受け止める。ありとあらゆる災厄から大切なものを守り抜くその盾に包まれる。展開されたマシユの新たな宝具の力によってロンゴミニアドの一撃は奇跡

的にその破壊を抑えられていた。

ギリッとマシユの口元が歪む。宝具の力が上がったとは言え相手はサーヴァントすらも超越している存在だ。このままではこの守りの宝具が破られるのも時間の問題かもしれない。

だが、それでも諦めたくなかった。目の前で、本当は誰よりも優しい少女がその細かい身体を張っているのだ。マスターであり、先輩であり、何より男であるオレが逃げてたまるかってんだ。

銀色の腕を持つ騎士の制止を振り切って今なお究極の矛を受け止め続ける存在の下へと駆け出した。無謀だろう、蛮勇だろう。だが、それでもオレは――

「——という再現ドラマのような夢を見た。だからきつとカメラロットのサーヴァントが召喚されやすくなっているに違いない」

「どうしましょう。先輩が疲れて壊れてしまったみたいです。うちにはナイチンゲールさんもないのに……」

眼鏡を外し目頭を揉みながら苦悶の表情を浮かべるマシユ。つておい、待てこら。誰が壊れてるって？ 仮にナイチンゲールさんいたとしても呼ばねえかならな。『どうしたんですか、マスター。頭がおかしい？ じゃあ首スパツといきましょう』、とかなりそうだから。むしろそれでスパツと逝くから。(恐怖)

「いや、マシユ大丈夫だから。寧ろ今度こそ星5サーヴァント引いてみせるから。きつとセイバーの」

ダブルアルトリアさんとかランサーのダブルアルトリアさんとか来てくれるから」
「今言った4名のうち星5の方は2名なんですすがそれは……」

だつてうちのカルデアアルトリア顔のこんいち人いないんだよ！ 今日あんなにアルトリア顔

が溢れてるのにうちには1人としていないんだぞっ!? こんなの絶対おかしいよっ!

「とうか、来る前提で話してませんか先輩? 今までの結果から統計してみるに先輩が星5のサーヴァントさんを召喚できる可能性は限りなく低いと思いますが」

「大丈夫。ここ一番で勝負運の強いオレの勘が言ってる。今こそ引くべきだと」

「確かに戦闘において先輩の直感というものに私達は何度も助けられてきましたが……今回ばかりは了承しかねます」

むう。意外と頑固だな。それだけ召喚に関しては信頼が無いということだろう。もちろん、オレのガチャ運は悪い。いや、もう悪いとかそういうレベルではなく単純に酷い。それは間違いないし否定もしない。しかしだ。あんな予言めいた夢まで見たのだ。これはきつと何かのお告げに違いない。かのジャンヌ・ダルクもこうして神の啓示を受けたのだろう。本人に直接確かめたわけじゃないから知らんけど。なんでうちのカルデアにはジャンヌさんいないんだろ……。

「お願い、マシユ。1回だけ! 呼符1回だけでいいから! それでダメなら諦めるから!」
「……しようがないですね。1回だけですよ。あまりカルデアの貴重な資源を先輩の引きで無駄にするわけにはいきませんから」

おおう、すげえなこの後輩。了承とデイスリを同時にやってきたぞ。誰の引きが無駄だった? んなこた自分が1番知ってますし! やべえ、言ってる虚しくなってきた……。

と、とにかくこれでなんとか召喚できるぞ。結局呼符1回しかできないけどできるだけマシと考えよう。さあ、そうと決まったら召喚部屋へゴー！

「——アーチャー、ダビデ。うん、僕はやるよ。かなりやる」

「円卓関係ねええええ!？」

例のごとく光溢れる召喚サークル。そこから現れたのは円卓の人物を示すような堅牢な鎧姿の人物ではなく、羊飼いの恰好をしたチャライ雰囲気の優男だった。

「すごいです先輩。流石、期待を裏切らないですね!」

「ねえマシユ、なんで嬉しそうなの?そんなにオレが外したのが嬉しいの?」

「変な夢を見てとこれまた変なことを言い出した時はとうとう頭がおかしくなっちゃったのではないかと心配しましたが、やっぱり先輩はいつも通りの先輩でした」

「やだこの子辛辣」

むしろいつも通りの結果に頭を抱えているオレを見て心の底から嬉しそうな笑みを

浮かべるマシユ。ちくしよう、悪気とか一切ない屈託の笑顔だから何も言えないじゃないか。というか、可愛いなこのやろー。

「おいおい、僕を無視してイチャイチャしないでくれないか2人共。どうせなら僕も混ぜてくれ。あつ、マスターはマイルームに戻っていいよ」

「それは混ざるんじゃないやなくて代わるっつーんだよ、この愚王め」

「ひどいなー。これでも古代イスラエルの王の中じゃ見事な治政を行ったって有名なんだよ？つまり、愚王とは正反対の王様ってわけだ」

「ソロモンについては？」

「言っただろう。子育てには興味が無かったんだ。僕が興味あるのは綺麗な女性とお金だけだよ」

きっぱりと言い放つその姿には全く迷いが無い。心の底からそう思っているのだろう。清々しいくらい爽やか系クズだ。そのくせ顔はイケメンだし豎琴とか半端じゃなく上手いから、そりゃ生前はモテたのだろう。

……あとでモテるコツとか聞いてみよう。ウリヤの件みたいな悪魔のような方法じゃなければ参考にした。

「それで、マスター。円卓とはどういうことだい？」

「ああ、今は円卓に関連するサーヴァントが出やすくなってるんだ。それで召喚を試み

たつてわけ。見事に外したがな」

「出やすくなってるんだって断言しちゃいますか、先輩……」

いいのマシユ。引きの直感の外したけどこれだけは間違っていないはずだから。具体的には11月の中旬辺りに出やすくなってるはず。(メタ)

「ふむ。それじゃ僕は間の悪い時に出てきてしまったようだね。これは失礼」

「絶対悪いと思つてねえだろ……」

メツチャニコニコしながら謝つてきやがった。くそ、超殴りたい。回避されるだろうから意味ないけど！

片やニコニコと笑顔。片やガルルウ！と相手を睨む。そんな対照的な雰囲気晒されていた召喚部屋だったが、やがてダビデが笑顔を止めたため空気が一変した。オレの前に立つのは先程までの飄々とした態度とは明らかに違う、偉人としてそして何よりも英霊として風格を持つ人物だった。

「それでこれからの指示を仰ぐうかマスター。僕はどうすればいい？」

「——とりあえず、すでにいるお前ダビデさんの宝具を強化させてもらおうか。火力はアーチャーの中じゃ優秀だ。スキルもあとでついでに強化しとくよ。ダビデの全体回避と回復を合わせ持つのは全サーヴァントの中でも稀有なスキルだしな」

「——御褒めにいただき恐悦至極。命令承つたよマスター。かつての王としての位は今

は神の下へと預けておこう。ここに居るのはサーヴァントのダビデという英霊。人理修復の間、マスターの命には全力で従うよ」

「……オレもお前らの期待には全力で応える。これからもよろしく頼む」
「もちろんです、マスター。それでは僕は僕の下へと先に向かつております」

ダビデは最後までその厳かな雰囲気は一切崩すことなく召喚部屋から出て行った。残されたのはオレとマシユのみ。シンと静まり返る、まるで宇宙にでも放り出されたような静けさを破ったのは、オレの短く吐いた息だった。

「——やっぱ、あんな態度取つても抜群の知名度を誇る王なだけあるよな。一瞬で雰囲気変えちまったよ」

「イスラエルのダビデ王と言えば歴史に詳しくない人でも像などから知ってる人も多いですからね。後世に語り継がれる存在として、その知啓と仁徳は確かだったのだと思います」

「つたく、日頃はただの女好きのダメ男のくせに。締めるところを決して見誤らないのは流石だと思う。まあ、女好きもぶっちゃけ素だとは思いますが。」

「さて。それでは先輩、私達も行きましようか」

「だな。たぶん、これ以上引いても意味が無いだろうし次に備えとくか」

マシユと共に召喚部屋を出る。それにしても、何故今頃になってキャメロットの夢な

ど見たのだろうか。確かにキャメロットの戦いはとてつもなく辛い戦いだった。アメリカでクーパーリン・オルタとの戦いも大概だったが、キャメロットはそれとは一線を画していた。恩恵により超強化された騎士達。そのどれもが油断など欠片もできない相手だった。

だが、本当にそれだけだろうか？ もしやこれは今一度気を引き締めろという何かの予兆のようなものではないだろうか。第七特異点の苛烈さはさらに激しいものになる、もつと精進せよという天啓めいたものなのではないか。

オレが次も生き残れる保証などどこにもない。そして、何よりも——

「——先輩？ 私の顔をじつと見つめてどうかしましたか？」

「……いや、なんでもないよ」

——マシユを、大切な人を守り切れるのかも分からない。オレのミスで彼女に何かあろうものなら……。

考えたくないことに限ってつい考え込んでしまう。悲観的なことを意識し過ぎるのは良くないと思うが、どうしても最悪の事態を考えずにはいられない。

失いたくない、離れたくない、ずっとずっとオレの隣で笑っていてほしい——そう思ってしまうのは我儘なのだろうか。きっと彼女は危険だからと言ってカルデアに残ったりはしないだろう。オレの力になりたいと自ら危険の中に身を投じ、他の人間よ

りも圧倒的に少ないその命を燃やし続ける。おそらく、自分の命が尽きることになろうとも。

「……う？なんだか今日の先輩はやっぱり変ですね。いつもはフォウさんみたいに分かりやすいのに」

「フォウってそんなに分かりやすかつたっけ……？」

「ふふっ。先輩もまだまだフォウさんのことが分かっていませんね。今度ゆっくり教えてあげます」

「ははっ、そいつは楽しみだ」

クスクスと口元に手を当てて笑うマシユの笑顔に自然とオレも笑顔になる。オレの心の底から守りたいもの。本当のところ、オレが守りたいものは人理などではないのだ。彼女を、彼女が生きているこの世界を、そしてこれから先も彼女が歩み続けることができる未来を守りたいのだ。人類最後のマスターとしては失格の理由であろう。

だから、オレはあの時踏み出したのだ。ロンゴミアドがマシユに放った一撃に、魂すら燃やし尽くす勢いで守護の宝具を展開させた彼女の下へと。代えのいないマスターの行動としてはあまりにも軽率すぎる。オレが死ねば人理が滅ぶというのに、そんな危険すらあったというのにオレはベデイの制止を振り切ってマシユの下へと駆け寄り、自身の命から絞り出すように彼女へと魔力を注ぎ、2人でロンゴミアドを凌ぎ

切った。カルデアの魔力が補助してくれなければオレは良くて一週間寝たきり、悪くて廃人になっていたと後々ロマンとダ・ヴィンチちゃんから説教された。

自身にも人理にも危険すぎる行動だったが、オレはあの時の行動を間違っていたとは思わない。オレの砂粒のような魔力によるブーストは正直いらなかったのかもしれない。現にそのあとのマシユは霊基を再臨させていたし、他にもサーヴァントは控えていたのだ。それでも、彼女に危険が及んでいるのも指をくわえて見ていることなどできなかった。できるはずもなかった。

だってオレは、どの歴史、どの世界にいる誰よりも、マシユのことが——

「——先輩！」

「——つと。ん、どうしたマシユ？」

「どうしたはこっちの台詞です。ボーとしてどうかしましたか？——はっ！もしかして風邪ですかっ!?ダメですよ、最近寒くなってきたのですからきちんと温かくして休まないよ！」

「いや、別にそういうわけじゃ——」

「いいから休んでください先輩！思えば今日は朝から様子がおかしかったのに、そんなマスターの異変に気づけないなんてデミ・サーヴァント失格です」

「だからな、マシユ——」

「さあマイルームに着きましたよ！早くベッドで横になってください！絶対安静です！何か温かいものでも持つてきますから！」

「ちよつ、マシユ……つて、行つちまつた」

オレをマイルームに押し込んだマシユはそのままパタパタと食堂の方へと走つて行つてしまった。先程の言葉通り何か温かい食べ物か飲み物でも取りに行つたのだろう。

その忙しく遠ざかつていく小さな背中を見てオレ思わず苦笑した。心配してくれるのは助かるが、これは少々度が過ぎないか？どうやらオレ達はお互い似た者同士らしい。互いに気をかけすぎているところなど特に。

「はあ。止めだ止め。こんな後ろ向きなことはらしくない」

つい色々と考え込んでしまった。オレの悪い癖である。もう少しベオウルフさんみたいに豪快にいつてみたいものだ。

結局はいつも通り。いつものように冒険へ出て、いつものように仲間と力を合わせて、いつものように最後は皆でここへと帰つてくる。それがオレにできることで、全てなのだ。そこで、いつものようにガチャを外すつと。うし、調子出てきた。

——そんなじゃ、今はこのわずかな平穏を楽しみますか。いずれ戦いの日々は戻つてくる。それまではこのまま、彼女と一緒に。

——食堂にて

「やあ、お嬢さん。マスターに言われて待機していたのだけど、彼ったら全然来ないんだ。だから、よければ僕とお茶でもしないか？」

「すみません、ダビデさん。今から私は先輩にホットミルクを届けるという使命があるので。お茶はお断りします」

「じゃあ、それを届けた後で——」

「先輩のそばにいたいので」

「ちよつとだけ——」

「ダメです」

「なら——」

「できました！それではダビデさん、またあとで。ダビデさんのことは先輩にきちんと伝えておきますから！」

「それなら僕も一緒に——つと。あーあ、行ってしまった。やれやれ、マスターといいお嬢さんといい落ち着きのない若人だ。……きつと、心の底から似た者同士なんだろうね。たくさんの女性に囲まれた僕だけど、ああいうのは正直羨ましいよ」

つい先日クリスマスイベとかあったんだけど、流石に時期が早すぎだよね？

『クリスマス』

それはイエス・キリストの降誕（誕生）を祝う祭である。日付的には12月25日に祝われるが、正教会のうちユリウス暦を使用するものは、グレゴリオ暦の1月7日に該当する日にクリスマスを祝うらしい。しかし、そのような信仰イベントが近年に近づくにすれ紆余曲折しくった挙句、子供がサンタクロースなる人物にクリスマスプレゼントを要求し、リア充どもが街中を闊歩するようなイベントへと変化していった。

今思えば、あれは普通の『クリスマス』だったのだ。魔術師の家系などという普通ではない家に生まれたオレからしても、当たり前のように参加できた普通のイベントだったのだ。

「というわけでクリスマスピックアップです」

「何がというわけなのか分かりませんが先輩が気合十分なのは把握しました」

「分かってくれたのならそれでOK。早速召喚してみるぞ!!」

「あつ、もう結果が見えた気がします」

何を言うかつ！今年はいろんな特異点に向いて、滅茶苦茶危険な修羅場を潜り抜けて特異点を修正して来たんだぞ！つまりはオレ超良い子！サンタさんだって良いもん

くれるに違いない！つまりは星5のサーヴァントが出てきてくれるに違いないじゃないかっ！（断言）

「とんでもない暴論ですが、そもそも先輩はサンタクロースを信じているんですか？」

「魔術師とか英霊がいるんだ。サンタクロースだっているさ」

「現にサンタオルタさんがいらつしやるのですごく否定し辛いですね」

「あれはオルタさんが自分のイメージの改善を図った結果だからノーカン」

「というか、隙あればエクスカリバーぶっぱなすサンタがいてたまるかっ！この前『あれ？オルタさん体重重くないですか？』って素直に疑問に思ったから聞いただけなのに、訓練所に連れていかれた挙句『これはプレゼントの重さだトナカイ！聖夜に沈め——
—約束された勝利の剣ッ！』ってされたんだぞっ！?とつさに自分に回避の魔術撃たなかつたら蒸発してたわ！」

「あれはどう考えても先輩が悪いです。女性には体重のことは禁句ですよ」

「本当にただ疑問に思っただけだったんだけどな。あつ、ちなみにマシユは「先輩？」

——あつ、はい黙りますごめんなさい調子に乗りました」

ふええええ、うちに後輩が怖いよおお。まあ靈基確認すれば分かることなんだが……何だろう。それをやったら命が無い気がする。女性の体重は禁句（戒め）

「と、とにかく早速召喚してみるぞー！石ドーン！」

ただならぬ殺後輩の満面の笑顔 気を感じたオレは話題を変えるようにすでに準備していた聖晶石を

召喚サークルの中へと投げ入れる。そして、もはやすっかり慣れてしまった操作で魔力を流し込むと、これまた見慣れた風景の通りグルグルと光が回り始めた。

さーて、今回は聞くところによるとジャック・ザ・リツパーことジャックちゃんが出てくるっぽい。ロンドンで会った時は速攻で命狙われたけど、サンタオルタさんのプレゼント配りで多少仲は良くなったからもう大丈夫なはず。うちにはナーサリーちゃんもいるし、できれば2人を会わせてあげたい。そしてその微笑ましい光景を見て和みたい。ロ、ロリコンちゃうわっ!?

どこの誰にしているのかも分からない否定を脳内でしていると、やがて光が収束していき3体の人影が現れ、同時にいつものごとくガシャガシャと騒々しい物音を立てながら礼装が落ちてきた。

ふーむ、音的に実体化している奴が多そうだな。ということとはレアリティは低め。どいういう理屈かは分からないが、レアリティの高い礼装は『人』が映し出されていることが多く、逆に実体化するのはレアリティが低い『物』であることが多い。

個人的な考えとしては、概念礼装はその名の通り『概念』が付与された礼装だ。『人』や『物』の歴史や物語が積み重なって起こる事象や魔法、魂といった神秘を宿している。『物』では概念としては用途と用いた結果が主に反映されるが、『人』の場合はやや異な

る。『人』は物ほど単純ではなく可能性の塊だ。ありとあらゆる可能性を秘めているからこそ、その可能性を一つの歴史や物語として凝縮し抽出しているため概念としてはより幅広く、より濃く反映されている。だからこそ、『物』の概念礼装より『人』の概念礼装の効果が高いのではないかと思う。ましてや対象となるのは『人』の中でもとびっきりのチート^英連中だ。そりゃレアリティも『物』などとは比較にならないだろう。

……つらつらと長い解説だが、あくまでこれはオレの自論。合つてるかどうかなんてロマンやダヴィンチちゃんに確認を取つてないから分からんし、役に立つのであれば何でも構わん。使えるものは使う主義なんだ。そこに善だ悪だなんて関係ないね。

そうこうどうでもいいことを考えているうちに召喚された3人の姿が見えてきた。さてさて、今回はどいつかね？

「——召喚に応じ参上いたしました。どうか、このパラケルススと友達になりましょう」

「——牛若丸、負かり越しました。武士として誠心誠意、尽くさせていただきます」

「——サーヴァント、アサシン。名を荊軻と言う。失敗した身で召喚されるといふのも複雑な気分だが、今度はうまく立案しよう」

白い研究衣とはまた違った趣向の外套をはためかせ、長い黒髪を揺らすマッドサイエントティスト（薬学）。それどう見ても鎧じゃないよね？むしろ痴女だよねを素で行く首置いてけ侍。白い着物を動きやすいように着崩し、チラリと短刀を光らせる刺客さん。

「——はい、解散。ありがとうございました」

「ちよつ、先輩っ!?!せつかくのクリスマスマスピックアップだと張り切つてたじゃないですか!いきなり冷めないください!」

「マシユ、クリスマスマスピックアップなんてなかったんだ。いいね?」

「アツハイ。……つてそうじゃなくて!」

いいんだよ!牛若ちゃんや荊軻さんはまだクリスマススイベにいたからまだしも、パラケル先生とか微塵も関係ねえじゃん!クリスマスマスとか嘘じゃん!サンタさんは幸運Eのマスターなんかのところには来ないの!はい、証明終了! (QED感)

大体さ、ピックアップ召喚つて関係ない鯖ばかり出過ぎなんだよ。ちよつとくらい星5さんが引つかかってくれても罰は当たらんでしょ。

「主殿主殿!先日ぶりですね!早速ご命令を申し付けください!あつ、首ですか?あのサンタトナカイの首を取ってくればいいんですね!」

「うん、牛若ちゃん。とりあえず落ち着こうね。トナカイの首とかいらからね。あとその言い方だとトナカイやってたオレの首を差し出すみたいだから止めてね」

「ところで我が主よ。どこかに良い酒はないか?できることなら美味しい肴も用意してもらえるとありがたい。一緒に月見酒と洒落込まないか?」

「この期に及んでまだ飲むと申すかこの暗殺者は。あんなだけの醜態晒しておいて微塵も

顧みないとか逆にすげえわ。あとオレは未成年です」

「マスター。そろそろホムンクルスの材料が足りなくなってきたので補給に連れて行ってくれないですか?」

「うるさいよ、大体の黒幕。あんたいつともそればかりだなおい。ホムンクルスの前に聖晶石ぐらい作ってくださいよ。賢者の石作れるなら余裕でしょ」

「ふふっ。お断りします」

「なんでや」

つか、作れることは否定しねえのかよ（驚愕）

ある者は尻尾が生えていればブンブン振ってそうならいキラキラした笑顔で物騒なことを言い、ある者はおのれの欲に忠実な要求をし、ある者は研究材料を採集しに行こうと宣う。ねえ、こいつら歴戦の英霊なんだよね?人間なんかより高次元の存在なんだよね?ちよつと自由すぎない?

「どうしてオレのカルデアに来るやつらはこうアクが強いんだ……」

「似た者通しは引き寄せられるからではないでしょうか、先輩」

「今、遠回しにオレがおかしいって言ったよねマシユ」

そんなスタンド使いみたいな宿命いらんわ。これから何世代もかけて戦わなければならぬとか嫌すぎるんだけど。

「とりあえず、お前ら全員宝具レベルMAXだし、ダヴィンチちゃんのところに行つてこい」

「「えー」」

「えー、じゃねえ！こちとら星4以上でもないサーヴァントを育成している暇なんてないの！すでにレベルカンストしている奴がいるのに新たに2体目なんて育てられる程余裕はないの！アンダースタンツ!？」

「「……はい」」

ぞろぞろと3人は召喚部屋から出ていく。少々悪い気もするが本当に余裕が無いのだ。第七特異点もすでに特定されあとはそこにレイシフトするだけというこの状況。少しでも素材の配分方法を考えておかないといざという時に足りませんでしたでは洒落にならないのだ。

こうして、オレのクリスマスピックアップは何の成果も上げられませんでしたあ！と宣告するように終わりを告げた。まあ、クリスマスとは言っても所詮こんなもんだ。とりあえず第七章攻略に備えよう。そう思ってオレは自室へと戻るのだった。

——その日の夜、まさかあんな事件が起ころうとは誰が予想できただろうか。

カルデア内が漆黒の帳に包まれ、歴戦の英雄たちが静かに寝静まる夜。オレは『小さな小さなサンタ』と出会うのだった。

「いやー。何はともあれ一件落着だな」

「おかえりなさい先輩。今回もお疲れ様でした。ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リ
レイさんもすでに帰還しています」

「ああ。わざわざ出迎えてくれてありがとなマシユ。まあ、自分で仕向けたことだしこ
の疲れはある意味自業自得だよ」

「ふふつ。それでもお疲れ様です」

ふわりと花のように笑うマシユに、オレも疲れた体など忘れたように笑う。ああ、ホントこの後輩の殺気無しの笑顔は最高やでえ。疲れなんかあつという間に吹っ飛んじまった。なんならもう一回レイシフトしてきてもいいくらい。ごめん、嘘。流石にそれは嫌だわ。

さて、ひとまず現状を説明しよう。あの統一性のない3人を召喚したその夜。なんとなくにジャンヌ・オルタがいたのだ。何を言っているのか分からんと思うが、正直オレも何故ジャンヌ・オルタがうちのカルデアにいたのか分からん。知つての通りオレは幸運Eのマスターである。もちろん星5のジャンヌ・オルタなど召喚しているわけがない。それなのに居たのだ。何を（以下略）

まあ、そこから大きな力運営の力と子ギルの持つた薬でジャンヌ・オルタがどこぞの名探偵もびつくりな程若返ってしまう。いや、なんでや工藤。

で、サンタオルタやこれまたうちにいるはずもないジャンヌ・ダルクにこのコナ——ゲフンゲフン。『ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ』を立派なサンタにするという使命を頼まれ、色々お膳立てをして今ようやく帰還したというところだ。途中にいないはずのエミヤやジャックちゃんやサンタ天アイランド草飯面四郎がいたような気もするが、ほらそこは大人の事情つてやつだ。良い子は気にしないように。じゃないとサンタさ

ん（オルタ）がプレゼントをくれないぞ。

「それでマスター？今回のひと騒動に関してお話があるのですが、見たところ元気そうなのでじっくりお話を——おっと！帰還したことをロマンに伝えなきゃ！また後でなマシユ！」——って待つてくくださいマスターっ！」

急に雰囲気の変わったマシユに寒気を感じたオレは全力で後輩に背を向け猛然とダツシユした。何をお話されるのかなど全部聞かずとも容易に察せる。十中八九マシユに今回の作戦を黙って、そして騙していたことだろう。だからこそ、逃げるのだ。だつてお説教は勘弁だしね！

「マスターっ！廊下は走つてはだめですよっ！もうっ！後できちんとお話を聞かせてもらいますからねー!!」

基本真面目なマシユはカルデアの廊下を走らない。だからこそ、カルデアでの追いかけてこであればオレに分がある。流石に非常事態であれば違うだろうが、今回のケースは別に急ぐことでもない。……あとが非常に怖いとかは考えないようにしよう。

バダバタとマシユから逃亡を図ったオレは自分のマイルームへとたどり着く。が、そのまま中へと入ろうとするその行動はマイルームの扉の前でソワソワとしている小さな影に止められた。

「——リリイ？」

「あつ！トナカイさん！おかえりなさい！」

扉の前に居たのは今回の大騒動の原因……って、この言い方はちよつと可哀想か。中心人物のジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイだった。オレは長いからリリイと呼んでいる。……他にもリリイの可能性を持つサーヴァントはいるが、この子を除いて1人としてうちには居ないので大丈夫だろう。

その彼女はオレを見つけると子供らしい非常に愛らしい笑顔を見せ、トテトテと駆け寄りポスリとオレの胸の中へと飛び込んできた。突然の行為に少々面食らってしまったが、ひとまず疑問に思ったことを口にする。

「どうしたんだ？もしかして自分の部屋の場所が分からなかったのか？」

「あつ、いえ！自室に関してはナヨナヨしているお医者さんに教えてもらいましたので大丈夫です。すでに場所の確認も終わっているので問題無しです」

ロマンエ……。ほぼ初対面の女の子にナヨナヨいって言われるとか流石に同情するぞ。うちの最高責任者代理の扱いに心中で涙しながら、オレはなるべく優しくリリイを引きはがして彼女に目線を合わせるように片膝をついた。

「じゃあ、どうしたんだ？」

「えつと、その……改めてお礼を言いたいなと思ひまして……」

オレの身体から離れ、マゴマゴと口籠もったりリリイだったがやがて頬を朱に染めなが

らえへへと笑った。

「本当にありがとうございました、トナカイさん^マ。もしトナカイさん^タが私を導いてくれなかったら、きつと私はサーヴァントとしての存在を確立することができず消滅していたと思います。美味しい料理を食べることも、クリスマスを楽しむことも、友達を作ることも、そして夢を見ることも何も理解せず消えてしまっていたはずです。だから、本当にありがとうございました」

リリイは背筋良くその小さな身体を曲げて深々と頭を下げてきた。ジャンヌは幼少の頃奔放な少女だったと聞くが、非常に礼儀正しい子でもあったのだろう。動作の1つ1つに育ちの良さを感じる。

「オレは君にほんのちよつとだけヒントを与えてあげただけだよ。自分の夢も、望みも、存在する意義も、その全てを見つけたのリリイ自身だ」

「トナカイさん^マ……ですが」

「ですが何もねえよ。頑張ったのはお前だ。必死に考え抜いたのも、貫くために戦ったのもお前だ。そういうところは他のサーヴァントにも負けてねえよ。だからドーンと胸張つときやいいんだよ」

「……分かりました。本当に、本当に本当に！ありがとうございました！トナカイさん^マ！」

「ははっ、どういたしまして。さっ、今日はリリイも疲れただろう。早く部屋に戻って休んでっい」

「はい！じゃあ、お休みなさい！——私の大好きなトナカイさん！」

最後にリリイはとびっきりの笑顔を見せてその場を後にした。嬉しそうな駆けていくその後ろ姿は、本当にただの子供のように無邪気で純粹だった。もうあの子は大丈夫だろう。胸に秘めた夢や望みがある限りきつとどんな困難を前にしても立ち上がれるに違いない。

こうしてカルデアのクリスマスの小さくて大きな事件は幕を閉じたのだった。

さて、それにしても——

「——やっぱり小さいジャンヌ・オルタもいいけど大人版ジャンヌ・オルタさんも来て欲しいなあ。ルーラーのジャンヌさんでも可」

——ちよつとした後日談——

「マ、マシユ？その、まだ怒ってる、のか？」

「何のことですかマスター。私は怒ってなどいません。ええ、怒ってなどいませんとも。それでマスター、何か御用ですか？」

「(メツチャ根に持つてるじゃん……) ああ、いや。そのお詫びと言つては何だけど、これ」

「……これは」

「その、ほらクリスマススの時期はきつと色々忙しいだろうからちよつと早めのクリスマスプレゼントをって思つて」

「マフラー、ですか？」

「うん、これからさらに寒くなるしマシユなら似合うかなって思って。め、迷惑だったか？」

「そういうわけでは……」

「確かにマシユを蔑ろにしたのは悪かったと思ってる。すげえ反省した。次、もしこういうことがあったら必ず相談する。今回のことは……本当にごめん」

「——ふふふつ。全く、先輩はしようがないですね」

「えっ？」

「この前のリリィさんの件はこれで許してあげます。ですが、今度からは私に隠し事は無しですよ？」

「お、おう、本当にすまんかった」

「分かってくださればそれでいいです。あれ？このマフラーちよつと長めですね」

「嘘!？うわ、しまった。ちよつと長いやつ用意しちまった。ごめん、マシユ。こう長いと使いづらいよな」

「……いえ、それならばこうして」

「マ、マシユ？」

「ふふつ。こうして2人で首に巻いてしまえばちょうどいいですよ、先輩」

「あ、ああ」

「——暖かいですね、先輩」

「——そうだな。本当に、暖かいよ」

年末になつてもうちのカルデアに星5の鯖が来ないんだけど、あれつて来年また出直して来いつてことだよね？

その日、オレは聖晶石と呼符が入った箱を抱え召喚部屋へと出向いていた。その隣にはすでに一心同体と言つても過言ではない相棒ことマシユも随伴している。

マシユを連れ立つて無言のまま部屋へとログインし、召喚サークルの前に立つて持っていた箱を降ろす。そのまま身軽になつた両腕のうちの一本を天井に突き刺されと言わんばかりに高々と振り上げ――

「――バビロニアピックアップアップがあああ！キタアアアアアア！」

「わー、今日はまた一段とテンションが高いです」

抑え込んでいたテンションを解放する。そんなオレの天元突破しそうなオーラとは
逆に、何故かマシユは非常に疲れたような雰囲気醸し出していた。

「おーい、マシユ。なんかテンション低くない？もつとアゲアゲでいこうぜー」

冷静になつて後で改めて思い返すと、この時のオレ相当ウザかった。ダビデと同じく
らいウザかった。ほら、遠足の前とかワクワクするじゃん？それと似たようなもんだ
よ。

そんなオレのハイテンションな様子に、突如マシユは無表情になる。えっ、どしたん
？

「——ここ数日このピックアップのせいで先輩のテンション高くて他のサーヴァントの
方々やカルデアスタッフに多大なご迷惑をおかけしてましたよね？いえ気持ちは分か
るんですよ、私もお会いしたい方々がたくさんいらっしゃいますから。ですが流石に少
しくらい落ち着いて欲しかったです。私がどれだけ頭を下げたと思ってるんですか。
ここ数日で私の謝罪スキルがどれだけ上がったと思ってます？すでにスキルレベル1
0ですよ、分かってますか」

「あつ、はい。ごめんなさい」

ヤバイ。ハイライトのない目で息継ぎ無しで捲し立てられると超怖い。清姫と同じ

雰囲気を感じた。あれだね、声が似てるからだね（メタ）

「と、とりあえず召喚してみてもいいでせうか、マシユ様？」

「何故様付けなんですか。……はあ、もちろんいいですよ。このために石や呼符を先輩が頑張つて貯めてきたことは知ってますから」

呆れたように息を吐きつつも、どこか母性を感じさせる優しい笑みを浮かべるマシユ。ようやくいつもの様子に戻った彼女の様子に強張っていた身体の緊張が抜け落ちる。

そう、オレはこの日の為に石と呼符を貯めてきていた。聖晶片をかき集めてダヴィンチちゃん工房に足良く通つて聖晶石変えてもらったり、なんかこう上の存在運からもらつたり、どうしてもらえるのか分からないがクエストを消費したりと、尽くせる手は全て尽くした。あとは己の運を信じるのみ！

「先輩のその言葉、召喚する度に聞いていますが1度として最後まで信じられたことってないですよね」

「大丈夫、今回こそはいける。だってこんなに石も呼符もあるんだぜ。下手な鉄砲、数撃ちや当たる作戦だ！」

「そこで下手な鉄砲って言ってしまつてるところからして、自覚はしてるんですね」

もちろん。ここまで引き悪くて自分運良いですとは決して言わんよ。自分の幸運E

な感じは槍ニキとかとタメ張れると自負している。やだ、なんか悲惨な死を遂げそう。『自害せよマスター』とか言われたらどうしよう。いや、誰にだよ。

最初の石30個を召喚サークルの中に放り込む。今回は20連と呼符7回分溜め込んできた。何？少ない？これでも頑張ったんだよ、文句あつかこのやろー。それにこれだけあればきつと呼べる……いや、呼んでみせる！オレが、オレ達がサンタムだっ！（意味不）

グルグルと周り光球が召喚サークルの周囲を回り出す。まるで太陽の周囲を公転する星々のような煌めきを見せる光の球は、やがて中心へと集いて金色のカードを浮かび上がらせた。

このクラスは——ランサー！

「キタアアアア！これ絶対エルキドウさんだよな!?あの人ランサーだもんね!?今回これバビロニアピックアップだし、そうだよな!」

「まさか、ついにうちのカルデアに星5のサーヴァントさんが……!」

うっしやオラア！誰が幸運Eだ！そんな不名誉撤回じゃあ！ついに、ついに星5が……!勝った！第3部完！まだ1部だけ！

これ以上無いというくらいテンションを昂らせるオレと、もはや感動にその董色の瞳をウルつとさせるマシユ。対極的な反応を示しているようだったが、オレ達の心は1つ

だった。

長かった、ここまで本当に長かったんだ。ようやく、この堂々巡りから解放され――

「エリンの守護者。栄光のファイオナ騎士団の長。ヌアザに勝利せし者……フィン・マツクール、ここに現界した。よろしく頼むよ、マスター」

「誰だてめええええ!!」

「おおっと!? はっはっは! 相変わらず威勢がいいな、マスターよ!」

「うっせえよこの親指噛む噛むロン毛違いがあ! 猪ぶつけんぞオラア!」

「それはやめてくれたまえ。猪はなにかと私に効く」

女性かと思紛う艶のある金色の髪を揺らめかせ、今までに何人もの女性を落としてきたであろう不敵な笑みを浮かべる騎士。オレが召喚したのはそんなナルシストなサーヴァントだった。違う、オレが来てほしかったロン毛はお前じゃないんだ……。

思わずガクリと膝をつく。足の皿が割れるのではないかと思うぐらい勢いよくついてしまったが、今はシヨックの方が勝っていた。

「せ、先輩大丈夫ですか!? 色々とすごい顔してますよっ!? えっ? もうダメかもしれない

? しつかりしてくださいさあはい!」

「まあまあ、お嬢さん。マスターはどうやら私の美しさに酔ってしまったらしい。心の底から謝罪しよう。これも私が美しいからだ。……それはそれとして、今から一緒にお茶でもいかがかな? 優雅で可憐なひと時を届けることを約束しよう」

「うちの大切な後輩いきなり口説いてんじやねえ! 張つ倒すぞ!」

マスターが心底落ち込んでいるというのにこの態度。絶対に肅清せねばと拳だの蹴りだのを繰り出すのが、流石は腐つても騎士団の長。自前の回避スキルもあつて一切当たらない。チツクシヨ! これだから回避持ちのランサーはつ!

「——あつ! 先輩! またランサーのカードが出てきましたよ!」

「なぬう!?! おわつ、マジだつ! これは1発逆転かつ!」

ナルシストのマイペースっぷりにはあははと苦笑いを浮かべていたマシュだったが、ふと慌てたように召喚サークルを指差した。彼女の言うようにそこにはランサーのカードが現れている。うおおおお!?! 今度こそキタんじやねえかこれつ!?!

「フィオナ騎士団が一番槍、デイルムツド・オディナ、推参いたしました。これより貴方を守るサーヴァントとなります」

「オイイイイ!?! 1回の10連でフィオナ騎士団揃っちゃったじゃねえかああ!!」

うちのカルデアを中から瓦解させる気かよ!?! お前らがいると内部崩壊のフラグ立ちまうだろうが!

「おおっ! デイルムツド・オディナ! 我が栄光の騎士団随一の騎士よ! 再び共に戦えることを嬉しく思うぞ!」

「わ、我が王フィン・マックール!?! 貴方様もこちらにいらしていたとは! もちろんです。我が双槍存分に振るいて、フィオナ騎士団一番槍の名に恥じぬ戦を見せましょう!」

勝手に身内だけで盛り上がらないでくれませんかねえ……! 完全にオレとマシユ置いてかれてんだけど。というか残りは全部礼装だったし、最初の10連終わっちゃったんだけど。

一応星4のサーヴァント出て幸先は悪くないはずなのに、ハズレ引いた感が半端ないのはどうしてだろう……。

その後とりあえず2人には歓迎の言葉を投げつけ、部屋を後にしてもらった。宝具レベルすでにMaxのデイルムツドさんはまだしも、フィンさんは初めての召喚である。

後でブーティカさんと共に歓迎パーティーでも開こう。ほら、なんだかんだで相手は英
霊さんだからね。敬意は払わないと。

「はいはい、そんなじゃさつきと次の10連行くぞー」

「ものすごくやる気を失われているのが分かります……。大丈夫ですか、先輩？」

「いや、もうなんか来る気がしなくてさ。どうでもよくなってきた」

「あんなにやる気になってたのに……」

しよすがねえじゃん。正直さつきの対応で疲れたんだよ。早くマイルームに戻りた
いんだよ。フィンさんじゃないけど、マッシュとお茶でもして癒されたいんだよ。うちの
後輩、セラピー効果抜群だから。あの笑顔見るだけで周回とか余裕だから。

ほーら、もう誰でもいいからさつきと終われーと石を投げこむ。社畜のように働きま
くる召喚サークルさん、いつも本当にご苦労様です。心の中で無機物に劳いの言葉をか
けていると、バチバチと一際大きな光が部屋の中に迸る。その中心から現れたのはまた
してもランサーのカード。しかも金色。えっ、嘘マジで？

「おいおい、オレ明日辺りに死ぬんじゃないの？2回連続でランサーの金枠ってどうい
うこと？」

「縁起でもないこと言わないでください。ですが、本当に珍しいですね。先輩にしては
当たりが来すぎな気がします」

「ついにオレの運気が覚醒したのかな？」

「それはないかと」

わーバツサリ切られたー。でも、言つといてなんだがオレもそう思う。緊張感など全くない会話をマシユとしている間に光は中心点へと収束していき、その中に小柄な影が現れた。

頭の先が猫の耳のように尖った黒いマントに三つ編みにした濃い紫色の髪。その手には小柄な身長の身の丈ほどもあろうかという大鎌が握られている。別名不死殺しの刃とも呼ばれるその鎌の持ち主は――

「――ランサーのクラスで現界しました。真名、メドゥーサ。よろしくお願いします」
「アナさんっ!？」

跳ね上がるようにマシユの驚愕の声上がる。現れたのはメドゥーサ。つい先日ウルクで共に戦い、最終的にゴルゴーンとなって原初の母――ティアマト神の右角を折

り、オレ達への道を開くために消滅していった少女だった。

「私はアナと言う存在ではありません。貴女の知る英霊とは違いますよ」

「あ、そう、ですよね……。すみません、メドゥーサさん」

「いえ、気にしていいので」

メドゥーサの返答に見るからに落ち込んでしまうマシユ。無理もない、マシユはアナとも仲が良かったし、最後まできちんとお別れを伝えることができなかったのだ。英霊は同じ人物であろうと、記憶がなかったり別の側面を持つていたりする。一括りに同じ人物でもオレ達のことを必ず知っていると限らないのだ。

……うん、暗いのはやめにしよう。彼女は自身をアナではないと言ったのだ。にも拘らず彼女をアナとして見てしまうのは失礼だろう。せつかく来てくれたんだし、居心地の悪さを感じてほしくはない。

「ほら、マシユ元気出して。じゃあ、メドゥーサさん……って言い方はすでにいるライダーのメドゥーサさんと被っちゃうな。メドゥーサちゃんって言うてもいい?」

「マスターの意志にお任せします。大きい私共々これからよろしくお願いします」

「うん、じゃあよろしくメドゥーサちゃん。あ、うちにはステンノさんはいないけどエウリュアレさんはいるからあとで会ってくるといいよ。きつと君の姿を見て驚くんじやないかな?」

「了解です、マスター」

「……分かりました、マスターの指示に従います。ですが、いざという時は私も戦います
からね」

「ああ、ありがとう」

何故ここまでオレが警戒の色を示しているのか。それはバーサーカーの特性の狂化
に関係している。狂化はサーヴァントの能力を飛躍的に向上させるが、その分その理性
までも奪ってしまう。そのため、召喚と同時に襲い掛かってくるサーヴァントも極稀に
いるのだ。令呪を使えばすぐに抑え込むこともできるのだが、万が一ということもあ
る。召喚の場にオレがいつもマシユを連れ立っている理由もそこにある。マシユに
バーサーカーを抑えてもらい、その間にオレが令呪で落ち着かせるのだ。

……別にマシユと一緒にいたいからこうして連れまわしているわけじゃないからね
?ちゃんとした理由があつたんだからね?誤解しないように!

「先輩、バーサーカー現界します!」

アホみたいなことを考えているうちについてその姿が現れる。神々しく輝く光の中
から現れた狂化された英霊。その正体は――

「……………」

灰色の丸太のような巨体。盛り上がる筋肉はそれぞれが鋼の鎧となっており、逆立つ髪や狂暴そうな表情からは彼の尋常ではない気迫を感じる。手にした巨大な斧剣は無骨ながら、有りとあらゆる武器に対抗できそうなほど頑強に見えた。

オレが召喚したのはそんな、ギリシャ神話の頂点に立つ大英雄——ヘラクレスだった。

「アイエエエエ！ダイエイユウ!? ダイエイユウナンデ!？」

「これは……流石に抑え込むのは難しい気がします、マスター」

「た、たたたたぶん大丈夫だと思うよ？へ、へヘラクレスさんはまだ理知的な方だとお思うし……。バーサーカーだけど……！思いっきりバーサーカーだけど！」

「そういえばそうですね。今のところ襲い掛かってくる気配がありません」

「ヘラクレス……！ペルセウスと同格の大英雄……！」

「お願いだから今すぐ襲いかかるなんてことは止めてね、メドゥーサちゃん。君の不死殺しと大英雄との戦いなんて止めれる気がしないからね？オレ死んじやうからね？」

と、とりあえず、ヘラクレスさんと会話してみよう。大丈夫、ネロ祭の時に唯一突破できた試練がヘラクレスさんの12の試練だったけど、勝った後に何もしてこなかった

——後日談——

「それにしても、フィオナ騎士団の御二人が同時に来たのはまだ分かりませんが、なんでメドウ・サちゃんとかヘラクレスさんは同時に来たんですかね?」

「うーん、言われてみれば」

「御二人の共通点と言えばギリシャ神話です。ですが、直接的に関わりはなかったと思
うんですが」

「……意外とヘラクレスは子ども好きだったりして」

「えっ?へ、ヘラクレスさんですか?そのようには見えませんが……その、随分と迫力
のある方ですし」

「分かんねえぞー。意外とああいうタイプって世話好きな一面持っていたりするし。もし
かしたら、どっかの世界でそういうマスターと一緒に戦ったのかもしれないぞ」

「ふふっ。もしそうだとしたら、凸凹コンビになりそうですね。きつと素敵な絆で結ば
れていたと思います」

『「やっちゃえバーサーカー!」とか命令されてたりな」

「なんだか夢のあるお話ですね」

「まあ、冗談だけだな。あははっ！」

「そうですね。ふふふっ」

「……………
……………何故分かったのだろうか」

冠位時間神殿ソロモン 前編

その世界のことを例えたとすれば何が一番最適だろう。

——宇宙か、地獄か、あるいは……世界の残骸か。

あらゆる例えが正しいようで、あらゆる例えが間違っている。そもそも空間と定義して良いのか、ここは本当に世界という括りに収めて良いのか、それすら曖昧であった。

ソロモン第二宝具、固有結界『時間神殿ソロモン』

もつとも、今この場に立つ人類最後のマスターには気にすることではない。否、気に

する思考などこの瞬間持ち合わせていないのだ。ここがどういふ場所なのか、そんな小さなことを考える余裕など、目の前に迫る消却の波に打ち消されていた。

魔術王ソロモンの名を語り、ここまで人理を翻弄し続けた者の正体。ソロモン七十二柱の魔神の集合体にして人類史全てを利用し原初に至ろうとした魔術。『人理焼却式ゲーティア』。魔神王と自ら名乗り、『憐憫』の名を持つ『原罪のI』となり、術者であるソロモンすら超えて全能者になった彼——いや『彼ら』の放つ宝具は、今までのどの英霊が放つ宝具よりも圧倒的だった。

有を無に。焼かれるのか刻まれるのか溶かされるのか。あの消却の一撃に触れたらどうなるのか考えたくもなかった。幾多の人理を糧とし焼きつくす宝具『誕生のときたれり、其は全てを修めるもの』。何億もの破壊の閃光。それら一条一条が聖剣の光に匹敵するという。

尋常ではない熱量を持ち、惑星すら容易く貫くその宝具を防ぐ術などないはずなのに、しかしそれはマスターである少年の目の前で確かに防がれていた。少年と同じ歳頃の少女の構える盾によって。

「あああああああああつ!!」

自身奮い立たせている鼓舞とも、必死に光帯の一撃に耐える悲鳴とも取れる叫び。盾の少女、人の身でありながらサーヴァントと融合しデミ・サーヴァントとなったマシユ・

キリエライトの宝具によってかろうじて、今にも切れそうな細かい糸によって少年とマシユの命は繋がれていた

マシユの宝具は全英霊の中でも一際特別なものと言えよう。長い旅路を経て彼女が体現させた究極の護り。『いまは遙か理想の城』。その強度は使用者の精神力に比例して強固なものとなっていく。何物にも染められていない、一切の穢れもなく迷いもない純粋な白亜の盾。それはマシユの心が折れなければ決して崩れはしない無敵の城塞だった。

その彼女の宝具だからこそ確かにゲーティアの宝具を受け止めていた。しかし、少年は叫び声を上げ、そのか細い身体を揺らしながら絶対なる力を受け止めるマシユはとても見ていられなかった。

それでも、駄目だとも、やめろとも少年は言うことができない。自身の命が惜しいかななどではない。自分の目の前で決死の覚悟で盾を構えるマシユがどれだけの思いでそこに立っているか知っているからだ。長いようで短かった時空を巡る旅で少年はマシユのことを誰よりも理解していた。誰よりも、大切に想っていた。

——やめろ……

——負けるな！

——もうやめてくれ……

——頑張れ！

——これ以上は……！

相反するグチャグチャの思考が少年の脳内を駆け巡る。嘯み締めた歯がギリツと不快な音を立てる。正面から襲いかかってくる圧倒的な魔力の衝撃に吹き飛ばされそうになるのを必死に堪える。

マシユの命はすでに限界だ。たとえどんな結末が訪れようともこの果ては揺るがない。この世界にレイシフトする時、少年はマシユの参戦を思い留まらせようとした。一秒でも長く生きていてほしかったから。

だが、マシユはその提案を断った。残り少ない活動時間を狭めることになっても共に戦いたい。自分は命の欲びを知っている、だからこそ一緒に連れて行ってほしい。人理焼却を防ぎ、人間の価値を示し、そして自分たちの未来を取り戻すために、と。

ゲーティアに人類史を否定し、共に行こうではないかと問われた時もマシユは迷うことなく頭を振った。自分は死の世界、終わりのない永遠なんて欲しくはない。見ている世界は今ここにあるのだ。例えこの命がほんの僅かだとしても、一秒でも長く未来を見ていたいから。

力強く、マシユがこの旅で積み上げて得た心からの気持ちだった。

「……良かった。これなら何とかなりそうです、マスター」

無限に続くのではないかと錯覚する破滅の時間の中で、少年は目の前の少女の声を聞く。彼女の顔を確認することはできなかつたが、こんな状況の中で彼女の声色はいつものように穏やかだつた。

「今まで、ありがとうございました。先輩がくれたものを、せめて少しでも返したくて、弱気を押し殺して、旅を続けてきましたが……ここまでこられて、わたしは、私の人生を意義あるものだつたと実感しました」

——違う。自分はまだマシユに何もあげられていない。彼女がいつか見てみたいと言つていたカルデアの青空も、高層ビルが並び立ちつつもどこか温かい街並みも、たくさん命が輝く未来を見せることも、何一つ叶えられていない。

「……でも、ちよつと悔しいです。わたしは、守られてばかりだつたから。最期に一度ぐらいは、先輩のお役に、立ちたかつた」

違う違う違うツ！守られていたのは自分の方だ。必死になって、戦うことなんて嫌いなはずなのにそれでも恐怖を押し殺して戦って、自分を守ってくれていたのはマシユだ！

少年の水晶のような青い瞳から涙が零れ落ちる。そのせいで振り返るマシユの顔すら歪んでよく見えなかった。それでも、少年はマシユがニツコリと笑っているように見えた。その笑顔を、誰よりも守りたいその笑顔を見た瞬間——少年は全てを分かかってしまった。

この旅を通してマシユが心の底から望んだものを、それを最後の最後で見つけられたことを。

——ああ、そうかマシユ。君は……

破滅の奔流が消え去る。周囲は宝具の余波を受け、美しかった玉座の情景を跡形もなく葬り去っていた。

そして——

「見るがいい、肉体は光帯の熱量に耐えきれず蒸発した」

ゲーティアが静かに言葉を並べる。彼の言葉の通り、少年の目の前には誰もいなかった。ただ、墓標のように突き立てられた大きな盾が、主無き今でも少年を護るかのよう
にそこにはあった。その雪花の盾には傷一つついてはいない。星を滅ぼす一撃を受け
たというのに。その純粹なる盾は彼女の精神の在り方を示すように、彼女の主を護り抜

いた。

ゲーティアは自身が予想していた結末を見届け、説く様に少年に言葉を投げかける。「……だから言ったんだ。彼女は勇敢な戦士でもなく、物語の主題でもない。ただの、ごく普通の女の子だったんだよ」

その瞬間、少年の中で何かが消えてしまった気がした。

「——あ、うああ……うあああああああああ!!」

慟哭だった。敵の前だというのにも関わらず、少年は叫び、嘆き、涙を零す。頭を抱え、荒れ果てた地面に蹲るように崩れ落ちる。

守りたい人だった。救いたい人だった。心の底から想っていた人だった。でも、もうその彼女はいない。最期の最後まで自身の命を輝かせるように戦い、そして儚いその命を散らせていった。

「分かっていた……！分かっていたさっ！マシユが何を考えているのかもっ！彼女がどんな選択をするのかもっ！何もかも分かっていたっ！だけど……ッ！」

止められるわけがないじゃないか……！止めてしまえば彼女の生を、この旅の全てを否定することになる。どんなに悲しくても、どんなに辛く胸が痛くなっても、少年は否定だけはしたくなかった。彼女の存在を否定するようなこと、そんなことは決して。

「無駄なことだ。まったく無駄なことだ」

狂ったように叫び続ける少年へ冷ややかな視線を落とし、ゲーティアは吐き捨てる。我々是不滅、貴様の一時の生存も、英霊どもの抗戦も、すべては無意味だと。そのことを言い終わるや否や、ゲーティアは新たに宝具を展開する。何という出鱈目な力だろうか。星を貫く一撃を容易く再発動させるなど。

ゲーティアの言葉に続く様に、遠くの方から地響きが聞こえる。マスターである少年との縁を辿り、この世界に駆け付けた英霊達。彼らの力は圧倒的ではあったが、その力は魔力と言う有限である。無限に復活し続ける魔神柱を抑え続けることは不可能だろう。だからこそ、彼らは少年に託したのだ。人間の未来を、勝ち取って来いと。

「ああ、最後に殴りかかるぐらいは許そう。貴様の気持ちは理解できる」

「理解、だと……？ふざけんな……！ふざけんなッ！てめえにだけは理解される筋合いはねえ！オレにとつて、彼女は、マシユは……！大切な人だったんだッ！誰よりも、大切な……！」

「理解できるとも。不服ではあったが、これでも人間社会で活動した身もこの中にはある。貴様らの怒りがどういった風に向けられるかなど、予測は容易いものだ」

「——ッ！そうやって、何でもかんでも計算なんかで人の心を測ってんじやねえ！心つてのは、そんな単純なもんじやねえんだよ！」

「ほざくな、人類最後のマスターよ。我らがマシユ・キリエライトの弔いとして、一撃だ

けは受けてやろうと言っているのだ。その貧弱な人の拳で、我が体に触れて死ね」
「——上等じゃねえか」

少年はユラユラと立ち上がり、グツと令呪が刻まれた右拳を握る。相手は魔神柱を束ね、人類を抹殺しようとしている王だ。たかが魔術師。いや、たかが人間の拳など通用するはずがない。怒り狂いそうな頭で、どこか冷静に少年は理解していた。それでも、ここで引くわけにはいかなかった。

「——いやいやいや。そこはちよつと落ち着こうよ、——君」

そんな時だった。この戦場に似つかわしくない、のんびりとしてどこか温かみのある声が届いてきたのは。

どうしてと少年は混乱する。どうしてあの人がこの場所に。貴方はモニターの向こ

うで指揮を取っているはずじゃ……そもそも戦場を闊歩するなどできるはずが……！

「玉砕はキミらしくない。ここはもう少し、力を溜めておいてくれ」

「D, r ロマン。なんで貴方が……！」

いつも着ている白衣を揺らし、軽やかに歩みを進める。結んだ長髪も、いつも管制室で見かけた穏やかな笑みもそのまま、ロマニ・アーキマンは戦場に訪れた。

突如として現れたロマニ——いや、本物の『魔術王ソロモン』。彼はその正体を明かにしても、幾度その細身の身体をゲーティアの攻撃により激しく揺らしても、ロマニの時のような声色でゲーティアへと語りかける。

「ゲーティア。お前に最後の魔術を教えよう。お前が知る事のできなかった、ソロモン王の『人間の英雄らしい』伝承から発動する本当の第一宝具。お前の持つ九つの指輪、そして私の持つ最後の指輪。今ここに逸話の再現を」

「——ツ?!馬鹿なツ!臆病者であるお前にそんなことができるはずがない!待て、止めろ……止めろ止めろ止めろツ!この指輪は、全能の座は、お前だけのものでは……!」

ソロモンはしかし、ゲーティアの焦りには耳を貸さず、ゆつくりと詠唱を始める。次々に紡がれる言霊に応じて彼の周囲に光の奔流が現れ始めた。それらは主の決意に従うように、徐々にその輝きを増していく。

——第三宝具

『誕生アル・ス・アルのときマたれり、其は全てデル・サを修めるロモニスもの』

——第二宝具

『戴冠アルのときルたれり、其は全てパを始リめるナもの』

嫌な予感がした。先程マシユを失った時と同等の感覚。しかし、止めようにも湧き上がる凄まじい魔力の風に、その場に縫い合わされたかのように動けない。

「そして——神よ、貴方からの天恵をお返しします。……全能は人には遠すぎる。私の仕事は人の範囲で十分だ」

その言葉を紡いだ時、ソロモンがどんな思いを抱いていたのか、少年には分からなかった。彼のことを紙面で調べてはいても、その心情までは読むことができない。諦めていたのか、疲れていたのか……あるいはホッと、安堵の気持ちだったのか。

「第一宝具、再演——」

『訣別の時きたれり、其は、世界を手放すもの』

その瞬間、一際魔力の光が輝いたかと思うと、今まで一番大きな衝撃が世界を揺らす。今までのように断続的な揺れではなく継続の揺れだ。まるで世界が端の方から崩れ落ちていくような感覚だった。

グオオオオ！とゲーティアが苦悶の声を上げる。先程まで纏っていた圧倒的な魔力が明らかに弱まっていた。そして、それに呼応するかのようにソロモンの姿が次第に薄れ始める。いや、その姿はソロモンではない。いつの間にかD r ロマンの姿へと戻っていた。

「ロマンツ！貴方は一体何をツ!？」

「うん。ボクの持つ全てをいま、放り投げた」

「全てを、放り投げた……?」

「そう。かつてソロモン王は天から授かった指輪を後に天に返した。ボクがしたのはその再現だ」

「な、なら、その身体は……!」

「放り投げたのは文字通りボクの全てだ。身体も、命も。要は自爆攻撃だよ」

淡々と事態を説明するロマニ。意外にもそれを遮ったのはゲーティアだった。

「そんな単純なものかッ！貴様は英霊である事すら放棄したッ！それはすなわち己が全

ての放棄だツ！功績、創造物、存在、その全てが無価値になるツ！我ら魔神柱も個別の魔神となり解けていくのだツ！」

何もかも放棄した結果、ソロモンの全ては消え去った。ソロモンの宝具によつて成り立っていたこの世界も。だからこそ、魔術的な効力を失ったこの世界は崩壊へのカウンtdownを刻み始めたのだ。

そして、存在を捨て去ったことでソロモン王は英霊の座からも消え去る。死など生温い、完全なる無への消滅だった。

「完全なる無……!?!」

「これでいいんだ。この選択をキミとマシユがボクに教えてくれた」

「ふぎ……：けんなツ！勝手に出しやばつてきて！勝手なことばかり言つて！勝手に消えようとしてんじやねえよツ！なんだよそれ……：！何なんだよツ！」

「これでゲーティアの不死身性も無くなった。今ならきつとゲーティアを倒せるはずだよ」

「そういうことが言いたいんじやねえ！消えんな……：消えないでくれツ！オレは、これ以上……：誰かを失いたくない……：！大切な人を、大切な友達を失いたくねえんだよツ！」

少年は消えかかっているロマニの肩を掴もうと手を伸ばす。だが、その手が友の肩を

掴むことはなかった。まるで空気を掴むかのように、スルリとすり抜けてしまったのだ。

予想だにしていなかったことに少年は唾然となる。対照にロマニは理解していたのか、少しも動じることなく小さく笑みを零した。

「——ははっ。良かった、キミに友達って思われていて。ボクは人間になって、この焼却の未来を見た時から必要最低限の関わりしか持たなかった。だから、友と呼べる人なんていなかったんだ。ダヴィンチちゃんも友達と言うより理解者だったからね」

「ロマニ……！」

「ありがとう、——君。本当に嬉しいよ。でも、これこそがボクの旅の終着点なんだ。分かってくれとは言わない。きっと難しいだろうからね。でも、知っていてほしいんだ。ボクは犠牲になるわけじゃない。キミの、キミとマシユが紡いできた旅路の道標になれるんだ。キミたちの成長を間近で見ていたボクからしたら、こんなに嬉しいことはないんだ」

ボロボロと再び涙を零す少年に、ロマニは優しく微笑みかける。この人間になってからの10年間、決して他者に心を開かなかった人間の、心からの笑みだった。

ロマニはそのまま、ゲートティアへと向き直る。ゲートティアは今にも消えてしまいそうな男を痛烈に批判した。人間の一生など『憎悪と絶望の物語』だと。あらゆるものは永

遠ではなく、その先にあるのは苦痛と死への恐怖のみ。

捲し立てるように言葉の圧をぶつけるゲーティアに、ロマニは静かに首を振った。確かにあらゆるものは永遠ではなく、最後には苦しみが待っている。だが、それは断じて絶望ではない。限られた生の中で、死と断絶に立ち向かう。終わりがあると知りながら、それでも別れと出会いを繰り返すもの。

「——輝かしい、星の瞬きのような刹那の旅路。これを、『愛と希望の物語』と云う」
 「『愛と希望の物語』……」

ロマニの言葉を噛みしめるように少年は反芻する。人間は憎悪ばかりを抱いているのではない。誰かを愛し、誰かを尊い、誰かを想う。時に愛は憎悪すらも優しく包み込む。すなわちそれこそ希望。際限ある時間の中で、人間が築き上げてきた確かな希望だった。

「——笑わせる。貴様の戯れ言など、何一つ我々には届かない。貴様を殺し、カルデアのマスターを殺し、英霊共も葬ってくれる。命に限りなど必要ない！死を前提にした物語など私には無用だ！失せるがいい、人間達よッ！」

再びゲーティアを中心に魔力の台風が巻き起こる。確かに先程よりも魔力の質も量も弱体化している。しかし、それでも原罪の持つ魔力は圧巻の一言だった。

「——いよいよだな。ボク……いや、ボク達が最後に見るのはキミの勝利だ。カルデア

の司令官として指示を出すよ。私の事は気にせず、完膚なきまで完全な勝利を」

その存在を薄れさせつつも、ロマンは力強い視線をマスターへと注ぐ。それは、共に戦ってきた戦友から送られる視線。キミなら大丈夫という信頼の証だった

「さあ——行つてきなさい、——君。これがキミとマシユが辿り着いた、ただ一つの旅の終わりだ」

「……………分かった」

崩れゆく世界で、静かにその言葉が響いていく。マスターである少年にもその響きは確かに届いていた。赤くなつた目を礼装の袖で拭い、腕をどかした時にはその真つ直ぐな青い瞳を輝かせていた。

「……………ロマン・アーキマン」

「ん？なんだい？」

「——貴方に、心から最大の敬意を」

少年の言葉にロマンは満足そうに微笑み——ついに、その姿を消失させていった。少年やマシユが歩き出すよりも先にこの旅路を歩いていた存在。その笑顔は少年やマシユを気づかないうちに守り続けていた。

残されたのは理不尽な程の魔力を振るう一匹の獣。そして、幾多の世界を歩き渡り、大きく成長した人類最後のマスター。

少年はカルデアから供給されている魔力を練り上げる。その周囲にいくつもの召喚陣が現れ、そこから共に戦い続けてきたサーヴァント達が現れた。彼ら彼女らの温かな魔力に背中を押され、少年はキツとゲーティアを見据える。そこにはもう悲しみも迷いもなかった。

少年はマシユが残っていた盾を持ち上げる。もう彼女はいないのに、それだけで温かな気持ちの流れ込んでくる気がした。それだけで——負ける気がしなかった。

「——いくぞマシユ。これが最後の戦いだ」

——はい、先輩！

いつも隣で聞いていた、あの声が聞こえた気がした。

冠位時間神殿ソロモン 後編

戦いが始まってどれくらいたっただろうか。5分？10分？いや、もしかしたら1時間かもしれないし、2時間かもしれない。崩壊していく世界と微塵も気を抜けない戦いの影響で、カルデアのマスターである少年の時間の感覚は酷く曖昧なものになった。

彼の周りには彼と共に戦うサーヴァント達がいる。いや、現状を『いる』と表現するのは些かズレていよう。何故なら彼ら彼女らは1人残らず地に伏していたからだ。

魔神王ゲーティアの力は絶大であった。ロマニ——魔術王ソロモンの宝具により弱体化したとはいえ、その身は原罪の獣だ。マスターである少年とサーヴァント達はゲーティアと互角の勝負を繰り広げた。閃光のように魔術を放ち、鋼の刃を翻し、岩のような拳をうち放つ。その全てが人の領域を超えた中で繰り広げられた。

しかし、やはり持久戦ともなると少年の方に分が悪かった。世界の崩壊が進んだせいか、いつのまにかカルデアからの魔力の支援も無くなり徐々に押され始めたのだ。ゲーティアも好機とばかりに宝具を発動。その威力に疲弊しつつあったサーヴァント達は軒並み倒れてしまう。弱体化したおかげで霊基こそ消滅していないものの、全員が満身

創痕。すでに体力も気力も限界だった。

しかし――

「はあ……！はあ……！はあ……！」

「くっ、たかが人間風情が諦めの悪い！」

少年はまだ諦めていなかった。急激な魔力の消費、人間である身の限界、人類の命運がかかっているという重圧、ありとあらゆる事柄が少年の枷となる。人外の戦いの采配という立場にあり、そのために脳の血管が切れるのではないかと錯覚するほどフル回転させて指示を出し、心も身体も凄まじく摩耗していた。このまま意識を手放してしまえたらどんなに楽だろうかと甘い嘔きまで聞こえてきそうだった。

――それでも、少年はゲーティアから目を逸らさない。勝つまでは、絶対に。

あちこちが引き裂かれた魔術礼装を身に纏い、身体にできた細かい傷から血を流しながらも少年は立っている。人理を滅ぼす獣を前にしても、残された思いを携えたその身は決して崩れ落ちることはなかった。

「何故立ち上がるッ!?我らの邪魔をするッ!?マシユ・キリエライトは死んだッ!ロマニ・

アーキマンを名乗ったソロモンもすでに無いッ！それなのに何故貴様は我に齒向かうのかッ!?そこまで生に執着しながら何故永遠を否定するッ!？」

「……マシユやロマンも言っただろうが。オレ達が見たいのは未来だ。人の、限られた時間の中で輝く命。永遠なんか手にしちまつたらそれはオレ達の物語じゃない。物語ってのは先があるからこそ見てみたいって思うんだよ」

「どこまでも愚かで傲慢な考えだカルデアのマスターよッ！僅かな生しか生きていない貴様に何が分かる!?そんなものはお前達のような限られた者達が口にできる戯言だ!」

ゲーティアが残像を残す速度で腕を振るう。直感的に少年はこの戦いの中決して手放さなかつた盾を正面へと構えた。その瞬間、とても耐えられるような威力ではない衝撃に襲われ、少年はボールのように弾き飛ばされる。崩壊しつつある世界の地面を数度バウンドし、やがて止まった。傍から見たらとても無事とは言えない状態だったがそれでも少年は盾を支えにしてふらふらと立ち上がる。蒼空を思わせる瞳はゲーティアから逸らず、眩しい程輝いていた。

「——愚かでもいい。傲慢でもいい。だって、そんなところも含めて人間だ。どこか不

完全で、だからこそ互いに支えあう命だ。誰かを思い想われる、そんな人間が作る先をオレは見る。マシユが信じた未来を信じる」

少年は支えにしていた盾をその場へと突き立てる。そして、令呪が刻まれた右手を持ち上げ、限界を迎えていながらもこちらを氣遣う視線を送るサーヴァント達へと微笑み、自身の全神経を手の甲に刻まれた令呪へと注ぎ始めた。

「——まさかッ!?!この状況になってまだ勝とういうのかッ!?!」

ゲーティアが焦った声を上げる。させるものかと両腕からレーザーのような屈曲する魔力を放つが、それらはボロボロの身でありながらもマスターを守ろうと立ち塞がったサーヴァント達によって防がれる。ボロボロに状態での捨て身の防御だ。いかに英霊といえど限界点を突破してしまった。ついにその意識が途絶えようとした瞬間、サーヴァント達は自らのマスターである少年の声を聞く。最後の最後まで取っておいた、聖杯戦争における最大の切り札を切る声を。

「令呪3画を以てマスターが命ずるッ!皆ア!もう一度だけでいい!オレに力を貸してくれッ!」

「グウウウツッ！き、さまああああ!!」

少年は右手に刻まれた令呪に生命力すら使っているのではないかと言わんばかりの魔力を注ぎ込み詠唱の言葉を紡ぐ。その瞬間、マスターとサーヴァントを繋ぐ確かな絆を辿り、戦友たちへと漲る魔力が供給された。その温かい魔力に口元を弧に綻ばせ、サーヴァント達は一齐に供給されたばかりの魔力を己が魂へと込め始めた。

「これで最後だゲーティアッ！サーヴァント宝具展開ッ！出し惜しみはなしだ！全力でぶっ放せッ！」

「ふざけるなあッ！貴様らのような弱き者達に我等の3000年の計画を瓦解されてなるものかあッ！」

マスター率いる英霊達の宝具が炸裂する。歴戦の英雄たちが己が生の全てをかけて磨き上げ、昇華させてきた必殺の一撃。人類の誇る最強の矛。それらがいくつも束ねられ、極光に等しき輝きを見せる。対するゲーティアも、再び第三宝具を展開してこれに応戦した。しかし、圧倒的な力を放ったはずのゲーティアの宝具は、英霊達の宝具の前に徐々に飲まれ始める。

「馬鹿な……！馬鹿なあ!!?何故我々の力が届かないッ！全能者となった我らの力がッ!? たかだか人間一人、何故消失することができんのだあああ!!?」

「終わりだアアアアアアアア！」

——やがて、ゲーティアは眩き宝具の閃光に飲まれる。人理崩壊を図った魔神王の姿はすでになかった。英霊達も力を使い果たし、強制的に光に包まれ先にカルデアへと戻っていく。崩壊する世界で少年と、そしてずっと共に旅を続けてきた少女の盾のみが残されていた。

ゲーティア消滅後、少年の下にカルデアにいるダヴィンチから通信が入る。どうやら、崩壊が進み過ぎているようでほとんど時間がない。完全に世界が消え去る前に帰還せよと。カルデアから新しく魔力の補給が行われ、どうにか少年の体力と傷は回復することができたのは幸いだった。

少年は少女の盾を持って、レイシフトの拠点である正門へとひた走る。走って、走って、とにかく走る。魔力で身体を強化してはいたがギリギリだった。途中で魔神柱達と交戦した場所も通ったが、誰一人として残ってはいない。夥しい数の魔神柱も、少年と

の縁を辿って駆け付けた英霊達も。彼らがどうなったのか、少年には知る術もない。だがきつと大丈夫。ちゃんと帰ってお礼を言うんだと走る足に力を込めた。

ダヴィンチの指示のもと最短距離で走っていた少年だったが、急にその足を止める。少年のこの状況では自殺にも等しい行為に、カルデアの通信室で目を見開く英霊だったが、現れた霊基の反応に苦虫をかみつぶしたような表情をとった。

「——そう簡単に逃がすつもりはねえってか」

「——その通りだ。ようやく共通の見解が持てたな、——よ」

現れたのは消滅したはずのゲーティアだった。その姿は先程のようなビーストとしての獣のような姿ではなく、ソロモンとしての姿に近い物だった。白色だった髪は金色へと染まり、目は酷く虚ろ。だが、特筆すべきはその身体の状態だろう。彼の右半分はひび割れた容器が少しずつ欠けていくように今もなお崩壊しつつある。その範囲は止まることなく広がっていることから、このまま時間が経てば彼はそのまま消滅し尽すだろう。

「——ここで何をしようとも我らの敗北は覆らない。人間に敗北した結果は何も変わらない。落ちぶれたものだ、今から私がしようとしている戦いは、以前の私であれば考えようのない選択だ」

「だけど、お前にも戦う理由くらいはある。そういうことだろ？」

「そうだと。この姿はすでに人間だ。だからこそ真に理解できた。限りある命を得て私にも意地ができた。3000年という時間の中で初めての感覚だ」

「そうか、人間に……」

「命を賭してなど、この口が語ることになるうとは思わなかったぞ。……私は私の譲れないものの為に君を止める。君は君の生還の為に、一秒でも早く私を止める。人類最後のマスター……。いや、人理を守護する『グランドマスター』よ。私が君へ言葉にするべき敬意は以上だ」

静かにゲーティアは少年を見据える。一方称えられた少年は、その評価に対して何もなかった。例え自分がそんな大層な存在として認知されようとも、今ここにいるのは2人の人間。互いの思想がすれ違うのならば、それを貫くためにぶつかるとは出来ないのだ。そんな両者の間に位など意味を成さない。

「——はつきり言ってお前のやってきたことを許すことはこの先絶対はない」

それは旅を経て少年が出した結論だった。たくさんの人が死んだ。特異点を修復しても、死んだという事実だけは覆らない。結局は何かしらの要因で死亡したと運命の糸は収束する。それらを引き起こす原因を作ったゲーティアを許すことなど、決してできなかった。

だけど——

「——3000年なんて途方もない時間を見続けてきた奴の敬意、そいつだけはありがたく受けとっておく」

少年の言葉に満足するかのように、ゲートィアは僅かに頷いた。虚ろな目をして表情筋など死に絶えているような面持ちだったが、少年には彼がほんのわずかに笑ったように見えた。

「——それでは、この探索の終わりを始めよう。人理焼却を巡るグランドオーダー。七つの特異点、七つの世界を越えてきたマスターよ。我が名はゲートィア。人理を持って人理を滅ぼし、その先を目指したもの」

空気を変化させたゲートィアの周りで魔力の渦が湧き上がる。それは先程までのゲートィアのような禍々しい魔力ではなく、どこまでも澄み切った純粋な魔力だった。色で例えるなら、黒が無色透明へと変化しているといった感じだろうか。ビーストとしての力はもう消えた。今ここにいるのは、魔神の名を捨て人間の王——『人王』と呼ばれるに相応しい存在だった。

その人王にグランドマスターと評された少年だが、もうすでに英霊を召喚する魔力は残っていない。残されたのはボロボロの魔術礼装と身体能力を強化できる程度の魔力、そして共にこの長い旅路を歩いた少女が残した盾のみ。戦力の差は歴然であったともいえよう。

それでも少年は引いたりはしなかった。どれだけ圧倒的に不利だったとしても、そんな状況は今まで経験し尽した。特異点を巡る旅が少年を大きく成長させたのだ。いつだって少年がやることは一つだけ。前に進み、自分達の未来を掴み取る事のみ。

少年は盾をもう一度強く握りしめる。負けられない、負けるわけにはいかない。これは人間同士の戦いだ。例え勝機が極僅かだったとしても引けない。少年は必ず勝つからと携えた盾に向けて誓う。

そして——人王ゲーティアとたった一人のちっぽけな人間による戦いが始まった。

戦いは見るまでもなくゲーティアの優勢だった。天から授かったという十の指輪の力を存分に発揮する人王。人間という器に収まったものの、魔術を扱うものとしては間違いない頂点に君臨する者だった。それに対して少年はひたすらに耐える。魔術で肉体を強化し、後輩から受け継いだ盾を用いて的確に攻撃を捌いていった。伊達にずっとマシユの背中を見てはいなかった。

「くっ！ちつくしようがあ!!」

一体いくつの指輪の攻撃を受けただろうか。いまだに一向に有効打の1つも打ててはいない。こちらは徐々に削られて行っているというのに、むしろ人王に関してはその場から全く動いてすらいけないというのに、少年には近づくことすらできなかった。その人王も身体の崩壊は確実に進んでいる。

「あと少し、あと少しだ。付き合ってもらおうぞ」

「冗談じゃねえ!」

地を抉り、空を裂く。閃光は瞬く間もなく放たれ、音は遅れるように鳴り響く。一方的な蹂躪としか表現のしようがなかった。

「――九の指輪」

小さくゲーティアが詠唱する。その瞬間、少年にかかっていた魔力強化が一瞬にして消え失せてしまう。続けて衛星が恒星の周囲を回るように指輪が少年の周囲に集い始めた。マズイッ!と少年は受け身すら取ることもできず反射的に前へと転がる。コンマ数秒の後、後方で爆発のような衝撃。一瞬でも判断が遅れていれば今頃ただの肉塊になっただろう。

「はあ……!ゴホッ!ゴホッ!」

「……我らの命運が尽きるまで残り僅か。私も、お前も。それでもなお進むか?」

「はあ……！はあ……！と、当然だ……！オレはお前をぶつ倒して、カルデアに帰る。こんなところでくたばってたまるかよ」

「——そうか。貴様ならそう言うかと分かっていた。では、そろそろこの聖杯探索に幕を引くでしょう」

そう告げると、ゲーティアの周りを漂っていた指輪が突き出した手へと集まる。

「——十の指輪」

ソロモン王が天から授かった最後の指輪。その力により、ゲーティアの魔力が爆発的に上昇する。突き出された手の中で高密度の魔力が今にもはち切れんばかりにうごめき出す。今までの比ではない圧力。例えば盾で防御しようとも、これは耐えられないと少年は直感的に気づいた。

バチバチと紫電のような光を放つ魔力越しに、ゲーティアは少年へと虚無感漂う瞳を向けた。

「これで、終わりだ——よ」

——『主よ、生命の歓びを』

魔神王の時のような広範囲のものではない。どこまでも一点に集中した魔力の一閃を少年は判断をし切る間もなく盾で受ける。今までで受けたことのないような衝撃が少年を襲った。身体強化を付与し直したとはいえ、とても耐えきれぬものではない。

「うおおあああああああああああああああ!!!」

歯を食いしぼり、目を固く閉じ、全力で身体に魔力を供給し続ける。これだけの威力、人王も全てをかけた一撃のはず。これさえ耐えきれば……!

ガガガガツと削岩機のように盾を削る音が聞こえる。ズズツと踏ん張っている足が後方へと下げられていく。それこそ永遠を感じるような時間に、少年はとうとう耐えきれずに片膝をついてしまった。

もう駄目なのかと、少年は折れそうになる。もういいじゃないかと誰かの声が聞こえた。人理修復は成った、全ては終わった。人王だってそのうち勝手に消滅するだろう。ここで諦めても、自分の使命は終わっているのだと。

盾を持つ手から力が抜けていく。このままゲーティアに殺されても、人々は救われる。その先を見ることができないのは残念だが、いなくなってしまうた人達の下へ行くのなら――

——駄目ですよ、先輩。貴方は、生きてください

頭の中で鈴のような綺麗な声が響いた。

「何故だ……」

先程までのゲーティアの様子からは絶対に考えられない動揺だった。そして、その時になってやっと自身に降りかかっていた重圧が全く感じられないことに気が付く。少年が何か特別なことをしたわけではない。何が起こったのかと俯いていた顔を上げ、その目の前で起こる神秘的な光景に思わず息を飲んだ。

『いまは遙か理想の城』だと……!? 何故その宝具が……。まさか、その身体を失つてもなお、自身の主を守るといふのか……。!?』

少年の目の前で展開されるのは騎士達の円卓。金城鉄壁にして崩れ落ちることのない雪花の盾。少年がその宝具を見間違うはずがない。それは紛れもなく、マシユの宝具だった。

何ということだろう。少女の守護は決して失われてなどいなかった。身体を失おうとも、命を落とそうとも、少女の思いは少年を救っていた。盾に込められたその決意は、人理だけではなく自らと共に歩んでくれた存在の未来までも守ろうとしていた。

それに対して己は一体何をしているのかと少年は自身に悪態をつく。まだ生きている自分よりも彼女の方がもつと未来を信じているではないか。諦めそうになったこの背中を押してくれるではないか。

大丈夫。腕も動く。足も動く。言葉だつて話せるし、心臓だつてまだ動いている。この命はまだ失われていない。

「——情けない話だよな、ゲートティア」

「なに?」

「これでも必死に足掻いたつもりだったんだけどな、どうやらうちの後輩はそれだけじゃ許してくれないらしい。もつともつと頑張つて生きろつてさ。まったく、先輩とし

て後輩に叱責されるなんざ情けないっただけありやしねえ」

「馬鹿な。マシユ・キリエライトは消滅した。消滅した者のことが何故分かる？」

「分かるさ。オレがマシユとどれだけ共に在ったと思う？言つとくけど時間だけのことじゃねえぞ。こいつはそれだけに左右されるわけじゃねえ。どれだけ相手のことを信じたか、どれだけ相手に信じてもらえたか。その絆さえ結べれば人は何度挫けても立ち上がれる。それこそが——誰かと共に生きるって事だ」

「……………また、人間にしか分からぬ道理というやつか」

『ロード・キヤメロットいまは遙か理想の城』が完全にゲーティアの魔力を防ぎきる。残されたのは魔力と言う神秘を失い、空っぽの存在として残るゲーティアの姿だった。それと同時に、白亜の盾もその役目を終え、まるで雪が解けていくように静かに消滅する。

「——ありがとう、マシユ」

少年は走り出す、ただの人間となったゲーティアに向けて。身体の強化などできるだけの魔力もすでに残っていない。完全に人としての領域の中での一步。ゲーティアも己が全てを出し切ったと、ゆっくりと瞳を閉じた。少年はこの戦いで初めてゲーティアの眼前へと踊り出ると——

「——そして、これでさよならだ。ゲーティア」

自身の全てをもって人王へとぶつかるのだった。

「——いや、まったく。……不自然なほど短く、不思議なほど、面白いな。人の、人生というやつは——」

それだけを言い残し、ゲーティアの身体は完全に崩壊。人理焼却を目論み、カルデアの最大の敵はこうして消滅した。ふらふらとしながらも、しっかりと立つ少年は、ゲーティアが消えた虚空に向かって言葉を投げかける。

「——ゲーティア、お前もほんの少し。あとほんの少しだけ人間に愛と希望が持てていたら、この結末は変えられたのかもしれないな」

それが無意味な結果論だったとしても、少年は口にせずにはいられなかった。

しかし、いつまでも感傷に浸っているわけにもいかない。こうしている間にも刻一刻と世界崩壊は進んでいるのだ。少年は再び聖門に向けて走り出す。ダヴィンチからの通信でこの世界、『時間神殿ソロモン』がカルデアから離れ始めていると告げられ、その走りには焦りも見えた。

レイシフト地点までもう少しというところまで少年は駆け付けた。しかし、その地点へと続く道は今にも崩れ落ちようとしている。一歩間違えれば宇宙のような空間に投げ出されそうな細い道を必死に駆ける。

……早く！……早く！と気持ちがいかに以上ない程高ぶっていた。そして、あと一歩踏み出せば間に合うという地点で――

――ガララララッ!!

「――ちえつ、あと少し、だったんだけどな……」

無情にも、レイシフト先へと続く道は完全に瓦礫となり途切れてしまった。今までの経験から完全に打つ手がなくなったと分かってしまった少年は、ドサリと腰をその場に落とす。持っていた盾へと視線を落とすと、それを抱えるようにして呟いた。

「ゴメン、マシユ。あれだけ生きろって言うてくれたのに駄目だったよ」

不思議と悲壮な感情は生まれなかった。その表情には穏やかな笑みすら浮かんでした。このまま、崩壊する世界に身をまかせるのもいいのかもしれないと、少年は思った。

「——まだです、手を伸ばしてッ！先輩、手をッ！」

諦めていた少年の耳に確かに聞こえた声。誰よりも大切の想っていた少女の声。どこかくすぐつたくて、でも芯はしっかりと通った鈴のような綺麗な声。その声を、確かに聞いた。

目の前に桜色の髪を揺らめかせ、こちらに必死に手を伸ばす存在がいる。鎧をモチーフにしたサーヴァントとしての服装も、あのアメジストのように輝く紫の瞳も、見間違えうはすがなかった。

「ああ……ッ！」

——少年の伸ばした手は、確かにその手を掴んだ。

「(ハハ)は……」

何かに頬を舐められたような感覚。そして、聞き覚えのある鳴き声。知らない間に意識を失ってしまっていたようだ。少年は目を覚ます。上体を起こすと、覚醒しきつていないその瞳に映ったのは2つの存在。いつの間に戻ってきたのか分からないフオウ。もう1つは——

「——先輩ッ！」

ガバツと抱き着かれる。その瞬間、再び倒れそうになるのをこらえると同時にほんのりと甘い香りと柔らかな感触が身体全身を包み込む。

「マ、シユ……？マシユ、なのか……？本当に……？」

「はい、おはようございます、マスター！マシユ・キリエライト、生還しています！」

確かな返事。その言葉を聞いた瞬間、少年の瞳からはボロボロと涙が零れ始める。

「なん、で……。マシユはあの時……」

「……その理由は後で説明します。ですが、大丈夫です。私はこうして、先輩の下へ戻ってきました」

——もう限界だった。少年はギュツと自分を包み込んでくれている少女を抱きしめ返す。トクンツ、トクンツと確かな鼓動がマシユから伝わってきた。それを感じて、さらにギュツと抱きしめる。この少女を手放さないように。もう2度と失ったりしないように。

「マシユ……！マシユ！マシユが生きてる……ッ！本当に……本当に良かった……ッ！」

「はい……！私はここにいます……！^{マスター}貴方と共に、生きています……！」

「ごめん、ごめんな……！辛い思いをさせて……怖い思いをさせて……！オレ、マシユに

頼つてばかりで……。マシユに守られてばかりのダメなマスターで……。！」
「いいえ、そんなことありません。先輩と居られれば私に辛いものなんてなかったです。怖いものだつてへつちやらでした。それに、先輩はダメなマスターなんかじゃないですよ。人理焼却から数え切れないほどたくさんの人々を救つた、私の自慢のマスターです」

「う、ううあ……。あああああああ!!」

それから、少年は喉も涙も枯れ果てるまで泣き続けた。何度も何度も少女の名を口にし、そのたびに少女は自身の存在を示すように優しく言葉を紡いでいく。

物語の始まりは偶然だったのかもしれない。少年がカルデアに来たことも、カルデアの廊下でマシユと出会つたことも。だが、偶然の始まりだったとしても少年少女の綴つた物語はこの瞬間を確かに迎えている。失われたものもあつた。目を逸らしたくなることもあつた。それでも、2人の道は確かにここにあり、どこまでも遙かなる未来へと続いている。

ならば、それはもはや偶然などではないだろう。そう、敢えてこの始まりを言葉にす

るならば——

「ううう……マシユウ……！」

「はい、先輩。私はここにいますよ」

—— 『フエイ
ト運命』と、呼ぶべきなのかもしれない。

うちのマスターがお年玉をもらつただけで、これって小説のタイトルのアウトだよな？

薄暗い空に一筋に光明が差し始める。極寒の寒さを保っていた夜が明け始める。白銀の世界であろう外は、その光を帯びて徐々にその輝きを帯びていつているようだった。

今日はこのカルデアにおいて非常に特別な日を意味している。その夜明けに立ち会いたくてオレともう一人、いやもう一人と一匹は漆黒の帳が明け始める時刻まで仮眠をとり、こうして備えていた。少しづつ、少しづつ。ゆっくりとその黒を拭い去るように白から、やがて青色の空が顔を覗かせる。

そして、光源がカルデアの周囲に佇む山脈から顔を覗かせると、夜明けの雰囲気を作りたいからと照明を切っていた廊下に柔らかな光が注ぎ込まれていった。その温かさを目や肌で感じながら、オレは隣に立っている人物にニコリと笑いかけた。

「——あけましておめでどう、マシユ。今年もよろしくな」

「あけましておめでどうございます、先輩。今年もよろしくお願いします」

クスリと笑うマシユ。その足元でフォウ君がフォウ！と小さく鳴き声を上げるの

だった。

冠位時間神殿ソロモンでの戦いを終え、人理焼却を食い止めたオレ達はカルデアで忙しい日々を送っていた。というのも、人理焼却によって1年以上カルデアにいたオレ達以外の人類がこの地球上から消滅していたのだ。イギリスにある時計塔から派遣されていた魔術師たちに、やれ何があったのだ説明しろだの、英霊や聖杯がどうだのと事情聴取に追われていた。

まあ、大部分が稀代の天才ダヴィンチちゃんによって誤魔化されたけど。まさに記録

を書き換えたのだツ！と、どこぞのドン・サウザンドもビックリなお手並みだった。前者に関してはまだしも、後者に関しては秘蔵しないとやばいからな。英霊をポンポン召喚できる設備とか大量に手に入った聖杯とか、魔術師からしたら喉からどころか体中のあちこちから手が出るほど欲しい物である。ましてや、マシユに関しては人間と英霊の融合したデミ・サーヴァント。性根の腐った魔術師からしたら絶好の研究対象だからな。もつとも、マシユに手を出そうとしたらオレとカルデアの英霊達が全力を持つてそいつらを排除するけど。ピーストにすら効果のあるオレのガンダが唸るぜえ！

そういう諸々の事情があつたのだが、年末年始ぐらいおとなしくしとけポケエツ!!と疲れすぎてマジギレしたダヴィンチちゃんによつて時計塔の魔術師達はカルデアから追い出され、オレ達はなんとかこうして平穩に新年を迎えることができているのだ。ごめんよ、ダヴィンチちゃん。三が日ぐらいゆっくりしといてね。

こうしてダヴィンチちゃんの奮闘により、オレ達は無事初日の出をお目にかかれていますというわけだ。あの命がけの戦場を走り抜けて、1度は生還することを諦めそうになつたもんだがこうして新年を迎えられている。それもこれも、隣に立つ彼女のおかげなのだ。彼女と別れるようなことにならなくて本当に良かった。

「先輩、これからどうしますか？ 職員の方が『おせち』でしたっけ？ それを準備していると言っていましたか？」

「そうだな……せつかく迎えた新年だし、炬燵に籠ってだらだら過ごすのも悪くないけど。——あつ、そうだ」

「どうしました？」

「——なあ、マシユ。おみくじ引こうぜ！」

「……？」

唐突なオレの言葉にキョトンとするマシユであった（可愛い）

「先輩、これはおみくじとは違うのではないでしょうか……」

「運試しという点では一緒だから大丈夫大丈夫。それに、人理焼却を防げたおかげで戦力補充しなくなつて聖晶石も呼符も余つてるし、どうせなら使つちまおうぜ」

おせちを食べ終え、オレとマシユが訪れた場所は言わずとも分かるな？ そう、まさに『いつもの』である。いつの間にかそれなりに増えていた石と呼符を持って、すでに目隠ししても来れるのではないかと思えるほど来慣れた召喚部屋。別に今更戦力の補充などしなくても問題など無いのだが、資材を余らせるのも……ね？

一応ダヴィンチちゃんからも許可はもらつてるしな。また時計塔の魔術師達がグチグチ言つてきそうだが、んなもん知るか。オレは別に時計塔の魔術師じゃないし、これから先そこへ行くこともないだろう。オレの魔術師としていられる場所はここカルデアだけだ。

「ということ、早速回してみるか」

「それはいいのですが、先輩。この場合、何が出れば大吉なのでしょうか？」

「まっ、星5が出れば今年1年の運勢が良いぐらいの考えでいいだろ。どうせ出ないだろうけど」

「なるほど」

結局最終決戦までに出てきてくれなかったからな……。冠位時間神殿ソロモンでい
ろんなサーヴァント達に助けてもらったけど、誰一人としてうちに来てくれない。
あれれ？ おかしいぞお？

「まあいつか。じゃあ、いつくぞー。そりゃ回れ回れ」

バラバラーと聖晶石を召喚サークルの中に放り込む。今回は10連1回と単発引き
3回分。加えて呼符3枚だ。さあーて、新年1発目に出てきてくれるのは誰だ？

「——サーヴァント、アサシン。風魔小太郎。このようなナリですが、どうぞよろしく
……」

目が隠れるくらいの赤髪を揺らし、日本の古来の装束で佇む人物。声や体格から幼さ
を感じるが、その立ち振る舞いは一級の暗殺者のそれ。時折髪の間隙から見える切れ長
の瞳は鷹のように鋭い。

「おお、小太郎君か」

「あつ、小太郎さん。あけましておめでどうございます」

「あけましておめでどうございます。主殿、マシユ殿。風魔小太郎、ただいま参上いたし
ました」

「うん、来てくれてありがとう、と言いたいところなんだけど……」

「分かりますよ、我が主。ここにはすでに宝具も極め切った僕がいますね。感覚で分か

ります」

すまない、すでに小太郎君は宝具レベルMAXですまない。だって彼良く来てくれるんだもの。そりゃ、すぐに宝具レベルも溜まるってもんだよ。

「それにしても、何故今頃になって召喚を？ 人理の危機は主殿のご活躍により無くなつたと思つたのですが」

「あー……その、なんだ。新年のおみくじ的な感覚でな。カルデアにはお参りできるよ
うな神社もねえから」

「なるほど、おみくじですが。それで僕を引いた運勢はいかほどでしょうか？」

「えっ、あ、ああ」

やばい、ものすごく目をキラキラさせてる。見えないけどすごい期待が込められた目してる……！

これは困つた。小太郎君はアサシンでは珍しい全体宝具持ちだし、スターの生成力も非常に高い。火力的な部分では少々物足りないかもしれないが、サポートという面では優秀だ。優秀ではあるんだが……正直微妙としか言えない。性能ではなくこう運勢的に。これはなんと伝えたらいいんだ？

「主殿？ 遠慮なさらずに言つてもらつて構いませんよ？」

とか言いつつ、ちよつと期待してるじゃないですかヤダー！ 尻尾があつたらブンブン

振ってるレベルで楽しみにしてるじゃないですかー！い、いかん、こんな純粹そうな態度を前にして微妙などとは口が裂けても言えん……！！

「えつと、こ、今年の運勢は良いんじゃないかな？丁度酉年だし、小太郎君も鬼ヶ島で難やつてたしね！ほら、こんなにも偶然が重なったんだし良いと思うよ、うん！」

「そうですか！それは良かったです！」

（嬉しそうな笑顔を向けるのは）ヤメロオ！無理矢理ひねり出したことに罪悪感がマツハ。こ、これが古来日本から伝わるセイシンゼメと言うやつか……！汚いな、さすが忍者きたない……！！

「じゃ、じゃあ小太郎君。悪いんだけどダヴィンチちゃんのところへ行つてきてくれな
いか？」

「分かりました！主殿にはお世話になってるので精一杯務めさせていただきます！他の僕もたくさんこき使ってくださいね！」

そう言つて忍者らしくシユタつとその場を後にする小太郎君。元気よく去つていくその背中を見送つたオレはそこに正月に外で正月遊びを満喫する子どもの姿を幻視した。

「あの、先輩……」

「何も言わないでくれマシユ。オレにはあれが限界だったんだ……！！」

「……はい」

やめて！ちよつと悲しそうな顔するのやめて！罪悪感に押しつぶされちゃうから！

それから呼符も使いきり、召喚できるのは残り単発1回のみとなった。結果、礼装の山でいっぱい。うん、相変わらずの幸運Eで安心したよ（白目）

というか、エミヤの正月礼装出すぎイ！お前何回出てくんだよ!?こんなに礼装いらないよ！つか、お前自身がさっさと来いやあ！いい加減、クロが寂しそうなんだよっ！リミテッドゼロオーバーとか投影魔術の礼装見てしよんぼりしてるのは見るに堪えないだよっ！その度に子ギルが慰めてるのを見たりすると泣くわっ！

「なんというか、相変わらずの運ですね先輩。人理を救つても先輩は先輩のままでは安心しました」

グサッ！

「オレも今年もマシユのその天然辛辣台詞が聞けて嬉しいよ……」

「……………」

マジうちの後輩無自覚天使。悪意が無いから怒るに怒れない。むしろ事実だから。でもそのキョトン顔は最高です。

「じゃあ、最後回すぞー」

「これが終わったらどうしますか？」

「当初の予定通りのんびりしようぜ。あつ、ダヴィンチちゃんなら正月らしい遊び道具持つてるかもしれないから、それで遊ぼうか」

「いいですね！他の皆さんも誘ってお正月を満喫しましょう」

石を3つ召喚サークルに放り込んでそんな会話をする。ここまで来たらどうせまあエミヤの正月礼装でしょ。知ってる知ってる。さっさとそれ回収して、ダヴィンチちゃんのところに行こう。

ペアと召喚サークルが今回の召喚で1番の輝きを放つ。眩しく金色に輝くその光は高レアのサーヴァントが召喚された証。そして、召喚サークルの中心から現れたのは金色のセイバーのカード。つまり星4以上のセイバーが来てくれたということだ。

「先輩これは大当たりでは!？」

「おいおい、マジか。このタイピングで来るのか——すまないさん」

もはや断言である。

「えっ? いえ、あの、まだ断定は早いのでは?」

「いやいや、絶対すまないさんだつて。どうせ『すまない、正月というめでたい時に召喚されてすまない』とか言うんだつて。でも、すまないさんいないからオレ的には大歓迎」
「そ、そうですか。いえ、そうですね。いくら新年とはいえまったく星5を引けなかった先輩がこんなところで引けるわけないですもんね。いつものように大いに期待して撃沈というテンプレのような流れを察しました」

……あの、マシユさんや。自分で言つといてなんだけど、その新年早々切れ味の鋭い言葉は一体どうしたんですか? なに? ビーストなの? デンジャラス・ビーストマシユ再誕なの? それはそれで大歓迎だよ?

この世の不条理に対して嘆くのと同時に、去年の後輩のハロウィン衣装を思い出していたオレの前で、爆発するように光彩が溢れる。そして、その光の海の中からついすまないさん(予想)が現れた。

「いやー、ようこそドラゴンスレイヤー。新年早々よろし——」

「——新免武蔵守藤原玄b……ごめん、やり直し! サーヴァントセイバー、新免武蔵。ここに推参! 面白おかしく過ごさせてね、マスター」

現れたのは竜の因子を持つ竜殺しではなかった。2本の刀を携え、動きを阻害しないように短めに加工された和服を身に纏う。美しさとたくましさを感じさせる絶妙のプロポーション。その表情は歴戦の剣士であるにも関わらず、非常に穏やかに見えた。しかし、その立ち振る舞いには一切の隙が無い。敵対しようものなら一瞬で切り捨てられる、そんな覇気も纏っていた。

「……………」

「あ、あれ？私何か間違えちゃった？確かに名乗り口上を思いっきり噛んじやつたけど……………」

あまりの事態に脳の処理が追い付かない。たぶん、怒涛の展開を見せた最終決戦の時よりも脳が回っていない。ポカーンである。ひたすらにポカーンである。それは隣で見ているマッシュも同様。

「……………」

「あの、マスター？そろそろ何か言ってくれないと困っちゃうなー、なんて……………」

う時のブレーキ係じゃないの？良く知らないけどさー！」

「まあまあ、貴方様はとりあえずゆつくりとお寛ぎください。あつ、座るものないですね。オレ椅子になりましたよ？」

「いらないよっ!?! 本当にどうしたのさマスター!?! とにかく落ちついてえええ！」

オレ達の荒れ狂いように武蔵ちゃんが大☆混☆乱! それから10分ぐらい3人でわちやわちやしてました。

「——とりあえず、マスターと、ええつとマシユちゃんがいいんだよね? よろしくね」

「はいっ……! はいっ……! よろしくお願ひします……!」

「先輩、ようやく報われましたね……!」

「おう、長い戦いだったよ、マシユ……!」

「今度は泣き出してると……。もうなんなのこの2人」

感謝……! 圧倒的感謝……! 運営さん、マジでありがとう! 最終決戦終わった後だけど、来てくれただけで超嬉しいです。

——ということ、うちのカルデアに星5のサーヴァントが来てくれました。

おまけという名の小さなシリアス

バタバタと廊下をひた走る。ある人物にどうしてもこの結果を報告したかったからだ。その人物の部屋の前に到着すると、オレはノックもせず扉を開ける。

「ロマンツィー！ ついに星5が来てくれたぞッ！ いやー、長い戦いだっただけどやっとなってくれた！ どうだ、幸運Eのオレだっけやるときはやる、ん……………だぞ……………」

——無人の空間に萎んでいく声だけが反響する。部屋の中からはあの聞き慣れた声は返ってこなかった。職員の誰かが大掃除をしてくれたのだろう。それでも、持ち主の意志を尊重して極力物を動かさないようにしてくれたのか、書類でゴチャゴチャではあったが部屋の中は埃こそ一つなかった。まるで、この部屋だけ時間が止まっているよな、そんな感覚だった。

「……………何やってんだオレ」

つい、ポツリと呟く。最近ようやくマシになってきたと思っていた涙腺から一粒だけ、涙が零れ落ちた。扉を開けたまま立ち尽くしていると背後から足音が聞こえてくる。振り返らずとも、それが誰かはすぐに分かった。

「先輩……」

先程とは正反対に、マシユは悲しそうな声色でオレを呼んでくれる。彼女の柔らかな手が震えるオレの手を包み込んでくれる。彼女が具体的に何かを言わずとも、そこにどれだけの思いが込められているのかは自然と理解した。

「——マシユ、オレさ。諦めてないから。こうしてマシユも戻ってきてくれたんだ。ロマンのこと、諦めてないから……！」

「——はい。私もドクターのこと諦めてません。絶対にまた会いましょう」
「ああ」

ギュッとマシユの手を握る。彼女も少し驚きつつも優しく握り返してくれた。

そうだ、こうしてまた彼女の手を握ることが叶ったように、あのヘタレだけど最高の司令官にもきつとまた会える。そして、今度こそ直接言つてやるんだ。『見たか、ロマン。オレだってやればできるんだ！』ってな。

第1・5部

ガチャは舞えば出るってファラオに言われたんだけど、あれってやつぱり迷信だよね？

『監獄塔 シャトーディフ』

あの場所で過ごした7日間は、人理焼却を巡る旅の中でも一際異質なものであったと今でも思う。戦場では片時も離れなかつたマシユという相棒とも逸れ、頼れるのは己の魂と戦いの時のみ召喚できる英霊達のみ。時々思い返す度には本当に夢だったのではないかと考える。しかし、確かにあの7日間の間オレの肉体が魂を抜かれたような状態に陥っていたのは事実であり、関係しているオレとサーヴァント達には紛れもない記憶が残っている。

絶望に染まり、恩讐に抱かれ、悪という空間で戦い抜けたことは今振り返っても奇跡だった。もう一度同じことを繰り返せと言われたら、次こそはオレの魂はあの監獄塔に捕らわれてしまうだろう。

だが、そう恐怖する一方で、共に戦い、最後には敵対した1人の英霊。アウエンジャー復讐者と呼ば

れる人物ともう1度会ってみたいと考えてしまうのは何故だろうか。助けたい、救いたいなどと述べようものならたちまち嫌悪の感情が向けられる人物に、どうしてかオレはもう1度会ってみたかった。

「あの、先輩、今回先輩がどうしても召喚してみたいというサーヴァントがいることはすでに聞きました。マスターである先輩がそれを望むのであれば私は良いと思います。

ですが……」

「んん？何か問題でもあったか？」

「問題、というわけではありませんが、ちよつと教えてほしいことがあります」

召喚部屋にて。いい加減このくんだり飽きたとか言つてはならない。まあ、とにかく今日も今日とて召喚である。正月の祝福ムードもすつかりと鳴りを潜め、通常運行モードもカルデアが戻ってきた頃。オレはあるサーヴァントの召喚にチャレンジするためにこの部屋を訪れていた。

今回オレがチャレンジするのは、アウエンジャー復讐者、もといエクストラクラスを持つ巖窟王『エドモン・ダントレス』その人である。

エドモンとの縁はそれはそれは密度の濃いものだったと今でも思える。突然魂だけ拉致られ、7日間も意味不明な塔に監禁されたのだ。おまけにこのまま何もしないと死ぬだの、どうにかしたれば戦い抜き試練を乗り越えるなどというブラック企業も裸足で逃げ出す真つ黒つぷり。なんとか英霊を召喚できたからいいけど、これオレの身体一つで乗り越えろとか言われたらただのムリゲーである。こちとら中身はただの一般人なんだつっの。

紆余曲折あり、どうにか試練を乗り越え最後に立ちふさがったエドモンもぶつ飛ばして無事オレの魂はカルデアに帰還した。いやーあの時のマシユの泣きつぷりはすご

かったね。だってオレの本体は7日間植物人間のような状態だったらしいしね。わんわん泣きじやくるマシユを慰めるのは一苦労した。でも、不謹慎だが泣き顔が超可愛かったのでオレは的には得した気分でした。

さて、その泣き顔も可愛い後輩がオレへと疑問を込めた視線を送ってくる。いや、正確にはオレともう1人この部屋にいる人物に向けて、か。今回の召喚にあたり、オレはこの人物に応援を要求した。その人物とは――

「まつ、マシユ嬢が不思議に思うのは当然だわな。俺も意味不明だもん。おーい、マスタ。俺なんか呼んだって全く役に立たないぞ。なんせ、俺は最弱のサーヴァントだからな！」

「別に戦うわけじゃないからいいんだよ。とりあえず、今回はよろしく頼むぜ。『アンリマユ』」

ニシシシツといったずらつ子のような笑みを浮かべながら思いつきり自虐の言葉を吐く人物――いや、英霊。そう、オレが今回応援として来てもらったのは自称最弱のサーヴァント。でもぶっちゃけその能力とか特性とか見たら超絶危険な英霊。エドモンと同じく復讐者のクラスを持つ『アンリマユ』だった。

「何故今回に限ってアンリさんを？ あつ！ いえ、決してアンリさんが力不足とかそういうわけではなく純粹な疑問として」

「別に俺は気にしないぜー。なんせ自他ともに認める雑魚サーヴァントだからな。まあ、英霊には負けたくないって看板も抱えてるけどよ」

「そ、そんなことありません！アンリさんも先輩を支える大切なサーヴァントです！」

「……なあ、マスター。マシユ嬢純粋過ぎじゃね？あまりの眩しさに俺消えちゃうぜ？」
「当たり前だろうが。うちの大使だぞ」

今更言われるまでもないわッ！

「マスターも本当にマシユ嬢好きだねえ……。それにしても、俺も今回呼ばれた意味が分かんないけど。クエストとかならまだ分からんでもねえけど、召喚に呼ばれても何にも役に立たねえぞ？仮に護衛ならこの前来た星5の……武蔵、だっけ？そいつ連れて来ればいいじゃんよ」

確かに。護衛的な意味なら武蔵ちゃんに来てもらえば盤石になるだろう。あの子メツチャ強いしね。ヒット数増やせるとかマジパネエ。だが、今回連れてきたのはそんな武蔵ちゃんではなくアンリ。もちろん、何も考えずに連れてきたわけではない。むしろ、今回の召喚はアンリにかかっていると行って過言ではないのだ。

「——前回武蔵ちゃんが来て、オレは今一度自身の召喚について考え直してみ、あることに気付いた。時にお前ら。オレのところはどうして今まで星5のサーヴァントが来なかったのか分かるか？」

「先輩の幸運がすごく低いからですよね？」

「マスターの幸運が俺並みに低いからだろ？」

「ぐぎぎい……！た、確かにそれもある」

「いや、どう考えてもそれしかねえだろ。いい加減認めろよマスター。あまりにも星5が出なくて現実から目を逸らしたくなるのは分かるけどよ」

「シヤアラップ！逸らしてないから！メツチャ現実見てるから！むしろ見過ぎで泣きそうなまであるから……！」

「やべえ、うちのマスターめんどくせえ……」

「違うんだ。オレも最初はそう思っていたけど、よく考えてみたら来ない理由に思い当たったんだ。」

「それで、先輩。その気づいたこととは何でしょうか？」

「マシユ、オレとお前が召喚する時、オレ達はいつも何を持っていた？」

「えっ？持っていたものですか？基本時には聖晶石に時には呼符。あとは出てきた礼装を回収する入れ物……それくらいでしょうか？」

「そのとおりッ！流石はマシユ！」

「えっと、ありがとうございます？」

そうだ。オレ達は召喚する際、それだけしか持っていなかった。一般的な英霊召喚と

カルデアの召喚は違っていたのですっかり盲点になってしまっていたことだが、本来英霊召喚には必要なものがある。そう、それは――

「――『触媒』だ」

「触媒？」

マシユとアンリがオウム返しのように言葉を繰り返す。『触媒』とはその英霊に関する物の事である。本来の英霊召喚であれば触媒を用意して、その英霊に干渉して召喚するのが一般的である。それとは違ってカルデアの召喚は触媒を用いず、石や呼符を用いて召喚するのだ。つまり、干渉する要素がない。だから、オレの下には星5が来ないのだと結論付けた。決してオレに運が無いとか、そういうわけではない、断じて。

「どうだ。これは盲点だっただろ？」

「……………」

ドヤ顔で語るオレとは反対に微妙な顔の2人。あれ？どした？

「あの、先輩。先輩のおっしゃりたいことはよく分かりました」

「それで、分かった上で聞きてえんだけどよマスター。もしかして俺を呼んだ理由は――

――

「ん？そりゃ、お前さんが復讐者だからだけど？同じ復讐者なら触媒になれるかなあつて思つて」

「……………」

オレの即答に困り顔になってしまいうマシユ。うわ、こいつマジかよと、顔全体で表現するアンリ。

「その、先輩。確かに触媒があればサーヴァントを引き寄せやすくなるのは私も知っています。結局のところカルデアの召喚方式で召喚する以上、触媒は関係ないのでは…………？」

「……………はっ!？」

「うわ、こいつマジかよ……………」

マシユの申し訳なさに伝えてくる事実思わずハツとなるオレ。確かにそうだ。召喚の術式やらなんやらがカルデア式のまんまだったら触媒あっても意味ねえじゃん!というか、今度は実際に口に出しやがったなアンリ。

「い、いや、でもほら。今回は触媒になるアンリもいるし、多少は影響が……………」

「あのな、マスター。確かにマスターの言ってたサーヴァントは復讐者^{アヴェンジャー}で、俺と同じクラスかもしれないけどな。それだけで触媒になれるわけねえだろ。んなことで容易く触媒に成れてたら他のクラスの奴とかどうなんだよ。ぽこじやか召喚されんぞ?」

「……………どうやっても?」

「どうやっても。第一、俺そのエドモンとか言う奴全く知らねえし。縁とか皆無だし」

「……………」

現実という名の凶器をオレに突きつけるアンリ。何故か気の毒そうな目でオレを見てくるマシユ。3人の間でもものすごく気まずい雰囲気が漂う。

「——よし、とりあえず召喚してみよう」

しばしの沈黙の後、とりあえずごり押すことにした。

「今のやりとり丸々カットですか先輩!?!」

「ごういうところはたくましいよな、うちのマスター」

うるさいうるさいうるさい! (フレイルムヘイズ感)

もうごうなったらどうにでもなれっ! 触媒があらうと無かろうと知ったことかッ!

どうせオレの幸運はEランク以下なんだ！当たるときは当たる！爆死する時は爆死する！それだけで！

「あつ！待ってください先輩！」

うおおおお！と手に持つ石と呼符を召喚サークルの中に突っ込もうとした瞬間、マシユから待ったの声がかかる。ギリギリのところまで投げ入れるのを止め切ったオレは何事かと彼女へと視線で語りかけた。

「これはダヴィンチちゃんに聞いたことで、眉唾物ではありませんが、召喚の成功率を上げる方法があるそうです」

「それ、どうせ『自己改造』とか『変化』とかそんな感じのスキルを使えとかじゃねえの？オレただの一般ピーポーだからそんなスキル持ってないんですけど」

「ぎゃはははっ！人理焼却を救ったマスターが一般ピーポーとか！謙遜し過ぎて嫌味に聞こえるぜマスター！でも俺はそういうのは大いに結構！嫌いじゃないぜ？」

「そういうんじゃないやねっつーの」

本当に謙遜とかじゃないんだけど。実際オレが1人で救ったわけじゃないし、むしろ助けられた記憶の方がはるかに多い。と、今はそのことは置いて。

「で、マシユ。実際のところどうなん？」

「——『舞う』と良いらしいです」

「……………はい?」

『舞う』?

「『舞う』ってあの『舞う』? ダンシングのこと?」

「はい。私も真偽の方はどうかは分かりませんが、エジプト式の幸運上昇のおまじないらしく、舞を舞うとその方の運氣が上がるとか。ニトクリスさんが発祥らしいです」

「エジプトのファラオは一体何してんの?」

何? あの人も何か運に頼りたいことでもあったの? 宝具の即死の確率でも上げなかったの? メジエド様も一緒に舞ったのかな?

「とにかく、効き目があるかどうかは分かりませんが舞ってみましょう!」

「ええ。今から? オレー人?」

「大丈夫です先輩。マスターと常に共に在るのがサーヴァントの使命。サーヴァントはマスターと一心同体です。私もお付き合いします。……少し恥ずかしいですけど」

そう言っただけのりと頬を染めつつマシユが笑う。こんな信憑性の欠片も無いことに付き合ってくれるうちの後輩マジ天使。寧ろ女神。いや、女神はやっぱ無し。ウルクに行っただ後だとなんか女神って例え使いたくねえわ。

「じゃあ、やるか。なんか特定の振りがあつたりするの?」

「いえ、特に無いそうですよ? 自らが思うままに舞えばいいそうです」

「自由度高すぎませんかね、エジプト式……。まあ、適当にやってみるか」

「おおう頑張れマスター、マシユ嬢。俺はもう用無しみてえだし戻るぜ」

そう言っただけでさっさと召喚部屋を後にしようとするアンリ。そんな真つ黒野郎の肩をガシリと掴んでその歩みを止めさせる。

「——まあ、待てよアンリ」

「なんだよ、マスター。もう俺に関してはやることないだろ？」

「確かにそうだが。なあアンリ、お前暇だよな？」

「あん？まあ、暇っちゃ暇だけど。……おい、まさか」

「お前も舞え」

ニタリと悪代官のような笑みを浮かべながらオレはアンリの肩に置いた手にさらに力を込める。英霊とはいえ、自分で言っているように、実際アンリは最弱のサーヴァントとして名乗りに値するステータスだ。つまりは、魔力で強化してしまえば人間であるオレでもその筋力を御しきることはできるのだ。

「嫌に決まってるだろ。なんで俺がんな意味不明なことに付き合わなきゃいけないんだよ」

「サーヴァントはマスターと一心同体。だろ？3人で舞えば確率上がるかもしれない」

「一心同体は時と場合によりますうー。サーヴァントでもマスターぶつ殺す奴とかいま

すうー。あの青タイツとかもそういうクチだろ。あと、確率は上がんねえから」

「い・や・だ」

「……………」

「……………」

互いの間で再び漂う沈黙。丸々10秒は経過した後、オレはハアと大きくため息をついた。

「そうか、なら仕方がない」

「やっと諦めたか。なら俺はもう行くぞ」——令呪を以て命ずる——おいバカ、やめろ」
右手に刻まれた令呪に魔力を注ごうとした瞬間、アンリが全力でそれを阻止しにきた。なんだ？今からオレは苦肉の策を取らなければならぬのだが？

「——つたく、この世全ての悪である俺より悪だぞうちのマスター。へいへい、クソザコサーヴァントはマスターの命令に従いますよ、ちくしようにめ」

「あれ？この光景どこかで見ることがありますよ、ちくしようにめ」

ぶつぶつと文句を言いながら降参するアンリ。顎に人差し指を当て、何かを思い出そうとするマシユ。この世の悪感情の集合体のような人物に悪人認定され、計画通りとキラの如き笑みを浮かべるオレ。舞う前からすでにカオスである。

「さあ、そんじやいつちよ舞いますか！」

結論から言おう。来ませんでした。

3人でわっちやわっちやと舞うこと数分。これだけ舞えば大丈夫だろうと意気揚々と召喚したものの、見事に爆死である。アヴェンジャーどころか普通のサーヴァントす

「来ない。礼装も普通のやつばかり。完全敗北である。」

「まあ、知ってた」

「うるせえよ。オレだって薄々感づいてたわ」

「すみません、先輩。私のせいでは……」

「あー、マシユは全然悪くないから気にすんな。オレの幸運値が低いのは今に始まったことじゃねえんだし」

「そうそう。マシユ嬢は全然悪くないぜ。悪いのは関係ない俺を巻き込んだ挙句、こんな体たらくな結果を出したマスターだぜい」

「こいつの言葉に納得するのは釈然としねえが、反論できねえ……」

おのれえ……！やはり前回の武蔵ちゃんは偶然も偶然、何か星の巡り合わせが狂った結果だったか。やっぱり調子に乗っちゃってことかねー。星5が1度来てくれたからって浮かれちゃって事かもしれん。

おし、少しばかりトレーニングでもしてくるか。確かダヴィンチちゃんが監獄塔に関する高難易度のクエストをシユミレーターで用意したって言ってたし、せっかくだしそれに挑戦してみよう。

「というこで、マシユ。トレーニングに付き合ってもらえるか？」

「はいっ、もちろんです先輩。マシユ・キリエライト、サーヴァントとしてマスターにど

「こまでもついて行きます！」

「そんなじゃ、俺はいい加減帰るぜー。マスターもマシユ嬢もせいぜい頑張れよ」

流石にこれ以上拘束するほどオレも鬼じゃない。今度こそアンリを解放したオレとマシユは、まずはシユミレーターを使用するためにダヴィンチちゃんの下へと向かうのだった。

—トレーニング後—

「ダヴィンチちゃんも鬼畜過ぎだろ。いくら何でもボスラツシユは無いわー。トレーニ

ングとはいえ死ぬかと思った」

「……………」

「あつ、すまんマシユ。ここまでやばいトレーニングだとは思わなくて。流石に疲れた
だろ？ 身体の調子とか大丈夫か？」

「い、いえ。身体の方は大丈夫です。お気遣いありがとうございます。その、ただ……」
「ただ……？」

「——ただ、あの時のことを思い出してしまつて。先輩が7日間も目を覚まさなくて、私
は不安に押しつぶされそうでした」

「マシユ……………」

「このまま目を覚まさなかつたらどうしようとか、目を覚ましても先輩が先輩じゃなく
なつていたらとか。色々考えてしまつて……」

「……………そうか」

「すみません、暗い話をしてしまつて。もう大丈夫ですから」

「——マシユ、よく聞いてくれ」

「先輩？」

「オレは絶対に君の前から消えたりしない。いや、もしかしたら絶対とは言えないかも
しれないけど、それでも君に何も伝えずにいなくなつたりはしない。今ここに、オレと

いう一人の人間としてマシユへ、そしてマスターとしてこの令呪に誓う。だから、心配しないでくれ」

「……………はいっ！」

「よし。じゃあ、食堂にでも行ってゆっくりするか」

「——先輩」

「ん？今度はどした？」

「私も改めて誓います。貴方と共に未来を歩んでいくと。だから……………これからもそばにいてくださいね、^{マスター}先輩」

「——ああ、これからもよろしくな」

待ちに待ったバレンタインガチャが来たんだけど、やつぱり眼鏡女子つて至高だよね？

ピピピッ！ピピピッ！と一定のリズムを刻む電子音がマイルームに鳴り響く。モゾモゾと潜っていたシーツから手を伸ばし、枕元にあった音の発生源——カルデア式近未来型目覚まし時計を叩く様に止める。そのまま少しだけ起きようと試みるものの、真冬のベッドというある意味炬燵との二大巨塔のうちの一角に絶体絶命のところまで追い込まれてしまった。が、そこは人理修復の旅を続けた根性で乗り越え、寝ぼけ眼のままベットから起き上がる。

実は、今日はちよつとばかり早起きしておかなければならない用件があったため、朝の身支度をすませるとすぐにマイルームを後にする。向かった先は食堂。すでに起きていたブーディカさんに朝の挨拶をし、朝食をお願いする。作ってもらっている間、今回特別に貸してもらった冷蔵庫を開けて中の様子を確認してみた。

冷蔵庫の中には色々な形に整えた『それ』がトレイの上に規則正しく並べられている。これらはオレが今日という日の為に心を込めて作ったもので、サーヴァントの皆にプレゼントしようと考えているのだが——

「——皆、気に入ってくれるかな」

今日は1年に1度、気持ちを伝え感謝する日。本日1日はカルデアの職員達も英霊達もきつと落ち着かない1日になるだろう。

『バレンタインデー』。甘くちよっぴりほろ苦い、そんなオレの1日が幕を開けるのだつた。

今回の催し、一言でいうと『大混乱』だった。それはオレだけではなくカルデア全体

を巻き込んだ大変見事な『大混乱』だった。

カルデアには多くのサーヴァントがいる。オレが日頃から背中を預け、苦しい時も悲しい時も共に乗り越えてきた大切な仲間達である。今回はそんな彼ら彼女らに日頃の感謝の気持ちを込めてチョコを用意したのだ。

もつとも、日本のお菓子会社の陰謀に従うのであれば女性から男性へチョコを渡すのが主流。しかし、それは日本に限ったことであり、海外などでは普通に男性から女性へと送る場合も良くあるのだという。そしてカルデアがあるのは日本ではないため、こちら辺の主流はノーカンだ。

……一々回りくどい言い方をしたが、そこらへんは分かってくれ。こういう女性が積極的に盛り上がっているイベントに男として参加するにはそれなりの気恥ずかしさがあるんだよ。まあ、男もそわそわして落ち着かないということもあるし、現にカルデアの男性職員達は朝から非常に落ち着きがねえし。研究や仕事続きでヨレヨレの白衣がいつもより綺麗であったり、ボサボサに放置している髪型が整っていたりと各々がいつもよりちょこつとだけ身だしなみに気を付けているのが分かる、チョコだけに。

「ねえ、マスター。私としてもそれは流石に寒いと思うんだけど……」

「えー、渾身のバレンタインギャグだったのにー」

「はいはい、面白い面白い。そんな寒いギャグは面白いという、もう他の人たちにはお礼は

して回ったのかしら？結構な数があったわよね」

「その点に関しては抜かりねえよ。女性サーヴァントだけじゃなくて野郎サーヴァントにももちろん渡してきたぜ。お返しに色々もらってマイルームが溢れてるけどな」

「女の子としてはやっぱり複雑よねー。チョコ渡して、すぐにお返しもらえるのって」

「元々渡すつもりだったからな。もちろん、女の人たちにはホワイトデーに別で用意するつもりだぞ」

「……そういうところマメよね、あなた」

テクテクと隣を歩く少女——魔法少女プリズマ☆クロエことクロエとそんな会話を交わす。本来であればマシユが付いてくるはずだったが、彼女は今頃食堂で忙しく動き回っていることだろう。理由を尋ねるなど無粋な真似はしないでくれよ？

「それにしてもわざわざ付き合ってもらって悪かったな。何か予定でもあったんじゃないか？」

「大丈夫よ、あなたにチョコ渡す以外に今日の予定は無かったし。それに、召喚の瞬間ってやっぱり気になるじゃない？」

そう、今回の護衛はクロエなのだ。先程も言ったようにマシユは忙しい。でも、オレにはある人物を召喚しなければならぬという使命がある。そう……新たな眼鏡キャラをッ！

彼女との出会いはまるで夢のようだった。というかマジで夢だったんだけど。

突然オレは謎のロボットになっており、その彼女——『ヒロインXオルタ』通称えっちゃんと呼ぶ行動を共にした。とある惑星から脱出したり、学園生活を過ごしたり、ヒロインXと争ったりと、短くもそれはそれは濃い時間を過ごした。なんでも、彼女は対セイバーを掲げるヒロインXに対抗する対対セイバーのサーヴァントらしい。なにそれ、意味が分からないよ（QB）

ん？いきなりロボットになったとかそつちの方が意味が分からない？何を言ってるだ、ここはカルデアでオレはマスターだぞ？（説得力）

まあ、そんな感じでえっちゃんやんが召喚できるかもしれないというダヴィンチちゃんの報告により、予てから溜めておいた聖晶石と呼符を持ってこの召喚部屋へと赴いたのだ。

「それで、マスター。そのえっちゃん……だっけ？来てくれそうなの？確かあなたの手元で、マスターEだったわよね」

「あれ、なんで知ってるの？」

「知ってるも何もカルデアの職員達は皆口々に言ってたわよ。人理を修復したマスターは戦闘等ではずば抜けた才を発揮するけど、いざ召喚となるとでんでダメになるって。もしかして召喚部屋にあなたの幸運値に対する魔術的な妨害でも現れてるんじゃない

かつて調査と修理もしたそうよ」

結果何も異状なかったみたいだけど、とクロエは続ける。

えっ、何それ知らないんだけど……。あっ！もしかして以前一時期召喚が行えなかったのってその調査をしてたせいなのか!?じゃあ、あの時『何かあったの?』って聞いたら、『君は気にしなくていい。これは私達にも任せなさい。なに、別に修理してしまっても構わんのだろう?』とすっげえたくましい感じって言われたのもそういうことかッ!?

「うわ……。それならカルデアの皆の分のチョコも用意するんだった」

「とは言っても、あなたサーヴァントの分だけで手一杯だったじゃない。気遣いも良いと思うのだけど、素直に甘えるのも悪いことじゃないと思うわよ?知らないふりの方がいいんじゃないかしら」

「うーん。だけど日頃感謝してるのには違いないからさ、在庫次第だけあとで何か渡すよ」

「……はあ、しょうがないわね。それなら私も手伝うわよ。あんまりお菓子作りなんてしたことないけど」

「えっ? いいのか?」

「あなたがこのことを知らなかったということは意図的に隠されていたのだろうし、私はそれをバラしちゃったしね。職員の皆にお詫びも兼ねてって事よ」

「サンキュークロエ！助かるぜ！」

ようし！そうと決まったら、ここで気前よくえっちゃん召喚しちゃってチョコ作りに戻るぞ！

今回はいつもより気合を入れて準備した。石が30連分に呼符10枚。たぶん今まで1番1度の召喚数が多くなるのではないだろうか。つまり、それだけ今回の召喚にかけているということだ。

「おーし。まずは早速10連1発目だ！」

そりゃーと石を召喚サークルの中へと投げられる。グルグルと光が溢れるお馴染みの背景を見守っていると、早速サーヴァントが召喚されたようで光の中から人影が現れた。背丈的に女性のような気がする。おおっと!?これはいきなり大当たりかっ!?

「YES!YES!YES!キタキタアア!えっちゃんだろこれ!」

「うわ、なにこの人。テンション上がりすぎて流石に怖いんですけど……!」

傍らに立つクロエが非常に失礼なことを呟いているが、今は別にどうでもいい。えっちゃんに会えるならそれぐらいいいにするまでもねえわ!

そうして、これまたお馴染みの爆発的に輝く光明の中から1人の人物が文字通り飛び出して来る。

シユタツと華麗に着地した人物の特徴として最初に目に飛び込んできたのは、虎柄の

着ぐるみパジャマ。頭には猫耳のようなジャガー耳がついているにも関わらず、普通に人間としての耳もあるという矛盾。ランサーのクラスであるはずなのに持っている武器はジャガーの手が付いた棍棒。見た目からすでに妖しいそのダメなお姉さん系のサーヴァントは――

「――ジャガーの戦士、ここに見参！タイガーじゃないからそこそこヨロシク！そのキミ、目を逸らさない！使ってみると案外強いぞっ！」

「帰れタイガー」

第七特異点でそれなりに世話になった色々常識的なものをぶつちぎってしまったサーヴァント。名をジャガーマンという。正直バーサーカーよりタチの悪い奴を召喚してしまった。

「へいへい、そのマスター。何度も言ってるニヤ。私はタイガーではなくジャガー。アーユーオーケー？」

「思いつきり英語じゃないですか。せめて中南米の言語使ってくださいよ、スペイン語とか」

「冷たいこと言うニヤってマスター。マスターと私はテスカトリポカメイツじゃない」「この生贄要求するウーマンめ。誰がテスカトリポカメイツだコラ」

お前と一緒にすんな。オレはまだ常識人の範疇に収まってるっの。って、さつきか

ら黙りこくつてるけどクロエどうした？

「ふ、藤村先生……？なんで先生が召喚されてるの？」

「おや？おやおや？この依代となった人間と知り合いかニヤ？この野性味あふれる身体、すごい重宝してるわー」

「というか、どうして先生の身体を依代になんてできるの？」

「聖杯の不思議POWERね」

「悔しいけど納得してしまった自分がいるわ……」

だから英語じゃねえかと再度ツツコむ。とはいえ聖杯と言われたら何も言えないんだよな……。流石は万能の願望器、やることなすこと規格外れで意味不明だわ。

「とにかく、あなたにはすでにいるジャガーマンの宝具レベル上げてもらうから、自分の部屋で待機しててください」

「ええー！せっかくこんな綺麗なお姉さん召喚したんだし、もっと楽しいことしようニヤ」

綺麗なお姉さん（笑）ですね、分かります。

「——今すぐく腹立ったニヤ」

「き、気のせいじゃないですか。いいからあとでいくらでも話ぐらいは聞いてやるから部屋で待機しといてくださいって。こっちはまだ召喚が残ってるんですから」

「しょうがニヤないニヤ。じゃあ、部屋で待つてるわよマスター」

そう言い残し、ジャガーマンは召喚部屋を後にする。どうでもいいけど全然口調安定しなかったな。あと、野生の勘怖すぎ。

その後も召喚は続いたものの、現れたのはハサンちゃんハサンさんハサンちゃんと礼装といったラインナップだった。ハサンちゃんの押しが強いぜ……。可愛かったけど、とりあえずダヴィンチちゃんの下へ。えっちゃんはまだ来てないです。

「じゃあ、一旦出てきた礼装を回収するぞー」

「分かったわ。……あら？これイリヤかしら？」

「んー？おおっ！マジだ。何々、『チヨコ・エンゼル』？なるほど、イリヤちゃんマジ天使ってことだな」

「犯罪臭がするからやめなさいなマスター。えーと、『好きなあの人にブレイブチェイン！』って……この情報あの子が考えたわけじゃないわよね？」

「流石にそれは……えっ？ないよね？」

ありえそうで否定できん。前にフォウ君の例もあったしね。うちの礼装達、超真面目に書いてある奴もあれば、どう考えてもふざけてんだろってやつもあるからなー。なんだよ、『カッコーの巢の上で』って。一言言つとくとリヨぐだ子は人類悪（断言）

「あれ？また藤村先生だわ」

『ブレスフル・タイム』？へー、この人がクロエ達の先生なのか！

クロエが手に持つ礼装。そこにはたくさんのチョコレートにうつとりとする一人の女性が映し出されていた。この人がクロエやイリヤの世界で教師をしている『藤村先生』か。なるほど、確かにジャガーマンにそっくり……というかもう本人である。代つてすげえな。

つてことは、イシユタルもそっくりなのかな。あの女神様結構うつかり属性持つてるけど、まさか依代の人もそうとかないよね？

「凜のこと？えっと、そ、そうじゃないかしら？」

なんだか思いっきり目を晒されたでござる。これはマジでうつかりさんなのか？

イシユタルの依り代となった人物のことを考察しながら礼装を回収し終わったオレ達は再び召喚サークルへと次の石を注ぎ込む。まあ、最初の10連から来るとは思ってたからね。大丈夫大丈夫、あと20連と10回単発引きもあるし流石に来るでしょ（フラグ）

そして再び発光する召喚サークル。その光の中からシユバツ！と華麗に飛び上がる人影。オレ達の目の前に降り立ったその人物は――

「――ジャガーの戦士、ここに再び見参！もう一度言うがタイガーじゃないからそこんとこヨロシク！」

「……おい」

「また藤村先生……」

「やあやあ、マスターに魔法少女ちゃん。このジャガーマンさんが来たからにはもう大丈夫。大船どころか箱舟に乗った気で安心するニヤ！」

現れたのはつい数分前に部屋から見送ったジャガーマンだった。いや、確かにさつきもハサンちゃん連発できたし分からんでもないよ？でもさ、よりにもよってなんであんなんだ。

「いや、もういいから。宝具レベル上がるのは嬉しいけどもういいですから。さつきとゴーホームしやがってください」

「ドライだにやー。まあでも？私は良識あるサーヴァントだから？ここはマスターの指示に従っておくニヤ！」

じゃあ、さらばニヤー！と勢いよく召喚部屋から走り去っていくジャガーマンⅡ。その後は何故か出てきた清姫に死ぬ気でご退場願ひ、召喚された礼装を集めた。ちなみにえつちゃんはまだまだ来ない。

「あの、マスター。これ……」

『魔性菩薩』とかいうんだかすごそうな礼装を拾っていたオレにクロエが気まずそうに話しかけてくる。彼女の方へと振り向くと、そこには2枚の礼装を差し出してくる彼

女がいた。そして、その手に持っている礼装はというと……

「……『ブレスフル・タイム』」

「ねえ、流石に藤村先生来過ぎじゃないかしら。私ちよつと怖いんだけど……」

「オレだってこええよ。こんなにも同一人物（依代だが）が次々召喚されると鳥肌もんだわ」

「これさ、えっちゃんピックアップだよね？ 加えて言うならジャックちゃんとの合同ピックアップだよな？（メタ）」

ハサンちゃん達はまだギリギリわかる。まだアサシンというジャックちゃんとの共通点があるし、同じように清姫もえっちゃんと同じくバーサーカーという共通点がある。

しかしだ、ジャガーマンに関しては何も共通点無くない？ あの人ランサーだよ？ 確かに再臨したらヤのつく自営業みたいになってアサシンっぽくなるけどランサーだよ？ まさか、依代の人の礼装がバレンタイン仕様だから召喚されやすくなってるのか無いよね？

「……まあ、流石に3回目はねえだろ。もし次来たらジャガーマンの宝具レベルMAXになっちゃうし、そうそうこんな偶然も続きはしねえさ」

「どうしよう。うちのマスターがとんでもないフラグを立てた気がするわ」

「大丈夫大丈夫。いくらオレの幸運のステータスが低いからって、ピックアップに関係ないサーヴァントを立て続けに召喚するなんてアホみたいなのは起きないって」
「ねえ、なんで？なんで自分からフラグを強固なものにしていくの？やめときなさいってば」

それにこれだけ言っとけば逆転フラグも立つって。ほら、死亡フラグを立てまくって逆に生還フラグを立てるとかあるじゃん？それと一緒だ。

「さあ、そろそろ来てくれよえっちゃん。これで30連目だ！」

これで持ってきた石の全てを消費したことになる。眩しく輝く閃光。そして、その中からまた新たな人影が現れたのを確認。よしよし、やつと来てくれたかえっちゃん。ようこそ、我がカルデアへ！

「——ジャガーの戦士、ここに三度見参！大事なことなので3回言うぞ！タイガーじゃ

ないから私！」

「——」

「おおつと！またまた私を引き当てるニヤンてマスターやるじゃない！これはついに私を最前線で使えという神の通告では？さあさあ！敵の中に突っ込んで暴れると命令してくれ！」

「——令呪を以て命ずる。自害せよラン s 「マスター！流石にそれはダメよツ!!」——ハッ！オレは今何を……」

速攻で令呪使おうとした瞬間、慌てたクロエに止められハッと我に返るオレ。あぶねえあぶねえ、あまりの急展開ととんでもない苛立ちに無意識に令呪使うところだった。

「……いや、いやいやいやいやいや。嘘だろ？ないわー、これはいくら何でもないわー」

「ええー？こんなにも美人で強いサーヴァント召喚しといて何を言ってるのかニヤー。お姉さん、悲しいぞ？」

「——令呪を以て命ずる。自害 s 「だからダメだつてマスター！気持ちは分かるけど堪えて！」——ハッ！またしても……」

そんなコントみたいなことを繰り返しているうちに10連召喚は終了。現れたサーヴァントはこのジャガーマンの他にハサンちゃんに清姫。ねえ、これえっちゃんピック

アップだよな？依存系サーヴァントピックアップじゃないよな？

というか、召喚された礼装の中に見間違いないかなければ『プレスフル・タイム』が2枚ぐらいあつた気がするんだけど。

「……どうしよう。なあクロエ、どうしたらいい？オレはもはや一周回って無に近いこのやり場のない怒りと絶望をどこに向ければいい？」

「ちよつ!?!ヤバい目してるわよあなた!?!しつかりしなさいよ!」

「おーいマスター、大丈夫かニヤー？お姉さんが慰めてあげようか？ケツアルコアトル以上の包容力をみせてしんぜよ!」

「あなたが原因よつ!いいから、さつさと部屋から出ていきなさい!次こそ令呪は発動されちゃうわよ!」

「おおつ!それは困るニヤー!じゃあ、また後でねーマスターとちよつとやらしい魔法少女!」

「うるさいわね!余計なお世話よ!」

バタバタと召喚部屋から退散していくジャガーマンIIIを見送る(3回目)。その背中を見て、オレはとてつもなく虚しい気持ちになってしまった。知らぬうちにツート一筋の滴が目から零れ落ちる。

「あなたも良い年した男が泣かないの!ほら、まだ呼符があるんでしょ?チャンスはま

だ残ってるわ」

「呼符……そうだ、そうだよな！まだチャンスはある！10枚あるから実際10連と大して変わんないよな！良し！オレ達の戦いはこれからだッ！」

「だからどうしてそうフラグを立てるのよあなたはッ!？」

オラオラオラオラオラ！と呼符を叩きつけるように召喚サークルに投げ込む。さあ、今度こそ！今度こそ来てくれえっちゃん！セーラー服という貴重な属性を持ってやって来たまえ！

眩く光る召喚の光が収まる。そして、全身全霊を懸けた召喚の結果は——

「元氣出しなさいってマスター。こういう日もあるわよ」

マイルームの前でクロエがオレを一生懸命慰めてくれる。そう、この言葉でもうお察しであろう。爆☆死である。呼符10枚使うじゃん？召喚されるじゃん？そのうち9枚が礼装なの。あつはははは！もう笑うしかないよね！しかも、そのうち3枚は『ブルーフル・タイム』。S S Fツ！と怒り狂ったオレを誰が攻められようか。

ちなみに唯一召喚されたサーヴァントは荊軻さんでした。何でやねん。

「ほら、部屋にもついたらし私はもう行くわね」

「クロエが天使過ぎてマスター辛い」

「流石に私はあの子の礼装みたいなのは勘弁ね」

じゃあ、今日はもう休みなさいなど、ヒラヒラ片手を振りながら去っていく魔法少女。そういえば結局カルデアの職員の人達の分のチョコ作れなかったな……。まあ、オレは今こんなんだし碌な物は作れないから後日改めて渡すでしょう。

「はあ……」

ポスリとマイルームのベッドへと倒れ込む。洗濯されたシーツの良い匂いと柔らか

な素材が包み込んでくれる。このままちよつと寝てしまおうかと思っていると、ピーという開閉音とともにマイルームの扉が開く。

「先輩！失礼します！」

開いた扉の先。そこには彼女がいた。桃色の髪をわずかに乱れさせ、緊張しているのかどこかギクシヤクとしている少女。今日、オレが誰よりもチョコを欲しいと願っていた人物が扉の先に立っていた。

——何故かサーヴァントとしても武装を展開しながら。

「……………」

「……………」

「…………カチコミ?」

「違いますからっ?!これは、その……気合入れです!」

斬新な気合の入れ方だな、おいと内心でツツコんでいると、マシユはもじもじとしながら盾を持っていない方の手を差し出してきた。その手の平に乗っているのは赤いシンプルな箱。これが何なのか分からないほど、オレも馬鹿じゃない。

「——今日は日頃お世話になつていいるマスターへ感謝の心をお伝えしたくて……。で、ですからこのチョコレート、受け取ってもらえますか?」

頬を赤くし恥ずかしそうに笑うマシユ。オレはその箱を宝石を扱うように大切に受

け取る。

「——なあ、マシユ。中身見てもいいか?」

「あつ、は、はい!ですけど、あまり期待しないでくださいね?チョコ作りの経験なんて皆無でしたし、ブーデイカさんに教わりながらだったので……」

不安そうに言うマシユの言葉を聞きながら、中身を揺らしたりしないようにテーブルへと置きゆつくりと開けていく。ラッピングされているリボンを解き、蓋を開ける。

「——すごいな」

現れたのはチョココレートケーキ。ハート型で真ん中にベリー系のフルーツ、彼女を象徴する白い盾のホワイトチョコ、真ん中にはマシユと筆記体で書いて飾られていた。

他のサーヴァント達の物と比べたら非常にシンプルなチョコだろう。まあ、彼女達は全員が全員個性が溢れすぎているというのもあるが。比べるなんてとても失礼なことだと重々承知しているがそれでもオレにとっては一番のバレンタインチョコだ。

「ありがとうマシユ。すっげえ嬉しい」

「よ、喜んでもらえたなら良かったです。先輩の下へと来る途中にクロさんと出会って、非常に落ち込んでいた聞いていたので」

「そうか、クロエが……」

「それなら日を改めた方がいいかと考えましたが、日頃の感謝を伝えるのは今日しかな

いと思つたので。すみません、強引な感じになつてしまつて」

「そんなことないさ。おかげで滅茶苦茶元気出た。……なあ、マシユ。これ今食べてもいいか?」

「い、今ですか?もちろん、それは先輩に差し上げたのでいいですけど……」

アワアワとテンパるマシユ。そんな彼女に癒されつつ、オレはフォークを食器棚から取り出して椅子に座りチョコレートケーキと対面する。本当のことを言うところのまま永久保存したいぐらいなのだが、流石にそれは色々とアレなのでやめておく。だから、せめて心から味合わせてもらおう。

あまりにこのチョコレートケーキが尊過ぎて、フォークを入れることすら罪になるのではないかと錯覚してしまうがそこはなんとか押し殺していざ入刀。ハートの先端を切り取り、その部分を口へと運ぶ。もう見ていられないのだろうか。この時マシユは恥ずかしさからか目を両手で目を隠してしまつていた。

「——美味しい」

「ほ、本当ですか?」

「ああ、このケーキ本当に美味しいよ」

すごく温かい味だ。甘過ぎず、ピター過ぎず。食べる人のことを心から思つて作つてくれたんだろう。なんというか、マシユの気持ち伝つてきてすつげえ幸せだ。

「あつ、そうだ」

「……………先輩？」

オレはマイルームの冷蔵庫の中から、あるものを取り出す。皿の上に置かれたそれは、奇しくもマシユがくれたのと同じチョコレートケーキ。小さな星型のクツキーを乗せ、ホワイトチョコの四葉のクローバーを添え、同じくホワイトチョコで From | to Matthew と書いた。そう、オレがマシユの為に用意した日頃の感謝を伝えるバレンタインプレゼントである。

「オレからも日頃のお礼だマシユ。いつも傍にいてくれてありがとう。守ってくれてありがとう。これはオレの気持ちだ」

「先輩……………」

「……………これからもよろしくな」

「……………はいっ！マシユ・キリエライト、これからもあなたの為に尽力します！よろしくお願ひしますね、マスター！」

互いに照れつつも笑い合う。最近、こうしてマシユと笑い合う時間が増えた気がする。人理焼却を防ぎ、平和な日常を取り戻したことで、ありふれた当たり前のような時間を過ごせる世界になったからだと思う。

「そうだ。せっかくだし一緒に食べないか？お茶の用意をするよ」

「あつ、それなら私がしますよ先輩。先輩は座つて食べてください」

「いやいや、マシユは座つといてくれ。理由はよく分かんないけどその格好をしてるってことは何かしらゴタゴタがあつたんだろ？疲れてるだろうし、椅子に座つて休んでくれよ」

慌ててお茶を用意しようとするマシユを止めて、テーブルに座らせる。ちよつとだけ抵抗しようとしたマシユだったが、やがて諦めたようにストンと椅子に座つた。

お茶を淹れてテーブルに戻つてきたオレは、マシユと自分のケーキの隣にそれを置く。そして、椅子に座るとマシユと向かい合うような形となつた。

「じゃあ、いただきます」

「はい、いただきます先輩」

パクリとマシユからのチョコレートケーキをもう一口。うん、やっぱり美味しい。

「先輩のケーキもとても美味しいです。負けた気がしてちよつぱり悔しいですね」

「勝ち負けとかは置いといて、これでもかつてぐらい気持ちを含めたからな。渾身の力作だ」

「そんな良いものを私がもらつてもよろしかつたんでしょうか？」

「当たり前だろ？それはマシユの為だけに作つたんだよ。むしろ他の奴になんかにやるもんか」

「あ、ありがとうございます……」

顔を真っ赤にしてちよびちよびとケーキを食べるマシユ。うん、調子に乗ってクサイ事言っただけど、すっげー恥ずかしい。まあでも——

「来年はもつと凄いチョコを用意しますね、先輩」

「おつ、ならオレはそれを上回る凄いチョコを用意してやろう」

「も、もう！では私は先輩よりももつともつと凄いチョコを用意します！」

「じゃあオレはさらにその上のやつを」

「私はさらに凄いチョコを！スーパーです！グレートです！」

「オレはウルトラでギヤラクシーなチョコを」

「子どもですかっ!? 変なところで張り合わないでください！私の立つ瀬がないじゃないですか！」

——彼女とこうして笑っていられる時間が少しでも続けばいいと、オレは幸せを噛みしめながら思うのだった。

おまけ

「そういうえば先輩。えっちゃんさんという方は召喚できなかったんですね？」

「うっ、思い出したくないことを。まあそうだけど……」

「クロさんが感心してましたよ。『マスターの幸運の低さはある意味宝具級』とか何とか」

「なにその表現、酷い。せつかくのセーラー服装備の文学系眼鏡女子だったのになー」

「……むう」

「どしたマシユ？」

「——先輩、私も読書は好きです」

「お、おう。知ってるけど」

「私も日頃は眼鏡してます」

「まあ、そうだな」

「なら、あとはセーラー服を用意するだけですね」

「……はい？」

「このケーキを食べ終わり次第、ダヴィンチちゃんの下へ行つて用意してもらいます」

「ちよ、ちよつとマシユさん？いきなりどうしたんだい？」

「――先輩」

「な、なんでしょう？」

「私のセーラー服姿、楽しみにしててくださいいね」

ちよつと新宿に行つてきたんだけど、今回の話でオルタ勢の魅力が爆発だよね？

『悪』

そのまま読むと2文字。漢字にするとたった1文字にしかならないこの単語には、その文字では収めきれないほどの意味を持つ。正義の対となる言葉、憎むべき相手、排除されるべき存在。それは小さなものから世界を脅かしかねない大きさのものまで様々だ。

オレは人理焼却を巡る戦いでいくつもの『悪』に触れてきた。——いや、所詮は触れてきたつもりだったのだろう。自身が正義の立場だと勘違いも甚だしい考えを持たなかつたとは言えない。それらを打倒せねばならないという使命感に駆られなかつたとも言わない。心のどこかでこれは正義の為なのだと自分に言い聞かせて、目の前の敵を排除したのだ。

しかし、特異点を巡る戦いでオレは悟つた。それが今まで戦つてきたものは『悪』ではなかつたのだ。決めつけていたものは『もう1つの正義』だったのだ。『正義の反対はもう1つの正義』とは使い古された言葉だろう。この旅を経て、オレはその言葉の重

みをようやく理解した。

例えば、第六特異点で出会った獅子王。またの名を『女神ロンゴミニアド』。彼女は特異点の中で円卓の騎士達や聖騎士達と共に『聖罰』という一方的な虐殺を行った。その一面だけ見ると、なるほど。確かに彼女は紛れもない『悪』であろう。しかし、その本来の目的は『聖抜』として自身の思想に賛同できる魂を集めることで『聖都キャメロット』の存続を願ったものであり、彼女なりに人理焼却による人類滅亡の危機を救わんとする手段だった。

また、他には人理焼却を凶つた魔神王ゲーティア。人々を見守るために在った彼は人間全てに失望し、人類を無に還そうと試みた。彼が成そうとしたことはとても許されることではない。絶対に正さなければならぬことだった。だが、健やかな知性を育み、死という終わりのない完全な環境を創り出そうという行為は視点を変えてみれば彼なりの『正義』でもあった。

——そう、『正義』と『悪』は表裏一体。見方を。立場を。意識を。少しでも変えてしまえばどちらにもなりうるのだ。

そのことに気づいた頃、オレは一人の英霊に出会った。彼の生き方は『正義』と『悪』が幾重にも重なり、混沌と化したものだったといえよう。『正義』の為に殺しつくし、『悪』という魔道に堕ちてしまった英霊。非情を貫こうとしたその心は、やがて鉄のよう

に固く冷たく閉ざされてしまった。

しかし、彼がそのことを嘆くことはない。何故なら彼は、何のために刃を取ったのかすらも忘れてしまったのだから。

「新宿ヤバ過ぎワロタ」

「……あの先輩、頭大丈夫ですか？」

レイシフトにより帰還してからの第一声がこれである。ついつい口から出てしまった正直な感想に、マシユは割と本気で心配した様子で問いかけてくる。あのお嬢さん、

その言い方は傷つくからやめてね。

「すまん、ちょつと言ってみただけだから気にしないでくれ」

「はあ……分かりました。とりあえず先輩、お帰りなさい。ご無事で何よりです」

「うん、マシユもお疲れさま。サポート疲れただろ?」

「い、いえ。これくらい先輩の苦勞に比べたらなんてことないです」

ニコリと微笑みながら笑いかけてくるマシユ。だが、その笑みはいつものよりどこかぎこちないように感じられた。おかしいな、いつもなら全回復するぐらい癒されるはずなのになんだか物足りないぞ?」

「この後はすぐにお休みになられますか? 報告に関してはまた後でいいとダヴィンチちゃんも言っていましたし」

「うーん、とりあえず疲れたから休みたい気もするんだけど——」

「するんだけど……って、まさか先輩」

オレが中途半端に言葉を区切ると、マシユの目の色が変わる。流石は相棒、これだけで何が言いたいのか分かってくれたようだ。ジト目の視線にあははと空笑いをしつつも、オレはグツと拳を突き上げる。

「——新しい特異点も終わったことだし、やっぱりここはやつとかないとな!」

その手の中にはキラリと光る聖晶石。もう、言いたいことは分かるな?」

「まったく！先輩はもつとご自愛を心がけるべきです！先輩はこのカルデアで唯一のマスターなんですよ！」

「ごめんって。でも早くしないとタイムオーバーになっちゃうかもしれないだろ？」

「タイムオーバーってなんですか！」

タイムオーバーって言ったらあれだよ、ピックアップ期間だよ（メタ）

プリンと怒るマシユを宥めつつ召喚部屋へと向かうオレ。マシユの気遣いは素直に嬉しいがあの新宿で出会ったサーヴァント達にもう一度会いたいという気持ちが足を進ませる。どいつもこいつもクセのある奴らだったけど、というか一部の奴アヴェンジャーに関しては本気でオレのことを殺そうとしてたけど、それでも彼らとの縁をさらに繋ぎたいと思っているからな。

というか、ぶっちゃけて言うときセイバーオルタとか邪ンヌが来てほしいです。理由とか言うまでもないな？可愛いからだ（言ってる）

「もう、先輩はこういうことに関しては本当に強情なんですから……」

「いやー照れるねー」

「褒めてないです」

「ごめんなさい」

ふざけた態度取ってたら真顔で怒られました。うん、我ながら反応早すぎでしょ。す

ごーい！君は謝罪が早いフレンズなんだね！（知能低下）

「とにかく、今回は召喚したらすぐに休んでくださいね！」

「わ、分かったよ……」

グイツと顔を近づけてくるマシユ。ほのかに鼻についできた彼女の甘い匂いと端正に整った顔に思わず顔を逸らす。マシユは最近こういう感じに距離感が行方不明になることが頻発するようになった。スキンシップと括ってよいのか分からないが、これは男として少々困ってしまう。

だってほら、少なからず意識している異性が警戒も何もせず距離詰めてくるんだぜ？
こう、照れるじゃん……？

しかし、マシユは顔を逸らしたオレの態度が自分の言うことを聞いてくれないのだと誤解したようでさらに顔を近づけてくる。ちょっ！流石に近いよっ！？鼻がついちやうから！っーいーちやーうーかーら！

「——先輩？」

「わわわ分かっていたから！だから早く離れてくれ！」

「あつ……」

あまりに近過ぎて照れがMAXになり悲鳴に近い声を上げると、マシユもようやく自分がどれだけ近づいていたか理解したのか、小さく息を漏らすと顔を真っ赤にして離れた。

「す、すみません、つい熱くなってしまつて……」

「い、いや。マシユがオレのことを心配してくれたのはよく分かったから。オレも変な態度取つてごめん」

互いに謝ると2人の間に沈黙が漂う。何を話せばいいのか分からず、マシユの真っ赤になった顔可愛いなーとか、オレ今顔真っ赤なんだろうなーとかどうでもいいことを考えていた。

「と、とりあえず召喚を終わらせるか」

「そ、そうですね！……あつ、ですが護衛のサーヴァントがいませんね。今の私ではその、先輩の護衛はできませんので……」

この気まずい空気を払拭するために召喚を進めようとするが、その前にマシユの言葉にオレはハツとなる。

実はマシユは現在サーヴァントとしての力が使えない。あの最後の決戦の後、一度は命を落とした彼女は再びその命の輝きを取り戻した。だが、その反動かサーヴァントとしての力を失ってしまったのだ。普通の人間としての寿命を獲得したもののその魔力回路は機能を停止。正真正銘ただの人間になったのだ。

護衛ができないと口にするマシユはとても悔しそうに俯いていた。ギユツと拳を握りしめ、わずかに肩を震わせている。

今回の探索は彼女にとつて歯がゆい物だっただろう。訪れた新宿は本来の世界とは異なり、文字通り悪の巣窟であり、オレだって何度死にかけたか分からない。『守護』を何よりも重きに置いているマシユからしたらモニター越しに見るそれらの光景は耐えがたいものであったに違いない。

さっきの迫力もそのことが関係しているとオレはようやく理解する。心配で心配で堪らなかつたから出た言葉だったんだと理解すると目の前の少女がより一層愛しくなる。その震える身体を思わず抱きしめて、大丈夫オレはここにちゃんといるからと伝えたい衝動に駆られる。が、ここはまだカルデアの通路。先程からチラチラと行き交う職員達の視線が刺さってくるため流石に自重した。

と、職員の中からこちらへと向かってくる影がある。主に白衣を身に纏っている職員とは違い、その服装は真っ黒だった。抜けるような白い肌や本来の色である金髪もやや

色が抜けておりまるで亡霊のようにも感じられる。——その手にターキーさえ持つていなければ。

「トナカイ、盾の娘。このような通路で何をしている？先程から職員達の物珍しげな視線が浴びせられているぞ。あと、次のクリスマスはまだか？」

「いや、まだ3月だから。あと9ヶ月ぐらいあるから。そういうサンタオルタこそ何してるんだ？」

「愚問だな。次のクリスマスで何を配るか聞き込みをしているに決まっているだろう。私は準備というものはすぐに終わらせる主義だからな」

そう言いつつモグモグとターキーを頬張るセイ——ライダーのサンタオルタ。新宿のセイバーオルタと同じでジャンクフード好きですね。ちなみに今はサンタの大きな袋は持っていない。ジャンヌ・リリイにでも渡しているんだろうか？

というか、一応カルデアの通路つて飲食禁止なんですけど。えっ？そんなこと知るか？ですよー。

「それで、こちらからの質問にも答えてもらおうか」

「ああ、今から召喚を試してみようかなと思っただけ。その……」

「……………なるほど」

オレがチラリと気まずそうにマシユへ視線を向けると、それだけでサンタオルタは察

してくれたようだった。納得の言葉を零し、少しだけマシユと向き合う。オルタ化し、クラスも変わり、色々と「どうしてこうなった」とツツコミどころ満載のサーヴァントであるがこれでも元々は一国を率いて幾度と勝利を掴んできた王だ。コスプレのような形をしても堂々たる風格は失われていない。そのような人物にじつと見つめられたマシユは、やがて気まずそうに目線を逸らしてしまう。

「いいだろう、その召喚には私が付き合つてやろう」

「えっ? いいのか? 今忙しいんじゃない」

「かまわん。その分、お前が私の手伝いをすればいいだけなのだからな」

「ああうん、なるほど。ありがとうサンタオルタ。じゃあよろしくお願いするよ」

「任せておけ。それでいいな、盾の娘?」

「……はい」

ぼそりと蚊の鳴くような返事をするマシユ。それが聞こえたのか聞こえなかったのか分からないが、サンタオルタは先に歩みを進め始めた。その背中を追うようにオレ達も歩き始める。召喚部屋へと向かう道中、オレ達の間会話らしい会話は無かった。

……こんな気まずい感じになるんだつたら、召喚は先延ばしにしていた方が良かったかもしれない。マシユを落ち込ませるだけじゃないか、と自分自身を心の中で罵倒する。だが、今更やっぱり今日は止めておこうと言うと、マシユが自分に気を使われたと

分かって余計落ち込んでしまうかもしれない。

結局この堂々巡りの思考は、召喚部屋にたどり着くまで続くのだった。

召喚部屋へと到着するとサンタオルタに急かされるままに召喚を行う。10連1回分に呼符が7枚。平均ぐらいの素材である。最初の10連はまあいつも通りの結果だった。すでに宝具レベルMAXなサーヴァントや礼装ばかり。うん、まあそうだよ
ね。

次の呼符についてだが、すでに6枚目を用いての召喚は終わってしまった。結局新宿に關係するようなサーヴァントは1体も現れていない。サンタオルタも飽きてきたのか、どこからか取り出した新しいターキーを口にはしている。いや、あのここも飲食は禁

止なんですが……えっ？『私がルールだ』？流星はオルタ。良い暴君っぷりです。

「トナカイ……モグモグ。お前の召喚運は……モグモグ。相変わらずだな……モグモグ」

「とりあえず、そのターキー食い切ってから喋ろよ。何言ってるか何となくわかるけどよ。あと無表情でモグモグすんな」

「サンタオルタさん、よくそんなに食べて太りませんね……」

「サーヴァントの姿が変わるわけないだろう。故に太るわけもない」

「そう、ですよ。サーヴァントなら、ですよ……」

いつもであれば何気ない会話の1つであっただろうに、サンタオルタの言葉を変な風を受け取ってしまったマシユは再びシヨンポリと落ち込んでしまう。ううむ……これはさっさと召喚を終わらせた方がいいかもしれない。

そう考えたオレは、最後の呼符を使い召喚を試みる。波紋上に広がる光の帯は3本ライン。つまりはサーヴァントが召喚されたことだった。そうして現れるクラスカードは銀色の枠のアーチャークラスのカードだったがすぐにバチバチと光を放ちその色を金色へと変化させる。

まさかこの状況で高レアのサーヴァントが来てくれるとは思っていなかったオレは思わずぼかんとその様子み目を奪われてしまう。やがてお馴染みの爆発するような閃

光が炸裂して、召喚された者の正体が見えてきた。

黒く変色した鍛え上げられた肉体。対照的に短く刈り上げられた真っ白な髪。冷徹、冷血、冷酷といったただひたすらに冷たい印象を与えてくる瞳。その手には銃に改造された夫婦剣を持ち、コツリコツリと靴音を鳴らしてゆつくりと近づいてくる。

召喚されたものの正体が分かった瞬間、オレは思わず表情を強張らせた。サンタオルタが警戒するようにオレの隣に立ち、サンタオルタとは反対隣にマシユが控える。そんなオレ達の様子を見ると、召喚されたサーヴァントは小さく鼻を鳴らした。

「——お前がマスターか、ひどい面構えだ。まあいい、おかしななりをしているがこれもアーチャーだ。精々上手く使え」

そう言って、ただひたすらに冷たく淡々と『エミヤ・オルタ』は口上を述べる。まるで——自分は戦いの道具。機械のように扱えと言わんばかりに。

「……エミヤ・オルタ。召喚に応じてくれたのはお前だったのか」

「別に応じたたくて応じたわけではないがね。アンタとの縁が少なからずできていて座がそれを紡いだ。それだけの話だ」

「だとしても来てくれたのは嬉しいよ。これからよろしく」

「ああ、命令するのであればいくらでも敵を殺してやろう。あいにく、俺にはそれしかないのな」

手に持っていた改造干渉・莫耶をしまうと皮肉気にエミヤ・オルタは笑う。新宿では敵対し、最後の最後でようやく共に戦いもしたがそれはあくまで共通の敵がいたからに過ぎない。完全に味方になったわけではなかったため、こうして召喚できたことは素直に嬉しく思う。ただ……

「——それで、そのセイバー。先程から俺に殺気を飛ばすのを止めてくれないか？ 仮にも今は味方なんだがね。反射的に撃ってしまっても文句は言えんぞ？」

「私は貴様が新宿で出会ったセイバーではなくサンタオルタだ、アーチャー。反射的に味方を撃つような貴様を警戒するというのが無理な話だろう」

「だから、その殺気を抑えてしまえばいいだけの話だと言っているのだ。それとも、力づくで大人しくさせてやろうか？」

「貴様のような奴が私を抑え込むと？ 面白味のない冗談だな、アーチャー」

「どういう考えを持ったかは知らないが、反英霊に片足突っ込んでいるにも拘らずその

ような道楽に興じている貴様など恐れるに足らん」

「……言つたな、貴様」

次の瞬間、サンタオルタの手には黒に染まった聖剣が握られておりエミヤ・オルタへと大上段から斬りかかっていた。エミヤ・オルタもほぼ同時のタイミングで改造された剣を両手に取り、交差させるように受け止める。ズゴンツ！と召喚部屋に衝撃が走った。

「先輩……このまま戦わせては……！」

「止めろ2人共！カルデアを破壊するつもりかッ!？」

オレは罅迫り合いを続ける2人の間へと止めに入る。流石にマスターであるオレの命令に逆らうつもりはないのか、2人共すぐのその矛を収めてくれた。もつとも片や馬鹿にするような視線、片や射殺するような視線は結ばれているままだったが。

「ふんツ……マスター、俺は適当に過ごさせてもらう。出撃があるようだったらいつでも呼べ」

そう言い残し、エミヤ・オルタは召喚部屋を去っていく。その背中からは幾度の戦場を切り抜けてきたという強さだけが感じた。そう、人としての感情など微塵も感じさせない、ただ力という暴力的な強さのみを。

「——あいつはな、腐っている」

「サンタオルタ？」

ポツリとサンタオルタが口を開く。手に持ったままの聖剣をギュッと強く握りしめ、どこか悔しそうに表情を歪ませた。

「自らが望んだ理想を忘れ、思想を捨て去り、ただ効率だけを求める機械に成り下がりが殺戮を尽くす。非道と言われようが外道と言われようが、与えられた使命だけを全うするだろう。その過程にどれだけの味方や非力な人間の亡骸が出来るだろうと、あいつは冷酷に切り捨てる。……例えば、それが自分自身であつても」

「……………」

「馬鹿な男だ。かつての剣の如き強靱な魂など今となつては見る影もない。ただ『正義』という道突き進もうとしただけなのに、正しいことをしようと奔走しただけなのに愚かにもその道を誤つたのだ。これを馬鹿と言わず何と言う」

「サンタオルタさん……」

「何があいつの魂を失墜させたのかは、今となってはどうでもいい。どう足掻いても奴は魔道へと落ちた道を今更正することなどできはしない」

もしかしたら、彼女はエミヤの生前を何か知っているのかもしれない。そうとしか思えないほど、今の彼女は雄弁にエミヤ・オルタのことを語っていた。

サンタオルタとしてではなく、『アルトリア・ペンドラゴン』としての彼女。その過去を聞き出すことは無意識のうちに憚られた。

「だがな、トナカイ。あいつはそれでも『悪』ではない。至る所が腐りきっていても、その心の奥底に眠るちっぽけな部分は変わっていない。確かに目的の為に手段を問わないやり方は『正義』と言い難い。しかし、今となってはあれがあいつなりの『正義』なのだ」

「『正義』……」

「もちろん、トナカイにまで『正義』を押しつけるつもりはない。『正義の味方』はある種の呪いだ。一度憑りつかれると過酷などとは生温い道へと進んでしまう。そのことを忘れるな」

厳しく言いつけるようにサンタオルタはその綺麗な瞳をオレへと向ける。『正義の味方』。子どもの頃であれば誰もが一度は描く希望の光。しかし実際は、それはあまりに

重く険しい道のりだった。エミヤ・オルタは……いや、エミヤとして在った頃の彼はどれほどの重圧に耐えながらその刃を振るい続けたのだろう。何も知らないオレが理解することなど……到底無理だった。

「——それと、盾の娘。貴様にも言っておくことがある」

「えっ？わ、私ですか？」

「そうだ。あの大馬鹿者にはおそらく『正義』を貫く支えとなつた人物がいなかつた——いや、失つたのだらう。だからこそ奴は魔道へと堕ちてしまつた。人の理想や思想は時に容易く崩れ落ちてしまう。支えとなる人間がいなければな。お前は今サーヴァントしての力が無いと言つていたな？だから己がマスターの役には立てぬと」

「はい……」

「本気で言つているのだとしたら貴様も大馬鹿者だ。このトナカイが何の為に貴様と共に在つたと思う？サーヴァントとしての力が欲しかったからか？」

「ちが……います……」

「何の為に人理を救つたと思う？栄誉が欲しかったからか？」

「違います……先輩は……」

サンタオルタの問いかけに胸元を抑えて苦しそうに答えるマシユ。あまりにも悲痛な様子にサンタオルタを止めようとも思つたが、彼女の放つ圧力に言葉が出て来なかつ

た。

「そこまで答えられるのであれば後は分かるだろう？ 今一度自身の在り方を考え直すといい。トナカイが大馬鹿者にならぬようにな」

ポンとマシユの肩に手を置いて、静かに諭すように言い聞かせる。そしてエミヤ・オルタと同じように召喚部屋から去っていくサンタオルタ。

「エミヤ・オルタ……。これが貴方の辿り着いた結末だというのですか」
部屋から出る際、悲しそうな言葉を彼女から聞いた気がした。

「次の日 マイルーム」

昨日の事から一夜明けて、マシユがマイルームへと訪れた。その表情は昨日と比べて憑き物が落ちたように柔らかかった。

「先輩、昨日はすみませんでした」

「いや、マシユは悪くない。本当はオレが謝らなきゃいけないことだよ。色々無神経で悪かった」

「先輩が謝る事なんてないんです。ただ、私が勝手に落ち込んでしまっていただけで」
「……………」

「私、昨日サンタオルタさんに言われて一晩考えてみました。サーヴァントとして今の自分に何ができるんだろうって。今までは盾も使えなくなつて、サーヴァントとしてのステータスも失つて、このままじゃ先輩のお役に立つことなんてできないと焦つてしました」

「そんなことない。マシユは今までもずっとずっと頑張ってくれてただろ？役に立つてないなんて思つたことないよ」

オレの言葉に嬉しそうに笑顔を浮かべるマシユ。うん、やっぱりマシユは素直な笑顔が一番だ。

「ふふつ、ありがとうございます。先輩ならそう言ってくれるだろうと相談したダヴィンチちゃんにも言われました。でも、私はもつと先輩のお役に立ちたいんです」

「マシユ……」

「——だから、今は自分にできることをしようと思います。傍にすることは難しくなつてしまいましたが、それでも先輩を支えたいんです。サーヴァントとして先輩をお守りすることはできませんが、私にできる精一杯で——キャツ!？」

限界だった。オレはマシユの身体を抱きしめた。かつて冠位時間神殿ソロモンから帰還した時にマシユがしてくれたように、優しく彼女の身を包み込む。

「せ、せせせせ先輩ツ!? ああああのーそのー! わ、わた、私は……!」

突然の事態に処理が追い付いていないマシユはアワアワと慌てた様子で、それ何語? というような言葉をポロポロ零している。思わずその様子にクスツと笑ってしまった。

——マシユ大切な人がこんなにもオレの為に悩んでくれている。オレの歩みを支えてくれている。そのことが何よりも嬉しかった。

包み込んでいたマシユを離す。彼女は顔を真っ赤に染め、少しだけ潤んだ瞳でオレを見つめている。あまりに艶っぽい姿に赤面しながらもの、決してその視線から目を逸らすことはなくオレは彼女へ笑いかけるのだった。

ぐだぐだイベントで魔神セイバーの噂が出てたけど、いつか実装されるはずだよね？

『織田信長』

言わずと知れた日本史を代表する戦国武将。”泣かぬなら 殺してしまえ ホトトギス”で有名なあの織田信長である。若い頃は太刀打ち者として好き放題暴れ回り、桶狭間の戦いで今川義元を討ち取ると一気にその勢力を拡大。室町幕府を事実上滅ぼし、織田政権を確立して天下人となる。が、重臣である明智光秀の謀反により1582年6月21日に本能寺で自害した。敵は本能寺に在りっ！とは有名な言葉だ。あと、ものすごくどうでもいいがかなりの美男子だったらしい。

まあ、こんな感じでおそらく日本であれば誰もが知っている戦国武将。戦国マニアであれば目の色を輝かせて捲し立てるように語り出すであろう織田信長。鉄砲バンバンで徳川さんと手を組んで武田さんを討ち破った織田さんである。そうなのだが——
「なんじゃ、マスター。わしの顔に何かついておるか？」

コテリと目の前の少女が首を傾げた。目の前でマイルームに置かれた炬燵へとすっぽりと収まり、モグモグと饅頭とお茶を堪能している長く綺麗な黒髪を持つ残念美少

女。何かBusterと書かれたクソダサパーカーを着ているが……そう、実はこれが先程から説明文を列挙している織田信長本人だったりする。

「——ノツブ、お前なんで英霊に成れたの?」

「いきなり酷くないかお主っ!」

「だってこの前の大騒動はぐっだぐだだったし、なんか悪いノツブとか言う奴に簡単に捕まってたし。というか、お前さんが聖杯を爆弾に変えるとか奇行に走らなければ大騒ぎすることもなかったんだけど。結局はた迷惑なだけじゃねえか」

「ぐぬぬう!言いたい放題言いおつてからに……!今すぐ骸に変えてやろうか!」

「あつ、じゃあこの饅頭とお茶没収な」

「ああつ!すまんかった!謝るから返してほしいのじゃ!まだ半分しか食べておらんのじゃ!」

ヒョイツと饅頭が乗せられた皿を持ち上げると、泣きながらガシツとオレの服を掴んでくるノツブ。まるでどこぞの女神のようだ……。

ワンワンと泣きやがるノツブに仕方なく饅頭を返してやると、二度と取られまいとキツと睨まれた。おかしい、歴戦の戦国武将で紛れもないサーヴァントのはずなのに微塵も怖くない。

なんというか、色々とダメダメな魔人アーチャーに思わずため息をつく。この前の大

騒動、カルデア内がノツブ達の世界と変に繋がってしまった、ちびノツブやら戦国武将にネームチェンジしたサーヴァント達が起こしたこの事件はこの上なく緊張感0で幕を閉じた。というか、終盤はめんどくさ過ぎて早く帰りたいかった。

その大騒動の間行動を共にしたのがこの目の前のノツブともう一人、桜セイバーこと『沖田総司』である。史実であればどちらとも男性であったはずなのだが何故か女性だった。うん、まあ今更だから別に気にしないけど。ちよつとやり過ぎじゃないですかねえ菌糸類さん……？

「先輩、追加のお饅頭とお茶持つてきましたよ」

「ありがとー。マシユも一緒に食べようぜ」

「はい。ご一緒させてもらいますね」

菌糸類のやりたい放題に思わず頭を押さえていると、部屋の片隅でお饅頭とお茶を準備していたマシユが戻ってきた。オレとノツブが向かい合って座っていたので、マシユはオレから見て炬燵の右隣のスペースへと入ってくる。入ってくる際、コツンと彼女の足がオレの足に当たってしまったのでごめんと謝り少しずらした。

「マシユもマスターに言うてくれんかー。確かお主は歴史とか詳しいんじゃない？ わしがいかに偉大な武将じゃったか教授してやってくれ」

「えっ？ ノツブさんのことをですか？ その、日本では戦国武将に関する勉強は義務教育、

でしたっけ？それで必須になっていたはずなので先輩もある程度は知っていると
思いますよ？」

「それは知ってるんじゃないが……。こやつ、わしに対して敬意というものが微塵も感
じられん」

「敬意（笑）」

「（笑）を付けるな（笑）をッ！」

いや、日頃のお前さんの様子を見てたら敬意なんて沸かんでしように。カルデアに
来た時はそれなりに風格を感じたりもしたけど、すぐにゴロゴロしたりダラダラしたりし
てたじゃん。

「もっとわしを崇めんかつ！これでも日本を切り開いた偉人じゃぞ！」

「ノッブ！（ステイの意）」

「それは回す方のノッブに言う台詞じゃろうが！」

おい、回す方とか言うなよ。確かにあの人宝具レベルMAXにするの超早いけども。

「大体、お主だつて体たらくだと聞いてるぞ！」

「つたく、うるせえな。何が言いたいんだよ」

「召喚の事じゃ。聞くとお主星5のレアサーヴァントを1体しか持ってい
ないそうじゃないか。このガチャ運E！」

「なにおうっ!? うるせえよ! 好きでガチャ運低いんじゃないやねえよ!? とうか、ガチャとかメタな言い方すんなし!」

「やーいやーい! ガチャ運Eー!」

「やかましい! お前だつて同じ配布サーヴァントなのにクロエより使いづらいじゃないやねえか! 何だよ騎乗特攻つて!? 神性特攻はまだ分かるけど騎乗特攻とか使いづらいわツ!」

「おおうっ! 地味に人が気にしていることを指摘してくるでないわっ! わしのアイデンティティーなんじやからいいじやろうが! 騎乗特攻とか超レアではないか!」

「じゃあオレもガチャ運Eがアイデンティティーですう! これで小説のネタ考えてるんですう! むしろ当たった時の方がネタに困るまであるわツ!」

「是非もないよね!」

「てめえ、それさえ言えば許されるとでも思つてんのか!?」

「うるさいわツ! ええい! このままでは埒があかぬ! 猿ウ! 鉄砲を持てい!!」

「いるかそんな奴! というか、そんな感じに荒使いするから謀反なんか起こされるんだよー!」

「いやああああ! 古傷を抉るではないわああああ!!」

「おうやろうつてのか!? 上等じやああああ!」

「えっ!? あの先輩ツ!? ノツブさんツ!」

そこから始まるマスターとサーヴァントの仁義なき戦い——という名の取っ組み合い。本来であればオレなどサーヴァントには逆立ちしても敵わないが、こちとら伊達に人理を救つちやいない。身体強化の魔術はすでに発動済みである。

「とりあえず沈めやああ!!」

それから数分間。マシユが「やめてくださいっ!」とアツアツのお茶を両者にぶつ掛けるまでこの取っ組み合いは続くのであった。あのマシユさんや。止めるのはいいけど火傷しちゃったらどうする?ん?身体強化してるから大丈夫かと判断した?意外と冷静なのね、君……。

「まあ自分で自覚してるけど、あそこまで馬鹿にされたら黙っちゃおれん。良く見ておけよノツプ。お前のマスターの運を!」

というわけで、ノツプとマシユを連れて召喚部屋へ。確かにオレの召喚に関する運は

低い。しかしだ、これでも武蔵さんを召喚できているのだ。最近だと、サーヴァントではないが『2030年の欠片』とかいうレアな礼装も出ているし、新年に入ってから間違いない運気は上昇しているからいけるはずだ！

「先輩の意気込みが空振りするのはいつもの事なので、結果に対しては温かい目で見てあげてくださいねノツブさん」

「マシユ、お主まるでダメな夫のフォロワーをする良妻のような感じになっておるぞ」

「そ、そそそんな！私が先輩の妻だなんて……！」

「ダメだこの娘、早く何とかしないと……！」

背後で一体何をコソコソと話しているんだ？というか、何故マシユは顔を真っ赤にして笑っているの？なんか幸せな事ことでも想像してんの？

「難聴系鈍感主人公か、お主。その設定今のご時世使い古されとるぞ」

「意味が分からん。というか、そろそろ召喚始めてもいいか？」

「分かっておる。早く始めるがよい」

「——ハッ!?私は今何を？」

「マシユ大丈夫かー。召喚始めるぞー」

「は、ははははい！ど、どうぞ先輩！」

ワタワタと慌てながら先を促すマシユ（可愛い）

さて今回の召喚だが、実は一発勝負である。というのも連日のピックアップのせいで石も呼符も尽きているからだ。今からの召喚もぐだぐだ特異点を修正した後にダヴィンチちゃんから『頑張ったで賞』的な感じでもらった呼符1枚のみ。こんな状態でノツブ見返すとか無理だけどしかたないよね！男には負けると分かっているも立ち向かわなきやならん時があるんだ。

「おーし、じゃあ回れー！」

呼符を相手のゴールにシュウウウツ!!超！エキサイティン!!と言った感じで呼符を突っ込む。グルグルと光の球体が周り始めたそれらは、やがて3つの線を描き出す。3本ライン——サーヴァントが召喚されたという証だ。さらに召喚されたサーヴァントがどのクラスかを示すカードが現れると刻まれていたのは誇り高き騎士の紋章。つまりセイバークラスのサーヴァントが召喚されたということになるのだが、あいにく色は銀色。つまりレアリティは星3以下ということになる。

「ほーら、やつぱりガチャ運Eではないか！やーい、バーカバーカ！」

「うっせえ！そう簡単にレアサーヴァント引けるかよ！むしろ単発引きでサーヴァントが来てくれただけでもすごいわ！」

「プププツ！うちのマスターのガチャ運が低すぎて辛いんじゃないやけどー！草生えるんじゃないやけどー！あれだけ大見栄張つとして恥ずかしいー！ねえねえ、今どんな気持ち？見とけ

とか言っておいてこの体たらくどんな気持ち？」

「うぜえ……………」

「はっはっはっ！まあまあ落ち込むでないマスター。ほれ、これを機にわしにもっと敬意を払って接するが良い。それならば今までの不敬は水に流してやるぞ」

「死んでもごめんじゃああああ！」

煽るノツブに煽られるマスター。今ここに第2回マスターVSノツブの仁義なき戦いが勃発しようとしている。一触即発のこの空気を変えたのは鶴の一声ならぬマシユの一声だった。

「せ、先輩！見てください！カードが！」

「なっ！金色に、変わっただと……………!？」

「なぬう!?!何故じゃっ!？」

今にもレオニダス直伝スパルタ式組伏せ術を発動しようとしていたオレだったがマシユの声にすぐさま反応。彼女の視線の先ではバチバチと紫電を走らせた銀色のセイバーカードが金色へと変化していた。そうして、一際激しく眩い輝きを放ったカードから人影が現れる。

桜色と朱色の袴を身につけた一見可憐な少女。桃色が混じった髪を黒いリボンでまとめているが、ピヨコンと頭頂部あたりからアホ毛が一本立っている。物腰も非常に柔らかく一目見れば茶屋の看板娘のような装いだ、そのイメージ全てを手に持った刀が消し去っている。

オレはこの少女を知っている。ついこの間まで行動を共にしていたからだ。ノツプが起こした大騒動を共に解決した、自称幕末最強剣士である彼女の真名は——
「——新選組一番隊長。沖田総司、推参。あなたが私のマスターですか……え、羽織？」

それが何処かにいってしまいました……」
「沖田さん大勝利——」でおなじみ。星5セイバー、『沖田総司』であった。

「おいしいおいしいいっ!? 星5来ちやつたじゃねえええかああああ!」

「詐欺じゃ! こんな詐欺じゃ! 誰がガチャ運Eのマスターじゃよッ!? こいつ単発引きでしかも1発目に引きおつたぞ!」

「どうする!? どうすんのオレ!? 全然予想してなかったよっ!? こんな絶対おかしきよッ!」 (まどマギ)

「先輩、とりあえず落ち着いてください! 沖田さんがものすごく微妙な顔してます! 具体的には、来るんじゃないかと」という感じの顔です!」

突然の事態に全然思考が追いつかないオレと騙されたと大声で捲し立てるノツプ。ギャーギャーと騒いでいたが、沖田の様子をしっかりとキャッチしたマシユがストップをかけてきた。

「お、おお。すまん、沖田さん。まさか来るとは思っていなかったからつい取り乱しちまった」

改めて言うが、オレは召喚運がものすごく低い、正月明けて武蔵さんが来るまでうん

ともすんとも召喚されなかったほど幸運Eのマスターだ。だがこれは本当に運氣が上昇してきているのではないか？このままいけば全クラス星5で揃えることも夢ではないのではないかと、わずかではあるが希望の光を見た気がした。

「は、はあ……。あの、私帰ってもいいでしょうか？たぶん何かの間違いではないかと」「間違いなんかじゃない……！」

「先輩、唐突にアーラシユさんの真似をするのは止めてください」

本気で帰りたいそうな沖田さんを全力で引き留める。ここ逃がしてなるものかつ！いや、お願いです、本気で帰らないでください。

「まったく、マスターがいらないところで幸運発揮したもんじゃから、会いたくもない顔に会ってしまったぞい」

「げっ、ノツブ。貴方までいるんですか。マジで帰っちゃダメですか？」

「ダメです」

「げっ、とは何じゃ。失礼な奴じゃな」

「貴方と一緒に居ると碌な事無いじゃないですか。また爆弾とか作ってるんじゃないでしょうね？」

「作つとらんわ！人をどこぞの頭のおかしいピエロ系キャスターと一緒にするでないわ！」

まったく関係ないところでディスプレイされるメフィストフレステ……。

「——はあ、しょうがないですね。召喚されてしまった以上、この剣は我がマスターに捧げます。この沖田総司、我が主の前に立ちふさがる敵は全て切り伏せてみせましょう」
「うん、ありがとう沖田さん。これからよろしく。あつ、あとで九頭龍閃見せてもらつていい？」

「いや、私幕末最強を自負していますがあれは無理ですから。縮地ならできそうですが」

左手に刀を持ち、右手を差し出してくる沖田さん。これから共に戦う仲間として、歓迎の意も込めて冗談を交えつつ彼女の手を握る。幕末で名を馳せた剣士とは思えないほどほっそりと柔らかな手だったが、そこには確かな強かさを感じる。やはり、星5のサーヴァントが秘めたる力というものは凄まじいということを改めて実感した。

「じゃあ、とりあえずオレの部屋に戻ってゆつくりしようか。夕食の時には沖田さんの歓迎会でもやろう」

「えっ、いいんですか？」

「もちろん。ここに新しく来てくれたサーヴァント皆に歓迎会はやつてるから。沖田さんも楽しんでいってくれ」

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えて」

最初は少しだけ遠慮がちな感じではあったが、すぐに笑顔を見せる沖田さん。うん、

良い笑顔だ。さて――

「――さつきから睨んできてるけどいったい何だ、ノツブ」

「……………」

ジツとこつちを睨み付けてきているノツブ。いや、睨み付けてきているというよりこれは拗ねている、と言った方がいいのだろうか？意味が分からずマシユの方にも視線を向けるが、彼女も何故なのか分からないように首を傾げていた。

「本当にどうしたんだ？何か言いたいことでもあるんだろ？」

「……………ない」

「ん？すまん、聞こえなかった」

「……………らつてない」

「ノツブさん？どうかされましたか？」

「わし、歓迎会してもらってない……」

その瞬間、部屋の空気が凍った。タイムアルターでも使ったじゃないかっていうくらい止まった。いや、あれ正確には動いてるけども。唯一まともに動いているのは目にはうつすらと涙を浮かべ、プルプルと身体を振るわせるノツブのみ。

やがて――

「わしッ！歓迎会ッ！してもらってないッ！」

――マジ泣きする天下人がそこにはいた。

「――いや、これに関してはマジで悪かった。本当にすまん」

「申し訳ありません、ノツブさん。私もすっかり忘れていました」

「ふ、ふん！こやつのはすんなり歓迎会の話が出てきたというのにわしの時だけ出て来ないとは何事か！」

「だからごめんって。ほら、泣くなよ」

「な、泣いとらんわ！戦国武将が泣くわけなからう！」

「あの、私全然悪くないのに超居心地悪いんですけど……」

場所は移ってマイルームにて。プンプンと怒りながら半泣きのノツブを慰めるオレとマシユ。その様子を見て「ええ……」と言った感じのリアクションしかない沖田さん。どうにか拗ねまくるノツブを説得し、忘れていたノツブの歓迎会は沖田さんとの合同という形で落ち着いた。ほ、ほら、同じイベントでのサーヴァントだし（震え声）

「大体、マスターはわしに対する扱いが酷いぞ」

「いやあ、ノツブって他のサーヴァントの中でも一際付き合いやすいというか、いじりやすいというか。気が楽なんだよな」

「サラツといじりやすいとか、確信犯ではないか……。おのれ、わしは何故このようなマスターの下に来てしまったんじゃ……」

「ノツブが好きで着いて行っただんじやないですか。面白そうとか何とか言っつて」

「あの頃のわしを全力で蜂の巣にした……！」

ぐぬぬと過去の自分に対して恨み言を呟くノツブ。まあ、是非もないよね！

「まあまあ、いいじゃないですかノツブ。マスター達も歓迎会をちゃんとしてくれるって言うんですから」

「うぬう……。分かったわい。ただし！2人分を合わせてやるんじや。1人のよりもさらに盛大な歓迎会にせんと許さんからなマスターッ！」

「分かったよ。オレだつてこれでも悪かつたつて反省してんだ。心を込めて開催させてもらうよ」

「うむ！分かればよい！」

さつきまでの涙目などどこ吹く風。すっかりいつものノツプに戻った彼女の様子に苦笑するオレ達3人。うん、まあぐだぐだな感じになつてしまつたが、言つたからにはしっかりとしたものを開こう。

「あつ、先輩、お茶が無くなつてしまいましたね。私、新しく煎れてきます」

「マシユさん、それなら私がいきますよ。新選組では結構やらされていたので。土方さんとかに」

「あ、ありがとうございます、沖田さん」

入つていたこたつから立ち上がり（ついに四画全部埋まつていた）、お茶を煎れに行く沖田さん、現在の服装が看板娘のような格好だからお茶を煎れている姿がものすごく映えている。いやー、あれだけ見ているとまさか彼女が凄腕の剣豪だとは思わないよなー。

「マスター、マシユさん、ノツプ。新しいお茶煎れて——ごふっ?！」

「吐血したッ!？」

お盆を持って炬燵に戻ろうとした瞬間、吐血してぶっ倒れる沖田さん。アワアワとカルデアの救護スタッフへと連絡を入れるマシユ。やれやれまたかと頭を振るノツブ。「医者ああああ!？」と慌てふためくオレ。

なんというか、これももうぐだぐだではなくただのカオスだった。

く本編とは全く関係ない話く

「——君、ちよつといいかい？」

「ん？ダヴィンチちゃんどうした——ぶふっ!？」

「あはははっ！計算通りのリアクションだ！流石は私！だが、こうも計算通りだと逆に面白味も無くなってしまっうね」

「ど、どどどどどどうしたんだマシユツ!?その恰好……」

「あ、あの。ダヴィンチちゃんがあまりにも勧めてくるので着てみたんですが、どうでしょうか?」

「どうだい——君。マシユの私服なんてレア中のレアだぜ?」

「ダヴィンチちゃん、貴方が神か」

「神ではなく天才と呼びたまえ。何せ、私は神すらも超える万能なのだから!」

「貴方が天才か」

「言われるまでもなく、無論天才だとも」

「あの、先輩……」

「お、おう。ごめん、マシユ、あまりにもインパクトが強すぎたんで正気を失ってたわ」

「そ、そうですか。それで、あのどうでしょうか私の私服——最高以外ないな」そ、即

答ですかっ!？」

「当たり前だろ。似合ってるに決まってる。むしろそれ以外言わせない。——おし、ちよつとオレマイルーム行って着替えてくる!今日はオレも私服で過ごすからマシユ

も一日その恰好な！」

「ええっ!?先輩待つて——つて、行つてしまいました……」

「はっはっはっ!よほど今のマシユが気に入つたらしい。それこそカルデアの制服なんて堅苦しものを脱ぎ捨てて自分も着替えに行くくらいにね。どうだいマシユ。今ならレイシフトでデートのセッティングもしてあげられるよ?流石に時代的に街中は無理だけど、人外れの草原とかなら大丈夫だ」

「えええっ!デ、デートですか!?えつと、ですが……」

「いいんだよ、マシユ。君は今まで一生懸命頑張つて、ようやく普通の女の子として振る舞える時間ができたんだ。少しくらい遊んだつて罰は当たらないさ」

「ダヴィンちゃん……」

「じゃあ、私はレイシフトの準備と一応護衛のサーヴァントに声を掛けておくよ。もちろん、君達の邪魔をしないサーヴァントに絞つてね。準備ができたなら——君と一緒においで」

「——はい!ありがとうございます、ダヴィンちゃん!私、頑張ります!」

お花見の季節になったんだけど、カルデアのメンツで普通にやるとか無理だよな？

季節も廻り、早いことですでに4月。肌を切るような寒さは徐々に薄れ始め、桃色の花々が鮮やかに街並みを染め上げる季節。そんな始まりの季節を迎えている今日この頃、オレはいつものどおりトレーニングに勤しんだり魔術の講義を受けたりしていた。

それにしても4月である。桜の花が満開に咲き開く季節である。そうなるのであれば行いたくなるのが『花見』だ。暖かくなってきた青空の下で桜を見ながら食事をし、語り合い、日頃の苦労を労う。新宿に引き続き特殊な特異点の探索が続いている時ではあるが、せっかかく人理を救ったのだし季節の風物詩を楽しんでも罰は当たらないと思う。

「——そんなわけでダヴィえもくん。花見がしたいよ〜」

「仕方がないな〜——太君は。テレレレッテレ〜。『カルデアドキドキお花見計画——ポロリもあつたらいいな——』立案書〜」

早い（驚愕）

いや、これ思いついたの30分ぐらい前なんだけど。それでレイシフトを使って花見できないかなー的な軽いノリで相談したのにすでに準備万端だったでござる。流石稀

代の天才は意味が分からない（褒め言葉）

ダミ声を作りつつノリノリで乗ってくれたダヴィンチちゃんが渡してくれた立案書を手に取り中身に目を通す。ふむ……レイシフト先は当然ながら日本、それも平安時代の京都らしい。あの、うちのカルデア羅生門イベ未経験なんですすがそれは……（メタ）

その後、ダヴィンチちゃんと共に誰を連れていくかを選抜することになった。本当なら全員連れていきたいところなんだが、流石に全員行つてカルデア内を空にするわけにはいかない。花見とはいえレイシフトであるためちゃんと存在証明をしなければ英霊でもないオレはすぐに意味消失してしまう。おまけに、カルデア自体の警備という面もおろそかにしてはいけない。ここには特異点を修復するすべてがあるのだからな。

まあ、とりあえずはサーヴァントの皆に希望を取ってみるか。こういう宴会じみたものに対しての好みもあるし。

「……おい、これいくら何でもデカすぎねえか？」

「まるでトウレの木のように……。ですが、大きさは置いといて本当に綺麗ですね。私も画像などで知識はありましたが実物を見るとはるかに凌駕しています」

訪れるは京都。都からはかなり離れており、かつ現地の人がほとんど立ち寄らないであろう小高い丘。そこに生えている見事な桜の下にオレ達は集まっていた。というか、どう考えてもデカすぎる。一周するのに腕伸ばした大人が何人いるよ。反対側が完全に見えねえよ。

『おそらく特異点の影響で巨大化したんだろう。マナの濃度が植物に影響を及ぼすことはたまにあるから、桜の木がここまで肥大化することも十分考えられるね』

「人体に影響は？」

『大丈夫だ。そもそも仮に悪影響を及ぼすような植物が生息している場所を花見ポイントに指定したりしないさ』

「まあ、そうだよな。普通に見ごたえもあるしすげえ綺麗だから有害でしたーなんて残

念過ぎるし」

ダヴィンチちゃんの解説に耳を傾けた後、逸脱したスケールと美麗に尽きる桜に感動しながら、持参したシートを広げたり食べ物や飲み物を各々に配つたりしながら花見の準備を整える。

「先輩、皆さんに行き渡つたようです」

「おし、じゃあ始めるか。さて、乾杯の音頭を誰に取つてもらうか……」

適当な奴を選んでやらせようとしたが、どう見てもオレへと彼らの視線が集中している。なんだよ、オレがやれつてか。言い出しつぺなんだからやれつてか。

「ほらほら、マスター。別にそう固くなることはねえだろ。気楽にやつてこうぜ」

「まあ、アーラシユさんがそう言つてくれるなら……」

相変わらず爽やかな笑みを浮かべる大英雄。ううつ、いつも種火の度にステラアアア！してもらつてるのにこの器のデカさよ。マジですみません、でもあなたの宝具すごく使いやすいんです……。

「じゃ、じゃあ最初がぐだつちまつたが始めようと思う」

「えっ？ぐだぐだ明治維新？」

「ノツブ、そんなこと言つてませんしマスターの話の腰を折らないでください。なんですか、ぐだぐだ欠乏症ですか」

「どういう欠乏症じゃ……」

ノツブと沖田が全く話を聞いていないが無視だ無視。おーし、んじや始めんぞー！
「——皆、今日せっかくの花見だ！ 思いつきり飲んで食べて語り合おうぜ！ 乾杯ッ！」
『かんぱあああああああ！』

キイン！とグラス同士の小気味の良い音を響かせ、ここに第一回カルデアお花見という名の宴会が開催されるのであった。

宴会は瞬く間に盛り上がりを見せていた。流石は歴戦の英雄達。こういった場では決して遠慮などせずガツツリと楽しんでるようで、このままのペースだとかなり多めに持つてきた食べ物はずぐに無くなってしまいそうである。まあ、その時は藤太さんに宝具使ってもらうからいいけど。

「よう！飲んでるかマスター！」

「うおっ?!いきなり出てきてビツクリさせんなよフェルグス!というか、まだ未成年だから酒なんか飲めねえつつうの」

オレも広げられた食べ物に舌鼓を打っていると、突然にニョキつと細目のマツスルケルトがジョッキ片手に顔を覗かせてきた。

「はっはっは!それもそうか!だが、マスター。酒も女も早いうちに経験しておいた方がいい!どうだ、この機会に飲んでみんか?」

「いやいや、ダメだって。流石にマスターがそこら辺のルール破っちゃダメだろ。もしかしたら酒かなり弱いかもしれねえし」

「相変わらず妙なところで固い男よマスターは。まあ、それはそれだ。お前の良いところではあるが、融通が利かないのは損をしてしまうぞ。ということではいっばいグツと」

「——スカサハ師匠に言いつけるよ?」
「すまん。今のは忘れてくれ」

ダラダラと冷や汗を掻きつつ引きつった笑みを浮かべるフェルグスはそのままだずさるようになって、槍ニキヤデイルムッド、フィンなどがいるケルトグループの下へと避難していった。やべえなスカサハ師匠の存在。うちには屋4にレアリテイダウンしてしまった水着師匠しかいないんだけど、それでも彼女にケルト組は勝てないらしい。ま

あ、あの人が負けるイメージが微塵も湧かないんだけどな。ちなみに彼女は夏をこよなく愛しているため今回はカルデアで待機している。

改めてケルトにおける師匠のネームバリューに驚いていると今度は女性が近寄ってきた。およそ戦闘向きとは思えないアレンジされた着物。ガチャガチャと4本の刀を携え、大人の女性らしい色香を放つ屈強の武人。うちのカルデアにおける初めての星5、宮本武蔵ちゃんだった。

「やつ、マスター。楽しんでる?」

「もちろん。武蔵ちゃんはどう?」

「私だつて存分に楽しませてもらつてわよ。本当にカルデアここは面白いことに尽きないわね。特にこういった和風な催しは私も大好きだから」

「窮屈な思いをしていないようでは何より。武蔵ちゃんも随分うちのカルデアに馴染んでくれたようでよかったですよ」

今年に入ってようやく来た星5である彼女。早速その実力を存分に発揮し、最優のクラスであるセイバーの名に恥じない活躍を見せてくれている。ほら、バスター系の単発宝具が撃てるサーヴァントって超火力が多いしね。彼女の火力も頭おかしいくらい出るしね。

また、彼女本来の接しやすさからか、もしくは血の気の多い英霊達が集うカルデアだ

からか、とつくに戦闘大好きバトルジャンキーの戦闘狂なサーヴァントを筆頭に仲良くなっている。本人は否定していたが、やはり劍豪として戦いに身を置く者としての本能は隠しきれないらしい。今でも時々ほかの連中と手合わせをしているようだった。

「そういうえば、武蔵ちゃんは沖田さんと手合わせしたの？」

「したわよー。あの沖田総司が女の子って知った時は驚いたけどね。つていうか、かの有名な牛若丸も女だったし、やっぱりこの世界の歴史っておかしくない？他にも性別変わっちゃってる英霊いるし」

退屈はしないからいいんだけどねー、とカラカラと笑う武蔵さん。すでに何杯か引つ掛けてきていたのかよく見ると頬がほんのりと赤みを帯びていた。ちよつと着崩して着ている着物も合いあまってぶつちやけエロい。

というか、性別変わつてるとかあんたが言うな。小次郎さんがどんだけ驚いたと思つてんだ。あの人正確には佐々木小次郎じゃないけど。

「手合わせの決着はどうだったの？」

「まあ、無効試合かなー。あの子が言うには私の勝ちらしいんだけど、あの決着は納得いかないし」

「……うーどういうこと？」

「いや、剣術的には私が勝つてたと思うんだけど、スピード的に負けてたのよ。あの子つ

たらとにかく速いのなんの。確実に獲った！って思っても、実は残像だったり。第一手も正面に対峙してたはずなのに背後取られて斬られかけたから。なんとか防げたけどあれは正直たまげたわ。あの子アサシンのクラスと間違ってるの？」

「間違いなくセイバーだよ。それで結局どうなったの？」

「途中であの子が吐血した」

「ああ……」

なるほど。それでぶっ倒れて、武蔵さんも試合を続けるわけにもいかず無効試合になったと。

「あの子は『スキル管理も実力の内です……！』って自分の負けだって言ってたんだけど、流石にあんな決着は私も望まないからね。勝負の行方は次回以降に持ち越しにしてもらったわ」

「納得。一応言っておくけどカルデアのトレーニングルームを壊さない程度にお願いね。あつ、ちなみに小次郎さんとはやった？」

「いや、流石に他次元から斬撃持ってくる人はちよつと……」

軽く引きながら答える武蔵さん。まあ、言いたいことは分かる。あの人魔術とかそういうの一切使わずに技術だけでそれやってるからね。魔術についてそれなりの知識が身についてきたからこそ分かるけど、次元への干渉って超高難易度の魔術だし。やつぱ

りNOUMINはすげえや（小並感）

「だけど、武蔵ちゃんや。あんたの宝具も十分おかしいからね。スタンドからのぶっぱなしとか意味不明だからね。まだ牛若ちゃんや沖田さんの宝具の方が普通だからね。」

「じゃあマスターまた後でねー！と他の日本勢が集まっているグループへと去っていく武蔵さん。なんとというか、流浪人という言葉が非常に良く似合う女性である。」

「ふふつ、武蔵さんが皆さんの中に解け込めていて良かったですね」

「最初の星5のサーヴァントだしちよつと気にしていたんだけど、いらんお節介だったらしい。まあ、あれは武蔵ちゃんを取っ付きやすい性格によるもんだと思うけど」

「もしかしたら疎外感を感じてしまうのではないかと危惧していたりしたが、結果的にそんなことも無かったことは素直に嬉しい。そんなオレの様子を見て隣に座るマシユが嬉しそうに笑みを浮かべている。舞い散る桜を背景に浮かべる柔らかな表情はまるで1枚の絵画のようだった。」

「……………私の顔に何かついてますか？」

「いや、そうじゃなくて。やっぱり綺麗だなんて」

「えっ……………」

「あ……………ご、ごめん！いい、いいいい今のはアレだ！その、アレだよアレ！だから……………アレだッ！」

「は、ははははい！そ、そうですね！アレですよわ！わ、分かりますよっ!!」

互いにテンパって一体何を言っているのかさっぱり分からなくなる。ちよ、ちよつとー！オレの内心ダダ漏れ過ぎてマジ受けるんですけどー！（JK）

「うっわ……何ですかこの甘ったるい空気。メシまで甘ったるくなってるんですがね」

オレとマシユが互いに気まぎらくなっていると、同席していた人物が胸焼けしてような表情を浮かべる。森に溶け込めるように深緑色のフードから始まり、服装のほぼ全てを自然と一体化できる色へと統一。タレ目で優男な雰囲気とは裏腹に、その実罨をしかけさせたら右に出る者はいないアーチャー。シャーウッドの森に潜む義賊ことロビンフットである。

「オタクら。そういうのをやるなどは言わないからさ、せめて別の場所ですてくれませんかね。こう白昼堂々とイチヤイチャしてるのを見せられると堪らんですわ」

「い、いえ！私と先輩は別にそういうつもりは……」

「顔真っ赤にしながら言っても説得力無いぜ嬢ちゃん。ほら、マスターも嬢ちゃん連れてサツサと行った行った」

「いや、いきなり行けって言われても……」

「ここにいたんじや他の連中に絡まれておちおちのんびりもできねえでしょう。こんだけデカイ桜の木なら、裏側の方ならほかの連中もやって来ないと思いますよ」

ほらほらと手を押し出すようにしてオレ達を促すロビン。どうやら2人でゆっくり話でもして来いということらしい。流石、有能さに定評のあるロビン。せつかくだから気遣いに甘えさせてもらおう。

「分かった。ありがとロビン」

「へいへい。他の連中は適当にはぐらかしておきますよ。裏工作は得意なんでね」

破壊工作Aのスキルを持つロビンがそう言うなら心配ないだろう。進軍してくる兵の6割を罠で壊滅させるレベルだし。

……よくよく考えたら、軍団の戦力の6割を罠で落とすってヤバくね？むしろそれもう宝具じゃね？対軍宝具じゃん。

「じゃあ、マシユ行こうか。たまには2人でのんびりと喋ろう」

「はい。私も先輩といっぱい話したいです」

こっそりとののサーヴァント達にバレないように移動し、桜の裏側へと回る。桜の木を挟んで向こう側から聞こえる宴会の騒がしさをBGMにオレとマシユは久しぶりにゆっくりと話し始めるのだった。

「さて、そんじや始めるけどお前らあんまり期待すんなよ？」

「とか言つて、またあつさり星5引いたりするんじやろ？知ってる知ってる」

「何かノツブが以前のことを根に持つてむくれてますが気にしないでくださいませ
ター。なんなら三段突き食らわせておきますから」

割と物騒なことを言い始める沖田。そんな彼女達を筆頭にオレを中心にグルリと弧を描く様にサーヴァント達が視線を集わせている。

何故こんな状況になっているのか。マッシュとしばらく話したあと宴会の場に戻ると、サーヴァント達がマスターつて召喚に関しては幸運E（＋）なんだろ？じゃあ余興がてら召喚をしてみろよ！と言ってきたのだ。いつの間にかカルデアと偶然桜の木の根元にあつた霊脈とパスを繋いで疑似召喚空間まで創り出していやがったし、ダヴィンチ

ちゃん仕事し過ぎでしょ。というか、絶対この桜って霊脈が根元にあつたからここまで巨大化したんだろ。

「じゃあ、ほいっと」

今回の召喚では10連を1回と呼符召喚を5枚挑戦。桜の木の根元に召喚陣が浮かび上がるといふ不思議な光景を目にしながら召喚の行方を追っていく。やがて、いつものように光の中からクラスカードが浮かび上がる。銀色の暗殺者のカード、アサシンのサーヴァントだ。

紳士的な服装、戦えるのかと心配になる弱々しい態度。非常に整った容姿をもつカッコいい人物ではあるが、正直頼りがいがあるとは思えず室内で優雅にヴァイオリンでも弾いていそうなタイプ。

「——僕の名は『ジキル』。ハイドとは……違う」

二重人格、そしてクラスチェンジと言う稀有な宝具をもつアサシンのサーヴァント、バーサーカージキルだった。

「あつ、ジキルさん。どうもです」

「やあ、マスター。こんにちは」

「召喚に応じてくれたのになんか見世物みたいになってしまつてすみません」

召喚されたのがジキルと分かつた瞬間、周りのサーヴァント達はなーんだ的な空気を醸している。まあ、うちのカルデアにはすでに宝具レベルMAXのジキルさんいるからね。つか、見慣れた人物が召喚されて今一盛り上がりには欠けてしまうのは分かるが、流石に失礼ですよあなた達。

「ここに僕は……まあ、いないよね。あんまりこういった場合は好まないだろうから」

「流石ご自分のことは良くお分かりで。はい、すでにうちにいるジキルさんはカルデアで待機しています。たぶん読書でもしているかと」

「僕らしい選択だ」

クスリとジキルさんが笑う。こうしてみると本当にイケメンな英国紳士なだけだなー。ハイドさんが出てくるとブレーキが壊れてしまうのが難点。バーサーカーは頼りがいのあるクラスなんだが、御しきるのもまた人一倍大変だ。

「じゃあ、僕はカルデアに戻っておくよ。この視線は正直キツイからね」

「いや、ホントマジすんません」

お前からその残念がる視線やめーや。ジキルさんが可哀想だろ。今ここでハイドさんが出てきたらどうするつもりだ。もし彼の人格が表に出てこようなものなら変な視線送っているサーヴァント達に特攻していきそうだし。

ジキルさんを一足先にカルデアに帰したあと、再び10連の結果を見守る。が、相変わらず10連はパツとしない結果に終わってしまった。唯一驚いたのはカレスコの礼装が出たことである。あなたの礼装マジで役に立つから助かります魔道元帥さん。

そして次はいよいよ呼符による単発引きである。最近単発引きにのみ定評のあるオレ。それを知っているサーヴァント達からは先程よりもさらに期待のかかった視線が集まってくる。

早速1枚目。普通の星3礼装。2枚目、またもやただの礼装。3枚目、荊軻さん。ちよつと、あなたさつき10連でも来たじゃないですか。そんなに宴会の席でお酒飲みたいんですか？

へべれけにうんざりしながら4枚目を投入。すると――

「わあ、またカレイドスコープです。先輩今日の召喚はかなり良い感じではないでしょうか？」

「立て続けに星5礼装が来るとか、なにそれ怖い……。うーん、嬉しいんだけどなんだろうこの運を使い切ってしまった感」

いや、普通に嬉しいよ？カレスコメツチャ高性能だからすげえ嬉しいよ？でもさ、サーヴァントが来てほしいんだ。だってこれアサシンとエクストラの合同ピックアップだよ？ジャックちゃん欲しくて引いてるんだよ？幼女が欲しいのに爺さんが出て

来られても……ね？分かるよね、他のマスター諸君。

というか、いい加減他の連中も飽きてきてほとんどがすでにこっちを見ていない。好き勝手に宴会を再開させており、「やっぱマスターの召喚の運気があんなもんだよなー」、「でもその運で自分達召喚されたんだよなー」、「ちげえねえな、あつはつは!」、「プギャーmg（ハハ）」的な感じの会話を交わしている。おい最後にプギャーって言った奴誰だ。ガンド撃ち込むぞ。

「はあ、まあいいや。オレもとつとと終わらせて戻ろう」

「だ、大丈夫ですよ先輩。私はちゃんと先輩を見届けますから」

結婚しよ（巨人感）

ということ、最後の呼符をシュツと投入。パアアと召喚の光が溢れ、光球がダイソ
ンみたいに高速回転を見せる。やがて白い光球は虹色に輝きを変化させた。はいはい、
虹色虹色。星5確定演出ねー。じゃあ、とつとと宴会に戻る。

——えっ？

「せ、先輩これは星5確定演出では!？」

「お、おとおおおお落ち着けマシユ! う…うろたえるんじゃないツ! カルデアマスターはうろたえないツ!」

うっそだろおい。まさか本当にジャックちゃん!? オレついにお母さんになっちゃう!? マジで!? 解体されちゃう?

オレ達の慌てっぷりと虹色に輝く光に気付いたサーヴァント達が再び周りに集合する。大勢が見守る中、爆発的な輝きと共にその人物は現れた。

金色の髪を桜の花びらと共に揺らし、優雅だが強い意志を感じさせる姿。そのクラスに恥じない清楚さと可憐さ。戦場にて仲間を導く旗を大きく靡かせ、凜とした表情でオレ達を見据える。どこか神々しさすら感じさせる彼女は——

「——サーヴァント、ルーラー。ジャンヌ・ダルク。お会いできて本当に良かった」
まさかの聖処女様であった。

『まさかのジャ違いっ!』

「きやつ——!?!」

オレとマシユの反応にビクツとするジャンヌさん。母性を感じさせてくれるサーヴァントを召喚しようとしたら母性を感じるサーヴァントを召喚してしまった件。ちよつと何言ってるか分かりませんねえ……。

というか、周りのサーヴァント達よ。「おい、マジで引いちやつたじゃねえかよ」とか、「空気が読めませんねー」とか、「聖処女よおおおおお!!」とかうるさい。あと、サーヴァント全員に令呪を以て命じる。ダブルジルは抑えとけ（無情）

「いや、確かにさ。合同ピックアップでジャツクちゃん引こうとしたらジャンヌさんが来たなんて話よく聞くけどさ、まさか自分で体験するとは思わなんだ」

「お、驚きましたね……。というか、先輩最近本当に単発による召喚成功し過ぎじゃないですか？ま、まさか私の知らないところでダヴィンチちゃんに改造されたりしていませんか!?!」

「どこの特撮ライダーだよ。ダヴィンチちゃん悪の親玉になっちゃうだろ」

「あの……マスター?」

ジャンヌさんが困ったような表情で声を掛けてくる。どうやら話の流れにうまくついてくことができず戸惑ってしまっているらしい。

「ああ、ジャンヌさん。すみません。開幕失礼なこと言ってしまったて」

「い、いえ。他のマスターにもよく言われることですから……。ジャ違いは流石に聞き慣れました」

ズーンと落ち込みながら話すジャンヌさん。どうしよう、罪悪感がマツハ。恐らく様々なカルデアで同じような反応をされたのだろう。これが運営のすることかよッ！
つか、様々なカルデアって何だ。

「と、とにかく今ちようど花見をしているんです。良かったらジャンヌさんも一緒にどうですか？ 歓迎会というには即興過ぎますが、きつと楽しいですよ」

「あつ、はい。それではお言葉に甘えて参加させてもらいますね」

「どうぞどうぞ。ぜひ楽しんでいってください。あつ、ジルさんを筆頭にうるさい奴がいたら言ってくださいね。カルデアに強制送還しますから」

「大丈夫ですよ。私もジルとお話したいことがたくさんあるので。それに、他にもお話ししたい方もいますから」

チラリと何名かのサーヴァントへと視線を向けるジャンヌさん。たぶん、アタランテさんとかマリーさんとかだろう。

こうして、新たな仲間も増え、急遽歓迎会も兼ねて行うことになった『カルデアドキドキお花見計画―ポロリもあつたらいいな―』は一層盛り上がりを見せながら進んでいくのであつた。

—花見終了後—

大いに盛り上がりを見せたお花見宴会だったが、結局最後までポロリが無かったの少しばかり心残りである。でもまあ、ジャンヌさんが来てくれたから良かった良かった。ピッチリした服装から分かる聖少女マジナイスおっぱい。

——あつ、なんかマシユがメツチャ睨んでる。

「ど、どうかしたかマシユ?」

「先輩。何か破廉恥な事考えてませんか?」

「い、いや。何でもないですよ?」

「知ってますか先輩。先輩って嘘つく時に瞬きしなくなるんですよ?」

「えっ、嘘!」

とつさに自分の目もとに手をやってしまふ。って、しまったあ!?

「ほら! やっぱり嘘ついてるんじゃないですか!」

「ご、ごめん! いや違うんだって! その、これは男としての性質というか仕方のない反応

で……!」

「——先輩、最低です」

「ぐはっ!？」

マシユの鋭利な言葉がぶっ刺さり撃沈。「マスターが死んだッ!？」、「この人でなし!」
とテンプレのようなセリフが聞こえた気がしたが……気のせいだったかもしれない。

ぐだぐだ明治維新すぐく面白かつたんだけど、あれつてぐだぐだじゃなくてシリアスだよね？

「マスターマスター。本当にやるのかのー？あんな強面で沢庵のことで頭いっぱい薩長ぶつ殺すマンのことなんかほつといた方がいいと茶々は思うぞ」

「いや、そんなこと言われても普通に土方さん召喚したいし沖田さんにもめっちゃ強請られたからな。あと、他にも来てほしい人がいるから」

「ぶー。茶々はいっは苦手じゃー。何かすごい強引だし、アレ絶対人の話し聞かないタイプじゃてー」

「バーサーカーは基本話聞かない奴ばかりだろ。今更だ、今更」

ドシリアス
ぐだぐだしていた特異点から帰還して数日。オレは新しく召喚された茶々と共に歩きながら召喚部屋へと向かっていた。目的の方は会話の内容からお察しであろう。特異点でお世話になり、同時には最後には敵対してしまった新撰組鬼の副長こと土方歳三さんを召喚するためだ。

マシユは今頃ダヴィンチちゃんの下でオペレートの勉強中であるため、本来であれば今回は沖田さんが付き添うはずだった。しかし、あいにく最強無敵の天才剣士殿は直前

に病弱の発作で吐血したのでドクターストップならぬマスターストップで自室で寝かせている。この前の特異点では人一倍無理をしていたので休息という意味ではちよど良い機会になるだろ。彼女はどうしても召喚の場に立ち会いたいと譲らなかつたが、通りかかった茶々がそれを一喝。代わりに自分が立ち会うからお前は寝ていると、バプミを感じさせる説得に沖田さんも大人しく布団の中へと戻っていった。

ちなみにだが歓迎会は既に行っている。流星に同じ過ちは2度は起こさない。

「マスター、いざという時は真つ先に茶々を庇うのじゃぞ。あの鬼のような眼光はちと耐えられん」

「なんでだよ、お前何しに来るんだよ。ガンドオンリーじゃバーサーカーになんか勝てるわけねえだろ」

オレなんかアレよ?土方さんの刀の一振りで爆発四散するよ?あの人ただでさえバフしまくる人なんだから。

護衛を買って出たとは思えない発言にツツコミを入れながら隣を歩く茶々を見る。彼女の身長はオレよりもかなり小柄だ。大体オレの胸元ぐらいまでしかないだろう。俗に言う『ちつちやくないよっ!』である。だが、それでも彼女も立派なサーヴァント。バーサーカーと言うには速さ——じゃなかった、狂化のランクこそ低い、その実力はバーサーカーのクラスに恥じない見事なものだ。ぶつちやけ茶々と喧嘩しようものな

ら2秒で死ぬ。だから、謀反とか本当にやめてね？

「——ほら、着いたぞ。頼むからシャキツとしてくれ」

「まったくしようがないな。今回だけじゃぞマスター。これが終わったら甘味の1つでも寄越すがよい」

「はいはい、分かったよ。あとでプリンでも作ってやるから」

「なぬっ！本当かつ!?ぷりんとはあのプルプルであまーいあの甘味じやる!?よーし！茶々のテンションまつくす!!やるぞマスター！」

「やだ、この淀殿チヨロイ」

先程までのやる気のなさとは大違い。フンスー！と鼻息を荒くしながらはようはようと急かしてくる茶々。ほんと、こういうところは見た目相応に子どもっぽいと思う。基本はいつもこの感じがデフォなんだが……時折彼女の本来の気質が見える時がある。その時の彼女はどこか寂しそうに見えて、オレはあまり好きな顔ではなかった。

「んん？マスターどうしたのじや、そんなに茶々の顔をじつと見つめて。ハッ！もしかして今頃になって茶々の史上最豪華絢爛超絶美人ぷりにほれ込んだのかのっ!?!」

「ハハッ、ペったんこが言いおる」

あつ、つい反射的に本音が。

「なっ！なななっ!?!ペ、ペったんことは何事かつ！ちや、茶々だつて！成長すればばいん

ばいんのないすばでーになっておったわ！」

「はいはい、ワロスワロス」

「むきー！信じておらぬなマスター！こ、このおっぱい星人め！」

プンプンと怒る茶々をからかいながら、どうにか誤魔化したことにホツとする。うん、やはり彼女はこっちのほうが似合っていると思う。天真爛漫に笑い、織田の血筋らしく我が道を行く感じの方が。

「——あのマシユとかいう娘に言いつけてやるからなマスター！」

「やめてください、死んでしまいます」

いや、それだけはマジご勘弁を。

「あつ、ねえねえマスター。そういうえばさつきあの怖い奴以外に召喚したい者がおると言つておつたの。誰なのー？」

「ああー、それな。『エレナ』さんのことだよ」

「えれな？誰それ」

『エレナ・ブラヴァツキー』。以前はロンドンやら魔法少女の世界やらでお世話になったキャスタークラスのサーヴァントだ。星4のサーヴァントであるのだが、優秀なサポート能力を持つており火力としても申し分ない。非常にバランスの良いサーヴァントなのだ。

「ふーん。茶々の方が優れてるとはいえ、そんなサーヴァントもおるのかー」

「まあな。今回は土方さん以外にもピックアップされてるサーヴァントがいて、その中にエレナさんが入ってるんだよ」

「——で、ぶつちやけたところ本心は？」

「目の前で『第二の光ッ！』って敬礼してほしい。——ハッ!？」

「うわっ！変態がいる！茶々ドン引きー」

「変態じゃねえよッ!？」

待ってくれ。違うんだ。確かにさっき言ったことも考えてたりはしないでもないが、戦力として期待してるのも事実だから。決して生で『良くつてよ!』が聞きたいとか、黒髭みたいにバブみを求めているわけでもないんだ。ホントウダヨ? オレウソツカナイ。「で、欲望丸出し犯罪者予備軍の変態マスターは日輪ファイヤーするとして。茶々はもうめんどくさくなってきた。早く終わらせて茶々にぷりんを食べさせるがよい」

「おい、オレの呼び方とかオーバーキルとかそもそも今回の目的違いとか色々酷すぎるぞ」

何なのカオスなの? ケイオスなの? うー! にやー! でバレなきや犯罪じゃないの?

(ニヤルラトホテブ感)

「そんな些細な問題などどうでもよいから、さっさと終わらせい」

「オレの人としての尊厳を些細と切り捨てるか、この幼女。プリン抜きにすんぞ」

「マスター超かっこいいよ!」

「なんとという手のひらクルー」

甘味没収を告げただけでこの変わり身の早さ。オレじゃなきや見逃しちゃうね。しかし、彼女の言うことにも一理ある。正直なところ沖田さんの体調のこともあり早く戻ってあげたい。その際に出来れば土方さんを連れていければ。パーフェクトなんだが、こればかりは時の運なのでどうなるか分からない。

とにかく、今回は10連一回のみの挑戦になる。最近ピックアップが多すぎてマスター懐事情ならぬ石事情はカツカツです。とか言ってるうちに新しいピックアップが次々来るんだろうなー(白目)

「おーし、そんじゃ回れ回れー」

「まわれまわれー!」

ポイポイポイツと30個の石を召喚サークルの中へと投げ入れる。茶々も声援のようなものを送ってくれた。

よーし、土方さん来てくれよー。あとできればエレナさんもプリーズ!あのなりで母性の塊というギャップの化身プリーズ!あつ、野心出ちゃった。

パアアア!と召喚の光が強くなると共に、召喚部屋の大気が揺れ動く。発生した風は茶々は兜が飛ばされないようにしつかりとそれを押さえ、初めての召喚の儀に興味津々と瞳を輝かせていた。そして、溢れる様な光の中からまずは小柄な影が現れる。体型からして一瞬エレナさんかと思っただがすぐに違うと気づく。だつてすでに宝具レベルMAXにしているぐらい知っている相手だったから。

半袖でおへそがチラリと見えるピッチリしたシャツに迷彩柄のちよつと丈が長い半ズボン。絹のような柔らかさそうな金髪に、幼いながらも非常に整った顔立ち。愛嬌溢れる笑顔を振りまくその少年の名は。

「——こんにちは、マスター。ボクのこと……そうですね、気軽にギル君、と呼んでください」

あの英雄王ことギルガメツシュウ王の幼少時の姿。通称子ギル君であった。

「……すつごい今更だけどやつぱりギル様とか言つた方がいいじゃないかな。話し方も敬語に直してさ」

「あはは！大きい方の僕はどうか知りませんが、僕に対しては敬語なんていりませんよ、マスター。今になって変えられちゃうと寂しくなっちゃいます」

「あー、すまん。いらん気遣いだったな」

おずおずと尋ねるオレに対して、明朗快活な子ギル君。これがあの英雄王ギルガメツシュウの子ども時代の姿とは誰が思おうか。基本的に唯我独尊な大人 *Ver* とは違い非常に礼儀正しく、例え小さな子達であっても偉ぶったりは決してしない。

「ところで、マスター。そちらの女性はどちら様ですか？」

「あつ、そういうやギル君は会つたことないんだっけ？最近うちに来た茶々だ」

「うむ！わらわこそが日輪の寵姫、茶々であるぞ！」

「そうですか。茶々さん、先程も言つたように僕のことにはギル君と呼んでください」

「ギルくん、だな！なんとも落ち着きのある男子よ。伯母上にも少しぐらい分けてもらいたいぐらいじゃ」

いや、ノツブはもう手遅れでしょ（無常）

「ふふつ、伊達に人よりも色々と経験しているわけじゃありませんよ。いえ、正確に言うところから体験すると言う方が正しいのでしょいか?」

「う、うん? そう難しいことを言われると茶々にはわからんぞ」

「あつ、ごめんなさい。特に気にしなくて大丈夫ですよ」

「む、そうかの?」

それにしても、やっぱり子ども同士話の感じが合いそうだ。まあ、どっちとも成人経験済みの偉人だけだな。なんだろう、このシヨタコンロリコンのお方々が見たら発狂しそうな空間。

「さて、子ギル君。来てもらったところ悪いんだけど。ダヴィンチちゃんのところに行つてくれるか?」

「はい、分かりましたマスター。すみません、なんか空気読まないタイミングで出てきてしまつて」

「いやいやそんなことないって。こつちこそ呼び出しちまつてすまなかつた。……あつ、そうだ」

「どうしましたマスター?」

「この後茶々にプリン作るからさ、ギル君も一緒にどうだ? ダヴィンチちゃんのところ

に行くのは別に急じやないし」

1人分作るのも2人分作るのも大して変わらんしな。せっかく来てくれたの子どもをこのまま返すというのも気が引ける。

「うーん、そうですね。お誘いは嬉しいんですがそれはすでにここにいる『僕』にご馳走してあげてくれませんか?いくら僕とすでにいる『僕』が同じ人物である程度記憶を共有しているとはいえ、やはりマスターとずっと戦い続けてきたのは前からここにいる『僕』ですから。お詫びではなく、今まで頑張ったご褒美として彼にあげてください」

「ああ、うん。君がそう言うならいいけど」

「はい、いいんです。じゃあ、お願いしますねマスター」

そういつて召喚された子ギル君は召喚部屋を後にした。彼のことだ、寄り道などせずダヴィンチちゃんのもとへと真つすぐに行くだろう。

「うむ、なんとも立派な子じゃったのー。茶々にも勝るとも劣らぬものだった」

「えっ?今なんて?」

「なんで今なんちようけいしゆじんこうみたいな反応したんじや!?!茶々も立派でしよ
!」

「立派(笑)」

「(笑)をつけるなマスター!」

なにこれデジャブ。やはり織田の血か……。ロリがシヨタ相手に張り合っていたので軽く笑い飛ばしてやる。あいにくだが今のお前さんはギル君には遠く及ばんよ。

と、次に召喚された奴が出てきたな。ええつとこれは——金のキャスターカードだ
とっ!?

「おおつしやあああ！エレナさんきたあああ！」

「うわっ！いきなり大声を出すでないマスター！」

「だってエレナさんだぞ！あのロリ体型で母性の塊のエレナさんだぞ！抱き枕にもなったエレナさんだぞ！」

「マスターが何を言っているのか分からないけどとりあえず気持ち悪い！」

気持ち悪い言うな！男なら誰しもあのギャップにはやられるものだぞ！（偏見）

パアアアア！と光の奔流が強くなり、いよいよサーヴァントがその姿を現す。ようこそエレナさん！うちでも存分にその母性を振りまいてくださいね！

「——サーヴァント、キャスター。トーマス・アルバ・エジソンである！顔のことは気にするな！これは！アメリカの象徴である！」

「ジャパリパークに帰れッ!!」

なんとということでしょう（絶望）

筋骨隆々の大柄な体、国旗に肖っているのである。配色のピッチリした服装、何よりも特徴的なライオンのような、というかまんまライオンの顔。

召喚されたのは小柄で神秘を追い求めるお母さん系幼女ではなく、発明王という名のフレンズだった。

「待て待てマスター。私はどこぞのけものフレンズではない。歴代大統領の意思を引き継いだ天才である」

「うるせえ知つとるわ！オレが初めて覚えた偉人の名を教えてやろうか！お前だよトーマス・アルバ・エジソン！」

「なんと……！それは光栄だマスター！私もマスターが成した偉業、決して忘れはせぬぞ！」

「やかましい！ありがとよ！」

ピシバシとその筋骨隆々の体を殴りながら発明王の登場を歓迎する。つかかてえ!?

なんだこいつ、筋力に関しては何ミヤ以下の見せかけEで、耐久EXも睡眠時間的な意味のほずなのにかてえぞ?!やはりサーヴァントのステータスは当てにならない(戒め)「ぷぷつ……!マ、マスターが召喚しなかったのがこんな変な顔をした奴だとか、ぷつ、ぷつ!きやはははは!」

「違うわい!オレが召喚しなかったのはエレナさんなの!こんな過労死待ったなしの労働強いてくるライオンじゃねえよ!」

「それは違うぞマスター。私はライオンになつたのではなく、ちよつとばかり髭が濃くなつただけだ」

「ちよつと黙つててくれませんかねえ……!」

笑い転げる茶々、相変わらず空気の読めない発明王。うん、まずはいったん落ち着こう。召喚もまだ続いているんだ。こいつらばかりにかまつていられない。

「とりあえずエジソンには後でカルデアのこととか色々説明するからダヴィンチちゃんのところに行つててくれ。部屋に案内してくれると思うから」

「うむ、了解したマスター。私もかのレオナルド・ダヴィンチ殿と語り合いたいという興味もある。それではまた後程会おう!」

ぬつはつはつは!と豪快に笑いながら召喚部屋を後にするエジソン。うーん、エレナさんが来なかったのは残念だけど全くの爆死つてわけじゃないから良かったかもな。

エジソンは珍しく宝具をOCでできるスキルも持つてるし、『魔性菩薩』と合わせるとすげえ破壊力生めそうだ。

「きやははは！——つて、あれ？さっきのモフモフは？」

「お前笑いすぎだろ……。マスター傷つくぞ。エジソンならとつくに出ていったよ」

「えー！あのふわふわそうな毛並みをモフモフしたかったのにー！」

「あとで本人にでも頼んでみな。ほら、礼装拾うから茶々も手伝え」

「はーい」

召喚は一応まだ続いているが、流星に星4のエジソンが来たしもう来ねえだろ。沖田さんには申し訳ないけど、これがオレの幸運度なんだから仕方がない。あんまり寂しくさせたりはしたくないんだけどな。

おつ、これは『プリズマコスモス』？すげえ、星5の礼装でも珍しいやつきたぞ。あとでクロエにでも渡してみよう（嫌がらせ）

「ねーねー。マスター」

「どうした？なんかレアな礼装でも拾ったか？」

他にめぼしいやつはねえなーと思っているとそばで一緒に拾っていた茶々が何かに気づいたように話しかけてくる。彼女の方へと視線を向けると、その小柄な手が召喚サークルの方を指さしていた。

「あれってさつきと同じやつじゃないのー?」

「はっ? どういう——なん、だと……?」

茶々が指さす召喚サークル。そこには新たなカードが浮かび上がっていた。しかも彼女の言う通り、先程と同じ金色のキャスターカード。つまり、これは……!

「今度こそ本当にエレナさんキタアアア!?」

マジかよ! 一回の10連でエジソンとエレナさん揃っちゃうのかよ!?! おっしやー!
マスター大勝利ー!

「えー! 茶々はさつきのモフモフがいい! 今度こそモフモフするー!」

「おい、洒落にならん事言うな。本当にそうなたらどうする」

だから後でエジソン本人に頼めつての。いや、今はそんなことどうでもいい。今度こそエレナさんを歓迎するんだ! 生で敬礼してもらうんだ!

そして、再び爆発的に光量が高まり召喚されたついに念願の人物が——

「——サーヴアント、キャスター。トーマス・アルバ・エジソンである！顔のことは気にするな！これは！アメリカの象徴である！大事なことなので2回言うぞ！」

「なんでさあああああああ!!！」

「やったー！モフモフだー！」

まさかのエジソンリターンズ。おい、マジふざけんな。オレの希望を返せよ。

「フハハハハハ！マスター！連続で私を呼び寄せるとはすばらしいぞ！これで生産率が超アップだ！」

「呼んでねえから！オレが呼んだのは母性ロリであってけもの顔のマツチヨじゃねえから！チェンジだチェンジ！」

「ねえねえ、モフモフしていい？」

「むっ、私をか？よかろう！子どもに夢を与えるのは発明家として光栄なことだ！存分にモフモフするがよい！」

「やったー！モフモフ〜」

「聞けよお前らっ!!！」

オレのことをガン無視で戯れ始める幼女とライオン顔のマツチヨ。ちなみにエジソ

ンが茶々を肩車している状態である。うん、傍から見たら完全に事案だよねこれ。というか、幸せそうにモフってんな茶々の奴。

「モフモフ」

「どうだ私のモフモフは」

「すつごいモフモフー！ふああ……茶々このまま寝ちやいそう」

「こらこら、危ないぞ」

「……………」

……何か茶々の様子を見てたらオレもモフリたくなってきた。

「な、なあ茶々？茶々ちゃん？ちよつとお兄さんと場所代わつてくれないか？」

「やだ……むにや」

「おいこら寝るな。寝るならオレと代われ。そんで部屋で寝ろ」

「やだあ……くー……すう……」

「マジで寝やがった……」

スヤスヤとガチ眠りモードへと突入した茶々。あどけない寝顔を見せるその姿を見せられては流石に引くしかなくなってしまう。

「むう、マスター。この娘どうしようか」

「しゃーない。しばらくそのまま居てくれるか。流石に体勢的に無理があるから少し

したら起きると思うけど、それまでは寝かせてやってくれ」

「了解した」

茶々を落としてしまわないようにゆっくりと座り込むエジソン。やはり傍から見たら色々とアレな光景だが眠っている本人も幸せそうだし別にいいか。それに、このほんわかした光景を壊したくないし。

「じゃあ改めて。ようこそエジソン。これからよろしく頼む」

「うむ、まかされたぞマスター。こちらこそよろしく頼む」

「むにやむにや……モフモフウ……」

—おまけ—

「この野郎、結局起きねえじゃねえか」

あれから2時間。いつまでたつても起きない茶々をおんぶしながら彼女の部屋へと向かう。幼女とはいえ流石に2時間も肩車したせいですっかり疲れ切ってしまったエジソン。そこで彼をダヴィンチちゃんの下へと送り出し、オレが代わりにお守り役を引き継いだのだ。といつても部屋まで運ぶだけだけどな。

「すやすや……」

「それにしてもよく寝てんな。やっぱ子どもだからか？」

少しずり落ちそうになつてしまった茶々を背負い直す。結構身体を揺らしてしまつたが、それでも起きる気配はない。

「それにしても、あの淀殿の全盛期がこの姿なんてな」

安らかな寝顔を浮かべているであろうその様子を想像しながら一人ポツリと呟く。

正直、彼女の史実はとても幸せなものであったとは言えないだろう。織田家から豊臣家へと嫁ぎ、あの豊臣秀吉の側室となるも、織田信長に実の父と兄の命を奪われ、夫である秀吉には実の母と養父である柴田勝家の命を奪われ、そして徳川家康には自分と息子である秀頼の命を奪われた。

日本を代表する戦国武将に翻弄された人生。豊臣を滅ぼした悪女とも呼ばれ、一人の女性が歩むには過酷すぎる生を生きてきた。その彼女の全盛期——いや、もつとも幸福だった時代がこの少女の姿とは。

彼女が時折見せる、母親のような温かい眼差し。あれはもしかしたら守れなかった家族のことを思い見せるものなのかもしれない。普段の天真爛漫な姿と武将を支えた側室としての姿。どちらが本当の彼女なのだろうか。

「——くっだらねえ。んなもんどっちでもいい」

オレは茶々の味方だ。一度彼女のマスターとして名乗った以上、それを覆す気はない。オレに出来ることはこの少女が寂しい思いをしないように助けることだ。まあ、普段は助けられてばかりなんだけどな。

「……いざという時は頼ってくれよな」

誰かに聞かせるわけでもなくそう呟いたオレは彼女を起こさないようにゆつくりと歩みを進める。さて、とりあえずこの後は——甘味をせがんでくるであろう少女のため

にプリンでも作っておきますか。

快樂の海に危うく沈みかけたんだけど、まさかの展開に
予想とか不可能だよね？

「——という感じの人なんですよ！もうかつこよくてかつこよくて！俗にいう尊いってやつですね！そう思いませんか？」

「ああー、はいはい。尊い尊い。オレの先輩すごい」

場所は食堂の一角。そこでタマモキヤットお手製の昼食『これぞタマモ地獄！気を抜いたら食べられちゃうぞ！（物理的な意味で）』を食べていたオレは、カルデア内を探索していた何ともめんどくさい奴に捕まってしまっていた。ちなみに料理名こそ不穩だが普通の生姜焼き定食である。理性はぶっ飛んでいるもののその味は唸らざるをえない程美味かった。

「でもでも！かつこいいのはいいんですけど、先輩だったらすぐ無理しちゃうんですよ。前なんて自分の身体のひとつが吹き飛んでるのに、頭さえあれば大丈夫とか言ってるに進んじやつたんですよ。可愛い後輩を心配させるなんて酷いと思いませんか！」

「いや、そもそもそれどういう状況だよ。どうやったら身体のひとつ吹っ飛んで生きてられんだよ」

「先輩ったら全ツ然折れてくれなくて、私もあの時は本気で焦りましたよ。やっぱりしっかりと躑けておくべきでした」

「聞いてねえし……。大体躑けとか言ってるけど相手一応先輩なんだろう？」

「はい、もちろんですよ。私は先輩にとつてたつた一人の美人でちよつぱりお茶目な後輩です。でも、先輩のためなら先輩自身をワンちゃん調教するのも辞さないしつかり者ですよ」

「もうやだこのラスボス系後輩」

やつぱりオレの後輩は純粋な天使だなど再確認。ああ、今すぐ会いたくなつてきたよマシユ。何でこんな時に限つてダヴィンチちゃんの特例オペレーション講座なんかあつてんだ。

ここにはいない可愛い後輩に想いを馳せつつ、オレはうんざりのため息を吐く。先程からマシンガントークという名の先輩自慢をしまくっているテーブルを挟んだ向かいに座る人物。つい先日巻き込まれた特異点から勝手に着いてきたイレギュラーサーヴァント。自称月の蝶、ムーンキャンサーというエクストラクラスを持つ災いの種こと

「でも、これもBBちゃんの愛なんですよ。分かりますか、セ・ン・パ・イ？」

「なにそのエスカリボルグ持ち出しそうなフレーズ。やめてくれよ、オレ普通に死ぬか

ら」

そう、BBである。結局特異点ではオレのサポートをしてくれたのか邪魔をしてくれたのかよく分からないBBである。大事なことなので2回言ったぞ！

「で、結局お前はオレに何の用だよ。惚気に来たわけじゃねえだろ」

「当然です。私、人間嫌いですし暇じゃありませんから。あつ、でも前にも言いましたがセンパイのことは評価してますよ。百均レベルで」

「よーし、マスター話無視しちゃうぞー」

なんかわざわざ話聞いてんのアホらしくなってきた。それよりもオレからしたらタマモキヤットの料理をじっくりと味わう方が重要なのだ。

つか、マジでうめえな。絶対何か隠し要素突っ込んでだろこれ。今度怖いもの見たさでレシピ教えてもらおう。

「ちよつと、せつかく私が入があるって言うてるのに無視しないでください」

「あつ！おまつ、生姜焼き定食の生姜焼き取り上げるとか何考えてんだッ！……つたく、しょうがねえな。ちゃんと聞いてやるからさっさと返せ。せつかくの飯が冷めちゃうだろ」

「分かればいいんですよ！BBちゃんは素直な良い子なのできちんとお返ししますとも」

「トラブルメーカーのくせして何言ってるんだか」

B Bに生姜焼きが乗ったお皿を返してもらいつつ彼女の話に耳を傾ける。コホンと一度咳払いした彼女は、先程までの浮かれていた雰囲気とは一変して、含みのある声色でその言葉を伝えてきた。

「——セラフィックスにおける特異点により、召喚システムに影響が出ています。今であればあの子達に会えるかもしれませんが?」

ピタリと箸が止まる。外していた視線を再びB Bに向けると彼女はほんの少しだけその桜色の唇で弧を描いていた。向けられる視線は試すように問いかけてくる。

「もちろん、あの特異点での事件は虚数事象として処理された為、仮に召喚できたとしてもあの子達はあの出来事を覚えていません。あれはもはや別の平行世界での事象のようなものですからね」

「……………」

「——それでも、貴方は召喚しますか?自分のことを覚えていない存在を、あれだけの戦いを共に乗り越えた相手と初対面のような出会いだとしても。貴方はあの子達を呼びますか、マスター」

海洋油田基地セラフィックス。そこでの事件は今までの特異点での事件とは色々な意味で桁違いな戦いだつた。秘かに誕生していたピーストⅢ。その片割れとの戦いはゲーティアとの戦いと同等の死闘だつたともいえよう。何か一つ。たつた一つでもピースが欠けていたら、間違いなくオレは死にこの世界は快楽の海へと沈んでいたに違いない。

そのセラフィックスで出会った少女。カルデアのサーヴァントと逸れてしまった才

レを最後まで支えてくれた快樂のアルターエゴ、『メルトリリス』。ボロボロの身体を奮い立たせ、巨悪へと立ち向かった彼女のことを知る人物はもはやオレとBBしか残されていない。虚数事象としてのあの世界の記憶及び記録はオレ達2人を除いて完全に抹消されてしまったからだ。それはメルトリリス本人も例外ではない。

メルトリリスは不器用な女の子だった。口から出てくるのは彼女の身体を現すような刺々しい言葉だったし、戦い方は痛めつけることを至極としているように荒っぽい。だけど、その本質はただ素直になれないだけでどこまでも一生懸命な女の子だった。守りたい者の為にボロボロの身体を引きずってでも敵へと立ち向かうその姿は、紛れもなく彼女がよく言っていた主役プリマそのもの。

いや、彼女だけではない。引っ込み思案でものぐさだが心優しい愛憎のアルターエゴ、『パッションリップ』、ただ自分のマスターの願いの為に戦い続けていた『鈴鹿御前』。いずれも最後までオレに協力してくれた大切な仲間達である。

そんな彼女達に再び出会えるチャンスが巡ってきたというのだ。確かにその記憶はないかもしれないけど、それがどうした。0に戻ったというのならまた1から刻んでいけばいい。無かったことになった時間を取り戻していけばいい。

何より、オレはメルトリリスに言わなきゃいけないことがたくさんある。オレが令呪を託した時どんな気持ちだったと、最後に別れもちゃんとできなくてどれだけ寂しかった

たと思ってんだ。記憶が無かろうが何だろうが、絶対に説教してやるんだからな！

B Bに話を聞いてからの行動は早かった。昼食をタママモキヤットに悪いと思いつつも速やかに食べ終わり、すぐさま持てるだけの聖晶石と呼符を持ったオレは急いで召喚部屋へと赴いた。もちろん、この情報を伝えてきたB Bも護衛がてら着いてきている。彼女自身メルトリリス達を召喚することをどう思っているのかは知らないが、わざわざ教えてきたという事は拒絶しているわけではないだろう。

やっぱりB Bの考えることはよく分かんねえ、と何の实りもないことに思考を巡らせていると思いついたように彼女が口を開いた。

「——それにしても、提案した私が言うのもなんですがちゃんと召喚できるんですかセ

ンパイ。この前あの赤いセイバーさんや狐キヤスターさんや紅茶さんや金ぴかさんを召喚しようとして爆死した話、私知ってますからね」

「おい、誰だそれ広めた奴。怒らないから正直に吐いてみなさい」

何故知ってるし。いや、別に今更召喚に関する運が低いことを知られようが痛くも痒くもないだけだよ。とにかく誰だ。

「どつかの変態剣士の格好のドラゴンガールですが？爆笑して涙を流しながら言いふらしてました」

「あのアホ娘……口の軽さが鎧の軽さと比例してんのかよ……」

B Bのサーヴァントは言わずもがな、エリザベート・バートリー（ブレイブ）である。つい先日、彼女に護衛を頼みB Bが先程上げたサーヴァント達を召喚しようと意気込んで実践してみたのだが……結果は悲惨なものとなってしまった。うん、思い出すのもアレだから思い出さないようにしましょう。とにかく酷かった。

「というか、何で増えてるんですか。ハロウィン仕様のとか、その言いふらしていた露出狂じみたエリザベートさんとか」

「それをお前が言うか」

「確かに私とメルトリリスやパッションリップは元は同じAIですけど、それはきちんとして私が切り離れたからです。エリザベートさんみたいに理屈も分からずポンポン増え

たりしませんって。しかも、私あの子がバーサーカーのクラスになったのも見たことあるんですけど」

えっ、何それ初耳。するとなにか。あのアホ娘はさらにクラスが増える可能性があるのかよ。何度も出てきて恥ずかしくないんですか？（ノルマ）

「——って、違う違う。オレが言いたかったのはそういうことじゃねえよ」
「はい？ じゃあ何ですか？」

「——露出狂とか、お前が言うなよ。常時パンツ見せてるくせに」

——瞬間、BBが完全停止した。

「あつ」

そしてオレは自分が踏み抜いてはいけない地雷を踏み抜いてしまったこと気づくが、どう考えても手遅れだった。

「~~~~~っ!!」

2秒後、先程までの余裕などどこかへと吹っ飛んでしまったBBは顔を真っ赤に染め上げ超巨大な注射器をどこからともなく取り出しその針先をオレへと向けた。つて、ちよつと待てい!!

「おいしいいい!!?何してんのお前ツ!!いきなり宝具とか向けてくんない!?死ぬだろうがっ
!」

「う、ううううるさいです!だ、誰が露出狂ですか!」

「だってどう考えてもそれ見せてんじゃない!わざとじゃん!パンツじゃん!」

「こ、これはパ、パンツじゃありません!レオタードです!」

「嘘つけっ!じゃあ、なんでそんなに必死なんだよっ!」

「いきなりマスターがセクハラするからです!ま、またこの屈辱を味わう羽目になるなんて……!どんだけ先輩とセンパイ似てるんですかっ!」

「何のことだよまるで意味が分からんぞッ!」

「うるさいですっ!こおんの……!変態変態へんたーい!!」

「ちよおーマジで死ぬっ！それは本気で死ぬからっ！というか、そんなことに使うぐら
いならその注射器の中の素材寄越せえええええ!!」

その後、10分ぐらい死に物狂いで逃げました。最終的にはサクラビームやら黄金の
杯とか使いやがったぞ……。

今日の教訓。BBにパンツネタは死ぬ（戒め）

さて、お互いに踏み込んではいけないボーダーラインを確認したところで召喚であ
る。今回の召喚は20連と呼符を7枚。前回の爆死を少なからず引きずっている身と
しては少々心許ない感じだが、すぐに『あつ、これいつも通りだわ』と持ち直す。我な
がらメンタル前向きすぎるぞ。

今回は呼符からチャレンジしてみることに。いつもは10連からして爆死するのが普通になってるから、偶には順番を変えてみたら何か変わんじやね？と。その結果が……はいつ！これです！

「礼装、礼装、礼装、緑茶さん、礼装、礼装、凜さんとラニさん礼装。これはBBちゃんも弄りづらいですね。何だか礼装ばかりなので失敗のようにも見えますが、珍しい礼装も来ていますし。ぶつちやけ微妙だと思えます」

「同感。レアな礼装はありがたいが肝心のサーヴァントがサツパリじやな……。おつかしいなー、最近単発引きは調子が良かったんだが」

「BBスロットでセンパイがデバフ効果ばかり引き当てていた理由がなんとなく分かりました。残念な星の下に生まれてしまったんですね」

「運が悪いだけでそこまで言うか貴様。というか、あの意味不明スロット作ったのお前だろ。どんだけめんどくさかったと思ってんだ」

「でも、いざという場面ではしつかりフォローしたじやないですか。それに一応人理を救ったマスターなんですからあれくらい軽く乗り越えてもらわないと。つまらない相手に付き合うようなBBちゃんではないのです」

うっ、そういうわれたら確かにそうだが……。でもあのスロット何故か基本的に自陣へのデバフしかかからないんだよなあ……。結局はあのビーストを倒すのに必要経費

だったわけだが。しかし何故周回時にもスロットが発動していたのか小一時間問い詰めた気もある。

「ほらほら、こんなしょうもない結果を悔やんでも仕方がないのでから、さっさと次に行っちゃってください」

「分かった、分かったから。だから急かすなっつーの」

回収した礼装を横目で見つつ次に聖晶石を準備する。ここから20連。最近ではうんともすんとも行ってくれない10連引きだが、今回はどうだろうか。

ちなみにだが、呼符単発のできた緑茶ことロビンフットはBBの姿を確認した瞬間、『顔のない王』を発動し速攻で退散した。どんだけ苦手なんだ……。

まずは最初の聖晶石30個を召喚サークルの中へ放り込む。ぐるぐると同じみの光を放ちながら、最後には大きな閃光が部屋中を満たした。カシヤンと礼装がいくつか落ちる音。次いで光の中から1人目のサーヴァントのクラスカードが浮かび上がる。それは——金色のセイバーカード。

「うおおっ!? キタアアアア! これは——誰だろ?」

「思い当たるセイバークラスが多すぎますからねー。赤セイバーさんか負債を回収する人か。もしかしたら文明絶対破壊するウーマンかもしれないよ」

「期待が膨らむな!」

ワクワクとしながら召喚されるのを待っていると、バリバリと激しいプラズマを発生させながら召喚された人物の姿が浮かび上がってくる。さあ……あなたはだあれっ!?

「——サーヴァントセイバー、召喚されて超参上！　みたいなー☆」

光が溶けるようにその身体から離れ、ついにサーヴァントの正体を見ることができた。現代の女子高生が身に着ける制服をアレンジした軽装。絹のような髪からは彼女を象徴する2つの耳がひょっこりと生えている。本来の動物としての特徴が目つきは鋭いものだが、身に纏う雰囲気は何とも軽薄。

その正体は諸説あり定かではないが、間違いなく日本を代表する伝説的な女丈夫にして、先日セラフィックスで共にビーストと戦ったサーヴァント、『鈴鹿御前』であった。

「狐耳JKセイバーだああああ!! やつふううう!!」

「うわっ!? なにこのマスター……。いきなり叫びだすとかマジ意味不明だし」

「流石にこの反応はBBちゃん的にもドン引きです。シンプルに気持ち悪いですよセン

「パイ」

「えっ、なんかごめん」

まさかそこまで引かれるとは思わなかった。あかん、最近はマシユが冷静にコメントくれてたからかメーターの振り切り具合を把握できてねえ。

「ご、ごほん。少々取り乱した」

「少々じゃなかったし。というか、あんたが私のマスターな感じ?」

「マスターな感じ。っーわけで、またよろしくな鈴鹿御前」

「さっきの反応的にあんまりよろしくしたくないけど仕方がないし。というか、『また』って何? 私あんたとは初対面のはずだけどー?」

「あ……。あ、ああ、そうだったな。すまん、変なこと口走っちゃまった。別に気にしないでくれ」

「んー? マスターがそう言うなら別にいいけどー。あえて細かいことを気にしないのもJK力に必須項目だし」

鈴鹿御前は軽い感じで笑いながらオレが差し出した手を握ってくれる。うん、初対面であんな反応したのに特に警戒することなく普通に接せられるってJK力すげえな
(小並感)

しかし、やっぱりセラフィックスでの記憶は無し、か……。ということは、彼女が必

死になって守りたかった『あのマスター』の願いも忘れてしまっているのか。

それは……なんだか寂しい。彼女がきちんと会えていなかった『あのマスター』の為にあそこまで必死に戦っていた姿を知っているからこそ、煮え切らない思いを抱かずにはいられなかった。

「あつ、センパイ。次のサーヴァントが召喚されたようですよ？」

「おつ、マジか」

「へー、私もこんな感じで召喚されたんだ。結構豪勢じゃん」

とにかく今は召喚に集中しようと頭を切り替える。こつちには歴戦のサーヴァントがいるとはいえ、鈴鹿御前は召喚したばかりで本来の力を十分に引き出せる状態じゃないため実質BBだけである。何が召喚されるか分からない以上、集中を切らすと怪我でもしかねないからな。

やがて、先程と同じように召喚サークルの中から新たなサーヴァトカードが現れる。

その色は——なんと金色だった。

「マジかよ………また金色とか今日すげえな」

「この前とは打って変わって大当たりじゃないですか。いつの間に幸運のステータス振りなおしたんですか？」

「そんなことやってねえよ。というか、できるならマジでやりてえよ。今日は本当に偶

然だ」

「何々？ どういうこと？ ちゃんと分かるように説明しろし」

状況がよくわかっていない鈴鹿御前。本来であれば簡単にでも説明してあげたいところなんだが、今回はちよつとだけ余裕がなかった。その理由はカードに刻まれたクラスの紋章である。

「——何だこのクラスカード。今まで見たことねえぞ」

それは初めて見るクラスカード。ピエロのような人物が2人、上下逆さまに背中合わせで刻まれたカードだった。

「これはもしかして……！」

「知っているのかBBっ!？」

「ええ。これは『アルターエゴ』のクラスカードです」

「『アルターエゴ』ッ!？」

「ちよつと！ いい加減分かるように説明しろし！」

隣で鈴鹿御前が声を荒げるが、オレの耳にはまったくもって入らない。『アルターエゴ』。それはたった2人しかいないクラス。あのメルトリリスとパツシヨンリップを象徴するクラス。つまり、そのどちらかが召喚されたということである。

——はい、今誰か忘れてないかと思つた諸君。頭の中に浮かんだ人物を今すぐ抹消し

なさい。どこぞの快樂天なシスターとかいません。いたとしても知りません。オレにとつてアルターエゴは2人です。いいね？

誰に忠告しているのかも定かではないことに思考が奪われているうちに、一際大きな輝きを見せるクラスカード。そして、ついにサーヴァントが姿を現した。

彼女の第一印象として目が行く点は2つある。1つはその豊満過ぎるぐらい豊満な胸だろう。性別問わず目を釘付けにするそれは、彼女の幼さが残る顔つきとはなんとなくミスマツチのように感じる。そしてもう1つは自身の身体すらも包み込めてしまえそうな巨大な手だ。剣のような鋭さと無骨さを併せ持つその手もまた、彼女にはミスマツチのように感じずにはいられない。

「——愛憎のアルターエゴ・パッションリップです。あの……傷つけてしまったら、ごめんなさい」

オレが召喚したのはBBのアルターエゴの片割れであり、絶対的な破壊力を持つ一人の女の子、『パッションリップ』だった。

「パッションリップ……」

「あつ、は、はい！あなたが私のマスターさんですか？」

おどおどと引つ込み思案なところは何も変わっていない。どんなに強くても戦うこと自体は嫌いで、だけどそれでも自分の力を必要としてくれる人がいるならその破壊の力すらも守るために扱える少女。セラフィックスで最後に分かれた時と何も変わらないう少女がそこにいた。

「……ああ。君を召喚したのはオレだ。よく応えてくれた」

「は、はい！えつと、戦うことは苦手な私ですが精一杯頑張ります！」

「うん、大丈夫。ちゃんと知ってるから」

「えつ？えつと、どういうことでしょうか？」

「それは……」

きよとんと小首を傾げるパッションリップ。やはり鈴鹿御前と同じくあの戦いの記憶は無いようだった。結構無理に笑みを作ったがうまく笑えただろうか。ここで以前あったことがあるというのは簡単だが、この心優しい少女のことだ。必死になって思い出そうとするかもしれないし、そのせいでオレへの負い目を感じてしまうかもしれない

い。せつかくこうしてまた出会えたのだし、そんなことを考えてほしくはなかった。

「すまん、こっちの話だ。気にしないでくれ」

「——あの、違ったらごめんさい。もしかして、私とあなたはどこかで会ったことがありますか？」

ああ、もちろんあるとも。例え君が、いや君達がああの時間を忘れてしまっていたとしてもオレは決して忘れない。人知れずたくさん傷ついて世界の為に戦ってくれた君達のことを。

「——いや、初めて会うはずだ」

なんというか、B Bに忠告されていたとはいえこうして戦友に忘れられるというのはなかなかキツイ。ベディヴィエールの時もそうだったが、こういったことはこの先慣れることは決していないだろうな。

「——よしっ！じゃあ、改めて2人とも！今後ともよろしくな！」

「う、うん？よく分からないけど私にまかせろし！」

「わ、私もマスターさんの役に立てるように頑張ります！——あうう、まだやっぱりこの呼び方恥ずかしいよお……」

「……………」

無理やりテンションを上げるオレと、それに乗せられる鈴鹿御前とパッションリップ。そんなオレ達の様子をどこか寂しそうに見つめるBBの姿があった。

結局あの後再び10連をしたものの、メルトリリスは召喚できなかった。というか、鈴鹿御前がもう1人来た。先程の記憶云々のやり取りをもう一度繰り返し返したときはマジでキツかったよ……。

鈴鹿御前とパッションリップは自身の部屋を決めてもらうためにダヴィンチちゃん

の下へと連れていき、彼女たちが各々の部屋へと入ったのを見届けてから、オレはなんとなくもう1度召喚部屋へと戻ってきた。それにひたすら無言を貫いてついできた者も1名。

「——センパイ、メルトリリスに会えたらどんなことを話すつもりだったんですか？」

「なんだよ、B B。暇じゃないだろ。とつくに召喚材料は尽きてるし、もう召喚はできねえぞ」

「確かに宇宙一の後輩であるB Bちゃんは超多忙です。——ですが、落ち込んでいるマスターさんを放っておく程つまらないサーヴァントになった覚えもありませんよ」

「誰が——」

反論を口にしようとして、だけどそれはできなかつた。落ち込んでいるというのは紛れもない凶星でさつきまでのはすべて空元氣。彼女はそれをすでに見抜いているみただったため、今更隠しようのないことだった。

「センパイ、そんな落ち込んでしまうほどメルトリリスに会いたかつたんですね。もしかして惚れちやつたんですか？」

「……ちげえよ。そういうことじゃねえ。あいつは結局隠し事ばかりで、心配ばかりかけて。だから説教しかかつただけだつーの」

「はい、ダウト。センパイ分かりやす過ぎますよ」

「うつ……！で、でも惚れた云々は本当に違うからな！」

「はい、もちろん冗談で言いました。でも説教の件は本心ではありませんよね？」

「そう、だけど……」

説教をする、それは間違った理由ではなかった。でもそれは本当に些細な理由でオレが彼女に伝えたかったことはもつと別のことで。

「——メルトリリスに謝りたかったんだ」

「……………」

「最後の最後で全てを押し付ける様な事をしてしまって、最後の消えるその一瞬まで共にいれなくてごめんって。オレ、あいつのマスターを名乗ったのにちゃんとあいつと最後まで一緒にいてやれなかった」

メルトリリスはオレの手を握ってくれたというのに。一緒に戦うって伝えてくれた

のに。それを貫くことができなかつた。最後の最後、オレは死地へと赴く彼女を見送ることしかできなかつたのだ。

「ああ、こんなもんは結局彼女に許されたいからっていう自己満足だ。そんなことは分かつてるんだよ。例え召喚されても、そのメルトリリスはオレの手を握つてくれたあのメルトリリスじゃないつてのに」

そんな一方的な感情の押し付けはどちらのメルトリリスに対しても最低だ。ギユツと、いつの間にか作つていた拳を固く握りしめる。歯を食いしばらないと今にも泣いてしまいそうだった。

オレが必死になつて内から零れ落ちそうな感情を抑えていると、ずつとオレの懺悔を聞いていたBBに動きがあつた。メルトリリスは彼女の半身のような存在だ。何を言われるのかと身構えて彼女の方へと向き直ると——トンツと非常に軽い音がオレの頭に響いた。

「——まつたく、センパイはマイナス方向に考え過ぎです」

「BB……?」

どうやら先程オレを叩いたのは彼女の持つ指示棒だつたらしい。先程までのオレの言葉を聞いて彼女がどんな表情をしているのか気になつていたのだが……BBは困つたように笑つていた。

「あの子はセンパイに感謝していました。あの子素直じゃないから口には出しませんが、それはそれはセンパイに感謝していましたよ。貴方への恨み言など一つもありません。不満ありません。あの子にとってセンパイは、最高のマスターだったと私
が断言しましょう」

トントンと続けるように彼女の指示棒がオレの頭を数回叩く。やってること自体はおかしな感じだが、まるで頭を撫でられているかのようにそれは優しくかった。

「もつと胸を張ってください。センパイはまた世界を救ったのです。あの特異点での記録も記憶もほとんど無いに等しいですが、貴方は誰もが成しえない偉業を達成したんです。きつとあの子もメソメソしているセンパイなんて見たらきつと怒りますよ」

刺すわよつて脅してくるかもしれないし、切り刻まれちゃうかもしれないよ？と
BBは小さく笑う。流星はアルターエゴとそのオリジナル。基本同じな顔だけあって
BBの笑みはメルトリリスとそっくりだった。

笑顔、か。そういうえば、メルトリリスの笑顔ってちゃんと見てなかったかもしれない。
ちよつと悪そうだったり、皮肉めいた笑みばかりで、彼女の心からの笑顔を見れなかつ
た気がする。

「……あいつ、許してくれるかな」

「許すも何も前提が間違っています。どうして最後に背中を押してくれた人を責めるん

ですか」

「そっか……」

——だとしたら、いつまでもウジウジしているのは無しだな。もつともつと頑張らねえと。今回は召喚できなかったが、もしかしたらまた彼女を呼ぶチャンスがあるかもしれない。その時にお前のマスターはこんなにすごいんだぞって、そしてそんなマスターのサーヴァントであるお前もすごいんだぞって伝えてやらないと。

「おしっ！なんか色々やる気出てきたっ！BBサンキューな！」

「全く、世話のかかるマスターさんです。こんなことBBちゃんの柄じゃないのに。二度とごめんですからね」

BBが嫌そうにため息を吐く。こんなことを言っているがいざ相談を持ち掛けたらこいつはぶつくさ言いながら相談に乗ってくれるのだろう。流石、自称宇宙一の後輩。BBにここまで思われている『先輩』とやらは本当に幸せ者だ。

「しゃあっ！そうと決まれば次の戦いじゃああああ!!待ってるよおおお!!」

「いきなり暑苦しくなつて早くも後悔なBBちゃんです……」

——メルトリリス。君にもう1度会えたらちゃんと言うよ。ごめんなんて言葉じゃなくて、ただありがとうって。

だから、早く来てくれよな。

304 快樂の海に危うく沈みかけたんだけど、まさかの展開に予想とか不可能だよな？

く短いおまけく

「今日はこつち^{フレ}の召喚^{ボガチャ}でもするかー。ポイント余ってるし、なんか星3のサーヴァントでも来ねえかなー」

「——あいよー！最弱英霊アヴェンジャー、お呼びと聞いて即参上！マスター、また俺を呼ぶなんてほんつと物好きだねー」

「……………」

「あん？どうしたマスター、呆然として。今更俺の弱さにビビることもねえだろ」

「……………」

「いい加減に反応くれよ。Q&Aぐらい成り立たせようぜ。ほら、会話のドツチボール」

「……………め」

「ん？なんだって？」

「——空気を読めッ！こんの馬鹿アヴェンジャアアアアアア！」

ということで、アンリの宝具レベルが2になりました。

羅生門と鬼ヶ島で鬼退治に行つて来たんだけど、鬼って容赦なさすぎだよな？

『鬼』

実際にその存在がいたのかいかなかったのか、今もなお語り継がれる日本を代表する妖怪。創作の物語の中では人間と幾重にも戦いを繰り返されてきた種族。圧倒的な脅威に頑強な肉体、日本中にその名を馳せ、人々からは恐怖の対象として見られてきた者達。

——まさか、そんな奴らと戦うことになろうなどと、一昔前のオレだったら考えられないよなあ。

「――ばらきー、お前ーヶ月お菓子抜き」

「な、何故だっ!？」

「先輩、それはいくらなんでも……」

止めるなマシユ。この馬鹿子鬼には一度はつきりと言ってきかせないといけねえんだ。だいたい、こいつは事あるごとにキッチンに忍び込んではお菓子を漁るわ、すぐ施設の物壊すわ、酒を飲みまくって辺りを酒の匂いまみれにするわで散々カルデアの皆さんに迷惑をおかけしてんだ。それに今回のことはいい加減許せん。

「おいおい、こりゃ何の騒ぎだ大将」

それだけは！それだけはやめんかあつ！と泣き叫ぶばらきーの声がマイルームにて反響する中、頑として態度を変えないオレとそんな2人の間をオロオロと彷徨うマシユ。そこにライダースーツを纏いサングラスをかけたサーヴァントが訪ねてきた。

つい先日の特異点で散々お世話になったゴールデンライダーこと、ライダーの坂田金時である。

「ゴールデンいいところに来た。ちよつと豆持つてきてくれ豆。あの緑色の枧に入った豆な。それ食つて、あと相撲の礼装つけて一発こいつをグツナイさせてやれ」

「ふざけるな貴様ア！今の吾は体力も霊力も普通のサーヴァントぞ！あんなダメメジ叩きだす豆からの宝具など死んでも食らわんからなッ！」

「いや、いきなり宝具撃てとか言われても意味分かんねえじゃんよ。そもそもなんで鬼である茨木が泣かされてんだっつーの」

状況を全く理解できないゴールデン。とりあえず今にもオレに飛びかかつてきそうな茨木を警戒したのか、いつでも対処できるようにオレの隣へと立ちながら目の前で涙目の子鬼を残念そうな目で見つめる。

「でつ、なんでこんなことになつてんだ？」

「それが、茨木さんがまた悪戯を……」

「またやつたじゃんよこいつ……。だけどよ、大将には気の毒だがそんなのはいつものことじゃねえか」

「はい、いつもであればもう少し穏便に収まっていますが、今回はその、私が先輩と一緒に食べようと思つていたケーキを盗み食いしてしまつたよう……」

マシユの説明にああ……とゴールデンは小さく呟くと呆れたように茨木へと視線を向けた。宿敵のそんな視線に居た堪れなくなってきたのだろう。茨木の視線が徐々に泳ぎ始める。

そう、マシユの言う通りこの悪戯鬼。よりにもよってマシユがオレの為にせっかく用意してくれたケーキを盗み食いしやがったんだ。これにはオレの怒りも有頂天。鬼退治も辞さない所存である。

「おい、ばらきー。オレが今まで何度お前の悪戯を注意してきたか分かるか？」

「し、知らん！そんなこと吾には関係ない！吾は鬼！人から恐れられ、食らい、奪ってきた存在だ！そんな吾が何故人間の言うことを聞かねばならんのだ！」

「反省の色無し。1ヶ月で少しは反省するだろうと思っただけどやっぱりダメみたいだな。3ヶ月に延長だ」

「あああつ！それだけはっ！それだけは勘弁してくれマスターツ！」

「自業自得とはいえ鬼が形無しじゃん」

隣の不良っぽい根は真面目なライダーが情けない表情になる。強大な力を持つ鬼達を何体も目の当たりにしてきたゴールデンだからだろう。今の茨木の様子は彼の中で、鬼の印象に何か改革をもたらしたのかもしれない。

「ったく、羅生門の特異点の時は傍迷惑で歪んでいたとはいえきつちりと鬼らしかつ

たつつーのに」

「……羅生門の時と今の吾は別物だ。そんな話されても知らんもんは知らん」

羅生門。それはつい先日鬼ヶ島での特異点の少し前に発生した特異点である。聖杯で注いだ酒を飲んでしまった茨木がその途方もない魔力に取りつかれ、京の町で大暴れした事件のことだ。もつとも、鬼ヶ島でもまた別の人物が大暴れしてたけどな。

あの時の茨木はマジでヤバかった。何だよ、腕14体倒さないと本体にろくにダメージ与えられないつて。正直ふざけんなつて思える強さだった。つか、普通にやりすぎでしょあれ……一応ぶつ飛ばしたけど。

「おのれえええ……！酒呑さえいれば貴様らなどいともたやすく地に伏せてしまえるというのに……！」

「お言葉ですがばらきーさん。先輩は令呪を持っていきますからどうあがいてもそれは無理かと……」

「うるさいわ団子モグモグ小娘が！気合の問題に決まつておろうが！」

「だつ……!?ち、違います！アレは礼装の為にたくさんモグモグしてしまっただけで、頃の私はあんないやしんぼじゃありませんから！ほ、本当ですからね先輩！」

「お、おう。そこまで力説しなくても分かつてるから」

あれっ？でもなんでわざわざ犬のコスプレしてたの？ただ食べるだけならコスプレ

「知らないよね？私、気になります！」

「そ、そういえばゴールドンさんは一体どうしてここへ？何か先輩にご用事があつたのではないですか？」

「おっと、俺としたことが忘れるところだったぜ。ちいつと大将に頼み事があつてな」
「オレに？どうしたゴールドン」

無理やり話題を変えたマシユの空気を読んだゴールドンマジクール。キャスジルさん喜びそう。と、今はそんなことより話を聞こう。

「——さつきダヴィンチちゃんから聞いたんだけどよ、羅生門及び鬼ヶ島に関連したサーヴァントが召喚されやすくなってるらしいんだ。そこで大将に頼みてえんだが、頼光さんと呼んでやくれねえか？」

「わりいな大将。無理言つちまつて」

「いや、ピックアップと聞いて黙つてるわけにもいかねえしちようどいいさ。それに珍しくゴルドンが頼みごとをしてきてくれたんだしマスターとしてそれに応えねえと」

「まつたく、うちのマスターは s o c o o r d e e だぜい」

「あつ、でも召喚できなかつたらごめん。こればかりは時の運だから」

「おう、そこらへんは分かつてるぜ。こうして実行に移してくれるだけで全然かまわねえよ」

ゴルドンの依頼を受けたオレは早速召喚部屋へと赴いていた。いつものように呼符と石をしこたまこさえてやってきたわけだが、よくよく考えたらこうしてサーヴァントの誰かに依頼されて召喚するというのは初めてかもしれない。

「にしても、どうして頼光さんを召喚してほしいって言つてきたんだ？もしかしてママが恋しくなったとか？」

「ち、ちげえじゃんよ！頼光の大将は仁義とか恩とかすつげえ義理堅い人なんだよ。だから、マスターに恩を返したいって常々思つてるはずだ。俺はその協力をしてあげて

えって思ったただけだ」

「あの鬼ヶ島でも思いましたが、ゴールデンさんは頼光さんのことを本当によく分かっていますよね」

「まあ、ちつせえガキの頃からずっと一緒にいたし、背中だつて預けてた相手だからな。それくらい口に出さずに分かつてねえと鬼達の相手なんざできねえのさ」

「お母さんだから、とは言わねえんだな」

「だからちげえって！あんじゃん！ほら……色々あんじゃん！」

顔を赤面させ必死に捲し立てるゴールデン。まったく、別に照れることねえと思うんだけどな。特異点で僅かな間とはいえせっかく再会できたんだからもつと素直に喜べばいいのに。まあ、そのあとすぐに血生臭い戦いに突入してしまったし、あと良い年した男としても色々複雑なのかもしれないけど。

えっ？じゃあオレはどうなのかって？そりゃあ、あの母性胸の塊部に埋もれたいと思つていますとも。

「おいマスター。あんなビリビリする牛女など呼ぶのではない。呼ぶのなら酒呑にしろ」

「だから選べねえんだつーの。第一、お前はなんでついてきてんだ」

「クハハハハッ！酒呑が召喚されるかもしれないぞ！吾が大人しくしてるわけがなか

ろうー！」

「この酒呑大好きっ子め……」

さっきまで甘味を取り上げられてピーピー泣いていた姿はどこへやら。すっかりいつもの調子を取り戻したばらきーが高らかに笑う。こいつはゴールドデンが鬼ヶ島だけではなく羅生門でのサーヴァントも召喚されやすくなっているという言葉を聞き逃さず、それなら酒呑童子も来るのではないか意気揚々とオレ達についてきたようだ。

「これ以上悪戯鬼が増えると流石にカルデアが混乱するぞ。第一、ばらきーですでに手一杯だつての」

「クフツ！酒？さえいれば貴様など恐れるに足らず！すぐに食ろうてやるわっ！」

「そんなことしたらカルデア中のサーヴァントを敵に回すことになりますよばらきーさん。もちろん私も黙ってはいません」

「俺っちも流石にそれは見過ごせねえな。それに、ここにはお前以上の怪物がわんさかいるじゃんよ。俺だつてあのハサンとかいう暗殺集団に目を付けられようもんならばアー号があつても逃げられる可能性は五分五分だろうからな」

「うっ……」

「いやー、オレも色んなやつに好かれちゃったもんだなー！確かに自惚れとかじゃなくてマジでそうなりそう。」

ばらきーに付き合つてやるのもほどほどにして、そろそろ召喚を始めることに。今回は呼符が20枚ぐらい、そして石が10連を1回できるぐらい用意してきた。次の特異点のことも気になるが、せっかくゴールデンに頼まれたんだ。大盤振る舞いでいこうじゃねえか。

「とういわけで呼符ゴー！」

何の材質でできているのか分からない符を召喚サークルに投げ込む。というか、いつも気にしてないけどなんでこんなので召喚できるんだろ？カルデアの召喚方法謎が深いわー。

パアアアア！と召喚サークルを中心に光が部屋の中に溢れる。すると3本ラインの光の帯が発生したことによりサーヴァントが召喚されたことが分かった。浮かび上がるクラスカードには暗殺者の刻印が刻まれている。

「おおおっ！これは酒呑ではないかマスター！よくやったぞ！珍しく誉めてやろう！」
「いやよく見ろばらきー。確かにアサシンクラスのクラスカードだけだよ——」

「はい、どう見ても色は銀色です。稀にある金色への変化もないですし、これは星3のアサシンですね」

「銀色か……。銀色も嫌いってわけじゃねえが、やっぱりゴールデンに限るよな。さいつこうにクールでイカした色つてのはやっぱりゴールデンだけ」

各々が反応を見せる中、ようやく召喚された人物が姿を現した。

その人物のことを一言で言うのなら、今の部屋の明るさに似合わない『黒』だろう。肌も変異が生きたのか黒。身に着ける軽装の服も黒。そしてまるで闇の一部のような雰囲気の黒。細身の体軀ながら、その実内面には80以上もの人格を有する多重人格暗殺者。

「——我ら影の群れを従えた以上は勝利も必至。ご安心召されよ、マスター」

暗闇の中から聞こえてくるような存在を感じさせないサーヴァント。百貌のハサンことハサンさんだった。

「あつ、ハサンさんだったか。よつす！」

「相変わらず大將はアサシン相手でも物怖じしねえな。今の俺たちはライダークラスだからさつきも言ったけどアサシンクラスは苦手だぜ……。まつ！元々バーサーカークラスだから苦手なのは変わらねえけどよ！」

「なんだ酒呑ではないではないか！帰れまっくろくろすけ！」

「ばらきーさん、その物言いはあんまりでは……」

軽い挨拶を交わす者、相性的に身震いするも最初から変わんなかったわ！と笑い飛ばす者、理不尽にかなり危ないことを言う者、それを咎める者。これぞまさしくフリーダム。

「……相変わらずマスターの周囲は混沌としていますな」

「ハサンさんの多重人格&分身も大概だけだね」

「言ってくださるな。これは我が刃、我が毒、我が罫。ありとあらゆる武器となるのですから」

「うん。いつも助けられてるからもちろん分かってるよ。でもさ、もう少し砕けてくれないんだぜ？ ずいぶん前にハサンちゃんにも言ったけど」

「主に使える身として、この礼節は当然です」

うーん。相変わらずハサン組は態度が堅い。ハサン先生はそれなりに砕けて話してくれるようになったけど、ハサンさんもハサンちゃんもまだまだ畏まっているな。キャメロットの時みたいに不遜な態度でも全然OKなのに。すごいのは英霊としての皆の力であつてオレは普通の人間なんだからさ。おやつ？ 今どこからか一般人（笑）って聞かされたぞ？

「それでは我らが力が必要な時はいつでも申してください我が主。諜報、暗殺、拷問。主殿のご期待に添えるよう常に身体を備えておりますので」

「いや、流石に拷問とかはしないからね？ それじゃ部屋で待機してくれハサンさん」
「御意」

シュツと闇のようなサーヴァントが目の前から消え去る。流石は気配遮断A。瞬き

した瞬間にはすでにその姿はなかった。

それから呼符での召喚を試みるものの、結局頼光さんを召喚することはできなかった。というか、バーサーカーのクラスカードすら出てこない。何たる不運。成果としては『起源弾』というキヤスター殺しの礼装が手に入ったことぐらいだろう。ただでさえキヤスター絶対倒すマンであるゴールデンライダーがさらに強化されてキヤスター絶対殲滅するマンにランクアップしてしまうのは確実だろう。

「なんだか最近先輩の単発引きが栄えませぬね。これはいよいよもって幸運上昇の波が収まりつつあるのでしようか？」

「やめてマシユ、怖いこと言わないで」

まだ今年半年もあるんだよ？今になって運気が下がるとか恐怖しかないんだけど。もうすぐ夏だから海とか水着とかイベントがあるんだからさ（メタ）

「うがあああああ！どんなに待っても酒？が現れないではないか！かくなる上はこんな役立たずの絡繰りなど破壊してくれるわっ！」

「ゴールデン、豆食って礼装装備して宝具開放」

「任せるじゃんよ」

「———と思っただけど、鬼は寛容だ。今しばらく我慢してくれよう」

「ああ、先輩やゴールデンさんが段々ばらきーさんの扱いがお手の物に……」

あれ？何かマシユが遠い目してる。どうかしたのか非常に気になるが、案に聞いてくれるなど言われているような気がするのでここは召喚に集中することにしよう。

「よし、じゃあ今度は10連召喚だ。頼むぜー頼光さん。ゴールデンの為にも来てくれよ〜」

「だから俺は別にそういうんじゃ……」

「ゴールデンさん、たぶん先輩も分かかってわざと言ってると思いますし、ここは無視が安定ですよ」

「お、おう……。嬢ちゃん、なかなか大将に辛辣じゃね？」

「えっ？別にいつも通りじゃね？（じゃないですか？）」

「いや、まああんた達がそれでいいなら何も言わねえけどよ……」

「酒？酒？酒？酒？酒？酒？……！」

ほら、マシユの天然な毒舌つて今に始まったことじゃないからね。もう耐性ついて逆に当たり前になっっちゃってるからね。あと、ばらきー怖いぞ。

グルグルーと先程の呼符での召喚の時のように召喚サークルが回転を始める。まあ、とりあえず一発目は順当に礼装かなーと様子を見ていたのだが――

「先輩、私の見間違いでしょうか。何だかバチバチ言ってますか？それも金色に光りながら」

「オレも同じ反応を目の当たりにしてるから間違いないじゃないと思うぞ。いや、うん。マジカー」

どう見ても高レアサーヴァント召喚の反応です、本当にありがとうございます。おい、単発引きが調子悪くなってきたと思つたら今度は10連の運氣が上昇ですか？片方が沈むと片方が上がるの？シーソーゲームなの？モグラ叩きなの？

パアツ！と一際大きな光が溢れ、召喚されたサーヴァントを示すクラスカードが現れる。刻まれる刻印は先程見たものと同じだった。つまりアサシンのクラスの高レアサーヴァントである。ちなみにばらきーは「ぬぬぬう……！」と手を合わせながら目を閉じて必死にお祈りしているせいでまだそれを見ていなかったりする。ゴールデンは顔に一筋の冷や汗を流していた。これから召喚される者にこれ以上ない心当たりがあるのだろうか。そして――

「アサシン、酒呑童子。ふふ。うちを召喚してくれて、おおきにありがとう。好きにやるけど——かまへんね？」

「ですよねえええ!!」

思わず叫ばずにはいられなかった。

召喚されたのは小柄な体躯のサーヴァント。だが、油断することなかれ。この一見少

女にしか見えないこの存在こそ、大江山に城を構えた鬼達の頂点の一角。ばらきーこと茨木童子が敬愛してやまない伝説の存在。星5アサシン『酒呑童子』。

つかサラツと来やがりましたよこの星5様。

「しゅ、しゅ、酒呑ンンンンンツ!!」

「おや茨木。あんたはんもおつたんか。これは良い時に呼ばれたみたいやわあ」

独特のゆつたりとした口調。色々と露出が危ない服装。両の手に盃を持つも、一切の隙がない立ち振る舞い。聞いている相手を蕩けさせてしまうような甘つたるい雰囲気醸しながら、ばらきーをサラツと躲した酒呑童子はそのトロンとした視線をオレと隣に立つゴールデンに向ける。

「まさか、小僧の方から呼んでくれるとは思つたらんかったわあ。——マスターさん含めて、ようやくうちを受け入れる覚悟をしてくれたんやねえ」

「——っ!」

ギリリと口元から覗かせる鋭利な牙を見たオレとゴールデンは、ゾクリと背中に冷たいものを感じ一気に距離をとる。判断とかそういうのではなく、生き物としての本能による反応だった。

これが『鬼』。日本に古来より言い伝えられてきた本物の絶対強者。

「なんやその反応。うち傷ついてまうわあ」

「酒呑のすごさに恐れ慄いたのだ！流石は酒?!」

「茨木、あんさん少し黙つときい」

酒呑の態度にガーンとショックを受けるばらきー。そのまま隅つこの方で『の』の字を書き始めてしまった。まあ、待ち焦がれていた相手にあんな態度取られたらショックだよな……。ドンマイばらきー。

ペタ……。ペタ……。と酒呑童子が裸足で歩く音が召喚部屋に響く。先程は思わず引いてしまったが、今のオレには令呪があるし隣にはゴールデンもいる。最悪の事態にはならないはずだ。マシユには目線でいつでも外部と連絡とれるように指示してある。仮に酒呑童子が暴れるようなことになれば、すぐにでもカルデアのサーヴァント達へ招集がかかるはずだ。

「いきなり逃げるなんて酷いわあ。うちに会いたくて召喚してくれはったんやないん？」

「……俺つちたちは頼光さんを呼ぼうとしてただけだ。お前じゃねえ」

「ということは今ここにあの乳臭い牛女はいないということやなあ。これは良いことを聞いたわあ」

「ちつ！俺としたことが口走るなんてな。c o o r j y a n e e」

「そないなことあらへんよお。小僧は昔からイケメンで落とし甲斐のある魂やさかい、

もつと誇ってもかまわんよお」

「おめえに褒められても嬉しくねえじゃんよ」

傍から聞いてると軽口の応酬のように聞こえるが、両者の間にはピリピリとした雰囲気漂っている。これは殺気だ。相手を如何に殺すかという戦う者の放つ圧力だ。最初から最後まで殺し殺される関係だった2人だからこそその鋭い空気だった。

「小僧は相変わらずいけずやわあ。マスターさんもそう思わへん？」

「そこでオレに振るのやめてくれませんかねえ……」

「だってさつきから会話に入れへんで寂しそうにしとったさかい。すまへんなあ、今の私はマスターさんの物やし。……マスターって言い方何だかしくりこんへんし、旦那はんって呼んでもええ？」

「好きに呼んでくれて構わねえけど……えっ？契約してくれんの？」

「……？そのために呼んでくれはったんやないの？」

「いやまあ、契約を結ぶサーヴァントを召喚するつもりだったけどよ……。まさか、こんな素直に契約してくれるとは思わなかった」

「旦那はんも酷いわあ……。うち、これでも旦那はんのこと前に見たときからええなあと思つとったんよ？それにここに居れば退屈しなさそうやし」

それに小僧もいるわ牛女はいないわで高待遇やわあと妖艶な笑みを浮かべる酒呑童

子。とりあえず暴れたりする様子は無いようだし、これなら大丈夫そうだ。

「おい、大将。契約を結ぶのは大将の自由だから俺たちは何も言わねえけどよ、こいつの前じゃ油断するんじゃないぞ。気づいたら溶かされて食われかねえじゃんよ」

「そんな面白くないことせえへんよお。やるとしても、もつともおつと旦那はんのことを堪能してからやわあ」

「大将、マジで油断するなよ?」

大丈夫……だよな? えつ、マジで大丈夫だよな? 気づいたら骨の髄までしゃぶりつくされてたりしないよな?

「じゃあさ、まずは信頼を得るといふ感じで一つ頼まれごとを任されて欲しいんだけど」
「なんや早速かいなあ。旦那はんはせっかちやわあ」

「おい、その妙にエロい言い方やめろ」

見た目ただの童女なのになんだその色気は。これが年のこ——

「旦那はん? 今うちに対して失礼なこと考えなはつたやろお。いけない御人やわあ」
「いいいいいい!! 別に考えてねえですともはいっ!」

「うふふつ。次は許しまへんからなあ」

ペロリと舌なめずりをして鋭い牙をギリリと光らせる酒呑。ちよつ、怖ええええええ!! 何なのこいつ!? 何で分かった!? 直感のスキルでも持つてんの!!

「それで頼み事とはなんどすえ？夜のお相手やるか？」

「間接的な言い方を注意されたからと言つて、直球でエロいこと言うなし」

というか、いい加減話を進めさせてくれ。

「ふふふつ。旦那はんをからかうの小僧と同じくらいおもしろいわあ。今はこれで満足やし、ほな、頼み事とやらを聞きましょか」

ようやく話を聞いてくれるようになった酒吞童子。その自由奔放な態度に疲れながら、オレは部屋の一角を指さした。

「——あいつをどうにかしてくれ」

オレが指さす先。そこにはいまだに『の』の字を書きまくるばらきー。同族の情けない姿に、流石に酒吞童子も小さくため息をつくのだった。

—後日談—

「ごめんゴールデン。マジでごめん」

「はははっ！もう過ぎたことだし構わねえよ大将！それに大将としては嬉しいんだろ？俺っちに氣を使う必要はねえぜ」

「うん、正直アサシंकラスの火力不足には悩んでたし、酒吞が来てくれたことは本当に嬉しいんだけど。でもゴールデンからしたら嫌だったんじゃないかなって」

「別に嫌じゃねえさ。あいつはああ見えて約束事に関してには絶対に破らねえ。危害を加える氣はねえって言つてんだし、契約時にも念を押しただろ。それなら俺も無駄に警戒する必要ねえじゃんよ」

「……酒吞のこと、よく分かつてるんだな」

「まあ、頼光さんとはまた違った信頼つてやつだ。何度も何度も殺し合いしてりや、知りたくなっても自然とそいつのことが分かつてくるのさ。鬼には鬼の誇りがあつて、それを自分から汚すような真似は絶対しねえ。まあ、茨木の奴はちいつとそのベクトルから外れちまつてるけどよ」

「——そっか。オレとマシユの支えあいとはまた違った信頼関係……。うん、勉強になつたぜゴールデン」

「おうよ！だがよ、大将。守る誇りがあるとはいえ鬼つてのはどこまで行つても狡猾だ。時には大将の手に余ることもあるだろうよ。そんな時は俺っちを頼りな。足柄山の雷光ライダー、坂田金時。最高のドライブテクで駆けつけてやるからよ！」

アガルタって女性の国だったんだけど、主人公の周りには女の子いなかったって嘘だよね？

「——すまん。なんていうかうまく言葉が出てこねえや。何分初めてのことだから……」

「私は気にしないよマスター。変に凝ったセリフよりも君自身の言葉で私は聞きたいんだ。それに、そう思ってもらえるのなら君の騎士としてとても誇らしいよ」

そう言つて目の前でクスツと微笑む彼女^彼。いつも被っている鎧の広い帽子を脱ぎ、日の光のように輝く金色の髪を靡かせる。ピシツと伸びた背筋に百点満点の所作。戦いに赴くにはやや軽装過ぎる服装だが、腰に愛剣であるレイピアを下げる姿はまさしく騎士だった。

「その、口下手で何の工夫もないありふれた言葉かもしれねえけどさ、ちゃんと伝えるよ」

「うん。ぜひ君の口から聞かせてほしい」

スー、ハーと深く息を吸う。これから彼女に伝える。マスターとして……いや、一人の人間としての言葉を。ずっとずっとオレに寄り添ってくれていた存在への精一杯の

気持ちちを。

さあ、伝えよう。それがきつと、オレと彼女彼女の新たな一歩になるはずだから。

「——絆レベルMAX、おめでどうデオン」

「ありがとうマスター。これからも私の剣は君のものだよ。フランスの騎士、シユバリ

エ・デオン。白百合の如く君の隣でこれからも花開きつづけることを誓おう」
告白かと思った？残念、絆レベルMAXのお祝いでした！

「いやー、それにしてもようやく絆レベルがMAXになったかー。1番初めにオレの下に来てくれたデオンがそうなるのは予想してたけど」

「懐かしいね。あの炎上する冬木で召喚された時は色々不安もあったけど、そんな君が今では立派なマスターになったよ。フランスの名立たる騎士にも負けないぐらいね」

「あつ、やっぱり初対面の時ってそんなこと思ってたんだ」

「き、気を悪くしないでくれよマスター。魔術も戦いの経験も無い人物に召喚されたわけだからね。その、確かに騎士として主を守るのは当然のことだけど、正直あの時は戸惑ってしまったよ」

「いやいや、別に気にしたりしねえよ。確かにあの時にオレは右も左も分からねえずぶ

の素人だったし、戦いの指示だって無知丸出しだったからな。ほんと、負担をかけさせちまつて悪かった」

「……でも、そんな君が今では人理を救った世界最高峰のマスターだ。その事實は胸を張って誇ることだよ。もちろん、私もそんな君に仕えることができていることは至上の喜びさ」

「あ、ありがとう……」

面と向かつてハツキリとそういうことを言われるかなり照れくさい。今の会話でも分かる通りデオンとはマシユを除いて一番長い付き合いだ。それがアガルタを突破したことにより、ついに絆レベルがMAXになりそれを互いに祝いあっていたというわけである。

まあ、あんまり豪勢なことができないわけでもないのだからデオンと2人で彼女の部屋でお茶会をしているだけなだけだな。

「さて、この後の予定だけどデオンは大丈夫？」

「もちろんさ。特異点アガルタに関連する召喚を行うのだろうか？今日は私が護衛を務めさせてもらうよ」

カチャリと紅茶のカップを口にするデオン。その仕草一つ一つが非常に魅力的で本当に騎士なのか、どこかのお姫様じゃないのか、そもそも性別は結局どっちなの？とい

くつもの疑問が脳裏を駆け巡ったが、騎士なのはデオンの戦い方を見ていれば分かるし、性別に関しても本人が話を逸らしているわけだから無暗に聞いてはいけないと思いき口には出さなかった。

あと、デオンの淹れてくれる紅茶めっちゃ美味い。茶菓子として用意された手作りマカロンも非常に美味だし、何この完璧騎士。召喚終わったら紅茶の淹れ方とマカロンの作り方教えてもらおう。

——ああ、そういうえばアガルタで思い出した。

「なあ、デオンーっ聞いてもいいか？」

「何だい？」

「——アガルタの街で手に入れたあのメイド服。あれどうしたの？」

「ブフツ!!」

噴き出した。さつきまで優雅に（『優雅たれ』ではない）紅茶を嗜んでいたデオンが思いつきり紅茶を噴き出した。そりやもう豪快に噴き出した。具体的にいうと対面して座っていたオレの顔に紅茶をぶっかけるぐらい。

「す、すすすすまないマスター！大丈夫かい!?火傷してない!？」

「いや、そこまで熱くなかったし大丈夫だから。ぐにゅ!?ちよっ!自分でやるって!」

「わ、私がしてしまった不始末だから!しばらく我慢してくれマスター!」

「フグフグフガツ！フガガガツ！フガアア!?（痛い痛い痛い！鼻取れる！取れちゃう!?）」

慌てたようにタオルを持ってきてグニグニとオレの顔に押し当てるデオン。羞恥からなのかマスターに不敬を働いてしまったからなのか分からないが、余裕に満ちていた表情はすっかり真つ赤つかに染まってしまっている。

拭くのももう許すからもう少し優しく拭いてくれませんか!?あなた筋力Aなんだよ！籠める力強すぎてオレの顔面抉れそうなんだけど！

「ま、まったく！いい、いいいきなり何を言うんだ君は!?」

「良かった！鼻も目もある。本気で取れるかと思った。だって結局あの後服の所在を知らなかったから。——その反応、もしかしてコツソリ持つて帰ってきてたり……」

「し、ししてない！してないから！」

ええく？本当でござるか？さつきからチラチラとクロゼットの方に視線が向いているのはどうしてでござるか？

「なあ、デオン。あのクロゼットの中——「わあああああ!!」——ごめんて、そんなに必死にならなくても」

「も、もう！君はそういうところは初めの頃から変わらないな！人をからかうのもほどほどにしたまえ！」

「でも、結構ノリノリで着てたじゃん」

「ノリノリなんかじゃない！あ、ああれはアストルフオに……！」

確かにあの理性蒸発のポンコツ英霊にいい様に釣られたのは分かるけどさ、あの衣装持ってきたの君だからね？人の寝室に忍び込んでわざわざチヨイスしてきたのYOUだからね？

「とうか、うちにはアストルフオいないんですけど……。あの男の娘英霊は一体どこから来たんですかねえ。」

さて、いい加減からかうのもここらへんにしておこう。臍でも曲げられて護衛をボイコットされたら大変だ。正直見た目が美少女にしか見えないから羞恥に染まった顔が可愛くてしょうがないのでつついやりすぎてしまう。ほら、可愛いものは愛でなくちやいけないから（使命感）

そして訪れた召喚部屋。今回の召喚は呼符が7枚、10連が1回で挑戦する。いつもと同じくらいかわずかに少ないことには目を瞑ってほしい。何故かって？察せ（水着イベ開始の印が付いたカレンダーを見ながら）

「何だかここでの初めての召喚を思い出してしまっうね」

「そーいや、この召喚部屋での最初の護衛はマシユとデオンだったっけ。あれから随分と時間も経ったしな。サーヴァントの数もすんげえ増えてるし」

寧ろ被り過ぎてるサーヴァントが多いまである。おい、星3勢。君たちのことだからね？

「じゃあ、始めてもいいか？」

「いつでも大丈夫だよ。マスターのタイミングで始めてくれ」

先程の取り乱しはどこへやら。優雅に微笑む騎士の存在を感じながらもまずは呼符での召喚を行う。最近の召喚の結果を鑑みて思ったんだ。もう単発だろうが10連だろ

うが当たればいいんじゃないかね?と。順番とかどうでもよくね?と。

グルグルと召喚の光を放ちながら回り始める召喚サークルを傍目に見ながら、誰が出てくるのかワクワク半分、不安半分なオレ。

アガルタの世界は男である自分にとつては色々キツイことも多々あったが、出会ったサーヴァント達は一部を除いて確かに英霊と呼べる者達だった。強いていた政治は正気とは思えない理不尽に溢れていたし、血の匂いや死の気配が常に隣り合っていたし、その国に住みたいかと問われれば即答で断るだろう。でも、彼女達の信念は確かなもので、これこそが自分の道、自分の国だという誇りがありその点については尊敬の念を送らざる得ない。

不夜城のキャスターやレジスタンスのライダーに関しては……まあ、ね。特にキャスターに関しては召喚された時どんな顔をすればいいのか分からないからな。最後、彼女の言葉にブチギレてしまってマッシュやデオンや他のサーヴァント達の静止がなければ殴りかかってたかもしれないし、今会ったとしてもまともに会話できる自信がない。

「あつ、マスター見てくれ!」

「ん?どした?——つて、おおおおお?」

物思いに耽っているとデオンがポンポンとオレの肩を叩いて白魚のような綺麗な指で先を指さす。何かあったのかと思いい顔を向けると、そこには金色にバチバチと光るク

ラスカード。おおおお！今回久しぶりに単発引きが冴えてるじゃねえか！って、ちよつと待て。

「マスター。私の見間違いないやなければあのクラスってランサーだと思っただけだ」

「どつからどう見ようとランサーだな。アガルタにランサークラスのサーヴァントなんていたか？」

「デオンの言うとおり金色のカードに刻まれているのは槍兵の紋章。だがアガルタのピックアップの中にランサークラスのサーヴァントなどいなかったはず。ということ。はこれはすり抜け!？」

「こりゃ、カルナさんとか獅子王とかエルキドウとか来たんじゃない!? ついにうちに星5のランサーがご降臨されたんじゃないやね!？」

「落ち着いてくれマスター。まだそうと決まったわけではないよ。もしかしたらフィオナ騎士団の彼かもしれないだろう?」

「おい、古傷抉るのやめーや。トラウマが蘇っちゃうだろ」

懐かしきバビロニアピックアップ。アレは酷い事件だったね……。というか、フィンさんの扱いが我ながら酷いなおい。

期待に胸を膨らませるオレとあくまで冷静なデオン。そんな2人が見守る中、ついに召喚されたサーヴァント。さあ、アガルタピックアップ中にある意味空気の読めないす

り抜けをしてきたのは誰だっ！

ふわりと裾の広いスカートを翻し彼女は現れた。頭には捻じれた不思議な角を持ち、竜のような尻尾を生やしている時点でまず純粹な人間ではない。彼女の残虐性を示すかのような槍をマイクスタンドのように構え、不敵な笑みを浮かべる。見た目はまだまだ幼さの残る少女にしか見えないが、その実伝説に名を残すほどの非道を行った人物。その者の名は――

「アナタが新しいマネージャー？よろしく、大切に育ててね♡」

自称売れっ子アイドル。その壊滅的な歌声は敵味方関係なしに葬り去る天性の音痴。鮮血魔嬢改め何度も出てきて恥ずかしくないんですか娘こと、『エリザベート・バートリー』だった。

「やつちやつたああああ!! ついにエリちゃんシリーズコンプリートしちゃったああああ!!」

ハロウィンにブレイブにカーミラさんに引き続き、ついに一番かと登場してしまったランサーエリザベート。何度も出てきて恥ずかしくないんですかともういい加減言い飽きたわ!

「はあい子犬。ようやく私を呼んだわね。まったくアイドルであるこの私にオフアールかけるのにどれだけ時間を掛けてるのよ。まあ、これも私が気品高い超レアなアイドルだからしょうがないのでしょうけど。格が違い過ぎるつても考え物よねえ」

「やかましいドラ娘。こつちはついに揃ってしまったお前らシリーズに頭を抱えてんだよ」

具体的に言えばアルテラさんもびつくりな破壊力満点の歌声を持つこいつらをどうやって隔離するかってことを。

「あらあら。そんなに身構えなくてもいいわよ。これでも私はスタッフを労わることぐ

らいできるんだから。もちろん、その分私に尽くしてくれたスタッフに限るけど。シンデレラにだってなれる私の歌声で昇天させてあ・げ・る♡」

「そのためには先ずは強面のプロデューサーに笑顔を褒められてこいやダメドルめ」

もしくはスクールアイドルになって閉校寸前の高校救ってこい。

「それでそれで！私を呼んだってことはライブ会場が整ったってことよね!?早速リハースルするから案内しなさい！」

「いやいやしねえから。今回は単純に召喚しただけだから。ましてやライブとか却下だから。ダメ、絶対」

「なーんーでーよー！私はアイドルなのよ!?だったらライブをするのが常ってもんじやない!どうにかしなさいよマナージャー!」

ワーワー!と喚き散らすエリザベート。小柄な体格で見た目だけなら美少女な為、迫力は無くまるで小動物が戯れてきているようにも感じられる。オレ自身様々な特異点でエリザベートには助けられたのだし、なるべくサーヴァント達の要望にも応えるようにしているののでできれば彼女の希望であるライブも開いてあげたいのだが、如何せん危険度が高すぎる。誰もあの世への片道切符なんていらんだろう。

どうしたものかとデオンへと視線を送る。彼女^彼は彼女^彼で微妙に顔を引きつらせていたわけなのだが、やがて小さくため息をつくとその小さな口を開いた。

「——ライブ云々のことはとりあえずロビンフッドにでも聞いてくると良い。彼ならどうにかしてくれるだろう」

「丸投げっ!？」

「えっ! あいつここにいるの!?! なによ、口ではぶつくさ言ってもちやんとマナージャーとして待機してくれているんじゃない! そうと分かたら早速ライブに向けて打合せね! じゃあ、子犬に性別不詳の騎士! また後でね!」

言うが早いのか、エリザベートはピューと効果音でも付きそうな勢いで召喚部屋を後にした。残されたのは嵐のよう後のような静けさ。そんな雰囲気は漂う中、オレはジトとデオンへとやや冷たい視線を送る。

「な、何だいマスター?」

「……デオンってたまに容赦ないことするよなーって思っつて」

「し、仕方ないだろう! あのまま居座られたら召喚どころではなかったし、何より私は彼女が苦手なんだ!」

「それは分かるけど……。あとでロビンのこと労わってやれよな」
「う、うん……」

とりあえずいきなりドラゴン馬鹿娘に突撃されているであろう緑茶さんに黙祷。シャーウッドの英雄の胃が非常に心配になった一幕であった。

結局あの後呼符単発引きは冴えなかったため、気を取り直して10連に挑戦である。最近調子のいい10連引き。ここいらでピックアップサーヴァントを引き当てたいところだがはたしてどうだろうか。

ガチャガチャと虹色の石を召喚サークルへと注ぎ込む。先程と同じように光の束がグルグルと回転を始め、大きくなったりと小さくなったりと絶え間なく輝きの周期を繰り返す。やがてサーヴァントが召喚された証である3本ラインの光の帯が出現し、その中から金色に輝くクラスカードが現れた。

「おおっ！また金色のクラスカード！これは良い調子じゃね？」

「今日は良い感じに召喚できてるじゃないかマスター。最近の君の召喚運の向上は最初のころと比べて目を見張るものがあるよ」

「最初は本当に金枠のサーヴァントがデオンしかいなかったからなあ。特異点攻略も骨が折れたのは鮮明に覚えてるよ」

何しろレアリティが低いと火力が足りない。耐久力も足りない。素材だって十分に揃っているわけじゃ無かったから育成だって不十分。そんな中でよく戦い抜けたものだ和我ながら感心する。

おっと、話が脱線してしまった。今は召喚されたサーヴァントだ。このクラスは——
バーサーカーか。

「バーサーカーのクラス、となるとマスター。召喚されたのは……」

「ああ。これがすり抜けとかじゃなければ間違いない彼女だろ」

彼女——通称エルドラドのバーサーカー。アマゾネスを率いていた彼女はカリスマに溢れており、見た目はまだまだ少女という見にくれにも関わらず圧倒的な武力を見せつけていた。オレもアガルタにて彼女と幾度か戦闘をしたが、その凄まじい気迫と戦闘部族の頂点に君臨する力に苦戦を強いられたことは記憶に新しい。

「二応警戒しといてくれデオン。普通に会話はできると思うけど、いつ狂化して襲い掛かってくるかも分かんねえから」

「心得たよ」

オレの指示にいつでも抜刀できるように剣に手を添えるデオン。

エルドラドのバーサーカー。彼女にとつての怨敵とも言える存在——『アキレウス』。普段の彼女はバーサーカーではあるが会話程度のコミュニケーションは行えたのだが、一度狂化が掛かってしまうと目に映る者全てをアキレウスと見なして襲い掛かってくるのだ。狂化が掛かっている分、ただでさえ桁外れな力がさらに増幅してしまうためとても手に負えなくなる。

やがて、バチバチと空気を揺らす召喚光を発しながら召喚されたサーヴァントが現れる。

「——アマゾネスの女王、ペンテシレイア。召喚に応じ参上した。……まず聞くが、アキレウスがいるなら出せ。隠し立てすると殺す」

小柄な体躯に似合わないほど引き締まった筋肉。白髪の下に見える顔立ちこそ美少女と謳っても過言ではないが、その目つきはどこまでも鋭い。両手に構える棘付きの黒い鉄球は振り下ろされるだけでオレなど容易く肉塊に変えてしまえるだろう。

オレ達の予想通り、そこにはアガルタで死闘を繰り返したペンテシレイアがそこにいた。

「よっ、ペンテシレイア。召喚に応じてくれてありがとな」

「以前会ったマスターか。よもや貴様の下に召喚されるとはな」

「あの戦いで縁が結べたんだろうな。それで早速なんだけど契約してくれるか？」

「その前に私の質問に答えろ。——アキレウスはここににいるのか？」

途端、部屋の温度が5度は下がった。彼女から発せられる凍える様な鋭い殺気が肌を

刺す。ふざけた答えを言ったら容赦なく殺すと、その狂化に染まった目が物語っていた。一度その殺気を身に受けていたはずのデオンも表情こそ変えないものの、ツート冷や汗を流している。

「……悪いがアキレウスはここにはいねえ。前に一度だけ会ったことはあるがそれだけだ」

「——嘘は言っていないようだな」

ジャラララと持ち上げていた鉄球が下ろされる。同時に放たれていた殺気も収まり、部屋の温度も戻ってきたように感じた。ふへー、緊張したー。

「さて、契約という話だったが私は別に構わん。だが、女王であるこの私を従えるのだ。それこそ負け犬のような無様な態度をとってみろ、容赦なく殺す」

「分かっているよ。じゃあ、契約成立。これからよろしくなペンテシレイア」

そう言って彼女に手を差し出す。ペンテシレイアは一瞬逡巡するような様子を見せたが、ああ握手かと呟くとオレの手を取った。自身の身体をいじめ抜き、鍛えた上げたその手は少女らしい大きさに関わらずゴツゴツと硬い感触だった。

うーん。見た目は本当に可愛いのにこうも仏頂面だともつたいねえな。いや、可愛いとか美しいとかペンテシレイアにとつてとんでもない屈辱だろうから口には出さないけど。下手に伝えようものなら第二のアキレウスになりかねん。人間でしかないオレ

は速攻でゴートウヘルである。エリちゃんの歌声と良いレベル。

「マスター。貴様今良からぬことを考えなかったか？」

「いえ！何にも考えてないですクイーン！」

「まったく君は本当に緊張感がないな」

それが君の良いところでもあるけどと、今まで沈黙していたデオオンが口を開く。その手はすでに剣に添えられていない。もう大丈夫だと判断してのことだろう。

「なんだ、誰かと思ったがああの時の騎士か」

「改めて挨拶をしよう、誇り高き女戦士達の女王よ。私はシユヴァリエ・デオオン。マスターを守る白百合の騎士だ」

「ああ。今更私の紹介など不要だろう。あの時我が精兵を抑えこんだその力。敵ながら素晴らしかったぞ」

「お褒めいただき光栄だ。しかし、あれはアストルフオや外的要因の力もあつてのことだよ」

「謙遜することはない。戦いとは何を用いようと勝者が絶対なのだ」

ペンテシレイアの言葉にデオオンは一度頭を下げた。敵同士で異文化の相手であろうと、やはり騎士として王に称えられるということは誇らしいことなのだろう。

「——どうだデオオン。私の配下に入るつもりはないか？貴様程の腕前ならばすぐの上へ

と昇り詰めることはできるだろう」

どっちもかっこいいなとオレが見惚れていたその時だった。ペンテシレイアがとんでもない爆弾を投下してきたのは。

「えっ?」

「はい?」

「むっ、どうした?」

ポカンとしたオレ達の反応が理解できなかつたのかアマゾネスの女王は不思議そうな表情をする。いやいや、ちよつと待つて。デオンをペンテシレイアの配下に?つまりアマゾネスの一員になれと?女性しかいない部族の一員に?」

「二度も言わせるな。さっきからそう言っているだろう。それともあれか、騎士として一度忠誠を誓った相手がいる以上、鞍替えなど出来ぬというわけか?」

「いや、確かにそれもあるんだろうけど……」

「マ、マスター。私は彼女にどう伝えればいいのだろうか……?」

「し、知らねえよ!」

ゴニヨゴニヨとデオンと小声で言い合う。だつてほら、デオンの性別つてほら。……ね?」

「ええい!はつきりしない!言いたいことがあるならとつとと言つたらどうだ!女王の

言葉だぞ！」

痺れを切らしたペンテシレイアがついに怒鳴りだす。ビクウ！と肩を震わせたオレとデオンは顔を見合わせて恐る恐る怒り心頭の女王様へと向き合う。あー、この後どんな反応されるんだろう。不敬とか言われて肉団子にされなければいいけど……。

そうなりそうだったらデオンを盾にして真っ先に逃げよう。大丈夫、今日のデオンには『月霊髓液』持たせてるから、スキル使えば3ターンくらい稼げるはずだ。

絆番外編

「し、死ぬかと思った……!」

「本当だね……。君がああ礼装を持たせてくれて助かったよ」

「まさか赤面して襲い掛かってくるとは思わなかった。いや、デオンの容姿を鑑みたら当然の誤解なんだけだよ」

「私自身、日頃から性別は誤魔化しているから間違っているとも訂正しづらかったからね。女王陛下には悪いことをしたよ」

カルデア内の廊下をテクテクと歩く。先程ペンテシレイアに真実を伝えた帰りである。あの後、ペンテシレイアに『デオンの性別はく』云々を伝えたところ、自身の勘違いを恥じたことの照れ隠しなのか彼女は赤面して攻撃してきたのである。もつとも、本気の彼女には程遠いものだったので2人だけでもどうにか抑え込むことはできた。それでも結構ギリギリだったが。

とりあえず、トロイア戦争の関係者であるヘクトールさんを紹介しておいた。今頃戦いの話にも花を咲かせていることだろう。

「ところでマスター。さつきどこへ行っていったんだい？あとそのケースは？」

「ああ、ちよつとマリーさんの所にな」

「マリー？どうしてだい？」

「デオンに渡したいものがあつたんだとさ。でも、良い機会だからオレから渡してくれって」

「デオンの部屋へと到着したオレ達はお茶会の続きをするつもりだったのだが、その前に一度自分の部屋に来てくれとマリーさんに頼まれたのだ。

「それでその中身は？」

「えつと……その、これだ」

ケースを置き、その中身を取り出す。現れたのは青色のドレスだった。胸元に一凛の赤いバラ、腰元には青色のリボンが結ばれており、どこかデオンがいつも来ている服装に似ている。着る者のことを考えながらデザインされたのだと手に持つだけでよく伝わってくる暖かみのある贈り物だ。オレはそれを宝石を扱うように大事にデオンへと手渡す。デオンは突然のサプライズプレゼントを前にして言葉が出ないようだった。

「これを……マリーが？」

「うん。絆レベルMAXのお祝いだって。——って、ごめん」

「どうして謝るんだい？」

「これはマリーさんから渡されるべきだったよな。元々これは彼女がデオンの為に用意していたものだし。ごめん、やっぱり今から呼んでくる」

「……待つてくれマスター」

部屋を出ようとしたオレの手をデオンが掴む。ドレスを大事に抱えたデオンは俯いたままボソボソと言葉を紡いだ。

「……その、今から着るから見てくれないか。マリーには私からちゃんと礼を言っておくから。だから、まずは最初に君に見て欲しいんだ」

「……いいのか？」

オレの確認にコクリ頷くデオン。そのままオレを椅子へと座らせ更衣室へと消えていった。

待つている時間はそこまで長くはなかったと思う。生涯のうちに女装を何度もしていたデオンからすればドレスの着用などお手の物だっただろう。しかし、それでも何だか落ち着かないオレからしたら短い時間も酷く膨大に感じた。

「——ど、どうかなマスター」

やがて更衣室から絶世の美女が現れる。青色のドレスはデオンに着られることによつてその美しさをさらに増しているように思えた。まさしく今の彼女彼女は可憐な白百合。見る者を魅了する輝きにオレは思わず目を奪われていた。

「す、すげえ似合つてるよデオン。正直、ドレスを着ているお前を見るの初めてだったから驚いた」

「ふふっ。私も、もうドレスは着ることはないと思つていたんだけどね」

「何でだ……?」

オレの疑問に困つたような表情をするデオン。しばらく考え込んだ後、意を決したようにオレと向かいのように座つた。

「——マスター。私の嫌いなことって何か覚えてるかい?」

「前話してくれたよな。確か、『笑われること』だったよな」

「そうだ。よく覚えてくれていたね。でも、どうして嫌いかまでは話してなかったよね」
そこまで言うとは、デオンは一度深く深呼吸をした。話しにくいこと、なんだろうか。それなら無理に話さなくても口をつこうと思つたが、それよりも早くデオンの言葉が

零れだした。

「私はスパイ後フランスに帰国する際、国から条件を言い渡されたんだ。それは死ぬまで女装し続けること。どうやら私の性別は賭けの対象にされていたようですね」

だから男性としての人生より女性としての人生の方が長かったかもしれない、とデオンは語る。まるでただのお伽噺を話しているような他人行儀の話し方だった。

「年齢を重ねるとね、社交界に招待されても私は『見世物』になつていた。ずっと女装を続けている私は群衆にとっていい笑いものだったんだらうね。——だから、私は笑われるのが嫌いなんだ。それは、すごく辛いんだ」

今にも泣きだしてしまいそうな表情でデオンは笑う。絵画のような美しさを見せる微笑み。そこに含まれるのは悲哀でしかない。国の為に精一杯尽くしたというのに、デオンを待つていたのは人間の醜い欲望の捌け口としての在り方だったのだ。

「何だ、それ……。そんなの、悲しすぎるじゃないか……！」

デオンがドレスを着なかつた理由も今ではよく分かる。一種のトラウマだったのだろう。また笑われる、馬鹿にされるといふことがデオンにとってどれだけ辛いことなのかオレは分かっていたいなかった。今までの付き合いの中でももしかしたら知らず知らず酷く傷つけてしまっていたのかもしれない、そう考えると彼女へどんな言葉を掛ければいいのか分からなかつた。

「ありがとう、マスター。でも、私はフランス王家に仕えた白百合の騎士。確かに辛いこともたくさんあったけど、それでも私はフランスが大好きだ。後悔は、してはいないよ」
それに、とデオンは言葉を続けた。座っていた椅子から立ち上がりオレの方へと歩み寄ってくる。歩き方まで優雅なその姿に見惚れつつも立ち上がる。今度は立った状態で向き合うような形になった。

「騎士としていられたからこうして君に出会えた。マリーやアマデウスやサンソンにも。これがいつか終わってしまう夢だとしても、今は君の騎士として居させてほしい」
花が咲くような笑顔でデオンは微笑む。さつきまでの悲しい笑顔ではなく本当の笑顔。正直、色々言わないといけないこともたくさんあった。だけど、今はそれらはあまりにも無粋だと何となく思った。

だからこそ。マスターとしてオレがデオンに伝えることは1つのみ。

「——これからもオレと一緒に戦ってくれるか、デオン」

「もちろんだよマスター。シユヴァリエ・デオン。——いや、『シャルル・ジュヌヴィエーヴ・ルイ・オーギュスト・アンドレ・ティモテ・デオン・ド・ボーモン』として、この存在が尽き果てるその時まで我が生涯で磨き上げた白百合の剣を君に捧げることを誓おう」

そう言って、デオンは笑う。つられてオレも一緒に笑顔を浮かべるのだった。

無人島の開拓をしてきたんだけど、それよりも水着美女の方が重要だよな？

「いつきますよー！勝つのは無理でも少しぐらい粘らせてもらいますからね！」

「ふふっ。どこからでもかかってくるの良い。手加減は一切無用だ」

「このマシユ・キリエライト。全力で先輩のサポートをさせていただきます」

「せっかくの砂浜での娯楽なんですよ。私も思いつきりやっちゃうわ」

どこまでも抜けていくような蒼い空。それとはまた違った澄み渡る碧の海の水平線ではモクモクと入道雲が伸びている。照りつける太陽によりオレ達の足元の砂浜はジリジリと焼き尽くすような熱を発して気温もこれでもかと上昇。だがその暑さに負けないぐらい、両者の間にはバチバチと火花が散っていた。

——ここは無人島。いつか訪れたあの島とは別の自然豊かな静かな島。そんな場所の砂浜にて今、互いの尊厳を賭けた大いなる戦いが始まろうとしていた。

ことの発端と言えはいつも通りと言えはいつも通り、我がカルデアが誇る天才ダヴィンチちゃんの提案である。季節的に世間は夏という季節が訪れているが、カルデアの周囲は基本雪で覆われているため海水浴などはできない。まあ、何故か施設内は真夏のよう熱いという不思議現象が起こっているのだが。

そこで、外で夏を楽しむむことができないのであればどこか適当な無人島にレイシフトして夏を謳歌してきてはどうかと提案されたのだ。

もちろんオレを始めとするサーヴァント達——特に去年無人島での鉄腕^{開拓}生活を送ったサーヴァント達は賛成。早速準備をして今いるこの島へと訪れたというわけだ。流石に私情が過ぎるのではないかと心配になったが、ダヴィンチちゃんを始めとする水着師匠ことアサシンクラスに靈基をチェンジさせたスカサハさんやキャスターにクラスチェンジしたマリーさん。ランサーなのにルーンもお手の物の槍ニキなどが完璧な証拠隠滅を図るということが無問題になった。魔術の力ってすげー。

ということとで早速レイシフトし、こうして夏の娯楽に勤しんでいるのである。ちなみに互いの尊厳を賭けた大いなる戦いというのはあくまで誇張表現であり別に何か賭け事をしてしているわけではない。

「行きますよー！おりやつ！」

「なかなか悪くないコースだ。だが、威力もスピードも及第点には程遠いなマスター！」

「す、凄いです！一瞬でボールに追いついてしまいました!？」

「流石はアサシンクラスということかしら？私目が追い付けないわ」

「行くぞっ！はあっ！」

「ええっ！一人でレシーブとトスをつ!？」

「予想はしてたけどやっぱ無茶苦茶だなスカサハさん！」

「こんなもの鍛錬に比べれば準備運動にもならんぞ！それっ！」

「——先輩そっちに行きました！」

「おうよっ！先輩にお任せあれだっ！」

「——甘いなマスター。その球、『消えるぞ?』」

「——き、消えたっ!？」

「あらあら。これはどういうことかしら？いつの間にかボールが落ちているわ」

「ふっ。まずは私の先制だな」

——とまあ、こんな感じで皆仲良くビーチバレーである。もつともオレとマシユとマリーさん対スカサハさんの変則マッチだけだな。つかその技、球技違う上にサーブ技なんですがそれは……。

やはりサーヴァントということは抜きにして、戦闘民族ケルトとは基本的なスペックが違うということを思い知らされる。スカサハさんビーチバレーなんてやったことがないはずなのに速攻でルールを把握し、なおかつ王子様もビックリな技まで生み出してしまっている始末。

「はあああ……。異様に疲れた……」

「途中からスカサハさんもテンションが上がってしまいましたからね。やはり夏になるとコンディションが良くなるのでしょうか」

「靈基的に関係ないとは言えないかもな。でもオレは心に決めたぞ。2度とあの人相手に勝負は挑まん」

試合が終わったことによる疲労からパラソルの下で横になるオレとマシユ。そこに赤いワンピースタイプの水着を身に纏い、何故か頭部にちっこいカニを乗せたマリーさんがパタパタと寄ってくる。彼女の場合試合には参加していたものの、うふふと笑っていることが大半だったためほぼボールに触っていない。実質オレとマシユ2人でスカサハさんを相手にしていた。一応キャスターのマリーさんは武器がビーチバレーボー

ルなため扱いは上手いはずなんですけど……。

「ねえマスター。私にもさっきのボールが消えてしまうやつできないかしら？」

「あー、うん、スカサハさんに教えてもらえばいいんじゃないですかね？」

ぐでーと疲れている状態でそう伝ええると、マリーさんはあらあらと太陽とは違う意味で温かみのある聖母のような笑みを浮かべてくる。

もはや語るまでもないと思うが試合はスカサハさんの独壇場だった。何あの人。どこにボール打ち込もうと余裕で対処してきたんですけど。むしろオレやマシユが打ちミスってコート外に飛んで行ったボールすら、これで試合を終わらせてなるものかと完璧に捌ききってたんですけど。おかげでメッチャ長引いたわ。

ただ、紫色のビキニの下で揺れるたわわが実にいい動きを見せてくれたのでオレとしては勝敗は割どうでも良かったりする。実際、師匠ものすごい美人だしね！ちなみにその件の師匠はというと新たな対戦相手を求めてどこかに行ってしまった。相も変わらずバトルジャンキーである。

「いや、やっぱやめといたほうがいいんじゃないです。ほら、スカサハさんって教える立場になると容赦ないです。マリーさん倒れちゃいますよ？」

「うーん。確かについていけないかもしれないわね……。残念だけれど、あんまりお日様の下に居過ぎると皆が心配しちゃうわ」

皆とは騎士、医者、音楽家とは別に、このマリーさんのポワポワ感にノックアウトされたカルデア職員達も含まれると余談だが話しておこう。オレ？言うまでもないね。

自分の顎に指を当て、うーんと難しそうな顔をする可愛らしい女王様。彼女の場合狙ってやっているわけではないのに非常に絵になり、もうそれを見ているだけでポワポワパワー炸裂である。うり坊が本能的に懐くのもよく分かる。

「それでマスター！次は何をしようかしら？私、少しお腹が空いちやったから、えっと……『やきそば』だったかしら？それが食べてみたいわ！」

「えっ？焼きそばですか？それは準備が必要ですから無人島であるここじゃ無理だと思うんですけど……」

「先輩先輩。その点は心配ないかと。先程ブーディカさんやタマモキヤットさんがかき氷器とか鉄板とか持ち込んで色々作ってましたよ」

「準備良すぎじゃないですかねうちのシェフ陣。あれかな、去年は礼装のみの参加だったり自分のオリジナルしか夏を楽しめなかったからかな？」

「どうなんでしょうか。あと意外な事にクー・フリーンさんも鉄板料理作ってるみたいです」

料理できたのか槍ニキ……。マシユからの報告に兄貴が焼きそばを作る絵を想像してみる。うん、何かよく分からんがすげえ似合うな。

「じゃあ、1つもらいに行きましようかマリーさん」

「ええ！どんな味がするのかしら。私楽しみだわ！」

子どものようににはしやぎ先にパタパタと行ってしまいうマリーさんを見てオレもマシユも和む。彼女を見てみると自然と笑顔になってしまうので、きつと彼女の笑顔にはポワポワパワー以外にもリラックス効果もあるに違いない。

「ふふっ。子どもみたいですねマリーさん」

「去年の無人島は開拓やら脱出やらで余裕がない部分もあったからな。こうして全力で羽を伸ばせるから気が楽なんだろ」

「私もまさかこうしてまた水着が着れるとは思っていませんでした。去年はその……身体のこともありましたし」

「……ああ。またこうやってマシユと海水浴を楽しめてオレも嬉しいよ」

サンダルで砂浜の上に2人の足跡を刻む。それだけであの死ぬかもしれない戦いを潜り抜けた甲斐はあった。

「そ、それでですね、先輩。今年のはまだ……その、ちゃんと聞くことができなかつたの聞いてもいいですか？」

「うん？どした？」

かなりシリアスな思考に浸っていたオレだが、それは身体の前で指を絡ませモジモジ

と身じろぎするマシユの様子に搔つ攫われた。紫色の髪から覗く耳は僅かに赤く染まり、どこか緊張したような面持ちの見える。えつ、どしたん？

「——あ、あの。私のこの、み、水着……どうですか？」

コフツ?!と沖田さん張りに吐血しそうになった。『おいおい、あいつ死んだわ』と脳内ボイスが聞こえる。いやいやいや。そんな真つ赤になりながら聞くとか卑怯でしょこの後輩。相変わらずの先輩特攻でオレのライフは0よっ！

「似合ってる」

「あ、ありがとうござ」超似合ってる。最高に似合ってる。可愛い。マジ可愛い。うちの後輩可愛いヤツター！」そ、そこまでは聞いてないです！」

照れマシユいただきましたあああ!!!これだけでも戦いを潜り抜けた甲斐がある（キラッ

さて、現在顔を真つ赤にして頬を両手で押さえているマシユが着ている水着について今一度説明しよう。現在彼女が身に着けている水着は去年の無人島の時に着用していたワンピースタイプ水着ではなく、今年になって改めて用意されたビキニタイプの水着である。もう一度言おう。ビキニタイプである。

日頃の彼女にしては水らしく蛍光色の黄色をベースにしたビキニはスポーティー感溢れる逸品である。胸元に彼女のシンボルである盾を小型化したような首飾りを揺ら

し、ネロ風に言うなら『ナイス、ナイス。ナイスバディ！』という美麗なプロポーシオンをこれでもかっ！と強調している。つか、ぶつちやけ色々際どい。誰だこんな水着用意したのは。まったく……グツジョブ！

「あの、先輩……。感想を求めているので申し訳ないんですが、そこまでじっくり見られると恥ずかしいです……」

片手でその豊富な胸元を、もう片方の手で下の部分を隠すようにモジモジさせるうちの後輩がビーチの天使過ぎる。恥ずかしいって？ダイソン並みに視線が吸い込まれちゃうんだよ！

「……そういや、その水着って元々礼装用だったっけ？」

「は、はい。ダイビングをしている様子が欲しいからということ。なるべく動きやすいものを、とカルデアの技術班の方々が」

「技術部のスタッフぐう有能」

「えっ？」

「いや、何でもない。感謝するべき相手が見つかっただけだから」

「は、はあ……。先輩は時々よく分からないことを口にしますね」

いかんいかん。ついこの素晴らしい水着を開発した技術スタッフさん達への感謝の気持ち溢れてしまった。本当にありがとうございます！

「もう！マスター！マシユー！早くこっちに来てくれないかしらー！」

「あつ、マリーさんが呼んでますよ先輩！」

「いつけね。行こうマシユ！早く行かないとマリーさんの機嫌損ねちゃう」

オレ達が着いてきていないことに気づいたマリーさんが離れたところから手をメガホンのようにして呼ぶ声が聞こえた。遠くてよく分からないが少しばかりプンプンと頬を膨らませているように見える（可愛い）

遅れて彼女に追いついたオレ達は謝ると、彼女はすぐにニッコリと笑みを見せる。それからは遅れることなくブーデイカさんやキャットや槍ニキが調理している場所へと3人で向かうのだった。

「よし、ここらへんでいいかな？ ダヴィンチちゃん、そつち的にどう？」

『うん、問題ないね。そこなら霊脈も安定しているしフェイトからのパスも繋げるだろうからしばらく待っていたまえ』

そこで一端カルデアとの通信が切れる。ここは無人島のある一角。先程までビーチバレーだのなんだのと遊んでいた場所の反対側に当たる場所だ。周囲を崖に囲まれてはいる中にひっそりとした小さな砂浜があり、騒然としていた先程の場所と対比されるように物静かだ。海が透き通るような翡翠色で漂い、押しては返すゆったりとした音を奏でる。大勢で来るよりも誰かと2人つきりで来たくなるような場所だった。

では何故そんなところに居てダヴィンチちゃんと通信を繋いでいたのかというと、これには深い事情がある。

「これで皆を呼ぶことができるのかしら？」

「さあな、そればかりはマスターの運次第というわけだ。そういうことだが——よ、自信はあるのか？」

「石も呼符もそれなりに用意はありますから、一人ぐらい呼んでみせますよ」

「むっ。そこは男らしく『自信しかない！』ぐらいの気概を見せ——ああ、いや。お前の運じゃ厳しいか」

「師匠師匠。そこで諦めないで。もつと自分のマスターを信じて」

残念そうにため息つくのやめて。マスター地味に傷ついちゃうから。

「それにしてもまさかマリーさんから先輩に召喚のお願いがあるとは思いませんでした」

「だって、せっかく去年滞在した島と似たような場所にいるんだもの。あの時の皆も呼んでももつと遊びたいじゃない？」

きつかけは先程ブーディカ作のゴージャスカキ氷と槍ニキ作の焼きそばを3人で堪能していた時のことである。ふと、マリーさんが島に行ったサーヴァント達を呼んでもつといっぱい遊びましょう！と表情をキラキラさせながら提案してきたのだ。元々この島でのバカンスから戻り次第カルデアで召喚を試みるつもりだったのだが、どうせならこの島で召喚できないかと考えた。なんかこう、無人島が触媒になるだろう的な適当な理由で。

そこでダヴィンチちゃんに召喚が行えるだけの霊脈を探してもらい、そこに現在カルデアの召喚システムであるフェイトのパスを繋いでもらっているのだ。

『おーい、——君。接続完了だ。いつでも始めてくれて構わないよ』

「ありがとうダヴィンチちゃん。急なお願いだったのに」

『なーに、これくらい万能な私にとって朝飯どころか起床前さ』

いや、流石にそれは意味が分かんないです。

「あら？準備できたのかしら？」

「ええ。準備完了です。早速始めますね」

「そう！ふふふっ！楽しみだわ。頑張つてマスター！」

「ふむ。マスターのお手並み拝見といこうか」

「スカサハさん、あまり先輩にプレッシャーをかけないであげてください。先輩、頑張ってくださいね」

水着の美女、美少女達に期待される。こんなに嬉しいことが他にあるだろうか。いやない（反語）

「おっしやー！やったるでー！」

気合は十分。今回の召喚の為の石と呼符も十分。もう何も怖くない（フラグ）
とりあえず呼符からいってみようか。

砂浜に刻まれ、スカサハ師匠のルーンによって固定された召喚陣の中に呼符が吸い込まれ、カルデアでの召喚されるときと同じような青白い閃光が辺りに溢れる。その光量に驚いたのか近くの木から野鳥がバサバサと飛び立っていった。あつ、騒がしくしてごめんね。

砂浜の中からクラスカードが現れる。その色は銀色——いや、バチバチとカードから小さな電のような魔力が飛び跳ね、銀色から金色へと変化する。刻まれる紋章はというと——魔術師の刻印だった。

あつれー？何だか見たことがある光景だぞー？具体的には去年の夏に見たような気がするぞー？チラリと傍らに立つ彼女達を見る。マッシュとスカサハさんは去年の召喚の時に立ち会ってくれた時のことを思い出したのか苦笑い。唯一マリーさんだけがきよとんとした顔をオレに返しにきた。そんなマリーさんの現在のクラスは——キヤスターである。

いやいや。もしかしたらすり抜けという可能性もある。玉藻さんがクラス間違えてキヤスターで来てしまったのかもしれないし、イベントフライングしてうっかりフアラオことニトクリスさんが来たのかもしれない。うん、そうに違い——

「——浜辺は好きよ。大好き！　あなたも皆も、きつと楽しみましようね？　——ヴィ
ヴ・ラ・フランス！　あら？　頭にカニさんが乗ってるわ。　ふふ、ごきげんようカニ
さん！」

——予想をぶつちぎってくれることを祈っていたが、その願いは神には届かなかつた。召喚されたのは紛れもなくキャスターのマリーさん。ものの見事に去年の再現となつてしまった。

「マリーさんが2人……！来るぞマシユマ！」

「ええつ、いきなりなんですか!?!というかマシユマつて誰ですか!?!」

「あらあら。私だわ！もう1人の私だわマスター！」

「くつくつくつ！やるじゃないかマスター！いきなり大当たりだぞ」

オレの突然のフリに対応できず右往左往するマシユ。もう1人の自分が召喚されて大興奮のマリーさん。予想通りの召喚結果に珍しく笑い声をあげるスカサハ師匠。くつ！結果だけ見るなら嬉しいのにダブってしまったから素直に喜べない……！

「あら、私がいるわ。マスター、2回も私を呼んでくれるなんてすつごく嬉しいわ」

「ええ、ええ。流石はマスターだわ。これで私達ビーチバレーでコンビが組めるわね」

「それは良いアイデアね私！早速やりましょうマスター！」

「コートはすでに作ってあるわけだし、マスターはマシユと同じチームということではないかしら？」

「待て待て待てッ！どっちが喋ってんのか分かんないですから！エウリュアレさんとステンノさんみたいになってますから！」

ええいつ！あつちと違ってこっちは完全に同一人物だから本気で分かんなくなるぞ！頼むからステレオ音声で話さないでください！

その後、どうにか落ち着いてもらったマリーさん達。後で遊ぶ約束をして、元々いたマリーさんはここに残り、今召喚された彼女は呼び出したデオンに付き添ってもらって先に他のサーヴァント達の下へと向かってもらった。被ってしまった以上宝具強化を手伝ってもらうことになるから、それまでの間はバカンスを楽しんでもらおうと思ったからである。

2人の姿が見えなくなつてから再び召喚を続ける。が、呼符での召喚はそれ以降ガツツリ爆死してしまつた。おいおい、限定礼装どころか星4の礼装すら出ないんですけど。いや、去年の礼装があるしそこまで限定礼装欲しい訳じゃないんだけどね。カーミラさんの礼装、正直超可愛いよね。

「流石に運を使い切つたか」

だから師匠見限るの早いよ！もうちよつと頑張つてよ！マスターも頑張るから！次

は最近ノリにノッてる10連だから！

「やっぱり他の皆には会えないのかしら……」

「元氣出してください！ マリーさん。先輩は精一杯やってきてますし、ダメかもしれないかもしれませんがもう少し待つてみましょう」

「師匠これっ！ この信じる心！ 大事ですよ！」

「いや、微妙にマシユは信じていないような気がするが……」

聞こえない聞こえない！ そんなオレの希望を打ち砕くような言葉は聞こえない！ まずは10連1回目だ、おらあああ!!

「礼装、礼装、あつ、アタランテさんの礼装です。おやつ？ これはテスラさんとエジソンさんの礼装です。これは初めて入手ですね。あとは……目ぼしいものはありません。普通の召喚結果です」

「ちつくしよおおおおお!!」

召喚されたものを皆で回収していく。礼装はほとんど見慣れた者ばかりで、唯一エレクトロ発明家コンビの礼装が初。召喚されたサーヴァントはいつもの星3勢だった。ちなみに牛若丸ちゃんにハサンさん、ジキルさんでした。すげえ安定感（白目）

「マスター……」

「先輩……」

「OK OK！そんな心配そんな目で見るなって！まだあと10連1回分の石はある！これで決めてやる！絶対だ絶対！」

だからそんな寂しそうな眼を向けるのはやめてくれっ！しようがないじゃん！最近運氣上がってきてるとはいえ元々の幸運のランクが底辺なんだから！これ以上落ちようがない最低ランクだったんだから！

「マスター。あまり気負い過ぎるなよ」

「さつきまで一番期待して無かった人に一番心配された……！」

フオローがこんなに痛いものだとは知らなかったぞ……。にやろう！こんなったら意地でも引いてやんよっ！何より水着美女少女の喜びの為に！あと、個人的に水着サーヴァントが増えて欲しい欲の為に！（野心）

「水着の神よ……！我に幸運を……！」

「どう考えても不純な神様だと思います」

「私が殺してやろうか？（神殺し）」

貴方今クラス違うじゃないですかヤダー。というか人が祈りを捧げている神を殺そうとすんなし。ゲイ・ボルクを自身の周囲に突き立てる師匠を横目にオレは召喚サークルに石を投入。さあさあさあ！そろそろ来てくださいよーマジで！

「——おや……？この反応は」

「うむ。金色だな」

「ええ、金色ね」

「おっしやあ！金色じゃああああ!!」

ポンポンと礼装が召喚される中、一際強い輝きを見せる召喚反応があった。やがてその光の帯は白色から金色の輝きへと変化。中心から徐々にクラスカードが露わになる。

「このクラスは……!」

「あら？何だったかしらこのクラス？」

「珍しいクラスが来たな。これは『ルーラー』のクラスカードだぞ、マスター」

師匠の言う通り現れたのは裁定者が刻まれた金色のクラスカード。高レベルのルーラーのサーヴァントが召喚されたということの意味し、ましてや今は水着サーヴァントの召喚を試みている状況。つまりは、十中八九あの人物が召喚されたということである。

「——マルタ。改めて参りました。どのような姿であろうと、私は私です。——迷いなく、あなたと共に世界を救います」

「グラツプラーウーマンという名の殴ルーラーだああああ!!」

——ドオン!と破裂音のような音を響かせて大気が揺れた。一瞬遅れてブワツと風が巻き起こりオレの髪を巻き上げる。召喚できた歓喜に震えていたオレのテンションが一気に急降下し、ガクガクと震えながら目の前で拳を突き出す(拳)聖女の表情を確認する。

「今、私のことをなんて言ったかしら? (笑顔)」

「すんまつせんでしたああああ!!」

砂浜が熱いかそんなことは二の次。姐さんに慈悲を請う舎弟のように土下座。マスターとしてのプライド? 殴られたら頭パンする相手には不要でしょ(恐怖)

「まったく、ようやく呼ばれたと思つて来てみれば相変わらざるの緊張感のなさ。本来英霊召喚というはもつと神聖なものはずなのよ?……はずですよ?」

クドクドと素の喋り方と聖女っぽい喋り方を織り交ぜながら砂浜に正座するオレに説教を垂れるこのBB絶対殴り殺すウーマンさん。流星、ベオウルフさんを殴り倒すだけのことはあるぜ! 容赦がない!

「マ・ス・タ―？今何を考えていたのかしらあ？そろそろ拳で語ってほしいのかしら？」
「いいいいいい!!何にも考えてないです、ハイ！」

「ごめんなさい!ごめんなさい!と何度も頭を下げるオレの姿に怒りを通りこして呆れてしまったのか、アイアン・ビュッティ鉄拳の女神ことマルタさんは1つため息をつくとおレへと手を差し伸べてきた。

「ほら、いい加減その悲しくなるような弱腰やめなさいつて。これからまた私のマスタ―になるんだしシャキツとして頂戴」

「はーい」

差し伸べられた手を取ると女性とは思えない力で引つ張り上げられる。流石は肉弾戦を主とするマルタさんであつた。でも、握つた手がとても拳で語るような人物の手とは思えないぐらい柔らかかつたし、黒いビキニ凄く色つぼくて前見たことがあるとはいえちよつとドキドキしました、まる。

「マルタさん!お久しぶりです!」

「久しぶり聖女さん。また会えて嬉しいわ」

「良い鍛錬の相手が来てくれたようで幸いだ」

「マシユ、マリーも久しぶりね。またよろしく願いますわ——しますわ。あと、その水着ケルト。なんで戦うこと前提なのかしら。戦わないからね!」

わちやわちやと女性陣で大いに盛り上がる様子をオレは眼福眼福と笑顔で見守る。いやー、新たに水着美女が増えてマスターはとても嬉しいですわー。こう、あれだね。ここは楽園だね（悟り）

「そうだわ！聖女が来てくれた今なら、『ビーチバレー』も勝てるかもしれないわ！」

「ほう、言うではないかフランスの王妃よ。リベンジということならいくらでも受けて立ってやろう」

「ええっ！またやるんですか!？」

「あら、何かするのかしら？えっ？ビーチバレー？それなら素手で殴っ——ゴホン、ゴホン！ええ、せっかく現界したんですから、娯楽に興じるのもよいでしょう」

そして、一斉に向けられる4対の視線。どうやらさっきの提案は決定事項らしい。オレとマシユが反対したところで人数的に勝てないのだ。

「——ああ、空が青いな」

照りつける太陽の光を浴びながら、燃え滾る砂浜の上でオレは勝敗はどうなろうと間違ひなくポロポロになる未来を想像しながら、せめて彼女達の水着を目に焼き付けようと固く決心するのだった。

—黄昏、無人島にて—

「今日は楽しかったですね、先輩」

「ああ。まあビーチバレーで師匠にボッコボコにされたことを除けばだけだな」

「ふふっ。そういうって先輩もものすごくはしやいでたじやないですか。『負つけるかあああ！』って気合十分で」

「うっ。そう言われると否定できない」

日が暮れつつある砂浜にオレとマシユの話し声、そしてゆったりとした波の音だけが

穏やかに響き渡る。辺りがオレンジ色に染められ、広大な海岸線に一つに大きな光が沈んでいく様子は自然がもたらす絶景。この情景を今にも切り取ってしまいたくなる美しさだった。

今頃、少し離れたところではカルデアへの帰還の準備が行われている事だろう。オレも手伝おうとしたのだがサーヴァント達、それも槍ニキを筆頭に男性サーヴァント達がニヤニヤしながらマシユを連れて散歩にでも行つて来い、こつちのことは俺達がやつておくからと半ば強引にオレ達2人を送り出したのだ。そこで行く当てもなかったオレ達は昼間の召喚場所へと再び赴き、そこで今日あったことを話していた。

「それにしても、怪鳥音を出し始めてからのマルタさんはすごかったですね。まさかスカサハさんと互角にラリーを続けるとは」

「結局はオレ達が足引っ張つて負けちまったのは申し訳なかったな。マルタさん全然気にしてなかったけど」

「ああいう、お姉さんのような余裕も同じ女性として尊敬しますね」

それ、尊敬だけで止めといてね？間違つても見習おうとか思わないでね？マシユが拳で語るようになつたりしたらオレ泣くからね（必死）

「本当に、楽しかったですね」

「……ああ」

互いにこの時間を嘯み締めるように言葉を零す。この時間が終わればまた特異点を巡る戦いが待っている。そこは何が起こるのか分からない戦場だし、極端な話こうして2人でゆっくりと過ごす時間はこれが最後になるかもしれない。まあ、その場合確実にいないのは特異点に乗り込むオレなだけだよ。

「——先輩、何か悲しいことを考えていませんか？」

「……マシユはすごいな。オレのことは何でもお見通しだ」

「そんなことはありませんが……。でも、今の先輩の表情が気になってしまつて」

「まあ、ちよつとな。次の特異点からもちやんと生きて帰つてこれるかねーつてさ。少
しだけ考えちまつた」

なるべく心配させないように明るい雰囲気で言つたものの、マシユは顔を俯かせながら自身の足を抱きかかえて黙つてしまつた。言葉のチョイスをミスつたかと頭を掻いていると、ぼそりと小さく『嫌です』と聞こえた。

「マシユ？」

「嫌です。先輩がいなくなるなんて私は嫌です」

「い、いや、これはほんの例えみたいな感じで。もちろん、そう簡単にくたばるつもりは
ねえぞぞ？」

「嫌です。私は先輩と離れたくありません」

「あの、ごめん。なんか嫌なこと聞かせちゃったみたいで」

「嫌です。先輩、ずっと私のそばに居てください」

「マシユ……」

ふるふるとその細い身体を震えさせながら頑なに嫌としか言わない彼女にどう返せばいいのかわからず困ってしまう。いきなりどうしたというのだ、なんてそんな察しの悪いことは思わない。彼女がここまで意固地になる理由はなんとなく分かつていた。

楽しい時間があればあるほど人はそれを失った時の悲しみや絶望は大きくなると聞いたことがあるが、今のマシユはまさしくそれなのだろう。人としての当たり前の生を謳歌できるようになった彼女は短い間にたくさんの思い出を作った。だから、今になって自覚し始めたのだ。それを失うことの恐怖を。思い出を一緒に作ってくれる人物がいなくなるこの絶望を。

頭の片隅でいつか必ず取り戻すと誓った友達のこと、脳裏を掠める。幼いマシユとずっと付き合ってきた彼ならどんな言葉を伝えるのだろうかと思像する。結果、不器用な言葉でワタワタと慌てながらも必死にマシユを元気づけようとするだろうと思ひ、そんな想像の中の人物に苦笑い。ならば、オレも不器用なりに頑張ってみようと思ひ——

「嫌——えっ?」

「——大丈夫」

隣に座る彼女の細い身体を抱き寄せる。水着という薄い布切れ一枚でしか覆われていない彼女の身体から直に体温が伝わってくる。片方の手で肩を抱き寄せたまま、もう片方の手で彼女の柔らかい髪を撫でた。

「大丈夫だよマシユ。心配しなくても必ず帰ってくる。オレの帰るべき場所はカルデアで、そしてマシユの隣だから。どんな相手だろうとオレとサーヴァントの皆は負けな
い」

オレはマシユの自慢のマスターなんだろ？といつかの彼女の言葉を返す。その言葉を覚えていたのかマシユは少しだけ潤んだ大きな瞳にオレを映した。頬を赤く染めているのは夕日のせいかな、それとも。

マシユはしばらく何かを言おうとして口を閉ざすということを繰り返した後、またぼそりと呟いた。

「——約束ですよ、先輩」

「ああ。もちろんだ。オレがマシユとの約束を破ったことがあったか？」

「結構あった気がします」

「……ああ、うん。そうかもしれん」

あまりの即答に言葉を見失ってしまった。うん、冷静に考えると結構あるな。こりや信用ねえわ。

「——ちゃんと帰ってきてくださいいね。私は先輩と今日みたいな楽しい時間をもっともっと過ごしたいです」

「ああ。オレだつてまだまだマシユに見せたい世界がたくさんあるしな。必ず帰るよ」

絶え間ない波の音に包まれながら、オレ達は迎えに来たサーヴァント達が現れるまで2人で語り合つた。これまでのこともこれからのこと。先のことなんか分からないけど、いつか帰る場所がある限りオレは決して居なくならない。その誓いだけは絶対に破らない。

どうでもいい話だが、密着しあっている2人のこの状況をサーヴァント達に揶揄われたのはいうまでもない。

星5確定ガチャって有償だったんだけど、それをふまえても破格のガチャだよな？

「——あつ、先輩。どうしたんですか廊下でボーとして」

「……マシユか。いや、何でもないよ」

とある日。オレは先程入手した『ある物』を手に廊下で考え事をしていた時偶然通りかかったマシユが不審そうに声をかけてきた。恐らくこれからまたオペレーターの勉強をしようとしていたのだろう。抱えたたくさんの資料やノートがその豊満な胸元の形をわずかに変えている。

そんな彼女をしり目にオレは何とも言えない微妙な返事を返す。これから行おうとしていることへ思いを馳せていたためかなりおぎなりの返事になってしまった。

「そうですか？ なんだか酷く思い詰めているように見えました。あれ？ 先輩その手に持っているのは？」

「……………」

「——待ってください。先輩、どうしてそれを先輩が持っているんですか」

「これは……………」

「それは先輩にとつて不要だと以前おっしゃってましたよね。それなのにどうして今持っているんですか」

「……………」

いつかは明るみになることで、だから別段隠すようなことでもなくすぐにその問いに對する答えを述べてもよかつた。しかし、今彼女が言つたように以前オレは『これ』を自分には不要なものだと彼女に豪語していた。そのことがオレの口を重くさせ、すぐに言葉を発せられない。

「答えてください！先輩言つてたじゃないですか！これに頼らなくても自分は戦えるつて！それなのにどうしてですか……………!!」

眼鏡の奥の瞳を揺らし、理由が分からないと彼女は追及する。その怒っているような悲しんでいるような視線に耐えきれずオレはマシユに背を向けて歩き出す。先輩つ！とマシユがもう一度大きくオレを呼ぶがそれに答えることなく『ある人物』の下へと向かう。

——背後でもう一度、小さく先輩と呼ぶ声があった。

「——本当にいいのかい？」

「——ああ。もう決めたんだ」

そこはカルデアの中でも特に未知の領域であった。壁一面に張り巡らされた設計図に何に使うのか分からない機械と山積みになされた書物。所詮凡人でしかないオレにはそれらがどういいう意図で置かれているのか皆目見当もつかないが、この部屋の主——ダヴィンチちゃんにとっては意味のあるものなのだろう。

向かい合うように対面しているオレ達はどこかピリピリとした空気を醸し出しながら言葉を交わす。いや、ピリピリとしているのはオレだけ。ダヴィンチちゃんはどこまでも面白そうに口元を歪め、興味深いものを見る様な視線を向けてくる。

「今から君がしようとしていることは、これまでの君の決意を真つ向から否定することになる。己の誓いを破ることになつてもその選択を変えるつもりはないんだね？」

「……確かに、オレは今までこの誓いを胸に秘めてきた。どんなに絶望的な状況だろうとそれを覆したりはしなかった。さつきマシユに見つかった時も言われたよ。どうしてつて」

そうして思い出すのは数分前に会つた後輩の顔。明らかな動揺を見せながらギョツと抱えていた資料へ力を込め、大きく開かれたその瞳は驚愕に揺れていた。その顔を振り払うようにオレはダヴィンチちゃんへと言葉を紡ぐ。

「だけどな、いい加減意地張つてばかりじゃなくて一步踏み出さなきゃいけない時が来たんだ。このチャンス逃したらオレは前に進めない、そう思ったから」

「そうか、それが君の新たな決意か。ならばこの天才はカルデアのマスターたる君を尊重しよう」

「すまない、ダヴィンチちゃん。今まで散々意地張つて頑なに拒んでいたのに。こんなあつさり手のひら返しちまつて」

「なに、構わないよ。これで君の手助けができるなら私も本望さ」

でも、ちゃんとあとでマシユにも事情を説明しておくんだよ？とモノリザの顔で聖母のような笑みを浮かべる彼女。メカメカしい腕がこの時ばかりは非常にアンバランス

に見える。その笑顔に感謝しつつ、オレはある物を取り出して彼女に渡した。これがオレの新たな可能性を開く力になる。大きな希望になる。だからこの選択に後悔はない。さあ……それじゃあ行こうか。

「——毎度あり♪これが10連分の聖晶石だよ。今後も御鼻屑に♪」
「やつふうううう！ついに手を出しちまったぜっ！」

初めての有償ガチャへ。いざ参らん！

さて、今まで散々無課金無課金と無課金勢を主張し続けていたオレなのだが、ついにその主張を捻じ曲げる時が来てしまった。そう、星5確定召喚である。どうしてそのようになっちゃったのかその経緯に関しては知らないがなんか召喚システムにそういった異常が起こっているらしい。だが、生憎その召喚は普通に手に入れた聖晶石ではなく、ダヴィンチちゃんの下で買った聖晶石でないとダメと言うことらしい。

そのため身を切る思いでオレは決断。無課金勢から微課金勢へとランクアップすることを決めたのだ。そして先程魔法のカードとかいう林檎マークのカードを使い、ダヴィンチちゃんから聖晶石を購入。こうして召喚部屋へと赴いたのだ。

先程マシユに見られたのはこの魔法のカードである。以前からオレは絶対無課金主義を掲げており、それをマシユを始めとする多くの人物に語っていたのだ。それなのにこうして手のひらクルーしてあっさりと手を出している。さつきマシユに会った時に何も言えなかったのは単に恥ずかしかつたからだ。『課金？オレには必要ない』と

自信満々に語っていたのに魔法のカードを入手しているところを見つかってしまいメツチャ恥ずかしかったからだ。

あと、これは邪推だと思うんだがどうして買った聖晶石でないとダメなんだ？これってどう考えてもダヴィンチちゃんか召喚システムフェイトを弄ったとか思えないんだけど。どう考えてもあの天才の手のひらの上でコロコロされているとか思えないんだけど。流石にカルデアの要であるフェイトをそんな思い付きのような感覚で弄ったりはしない……よね？石を購入する時すっごいニヤニヤしてたけど関係ないよね？ねっ!?

「そこんところどう思う?」

「はっはっは! 召喚システムについて聞かれても俺にはさっぱりだぞマスター。弓兵には矢を放つことぐらいいしか出来ないからな。魔術だの何だのを考えるのは専門外だ!」

ましてや天才の言うことはなおさらだな、と気持ちのいい笑い声をあげる人物。ペルシャの大英雄にしてアーチャーの語源ともなった英霊。アーチャークラスのくせして弓とか使うの?とか『ステラアアア!!』とか意味不明な言及をされるアーラシユ・カマンガーさんその人だ。

「アーラシユさんの千里眼でも分からない?」

「おいおいマスター。俺の千里眼は少しばかり目が良いだけだぞ。流石にそこまでは分

からんさ」

いや、あなた少しばかり目が良いとか言ってるけど千里眼Aクラスだからね？Aクラスと言えば遠くが見えるとかそういうレベルじゃなくて、未来視とか読心とか可能なレベルだからね？相変わらずこの大英雄は謙虚だ。星1なのが間違いないかと思うぐらいの逸話があるんだし、むしろ星5でもいいじゃん。

「それで誰を召喚するつもりなんだ？」

「うーん、星5確定とはいえ今回は闇鍋状態だからな。完全に運任せだ。もしかしたらすでにいる星5のサーヴァントが来るかもしれないし」

「まあ、それなら宝具強化……って言ったか？それでいいじゃねえか」

「うん、オレもそこまで拘ってはないよ。新しいサーヴァントが来るなら戦略の幅が広がってよし、すでにいるサーヴァントが来ても戦力の底上げができるから良しって感じかな？」

そう言いながらオレは先程購入した聖晶石の集まりに目をやる。星5確定と分かっているからだろうか、虹色の輝きを持つその石は今日は一段と輝いているように見えた。まるで『今日ははりきつちやうぞー！』と声高々に主張しているかのようである。もちろん、気のせい。

「俺はいつでも準備はOKだぜ、マスター。いつでも始めてくれ」

「了解。それじゃ、いっくぞー！」

いつもと違う輝き有を見せる聖晶石石を召喚サークルへと投げ入れる。途端にグルグルと激しい光を放ち始めた召喚サークルは徐々に金色の光を放ち始め、大きな光彩を煌かせる。ビリビリと高魔力の感覚を肌で感じたオレはこの光の中心で星5のサーヴァントが召喚されたことを悟った。

「いきなりお出ましのようだな。魔術には詳しくねえがよく分かるぜ、この強烈な圧力」「うん、オレも分かる。あまりの反応の強さにクラスカードを見逃しちまったからクラスは分かんないけど間違いない星5だ。アーラシユさん、一応バーサーカーであることも警戒しておいてもらえる？」

「お安い御用だ」

あまりの魔力に部屋全体が微振動を起こしてる中、オレとアーラシユさんは非常事態にも対応できるように身構える。だが、光の中から現れた人物を目視した瞬間その心配は杞憂だったことに気づく。なにせ、以前共に戦ったことのある相手だったからだ。

カシャンカシャンと軽鎧の音を響かせながらオレの目の前へと歩いてくる人物。背丈は180を超えるぐらいの長身で中心に白、その周りを黒で染め上げられたフードを目深に被り、白銀の鎧と光らせ蒼い衣を揺らめかせる。

圧倒的魔力量に人の上に立つ者の風格。オレは知ってる、この人物を知っている。以

前レイシフトの事故によりたった1人で飛ばされた先で出会った英霊。オレの命を2度も救ってくれた恩人。この世界の英霊とは違った神秘を秘めているサーヴァント。その名は――

「――僕はセイバー。君を守り、世界を守る――サーヴァントだ」

別世界の伝説に刻まれた人物。アーサー・ペンドラゴンその人だった。

「……まさか貴方が来てくれるとは思いませんでした」

「僕もこんなに早く君と再会できるとは思っていなかったよ、異世界のマスター。いや、この場合僕が異世界のサーヴァントということになるのかな？」

「ここに召喚された以上異世界とか関係ありませんよ。ですが、お会いできて光栄です。アーサー王」

「そんなに堅苦しくならなくてくれ。今の僕は一介のサーヴァントで君はそのマスター

だ。主従的には君の方が上なんだしもつと砕けた話し方で構わないよ」

「……分かった。じゃあ、いつも通り話させてもらおうよ」

うん、そうしてくれと笑いながらアーサー王はフードを外す。その下から現れたのはもはや形容しがたい超絶美形だった。白馬の王子様という言葉があるが、まさしくこの人物の為にある言葉なのだろうと思う。絹のようにサラサラとした金髪にどこまでも透き通る翡翠色の瞳。神が創造したといわれても何の疑問も持たないぐらいのイケメン。おや、どこかでファブリーズと聞こえたような。

あとどうでもいいんですけど、他のアーサー王達と同じようにアホ毛はあるんですね、何でそこだけ絶妙にピヨコンとしてるんですか……。

アーサー王の容姿に人間として完全敗北を味わっていたオレだったが、すぐ隣に立っていたアラシユさんが一歩踏み出したことに正気に戻る。あれ？どうしたんですか？

「——まさかお前さんがここに召喚されるとはな」

「君は……！」

今までオレへと向けていた視線をアラシユさんに向けた瞬間、アーサー王の表情が驚愕に染まる。その反応に苦笑しつつ弓兵は柔らかい口調で言葉を続けた。

「そう硬くなるなって。どうせ申し訳ないとか考えてるんだろ。いいんだよ、『あの戦

い』の最後には俺も満足してるしな」

「……君は変わらないな。そうやってハッキリと物事を割り切れるその強さは羨ましいよ」

「はっはっは！かの騎士王にそう言ってもらえるとは光栄だな！まあ、とにかくだ。過去のいざこざのことは忘れて、とまではいかねえが折り合いをつけていこうや。ここじゃ俺達はまた手を組めるんだからよ」

「そう、だね。分かった、これからよろしく頼むよ」

「おうーこつちこそ頼りにしてるぜ！」

大英霊と騎士王がすごく楽しそうに話してる……!?というか内容がなんのこつちやっつて感じでまるで分かんないんだけど。なに？この2人って戦ったことあんの？でもアーラシユさんの言葉的に仲間でもあった？うーん、分からん。

「おおっと、すまねえなマスター、勝手に喋って盛り上がっちゃって」

「つい昔語りをしてしまった。すまないマスター」

「いや、別に構わないんだけどさ。というか2人は知り合いだったのか？」

「まあ、な」

「その話はいつか時期が来たら話してあげるよ。僕にも覚悟があるし、何より長い話だからね」

「ふーん。じゃあ、楽しみにしておくよ」

たぶんだけど、きつとこの2人の間で交わされた会話はすごく大変なことに關してだったんだと思う。サーヴァントが戦うなんて聖杯戦争ぐらいいしか思いつかないし、ということはい互いに敵対していたはずなんだ。聖杯戦争は戦争の名を冠しているように命のやり取り。話しにくいこともたくさんあるだろうから、ゆっくり話してくれればいい。別に焦らなくても大丈夫さ。

「それじゃ早速他に召喚された礼装とかを回収してアーサー王の歓迎会をしようか」

「おつ、そりゃいい。なら俺も久しぶりに手伝うか。ひよこ豆のペースト作ってやるから楽しみにしとけよ」

「マジでっ!?アーラシユさんのひよこ豆のペーストとかレアじゃん!アーサー王も楽しみにしてた方がいいぞー!」

「それなら僕も何かお手伝いしよう。これでも料理は得意な方なんだ」

えっ?王様なのにな?うちにも一応アルトリアさん(サンタ)いるけど食う専門だよ?ターキーばっかり食べてるよ?

「まあ、ブリテンの料理は……なんとというか色々アレだったからね。絶品とは言わないけどそれなりにはできるよ」

生まれた土地の風習のせいかな第三者によると味が雑把らしいけどねと苦笑する王

様。いや、それでも少なくとも人に食べさせることができる料理を出せる時点まだマシだよ。ほら、うちにはいないけど円卓にじゃがいもをマッシュすることしかできない騎士とかいたから。あとは一口食べただけで死ぬポイズンクッキングをしやがるドラゴン娘とかもいるから。食えるだけ上等だ。

「でも流石に主役に手伝わせるわけにはいかないよ。アーサー王はカルデア内の探索でもして時間を適当に潰しておいて。料理に関してはオレとかブーディカさん、キャットでどうにかするから」

というか、基本的にこのメンバーである。あとはお手伝いでマッシュが手伝わってくれて、俵さんが食糧を提供してくれるぐらい。うちのサーヴァント達食うだけ食って手伝わってことしねえからな。ああ、早くエミヤか頼光ママをお呼びして戦力を増やしたい……。

今回はどんな物を作ろうかと頭の中でレシピを探しながら回収物を回収している時だ。すぐ近くで礼装を拾ってくれているアーサー王に聞きたいことがあったことを思い出す。

聞くとしてもタイミング的かどうかと思ったが1度思い出してしまった以上気になるため、思い切って尋ねてみることにした。

「なあ、アーサー王」

「……？何かなマスター」

「前に会った時に言ってたよな。ロマンに会った時、オレのことを話していたって。なんて言ってたんだ？」

「……………」

時間にして数秒、しかしオレにはそれ以上に感じる沈黙だった。どうしてすぐに答えてくれないのかモヤモヤする間だったが、うつすらと笑みを浮かべるアーサー王は懐かしむように口を開く。

「——『愛と希望を担う誰か』。彼はいつか僕が出会う君のことをそう言っていた。そして、彼の言っていた通り僕はこうしてマスターである君の下へと召喚された。彼——ロマン・アーキマンの言っていたことは間違いじゃなかった」

「——そうか」

優しく紡がれる言葉にスーツと小さく息を吸って吐いた。

その言葉だけで十分だった。その言葉が聞けただけで満足だった。

「話してくれてありがとう、アーサー王」

「いや、これぐらいお安い御用だよマスター」

「これからよろしく頼む。オレはロマンの言葉を信じてこれからも戦う。だから貴方も力を貸してほしい」

「もちろんだともマスター。以前僕は君に言ったよね。君が世界を救うという意味を見せてくれるなら、僕も星の輝きを君に見せようって。聖剣の担い手として星の力をもつて世界の敵を切り払おう」

「その後のマスターとマシユ」

「何もあんな風に逃げなくても良かったんじゃないですか」

「いや、だって恥ずかしかかったんだもの。これ以上ないぐらい恥ずかしかかったんだもの」
「確かに先輩は課金はしないとずっと言っていましたからその気持ちは分かります。でも、私は驚きはしましたけど本当にそれだけです。先輩がそれでよいと判断したのであれば私は何も言うつもりはありませんよ」

「えっ、『プー、クスクス。あんなに自信たつぷりに課金しないとか言ってたのにあっさり欲に負けてるの？はっずかしー！』とか思わない？」

「思いませんから。私そんな毒舌っぽいこと言いませんよ」

「えっ？」

「えっ？」

「……………」

「……………」

「——男版のアーサー王ってイケメンだったよね。まるで白馬の王子様だった」

「今の微妙な空気には触れない方がいいということですね。ここは会話の流れを汲むできた後輩力を発揮します。……確かにすごかつこよかったですね。それに物腰も柔らかくて非常に紳士的でした」

「……やっぱりマシユもあんな感じの人が好みだったり、する？」

「そ、そんなことはないです。確かにすごく魅力的な方だと思えますが」

「超イケメンで身長も高くて性格良くて最高クラスに強くても？」

「はい。だって私は……」

「私は……？」

「あつ……！な、なんでもありませんから！さ、さあ先輩！そろそろトレーニングのお時間ですよ！アーサー王さんとの初めての訓練なんですししっかり準備していきましよう！」

「あつ！ちよつ！ズルいぞマシユ！何て言おうとしたんだよ！教えてくれよ！おいマシユ——」

女神って威厳を感じたりするんだけど、神話を見ると善悪が酷く極端だよな？

——『女神』という存在を知っているだろうか？読んで字のごとく女性の神。神話と名付けられる物語には必ずと言っていいほど登場してくる、力の面でも美や知的さという面でも人間をはるかに凌駕した存在である。一般的には勝利の女神や美の女神といった比喩表現として用いられるが、神秘が衰退し科学が発達した現在ではその存在を信じる者はごく少数だろう。

家系こそ魔術的要素を持ち合わせたオレの家だが、その血は衰退への未来をジエツト機で飛びぬけており、魔力の濃さも質も『たったの5か、ゴミめ』と言われても仕方がないほど没落している。そんな、一応魔術も齧ってますが小指の先レベルですよーを地で行っている父親には——

『女神とかよく物語に出てくるだろ？実際にいるんだぞ、アレ』

と、ものすごくアバウトな説明は頂戴していた。あまりにアバウトすぎてこの話を聞いた当時のオレはまるで信じていなかった。確かに魔術はあるだろうが、神などは所詮事象を人々が勝手に神格化して崇めているだけなのだとしか思っていなかった。

それに舐めないでほしい。こちらら科学に染まりきった生粋の現代っ子だ。ゲームとアニメと漫画が大好きな普通の一般人（笑）だ。二次元の世界でならまだしもこの三次元の世界で神とか女神とかないわー、オレの女神は画面の向こう側だわーと考えていたのだ。このカルデアに来て数多のサーヴァント達と出会ったまでは。

そう。女神は本当にいたのである。日本だのギリシャだのエジプトだのローマだのと神話はそれこそ数えきれないほど存在するが、それに名を刻む女神はマジでいたのだ。

さて、ここで一つ問いたい。女神と聞いてどんな印象を持つだろうか？可憐や慈愛といった印象をまずは持つと思う。実際、日本語において女神という言葉はマイナスの印象で使われていることはまずないし、きつと美しさと優しさの塊のようなものだと思うだろう。

だが、いざ神話を紐解いてみると女神がそういうものとはかけ離れたものであるということはすぐに分かると思う。殺し、騙し、裏切りは当たり前。冤罪や誘惑からの寝取りに支配。時の権力者をいともたやすく狂わせ滅ぼした国の数は数知れず。女神にはこのように悪と断罪されるようなものを行っているお話が多々ある。つまり一般的な印象とは所詮イメージ程度でしかなく、実際はドン引きするようなものばかりなのだ。

神であるため純粋な力があることは認めよう。そりゃ母性もあるだろう。優しさや

慈愛がある女神もいる。しかし、それ以上にこいつらはヤベーのだ。女神とはそういう存在だったのだ。

「さて皆、まずは今日集まってくれたことに感謝するよ。この開廷を宣言した理由というのはずでに分かっていると思うけど、数日前の騒動の件だ。今回の騒動だがここで裁判員の意見を聞きたいと思う。酌量の余地は個人的にないと思うんだけど皆はどう思う？」

『ギルティ』

「はい、ということとで今ここに判定を下します。被告人は有罪」

「ちよっ！待って待って！こんな一方的な裁判なんて無効よっ！弁護士を呼ぶことを要求するわっ！」

「と、申しておりますがルーラー弁護士ジャンヌさん、およびマルタさん。どうしますか？」

「ギルティ」

「弁護士すら見放したっ!？」

「ではこれにて第78回カルデア裁判は閉廷。速やかに被告人を連れて行ってください。彼女には一週間カルデア内の清掃を命じます。隅々まできちんと掃除するように。埃1つでも残そうものならカーミラさんの『幻想の鉄処女』ファントムメイトの刑に処します」

「やめてよっ!?!今の私はライダーなんだから死ぬわよっ!?!」

あああああっ！放して！！ 弁解ぐらいさせてよもうおおお!!と力自慢の

ヘラクレスさん
サーヴァントに連れていかれる被告人——もといライダークラスにチェンジした女神イシユタル。自慢だと謳っていた艶のある綺麗な黒髪ツインテールをボツサボサに乱れさせながら扉の向こうへと消えていく彼女を見送った後、続々とサーヴァント達がこの裁判室から退室していった。

「先輩お疲れ様でした」

「マシユもお疲れ。とはいっても速攻でケリがついたから疲れるまでもなかったな」

「裁判員全員のギルティからの即判決。弁護士に名乗り出てくれる人もいませんでしたし、皆さん検事の状態でしたからね。開始5分掛からずに判決を出すとは鮮やかです、先輩」

「それだけあの駄女神に引つ掻き回されて腸煮えくりかえってたつてことだろ」

「ちよつぱりイシユタルさんが不憫でしたが……」

苦笑しながらマシユは大英雄に連行された女神のことを案じる。いやいや、心配しなくていいだろ。今回ばかりは自業自得だ。

さて、何故こんな魔女裁判もビックリな裁判をしていたのかというと、まあ説明するまでもなくこの前のイシユタルさん主催のイシユタルカップのことである。特異点が見つかったと宣いやがったあの女神さまはあろうことかサーヴァント達を勧誘しレース大会を開催。特異点修復に必要なことだと法螺を拭いた挙句、実はこの大会は彼女の

最大戦力であるグガランナを復活させるためだったのだー！あつはっは！と悪役っぷりを存分に発揮。カルデアの職員とサーヴァントを大いに巻き込んだ大騒動を引き起こしやがったのである。

いやね、オレもレースは楽しんでたよ？水着は最高でしたよ？それにこの騒動がウルク攻防戦の時に役に立てなかったって言う後悔（とお金儲け）から来てるのも分からんでもないよ？

だがやり方が悪かった上に監獄にお世話になったり、メイブちゃんサイコーしたり、終いにはグガランナでオレ達に襲い掛かってきた——本当のグガランナの強さを考えれば戯れにも等しいが——と問題ばかりが発生したのはいただけない。結果、完全に顕現しきっていなかったグガランナは哀れにも同じく金星の女神であるケツアル・コアトルのバツクドロップからの脳天落としを食らい、イシユタルさん本人はこうして裁判を迎えたのだ。

ちなみに『私は駄目な女神です』という名の再利用品リサイクルを持って出頭していた。無駄に律儀である。

「お前のご主人様も完全に悪い訳ではないんだけどなー」

「モウウウ……」

「なんだかごめんなさいって謝ってるみたいですね」

オレはマシユの腕に抱えられた生き物を撫でるとしよぼんとした鳴き声を発する。この子は何故かクラスチェンジしたイシユタルさんについてきた『ミニグガランナ』だ。グガランナの幼体と言つてもいいかもしれない。どういう生態なのかさっぱりだが、基本訳の分からないものが蔓延っているカルデアからしたら些事なので問題ない。あと、さつきからオレの肩に乗っているフォウ君からの圧力がすごい。覇気でも纏つてんのかつてぐらい重い。カルデアマスケットとしての立場が危うくなっていることを感じているためなのだろうがいい加減霸王色でも発しそうで怖いです。

「よし、じゃあ早速ちゃんと清掃しているか監視に行くか」

「そういえば、よくよく考えればイシユタルさんって清掃のやり方つてご存知なんでしょう？あの方は女神ですし、掃除なんてやったことがないのでは？」

「別に本当にピッカピカにできるなんて思っていないさ。反省の色が見えればそれでよし、だ」

だつてあの女神うっかりが酷いんだもの。綺麗になんてできるわけない。だが、今更ながら罰を間違えたかと若干後悔しないでもない。

……相当酷かったらオレも手伝うか。一応マスターだし。

それから一週間。イシユタルさんは思ったよりも真面目にカルデアの清掃に取り組んでいた。確かにマシユも懸念していた通り掃除の仕方はド素人も良いところで、物は壊すわ、仕事は増やすわ、終いには恥も外聞もなくどうすればいいのよおおお!!と泣き出すわと無茶苦茶な様子ではあったが、そんな状態でも決して止めるとは言わなかったのは彼女なりにこの罰を真摯に受け止めていたのだろう。まあ、流石に見えていれなかつたのでオレとマシユで手を貸したりもししたが。

「ほい、それじゃとりあえず刑期は終了。お疲れさん」

「あああああ疲れたあああ……。もう二度とやらないわよ……」

「じゃあ、もう二度とやらかさないでくれよな？」

「うっ、分かつてるわよ……」

終了を宣言した瞬間その場でぐでーつと倒れ伏す女神。とてもメソポタミア神話置いて崇拜されている女神とは思えない品の無さだ。服装も水着にパーカーのままなので一層それが引き立っている。そんな姿にやれやれと思いつつ、抱えていたミニグガラナを倒れる彼女の目の前へと下ろした。

「でも意外だったよ。てつきり途中で投げ出すもんだと思ってたし」

「うるさいわね。私だってそうなるだろうって思ってたわよ」

「じゃあなんで？」

「……これでも一応あんたのことはマスターとして認めてるのよ。私も今回のことは流石にやりすぎたかなって思ってるし」

やはり彼女なりに思うところがあつたようだ。プイっとそっぽを向きつつミニグガラナを撫で、うっすらと頬を染めている女神さまについて笑ってしまう。女神の中でもかなり上位に食い込むような相手にそういつてもらえるとは光栄の極みだな。

「むむむ……。なんだか子ども扱いされている気がするわ。——ねえ、マスター。この後暇かしら？」

「うん？まあ、一応このあとにレイシフトの予定もトレーニングの予定もねえけど」

「よし！じゃあここで一つ女神らしく恩恵というものをマスターに与えましょうか！」

「はっ？恩恵？」

急に何を言い出すんだこの女神。

「恩恵って何さ」

「なんでも召喚が上手くいかなくて困ってるんでしょ？私はイシユタル、幸運の女神でもあるわ。だから私のご加護で召喚運を上げてあげましょう！」

「マ？（マジで？）」

「マジもマジ。大マジよ」

うおおおおお!!マジかっ！ついに召喚運上昇イベントキター！これは手を拱いてる場合じゃねえな！急いで準備だっ！

「そうと決まれば石掻き集めてくるぜ！元々水着サーヴァント召喚の為に貯蓄してたからな！イシユタルさん、いやイシユタル様は召喚部屋にてお待ち下さい！」

おおおおし！いよいよお待たせしましたよ水着サーヴァント達！クールな暴王のメイドオルタにキャスターの方が相性がいいネロ様、風紀委員の頼光さんに娘へとランクアップしたフランちゃん。ロックなノッツ、スク水エレナさんにメジエドコスプレのニトちゃん。皆可愛くて綺麗でエロい水着イベサイコー！

「欲に忠実過ぎて素直に気持ち悪いわねこのマスター」
背後で何か聞こえた気がしたけどノープロブレム！

それから数分後。聖晶石を持って召喚部屋へと特攻していくとふよふよと部屋の中をスクーターで飛んでるイシユタル様がいた。部屋の中でスクーターってどうよと思
うが、どんなサーヴァントが召喚されるかわからないためこの部屋の作りをそれなりに
広いので特に問題はない。

「あら、もう来たの？随分早かったわね」

「だって待ちきれないですから！」

「そ、そう。それで今日はどれくらいやるのかしら」

「40連に挑戦ですっ！今回はたっぷりとため込んでしまいましたぜい！」

「そつ。まあ今回は期待していいわよ。なんてつたつてこのイシユタル様が見守つてるんだから」

自信満々に胸を叩く女神ライダー。おおつ……つい1週間前まで駄目な女神です石板を携えていたとは思えないほどありがたみのある姿だ……！

そんなわけで早速10連一発目に挑戦。グルグルと回り始めた召喚サークルから聖晶石の魔力によって呼ばれた者（物）達が現れる。結果――

「6人星3のサーヴァント、星3礼装が1、星4の礼装が1、起源弾が1、スク水の可愛らしい幼女礼装が1、ですか」

「これまた微妙な結果ね。あんた、本当に召喚運が無いのね」

うーん、でもまあ1発目なんてこんなもんだろう。むしろいつもよりいいぐらいか。起源弾は今後のキヤスターとの戦闘を考えると必要不可欠な特攻礼装だし、何よりスク水の天使達の礼装が確保できたのは良い滑り出しではある。多少は加護があったか？

「マスター、黒髭みたいな顔してるわよ」

「やめろください」

あんな年中デユフフ言ってるような奴と一緒にしないでください。オレはあくまでノーマルです。アブノーマルな性癖なんか持ち合わせてないです。脳裏に浮かんだ変態海賊にはあとでハサン先生に妄想^{ザパルニヤ}心音してもらおう（理不尽）

それでもって次の10連にチャレンジ。結果は――

「星3が5人。いつもの礼装が4つ。ジャンヌと三蔵ちゃん限定礼装が1つ……あれ？」

何か召喚の結果が悪くなってないですか？気のせいですか？星5礼装すら出てないんですが。

「あのねえ。いくら私とはいえ元々底辺に近い幸運値の持ち主の運気を上げるのも一苦労なのよ。それに波つてのはどうしても発生してしまうものよ」

全部が全部最良の結果なんてただの怠惰よ、とそれっぽい言葉を並べるイシユタル様。う、うん、言ってることは分からなくてもないがちよつと納得がいかない。本当に召喚運上がつってるのか？

とりあえず召喚したものを回収。そんな中ジャンヌと三蔵ちゃんの礼装を見てふと思う。

「ぶっちゃけこの2人、聖女とか僧とは思えない格好してますよね」

「聖女様の方は大きいのに基本の服装がパツパツで身体のラインがくつきりに見える格好で、もう片方は水着と大差ない格好してるしね。一神として自身に仕える者たちがこんな格好をしてたら正直戸惑うわ」

「まあ、その女神様もこうして水着に格好しているんですが」

「お言葉ですけど、どこまで行っても人間である者達と最高クラスの女神だと気品の勝負になんてならないわよ。誰よりも優雅に可憐に大胆にっ！それが私なんだから」

これは依代の身体を借りてるからこんな身体だけど本当の私はもつとグラマラスなんだからと胸を張るイシユタル様。そんなことを言いつつもこの依代は気に入っているらしいが。

さて、次は30連目になるわけなのだが、今のところ限定礼装が出たぐらいで芳しい結果は出ていない。さつきは良い感じに言いくるめられたが、少しだけイシユタル様への不信感が芽生えてきた。本当に大丈夫かこの女神様。

「今内心で思いつきり不敬なこと考えやがったわね貴方。ふん、そう言っただけいられるのも今のうちよ。3度目の正直という言葉を知らないのかしら。次こそは抜群の女神力を發揮してやるんだから」

「女神力（笑）にならないことを祈ります」

「スクーターで轢き殺すわよ」

「怖いっ！」

ギロリと睨みつけてきたイシユタル様に冷や汗を掻きつつ、30連目に挑戦する。あそこまで自信満々に豪語したのだ。次こそは今までとは違った素晴らしい成果が出ることだろう。

——と思っていたことがオレにもありました。30連目で召喚されたものを再確認してみると限定礼装も高レアサーヴァントもない。恒常の星3サーヴァントと星4礼装が1つだけ混じってあとは星3礼装。紛れもない爆死である。

「——なあ、イシユタル。数分前に言ったこと覚えてるか？」

「さ、さあ？女神つてのは長生きだし不要でどうでもいいことなんて一々覚えてなんかいられないわ。だ、だから知らないわよ。というか敬語……」

「そうか。ならば思い出せるように一語一句間違えずに教えてやろう。『3度目の正直という言葉を知らないのかしら。次こそは抜群の女神力を発揮してやるんだから』と豪語しやがったよな。で、なにこれ。明らかに悲惨なことになってんだけど。1回目と2回目は限定礼装が出ていた分超悪化してんだけど」

「し、知らないわよっ！私の責任じゃないわ！あなたの運が悪いだけでしょー！」

「お前さつき女神の加護がどうか言ってたじゃねえかっ！あれか！回数制限でもあんのかつ!？」

「愛の女神の加護は無量大よっ！あなたの私への信仰が足りないんでしょっ！もつと私を崇めなさい！称えなさい！甘やかしなさい！」

「ふざけんな！この散財の女神がつー！」

「誰が散財を司ってるよっ!?!そんなものとは対極に決まってるでしょー！」

「じゃあ、今のポケットマネーの残高言ってみろよ！」

「……………億万長者よっ！」

「小学生みたいなこと言ってるじゃねえよっ!？」

知ってんだぞこの前のイシユタルカップで全財産のQP使ったってこと!全てサーヴァント達にぶっ壊されてたし本当に一文無しのはずだろうが!

「くそう!やつぱりうっかり属性のある女神になって頼るんじゃなかった!」

「ちよつと!うっかり属性なんて持ってないわよっ!」

「その依代を選んだ時点でお察しだよっ!」

「あんたこの娘の何を知ってるのよっ!?!怖いわよ!」

ぜえぜえと互いに息を荒げるオレ達。ちくしよう、せつかくの水着サーヴァント達を引き当てるチャンスだつてのになんか無駄にしちまった気分だ。お金もない。神としてのご利益もない。称えられそうな一面もない。色々とヤバいだろこの女神様。

…………あれ?冷静に考えると段々可哀想になつてきたぞ?

「——イシユタルさん、あとで食堂で何か奢つてあげるよ。何がいい?多少の融通ならきかせてやるから」

「えっ、ちよつと何よ急に。いきなり優しくしないでよつてなんで肩ポンしながら泣きそんな顔するのよ。待つて待つた待ちなさいその憐れむような目止めなさいよ如何に

もこれから先頑張れよみたいな雰囲気でも両手握るんじゃないわよ！」

「いいから。だから無理すんな……」

「いい加減本気で殴るわよ貴方っ！マジカル八極拳舐めんじやないわよっ!?違うって言うてるでしょ！わ、私は駄女神なんかじゃないんだからああああああ!!」

イシユタルの境遇が哀れに思えてきたオレははひっそりと涙を流す。そうだよな、神様なんて腐るほどいるんだもん。だったらできない女神が居ても不思議じゃないよな。この哀れな女神様に祝福を！

「ふんっ!!（無言の腹パン）」

「ゴはっ!？」

「いいからとつと最後の10連召喚やりなさい！見てなさいよ……！私の女神としての力見せてやるんだから」

「だ、だからって生身の人間殴んなよ……!」

マジカル八極拳とやらで内臓が爆発したらどうするつもりだ……!ズキズキと痛む腹を抑えつつ最後の10連用の聖晶石を召喚サークルに放り込む。グルグルとおなじみの光源が回転し、爆発するように光の柱が現れる。

浮かび上がるのは銀色のクラスカード。刻まれるは弓兵を示す刻印。先程から見飽きてきた星3アーチャーのものだ。

「あれー!?なんでー!?」

「おい、イシュタル」

「ち、違うのよ!これは違うのよっ!だからド、ドスの利いた声で呼ばないでよ!」

「さつき刑罰は終了したって言ったけどアレ取りやめな。延長1ヶ月だ」

「職権乱用じゃない!?そんなこと認められないわっ!」

裁判長
「オレがルールだ」

「神より横暴よこの人間!?!」

「いいんだよ。第一お前さんのご加護、が……?」

「あつ……あああつ!」

イシュタルに対して改めて通告をしている時だった。先程現れたクラスカードがもう一度輝いたかと思つた瞬間、バリバリと金色の光を発しながら金色に変わったのだ。

「ウソオ!?!」

「ほーら!ほらほらっ!見てみなさい!私はできる女神なのよっ!駄女神なんかじゃないわ!」

嘘だろっ!?!まさかここに来て女神の加護発動かよっ!?!しかもクラスはアーチャーの星4以上。まさか、これは——!!

とうマスター」

可愛い（断言）

「イシユタル様もありがとおおお!! 駄女神とか言つてすんません!」

「ものすごく熱い手のひら返しを見たわね……。でも、これで私の加護の力を思い知つたでしょ」

うんうん! それもマハトマだよね!（意味不明）

「ふうふう……」

「やっと落ち着いたかしら」

「よおしつ……! やつた……! 念願のエレナさん……!」

「あつ、ダメだわ。全然落ち着いてないわ。アウトプットからインプットになっただけだわ」

だつてオレがどれだけエレナさんを引き当てようとしてたか分かつてる? 前はエジソンさん2連チャンに阻まれてからサツパリだつたんだぜ? 今喜ばずしていつ喜ぶ?

「いや、ほんとよく来てくれましたエレナさん。お待ちしてましたよ」

「私もよ。貴方に呼ばれるのはいつになるのかずつと待つてたんだから。でもこのクラスで呼ばれるとは思わなかったわ。キャスターのクラスとは違うけど、どうかしら?」

最高です（真顔）

「これで私の女神力を思い知ったかしら。分かったのならきちんと私を崇めなさい」

「うん。本当にありがとうイシユタルさん」

「ス、ストレートにお礼言われるとそれはそれで照れるものね」

照れ照れと頬を染めるイシユタルさん。それを見ながら母性しか感じない笑みを浮かべるエレナさん。よーし、早速エレナさんの為に種火周回してくるぞー！あとはイシユタルさんのQP稼ぎもしてあげよう。

「じゃあ、これからもよろしくね。この私はキャスターの私と比べてちよつぴり我儘だったりするけど貴方の為に頑張るわ」

「むしろ我儘ばつち来いって感じですけどね。エレナさんも何か要望があったら言ってくださいね」

「要望……そうね。じゃあ今度私と海に行って遊びましょう！この身体の年齢に引つ張られるせいかすぐく遊びたいの！」

よーし、マスター童心に帰っちゃうぞー！

—おまけ—

「そういえばエレナさんのバイク変わった形してますよね。どこぞのキングみたいで」

「キングというのが誰かは分からないけど結構気に入ってるわよこれ。モノホイールバイクっていうの。速いし色々機能も搭載できるし。ああ、そうね。このカルデアにはバイカーのサーヴァントがいるんでしょう？彼ら彼女らと勝負してみたいわね」

「イシユタルさんと金時さんですか？いいですね、ぜひとも見てみたいです」

「でしょ？前のレースは支援ありだったわけだし、今回は単独での勝負もしてみたいわね。アーチャーのクラスになって単独行動のスキルもついてるし」

「それはあんまり関係ないかと……。うん？エレナさんちよつとお聞きしたいんですがスキルって何をお持ちですか？」

「どうしたの急に。えーと『サマーバケーション』、『ニヤーフ』、『大佐の夏休み』。あとはクラススキルである『対魔力』と今言った『単独行動』。これくらいかしら」

「えっと……。それだけですか？」

「ええ、これだけね」

「『騎乗』スキルは……?」

「ないわ」

「……………」

「なによ、心配しなくてもよくつてよ。マハトマの力があればバイクを乗りこなすなんて簡単なんだから」

「いやいやいや！危ないでしょう!?! 駄目ですよ！せめてちゃんと講習を受けてからに——」

「さあひとつ走り行ってくるわマスター！ダヴィンチ女史にお願いしてレイシフトしてくる——」

「だ、だから駄目ですって！一人じゃ危ないんでせめて金時さんを……!」

「ライディングニャーフ！アクセラレーション！いやっほおほお!!」

「ちよっ！エ、エレナさあああん!?! 話聞いてくださあああ!!」

番外編 M a t t h e w s D i a r y

刻々と更けていくカルデアの夜、私は自室で机の前に座り日課となっている日記をつけていました。この日記は人理焼却の旅路が始まった当初からつけ始めたもので、今まで私と先輩が歩んできた軌跡が刻まれています。今となっては眠る前につけないと落ち着かない習慣となっていました。

「今日の分は……これでいいでしょう」

ペンを日記帳の隣へと起き、今日の分の日記を読み返す。はい、どこにも誤字脱字はありません。確認を終えた私は置いていたホットミルクを口にしながら傍らで眠るフォウさんを一撫でします。ミルクは淹れてから随分と時間が経ってしまったのですっかり冷めきってしまっていますが、はちみつを加えているため仄かな甘みが身体へと行き渡りホッとした気持ちにさせてくれます。あつ、今のはダジャレとかではないです。

「日記帳もだいぶ溜まってきましたね……」

机に備え付けられている棚に立てられた過去の日記帳を前にポツリと眩きます。旅の初めにはたった1冊しかなかった日記帳は、今となっては随分な量になってしまし

た。それを見ると如何に私達が数多くの冒険を繰り広げてきたのかということが分かります。あと、この日記は日常のことも結構書いてるので如何にカルデアの日々が色濃いものかということも物語っていますね。

「まだ就寝には早いですし、少し読み返してみましようか」

○月×日 クラス別ピックアップ

世間の学生さん達にとって至福のひとつ時であろう夏休みが終わる頃です。今年は水着を着たサーヴァント達のレースを観戦するという不思議な体験をしたので、思い出としてはこれ以上ないインパクトの充実した夏だったと思います。

そんな暦の上では秋へと季節が変わろうとしている今日この頃、先輩はいつもよりも

気合の入ったご様子で召喚へと赴いていました。というのも、今回はクラス別ピックアップにより欲しいクラスのサーヴァントを召喚できる確率がグンと上がるからです。戦略の多様性を増やすという点で考えれば、星5のいないクラスを狙えるという貴重なチャンスでもあります。

いまさら言うまでもありませんが、我がカルデアには星5のサーヴァントが少ないです。一応全体としましては5人の星5サーヴァントの方がいらつしやいますが、内3人はセイバークラスとちよつとバランスが悪いです。ランサークラスのエネミー相手であれば恐れるに足らずではありますが、逆にアーチャークラスのエネミーとなりますともう1つ決定打に欠けます。個人の考えを述べさせていただくのであれば、ここはセイバークラスに負けない戦力を得るという点でランサーないしアーチャークラスの英霊召喚を行うのがよいのではないかと。

しかしながら、今回先輩の狙うクラスに私は少々疑問を感じていました。どうやらアサシクラスを狙うようなのです。が、カルデアにはすでにアサシンの星5である酒吞童子さんがいます。三騎士のクラスではないにしてもライダーやキャスター、バーサーカーのクラスを狙うと思っていましたのでこれは予想外の答えでした。一応エクストラクラスも含むということでルーラーであるジャンヌさんも狙えますが、あの方もすでにカルデアにいます。宝具強化を狙っているのかもしれないませんが、せつかくですしこ

は別のクラスを狙うべきではないのでしょうか？そう考えた私はその疑問を先輩に聞いてみることにしました。

……えっ？星5云々の前にジャックちゃんのお母さんになりたい？先輩、何を言っているんですか？

それでは日記の続きとして召喚の結果を綴りたいと思います。結論から報告させていただきますとジャックちゃんは来ませんでした。最近になり再び先輩の召喚運が星5限定で下降気味になっているせいで、できる後輩である私は冷静に分析します。

しかし、ジャックちゃんとは別の思わぬ出会いもありました。新宿のアサシンさんが来てくれたことです。新宿では先輩を狙う敵でしたが今回は味方として来てくれました。最初こそ身構えてしまったものの、彼自身としてはマスターを害すつもりは無いようで非常に友好的にコンタクトを取ってきました。戦闘においてスター生成とクリティカルに特化した、いかにもアサシンという戦闘スタイルをもつ新宿のアサシンさ

ん。色々と蟠りもありましたがこれからよろしくお願いします。

あと、先輩。ものすごく悔しいのは分かりますが新宿のアサシンさんにジャックちゃんの変装を頼むのはやめてください。そして新宿のアサシンさんも乗らないでください。絵面的に犯罪の香りがします。

○月×日 ネロ祭ピックアップ

体育祭シーズンというのでしょうか。小さな子どもから私と同年代の方々が学校で運動会及び体育祭に精を出す時期です。

巷では大いに盛り上がっているネロ祭の開幕。日頃カルデアというコミュニティに居るためなかなか全力で戦えないサーヴァントの方々が、ようやく本気で戦えるという

ことでお祭りは大盛況のようです。先輩も特異点のように命の危険がないため今回の催しを楽しんでいるようでした。常に危険に晒されている先輩があんなに楽しそうにはしゃいでいるのを見ると胸がポカポカと温かくなります。

私は今回は運営側へとまわりお祭りを盛り上げることに尽力しましたがやはり非常に大変でした。流石はネロさんが開く祭りというだけあって豪華絢爛、何事も派手にという感じでしたのでカルデアのスタッフもあつちへこつちへと大忙しです。

そんな中で先輩はまたもや召喚に挑戦したようです。何でも今回は通称ツチノコと呼ばれるブリュンヒルデさんが召喚できるということで、このチャンスを利用してなるものかと興奮気味の様子でした。気持ちは分かりますが戦乙女にツチノコはどうかと思えますよ、先輩。

召喚の方ですが、なんと今回はランサーの金色のクラスカードが出現しました。これには先輩も狂喜乱舞していて「キタツ！ツチノコさんキタツ！リップちゃんとのダブルロマンシア見れるツ！」と叫んでいました。眩い光が辺りを染め上げ、召喚光の中からブリュンヒルデさんが——現れませんでした。

現れたのはヴァルキリーではなくエリザベートさん。まさかのこの短期間で2回目の召喚です。エリザベートさんはまた召喚されたことで大変嬉しそうでしたが、逆に先輩はノオオオオオオオ!!と絶望のどん底へと叩き落されているようでした。そんな先

輩の様子を心配したエリザベートさんが歌って励まそうとした時は本当に焦りました。なんとか先輩を立ち直らせてエリちゃんソングを回避できたのは運が良かったです。

しかも今回の召喚はそれだけでは終わりませんでした。なんとカーミラさんまで召喚されたのです。最近になって戦闘中の動きが変わったカーミラさん。女性型のエネミーに対して抜群の能力をもつ優秀なアサシンです。カルデアにはすでにカーミラさんがいらつしやいますので宝具強化ということになりました。

ちなみにこれは至極当然といえますか、立て板に水と言いますか、むしろ水と油とも言えますがエリザベートさんとカーミラさんで揉めました。互いに同一人物でありながら相容れない関係のお二人。戦闘こそ起こりませんでした。が険悪な空気でした。ですが、そういう時こそマスターの出番です。その卓越したコミュニケーション能力で双方をいとも容易く懐柔してしまいました。流石です、先輩！

……そういえばカーミラさんと言えば最初に来られた時もネロ祭の真ただ中だったはずですね。お祭り好きなんでしょうか？

○月×日 マーリンさんピックアップ

世間では残暑を残しつつも少しずつ気温の下がってくる時期になってきました。年中雪に閉ざされたカルデアではあまり季節を感じる事ができませんが、叶うことなら『紅葉狩り』というものをしてみたいなと思います。山々が紅葉に染まり、それをお花見のように楽しむものだとは先輩に教えていただきました。先輩の故郷である日本では毎年多くの方々がそうして秋を満喫するそうです。

さて、今日も召喚へと挑戦する先輩です。今回は護衛として、最近いつの間にかやってきていたセイバーオルタさんを同伴していました。本当になんか間にかやっ召喚を行ったはずもないのになんか。先輩は理由を知っているようなのですがうまくはぐらかされてしまいました。セイバーオルタさんも怒ったりしているわけではないため変な手段で呼んだと言うことではないと思いますが非常に気になります。

それにしてもセイバーオルタさんは私にとって複雑な人物ではありません。今となつては随分と前のことのように感じる最初の特異点。デミサーヴァントとなつた私とマスターが初めて駆け抜けた戦場。あの特異点の聖杯の前で戦つたセイバーオルタさんは私にとつて忘れられない人物です。今思えば、彼女はあの時点で私が誰の力をお借りしていたのか薄々気づいていたのでしよう。

本気でぶつかり合い、奇跡的に勝利したあの戦いの記憶はただの人間となった今でも克明に覚えています。そんな王も今となつては同じ志を持つた味方です。だから怖がるのは失礼だと思つてはいるのですが、初めて相対した強大なサーヴァントであつたためやっぱり少し怖かつたです。

そんなセイバーオルタさんを連れての召喚。なんでもマーリンさんを召喚することができるとか。マーリンさんと言えば流石は冠位クラスのキャスターということでも万能過ぎる力を持ったサーヴァントです。カルデアへ来ていただければ戦力の大幅な強化をすることができ、その分先輩の危険度も下げることができません。どうなるかは分かりませんが先輩には頑張つていただきたいと思ひます。

今回の召喚に備えて必死にやりくりしたおかげで聖晶石はかなり溜まつているようでした。これならチャンスはあると私も先輩も思つていました。……はい、思つていました。現実は無常というのでしょうか、結果的にマーリンさんは来ませんでした。やはり冠位クラスともなると召喚は困難を極めるようで先輩もガツクリと残念がつていました。

ですが、私としては少しばかり安心している節もあります。なぜなら召喚の間セイバーオルタさんが抜身の剣のような圧力を発していたからです。もしマーリンさんが来ていたとしたら一悶着あつたかもしれないですね。具体的には召喚されて口上を述べ

ている間にカリバツていたかもしれません。人知れずカルデアの危機が回避されていたのでしょうか。

その代わりと言っては何ですが、セイバーオルタさんがもう1人来てくださいました。今回はキチンとした召喚での登場です。セイバーオルタさんの宝具は言うまでもなく黒い聖剣です。破壊力抜群だけでなく、放った後には魔力を回復するというトンドモ宝具です。強力な宝具をさらに強化できると先輩は喜んでるかと思いましたが、何故か微妙な顔をしていました。ブツブツと「交換ミスった……」と呟いていましたが交換とはどういうことなのでしょう？

また、セイバーオルタさんとは別にランサーのアルトリアオルタさんも来てくださいました。それも3人。1度目に現れた時はロンドンでのことを思い出し警戒態勢を取りましたが、セイバーオルタさんと同様に今は味方なので比較的友好的でした。さらにその後2人目、3人目と立て続けに召喚されたことには私も先輩もビックリしましたがクリティカルの火力が凄まじいランサーオルタさんが来てくれたのは非常にいいかもしれません。先日来た新宿のアサシンさんとの相性も良さそうです。

それにしても先輩。いくらランサーオルタさんが馬に乗って高いところにいるからと言ってずっとそのお胸を見るのはやめてください。不可抗力とか聞いてないです。思いつきり下乳上と口にしています。最低です。セイバーオルタさんもお胸を覗みつ

けてマーリンさんに対するものとは別の感情で剣を抜こうとするのはやめてください。
ご本人ではありませんか。

○月×日 このピックアップ召喚はなんとお呼びすればよいのでしょうか？

月日は10月になりました。今年も残すところ3ヶ月を過ぎ、気温もグツと下がり始めてきています。去年はエリザベートさんが引き起こした（引き起こされたとも言えるのでしょうか？）ハロウインの特異点に翻弄されていた時期ですね。今年はこのまま何事もなく終了してほしいと切に願います。

今回の召喚ですが、以前先輩が行かれた微弱な特異点に関連するサーヴァントが召喚されるようです。対象のサーヴァントは女神『パールヴァティー』。容姿的にはパッションリップさんやBBさんに非常によく似た人物……いえ、同一人物と言っても過言

ではない女神様でした。本来の姿ではなく依代としている人間の方と先の御二方が似ているのは何かしら理由があるのでしょうか。目下調査中です。

召喚の結果ですが久しぶりに鮮やかな失敗となりました。召喚されたサーヴァントは見事に宝具レベルMAXの方々ばかり。礼装もすでに所持しているものばかりでした。しかし、立て続けに見覚えのあるサーヴァントや礼装が召喚される中で唯一私と先輩の興味を引いた礼装がありました。

オルタでもサンタでもランサーでもない、青い服装に軽装の鎧を纏ったセイバーのアルトリアさん。そしてその王と肩を並べる赤銅色の髪をもつ私や先輩と同じ年ぐらいの青年。その2人が刻まれた礼装です。礼装名は『願いの先』と呼ばれるものでした。

先輩はどうやらその青年の方に見覚えがあったようですが、すぐに雰囲気が違うと首を振っていました。恐らく彼はアルトリアさんのマスターだろうと推測します。つまりこの礼装はアルトリアさんが以前参加した聖杯戦争のマスターとサーヴァントを模しているということなのでしょう。いずれにせよ、戦うアルトリアさんのご様子から互いに信頼し合った良き仲であったと思います。

フオウと小さく鳴く声がして私の意識は過去の世界から戻ってきます。どうやらネムネムしていたフオウさんが起きたようです。時刻を確認してみるといつもの就寝時間の少し過ぎたぐらいの時刻になっていました。

「もうこんな時間に……。つい夢中になってしまつて気づきませんでした」

教えてくださりありがとうございますとフオウさんを優しく撫でます。ナデナデを堪能したフオウさんは私のベッドの隣に置かれたフオウさん専用ベッドへと向かい、また丸くなりました。どうやら本格的に眠るようです。

「私ももう休みましょう」

夜更かしは明日の仕事に支障きたします。カルデアの一スタッフ、そして先輩をお助けする身として体調を万全に整えるのは必須項目です。私は空になっていたマグカツプを片付けて就寝準備を整えて自身のベッドへと潜り込みました。

「明日は先輩のトレーニングにお付き合ひして、ダヴィンチちゃんの観測の補助も行って……」

明日すべきことを反芻しているうちに徐々に瞼が落ちてきます。日記帳の過去の世

界とは別の夢の世界へと安らぎを持って誘われていきます。私はそれに抵抗することもなくゆつくりと身体と意識を預けていききました。

——さあ、明日も頑張りましょうか。

劍に生きた者の行く末を見届けたんだけど、やっぱり零に至るは美しき華だよね？

背筋が凍りつくほど美しく鮮烈な一筋。担い手の迷いなき心情を物語るかのように放たれる神速の刃。人を斬り、化生を斬り、空を斬り、次元すら斬る。空間を超越し有限という概念に捕らわれない可能性の劍。神秘にすら届くその“無限の劍”は紛れもなく劍という頂に立つ者の一刀だった。

呼吸を断ち切るそんな劍に美しき天元の華は己が持つ二刀を持つて相對する。無空すら捉えるまでに至った劍筋は相對する劍聖に引けを取らない。自身が見定めた一つの結末に至るように究極的にまで削ぎ落とされ、神仏ですら変えられない結果を収束する劍。その手に持つ二刀を華が舞い散るが如く華麗に、しかし鬼神のように剛毅に振るう。無二を超えようとする有限にして“零の劍”。こちらも道は違えど紛れもない劍の頂に立つ一刀だった。

場所も時間も運命すらも超えて出会うこととなった因縁。例え辺りが今にも燃え落ちそうだとしても、このまま戦っていたところで結末は死しかないとしても、2人の劍鬼は止まらない。

「武蔵イツ!!」

「小次郎オオオオオ!!」

ただひたすらに斬ることのみを追い求めてきた者達が刹那の間に数十合打ち合う。1度ぶつかり合うたびに1つの何かが生まれ、1つの何が終末を迎える。まさに無念無想の境地。無限と零の交差する不可能世界。

人体における急所を剣筋が消える速度で狙われているにも関わらず互いに致命的な一撃は受けていない。追及してきた道は違えど、美しすぎるほど洗練された剣の舞。常人が立ち入ることが許されないその空間にオレは心を捕らわれていた。

やがて2人の鬼は無限のように続く剣戟を交わした後距離をとる。先程と同じなら呼吸すら許さぬ時間で斬り結んでいたはずなのだが、牽制し合うように視線を交わしていた。そして、そこにきてようやく2人の表情をオレは見る事ができた。

——笑っていた。ただひたすらにそれぞれの口元を弧の形に吊り上げ、爛々と瞳を輝かせ、乱れる呼吸や流血すらも愛おしいと言わんばかりに。2人の鬼は笑っていた。

ああ、とオレはここにきてようやく諦めがつく。やはり、オレには2人の考えは分からない。剣を研ぎ澄ますことだけに全てを注ぎ込んできた者達の心など、人理焼却に立ち向かうまで悠々と暮らしてきたオレに理解できるはずもなかったのだと。どうかして剣士という人間について知ろうとしていたけれど結局できなかった。

2人の鬼の間で爆発的に殺氣と劍氣が膨れ上がる。先程まで型らしい型を構えない無形として斬り合っていた小次郎は身の丈ほどもある長刀を初めて顔の横で”構えた”。間違いない、彼の唯一にして無窮の絶技を放つ構え。飛燕を斬る我流の斬撃。

対して武蔵は両刀を鞘に納め、隻眼となつてしまつた瞳を閉じる。静かに行われたその所作の中で、彼女の周りには空間すら捻じ曲げるほど恐ろしい劍氣が溢れていた。

時間にしてほんの数秒もなかつただろう。しかし、2人の間に流れる空氣の重さからオレには文字通り永遠のように感じられる時間だつた。

「——秘劍」

「——この一刀こそ我が空道、我が生涯！」

カッと武蔵の瞳が開かれる。刹那、小次郎の姿がその場から消え——

「燕返しッ!!」

「伊舍那大天象ッ!!」

——劍鬼同士が到達した究極の劍が交わつた。

ゆらゆらと黒い煙が空を覆いつくす。パチパチと木が小さく爆ぜる。闇を赤く紅く染め上げる炎が辺りを焦がす。

ほんの1日前まで見事な天守閣を誇っていた城はほんの数刻前に異界の城へとその風貌を変え、そして今この瞬間夜空を焼き尽くすように紅蓮に燃えている。周囲は異界の様相を残しつつも徐々に広がる火の手によって飲み込まれ、ただの黒い灰塵へと化していつていた。

「——離せッ！離せつつてんだろッ!!」

「いいえっ！例え主殿の命令だとしても決して離しません！ここはすぐに避難するべきです!!」

噓せ返るような煙と肺を焼き尽くさんとばかりの火の海の中、オレはみつともなく小太郎君に羽交い締めにされていた。いつもは頼りになる彼の優秀さがこの時ばかりは腹立たしい。忍として一つの境地に達し、サーヴァントとしての神秘の肉体を持つ彼の手をたかが人間であるオレが到底振り払うことなどできるはずもなかった。

「ふざけんなっ！オレー人だけ逃げるわけにはいかねえだろうがッ！あそこにはまだ武蔵ちゃんがいるんだぞっ！」

彼女は佐々木小次郎との戦いに辛くも勝利したものの大怪我を負ってその場を動けなくなってしまう。そんな状態の彼女は何とか2人での脱出を試みようとするオレだけを燃え落ちる城の外へと投げて脱出させたのだ。

突然城から飛んできた主をキャッチしてくれた小太郎君にお礼も碌に言わぬままオレは再び城の中へと戻ろうとするも、それを小太郎君に止められたのだ。

「駄目です！サーヴァントでもない主殿では今引き返したところで命を落とすだけです！」

「サーヴァントじゃねえのは武蔵ちゃんも同じだろうがあッ!!彼女はまだ人間なんだ! あんなに傷だらけになった状態じゃ逃げることもできねえんだよっ!!このままじゃ本当に死んでしまうんだっ!!」

ふざけんな……! そんな結末絶対に認めるもんか……! オレは、2度と仲間を失わな

いって——

「それでもッ！主殿をむぎむぎと死地に向かわせるなど忍の恥、従者として失格です！僕には貴方を必ず生きてカルデアに帰還させるといふ使命があります！いえ、それ以前に僕自身貴方に死んでほしくはないっ！」

「——ッ!! だけどっ！」

「主殿の気持ちは痛いほど分かります……！僕だつてできることなら今すぐにも助けに行きたい！でも、辺りがここまで火の海になつてしまつては主殿一人で脱出することは不可能です！だつたら僕は貴方を選びます！非情でも冷徹でもなんでも受け入れましょう！ですがッ！主殿は生きなければいけない！貴方の帰りを待つ人達の為にも！」

グツと小太郎君の手に力が籠る。彼の赤髪から覗く瞳は揺れていた。忍らしく常に冷静を被っていたその仮面が剥がれ落ちかけており、砕けるのではないかと思うほど歯を強く噛み締め、眉間に皺を寄せ、湧き上がる感情を必死に押し殺してようだった。

「お願いです主殿……！」

震える声で小太郎君が懇願してくる。彼の必死な様子に上がつていた頭の血が一気に下がるのを感じた。

——またオレは誰かの命に守られるのか。

頭の中でこの世界で出会った彼女との思い出が蘇る。目まぐるしく変わっていく情景に手を伸ばしそうになる。これを掴んだらオレは止まらない。間違いなく燃え尽きようとしている城へと飛び込んでしまう。

だから——

「——分かった。……………行こう」

「ありがとうございます……………」

オレの言葉を聞き届けた小太郎君は拘束を解き、急いで燃え盛る炎の中からの脱出ルートを確保していく。流石歴代の風魔の力を継ぎし者。的確かつ素早い。瞬く間に1人分が通れる逃げ道が確保できた。

「さあ、主殿。僕が先頭に立ち引き続き道を開いていきます。くれぐれも離れることのないよう」

「……………ごめん、小太郎君」

「——いいえ、謝らないでください。では、行きます！」

それから約四半刻後。なるべく安全かつ最短ルートを通ったオレ達は無事安全地帯まで避難することができた。

しかし、振り返ったその先。傷つき、今にも散ってしまいそうな彼女を置き去りにした城は——すでに崩壊してしまっていた。

「主殿、失礼します。お身体の方はいかががでしょうか？」

「おにいちゃん、身体は大丈夫？」

厭離穢土城が崩壊した2日後。オレは仮宿として与えられた建物で横になっていた。今回の戦いはいつも以上に過酷だったようで、カルデアからの魔力供給は繋がりが自体が希薄なためかなり少なく、おまけに英霊剣豪を立て続けに相手にし、さらに腹に大穴まであけられた状態だったのだ。本来の肉体ではないにしても身体も魔力回路もボロボロになっていたオレは2日前に避難した直後に気を失い、丸々1日意識が戻らなかった。つまり昨日までの話だ。今は意識が回復し魔術で傷を癒しつつ大事をとって身体を休めている。

オレが目を覚ましたと聞いた小太郎君やおぬいちゃん、田助は街の復興を手伝う合間を縫ってこうして時々様子を見に来てくれてるのだ。

「おお、3人もありがとな。心配かけて悪かった、もうだいぶ良くなってきたよ」

「魔術による回復により傷もほとんど癒えているとはいえ、失った体力は戻りませんからね。今はしつかり休んでください」

「そうだよーおにいちゃん！無茶しちやだめだからね！」

「だううー！」

おいおい、小太郎君はまだしもおぬいちゃんや赤ちゃんの田助にまで心配されてんぞ。おにいちゃん嬉しい反面少し情けないぞ。というかおぬいちゃんと田助は魔術とか驚かなくなつたな。誰のせいだろうね（目逸らし）

「分かつてるつて。良くなつたとはいえ、今日いっぱいはまだろくに動けねえから安心してくれ。何かねえ限り大人しくしてるよ」

「何か起こると動くつてことなんですな……」

小太郎君が苦笑いを浮かべる。おぬいちゃんは含みのあるオレの言い方を理解できなかったのかキョトンと首を傾げ、田助はキャツキャツキャツキャと何か楽しそうにしているか中、『まあ、それは置いといて』と小太郎君が小さく咳ばらいをした。

「——では、おぬい殿。先程お願いした通り少し席を外してもらつてもよろしいですか？」

「うー、もつとおにいちゃんとお話したいけど……大事な話なんだよね？」

「はい。僕と主殿とのとても大事な話です」

「……分かった！じゃあ、おぬいおたまさんのお手伝いしてくる。いこ、田助」
「どうだう、あーい」

事前に途中で席を外してほしいと頼んでいたのだろう。おぬいちゃんはすぐに真剣な小太郎君の様子を汲み取り田助と共に仮宿を後にした。残されたのはただの魔術師被れと風魔の忍。どちらから話しかけるようなこともせず少しだけ無言の時間が流れていたのだが、やがて小太郎君が重たい口を開いた。

「——主殿、どうか僕へ処罰を」

「……はっ?」

布団で上半身を起こした状態のままのオレの目の前で小太郎君が膝をつく。自分が仕える人物の指示を仰ぐ姿勢だ。

「今なんと言った? 『処罰』?」

「主の命令に逆らったことに対する処罰です。僕はあの時主殿の身を守るためとはいえ武蔵殿を見殺しにし、貴方の命令に背いて自分の意思を優先させた。忍として最低なことを行つたのです」

「いや、あれは仕方がなかったじゃねえか」

「いいえ、『仕方がなかった』『やむを得なかった』で済む話ではないのです。忍は影から主君に仕える者であり、決して主より前に出てはいけません。ましてや自身の意思

を優先させるなど言語道断。こんなことは見習いの忍でさえ熟知している当たり前のことです」

赤髪から覗かせる彼の瞳は真剣だった。真剣に罰を受けようとしている目だった。

「分かった。じゃあ、処罰を言い渡すよ」

「はい、何なりと」

スウーと小さく息を吸う。小太郎君は身じろぎ一つせずオレの言葉を待っていた。

「——城下町の復興を死ぬ気で頑張ってきてくれ」

「……はい？」

予想もしていなかった言葉だったのだろう。小太郎君は言われたことへの理解に時間がかかっているようだった。

「だから、城下町の復興を死ぬ気で頑張ってきて」

「いやあの、おっしゃったことは理解できたのですが……」

「本当か？死ぬ気だぞ死ぬ気。町の人達に最優秀賞もらえるぐらいだぞ？」

「そんな賞は無いと思うんですが……。いえ、そういうことではありません！主殿、それでは僕が今やっていることと変わらないではないですか。それでは処罰などは……」

「チツチツチ。甘いぜ小太郎君。みたらし団子に練乳ぶっかけてイチゴ牛乳と一緒に食べるぐらい甘い。あつ、でもちよつとやってみたいかも」

「虫歯には気を付けてくださいね。で、どういうことですか？」

オレの言いたいことが全く理解できていないようで小太郎君は困惑しているようだった。まあ、正直オレもこの例えは意味分からん。あつ、違うねそこじゃないね。

「……段蔵ちゃんも命懸けでおぬいちゃんと田助を救うために戦った。でも、彼女が守ろうとしたのはあの子達だけじゃなかった」

「……………」

「段蔵ちゃんはこの町に住む全ての人を守るためにオレ達と一緒に戦ってくれたんだ。確かにあの外道キヤスターに操られて対立もしちまったけど、彼女は共に戦った仲間だ。段蔵ちゃんが守りたかったものが荒れ放題つてのは見るに堪えん。でも、生憎オレはまだろくに身体を動かせないから復興を手伝うにも手伝えない。だから町のことは小太郎君に任せたい。いいか、最低でも5人分は働くんぞ」

「……よろしいのですか？」

「なんだ、忍は主に影から仕える者じゃなかったのか？」

オレの言葉に小太郎君は小さく息を吐くと少しだけ笑みを浮かべる。

「——ふふつ、そうですね。サーヴァントと風魔の術を使う僕ならそれくらい余裕です。英霊と風魔の力が合わさって最強に見えます」

「こんなブラツクな労働を強いるとか処罰以外の何物でもないぞー。キツチリ働きたま

え」

「分かりました。この風魔小太郎、主殿からの処罰謹んでお受けします。……ありがとうございます、主殿」

そう言っで一礼した後小太郎君は部屋から静かに退出していった。今回の出来事を気に病んでいたりするんじゃないかと思っていたが杞憂だったらしい。

「ありがとう、か。お礼を言いたいのはオレの方だよ」

あの時、オレを止めてくれてありがとう小太郎君。

「——んっ」

「あつ、先輩気が付きましたか?」

「マシユ?ということは、オレは戻ってきたのか」

「はい、先輩おかえりなさい。今回も特異点修復お疲れ様でした」

小太郎君に処罰を言い渡してからさらに数日後。オレの身体もだいぶ回復し町の復興もとりあえず町民だけでどうにかなるようになった頃、オレ達はあの世界を後にした。あの世界の住人ではないオレ達がいままで残っているわけにもいかなかったからな。少々急でおぬいちゃんが寂しがっていたけれど大丈夫だろう。あの子も、田助も強い子だから。

下総国からカルデアへ帰還したオレを出迎えてくれたのは後輩の温かい笑みだった。どこかホツとした様子なのは決して見間違いなどではない。今回は事前に万全に準備をしたレイシフトではなく唐突な特異点への突入だったため心配も従来のは比ではないのだろう。

馴染みのある柔らかさ。こりやマイルームのベッドの上か。

「随分久しぶりな感じだよ、マシユ」

「日にちにして十数日、先輩はずっと寝たきりでした。先に帰還されている小太郎さんからおおよその経緯は聞いています」

「そっか。じゃあ、ちよつと行ってくるよ」

「えっ？行くつてどちらへ？というかお身体は大丈夫ですか？一応筋肉の硬直がない様に医療チームの方々々が定期的に動かしたり魔術で補助をしてくれていたようですが」

「全く問題ないな。流石うちのスタッフは優秀だわ」

「それならいいのですが……」

「カルデアの皆には突然のこととで心配かけちゃったよ。だから、目が覚めたことの報告と……あと、あの大馬鹿に話をな」

「ああ、なるほどです。では、私は報告が終わった後は席を外しますね」

「ありがとうマシユ」

オレが誰のことを言っているのかすぐに察してくれた後輩は小さく笑みを浮かべる。気の利く後輩で先輩は嬉しいよ。

それからはダヴィンチちゃんを始めとするカルデアスタッフへの報告を済ませた。皆は随分と心配してくれていたようで終始大丈夫か？の嵐に思わず苦笑いをしてしまったのはしょうがないと思う。

あと、酒？ちゃんにも会ったのだが彼女はあの世界のこととは何も知らないと言い、やんわりとした京都弁でお帰りと迎えてくれた。……もつとも、口元が意味深に笑っていたしどう考えても何か覚えているようだったが。オレもただありがとうとだけ伝えておいた。

そして、件の人物の部屋へと向かう。オレが目を覚ましたことはとつくにカルデア中に広まっているはずなのに一切自分から会いにこない大馬鹿者。あの世界で一番長く時間を共にした英霊。

コンコンコンと客が来たことを知らせるノックをすると――

「わひゃいっ!?!」

「……………」

部屋の中から何ともマヌケな声に続きドンガラガツシャーン!と激しくベタな物音がした。

「武蔵ちゃん、話がある。入るぞ」

「い、いません。そんな人ここにはいません」

「居留守を使うんなら口を開くべきじゃないな。いいから開けてくれ。オレは武蔵ちゃんに直接話があるんだ」

「い、いいいいないわよー。ここにそんな見目麗しい最強美人剣士いないわよー。私は別人ですよー」

「へえ、じゃあ武蔵ちゃんの部屋にいる貴方はどちら様ですかね」

「も、望月千代女です。ほら、声も同じでしょう?」

「召喚した覚えがないな。彼女の召喚を試みるのはこれからのはずなんだが」

「……………」

「……………」

「いいから観念してとっとと開けやがれこの駄目剣士ツ！いるのは分かっただよツ
!!」

「い、嫌嫌嫌ツ！だつて開けたら君絶対怒るでしょ！というか、すでに怒ってるじゃない
！」

互いの間に扉一枚分け隔てて静かに問答していたが、いつまでたつても開けない彼女に痺れを切らし、先程の行儀のよいノックとは裏腹に借金の取り立てのようにガンガンと扉を叩く。

「怒ってねえよツ！つかその反応ってことは下総国のこと覚えてるんだなツ!!」

「嘘よ絶対怒ってる！き、記憶のことは君が特異点を修復した時になんか頭の中に流れ込んできたのよっ！わ、わわ私だつて意味分かんないし！」

「英霊の座からの干渉か……。つて、覚えてるなら話は早いっ！ここを開けやがれこの大馬鹿ツ!!」

「いーやー！怒られるのはいーやーなーのーよー!!」

それから約10分。通りすがりのカルデア職員や英霊達に苦笑いされながらも続いたこのくだらないやり取りは、偶然通りかかったダヴィンチちゃんにロックを解除して

もらう形で収束した。その時の武蔵ちゃんの絶望しきった顔といたら……。

「ううっ……」

「つたく、手間とらせやがって……」

「だ、だって君すごい剣幕だったし……」

床に正座をしてメソメソと泣くする今の武蔵ちゃんはこの剣戟を行った人物とは到底思えず、普通の女の子のようだった。

「とりあえず扉の前でも言ったように話がある。いったん椅子に座れ」

「あ、あの！そのことで少しお願いがあるんですけど……」

「なんだ？」

「——ちよつと場所変えてもいいかしら？」

訪れたのはシミレーシヨールーム。そこを小高い草原と快晴に設定した場所だった。草が風によつて揺れ、青い空を雲がゆつくりと漂う。何度体験しても仮想世界とは思えないそんな場所にオレと武蔵ちゃんは来ていた。

「何でこの場所なんだ？」

「うーん。ほら、君とあの世界で再会した光景にちよつと似てるでしょう？君とゆつくりお話をするなら開放感のある場所の方がいいなって」

そう言つて武蔵ちゃんは一度大きく伸びをしたあとに膝を抱えるように座つた。それに倣つてオレも片膝を曲げるようにして座る。ああ、そういえばあの特異点で目覚めて武蔵ちゃんと再会した時もこうして隣に座り合つて再会を喜んだっけ。

「で、だ。オレが話したいことが何か、もう分かつてるよな？」

「——ごめんなさい」

彼女の方を向かずに放つた言葉に、武蔵ちゃんはポツリと謝つた。

「私の我儘に君を巻き込んでしまったこと。危険な目に合わせてしまったこと。勝手に死んでしまったこと。全て謝ります、ごめんなさい」

「……………」

「でも、これだけは言わせてほしいの。私はあの戦いに後悔は一切ない。私の剣をぶつける相手に最もふさわしい剣士と剣を交わすことができ、最後の剣を君に見届けてもらえて。私は後悔なんてしていない」

「……………」

「理解してもらえとは思ってないわ。私はどこまで行っても剣を握る者で君はそうじゃない。分かってももらえないわけがない」

「……………」

「私はそういう性分なの。これだけは絶対に曲げられない。人に何を言われようと、仏様に何を言われようと、世界に何を言われようと、決して変わらない」

静かに話す彼女の言葉には底のない重い気迫があった。長い髪から覗く健在な両の眼は真つすぐに先を見通していた。これが剣の為に生まれ、剣に生き、剣に死ぬ者の覇気。これこそが剣豪と呼ばれる者。

……やっぱりオレには無理だな。

「——んなことはとつくに諦めてるよ」

「えっ?」

「武蔵ちゃんに剣士としての矜持があつて、それをオレが理解するなんてこと」

「……………」

「第一、今まで普通に生きてきたオレが武蔵ちゃん達を完全に理解するなんて無理に決まってるだろ、オレは剣士じゃねえし。だからさ、諦めた。こういう存在なんだって考えることにした。理解されなくても誰にだって譲れないもんはあるし、それが武蔵ちゃんにとって剣だったってだけの話だろ」

「——君、怒ってないの？」

「だから怒ってないって。オレはただ、武蔵ちゃんにも絶対に譲れないものがあつたんだなって話があったただけだ。理解もできてねえのに怒れるわけねえだろ」

「…………えへへ、そっか」

頬を朱に染め武蔵ちゃんは照れたように笑う。どうやら本気で怒られると覚悟していらしい。

「だが、説教は無しにしてもお願いがある」

「何かな？ほらほら、お姉さんに言ってみなさい」

「怒られないって分かった瞬間の切り替え早くない？」

「いいからいいから。で、何かな？」

怒られないって分かったらすぐこれだ。やっぱり拳骨の1つでも落としてやるべきだったか？身体強化使ったマルタさん直伝の鉄拳制裁、英霊達の間でもアホみたいに痛

いって評判なんだぞ。

はあ、と小さくため息を吐くもこつちの方が武蔵ちゃんらしくていいかと思ひ直す。
さつさと言いたいこと言つちまおう。

「——死ぬな」

「あつ……」

「劍士として譲れない戦いをするのはいい。もうそんなことは知らん。だけど、絶対に死ぬな。戦うなら勝て。勝つて生きろ。今度勝手に死んだりしたら今度こそ説教だ。座だろうが冥界だろうが地獄だろうが天国だろうが必ずオレはお前を追っかけて鉄拳制裁してやる」

「……それは嫌だなあ」

「嫌なら死ぬな。やるからはどんな相手でも斬れ」

「その言い方まるで悪者みたいな言い方で引つかかるわね」

ジト目でこちらへ視線を注ぐ武蔵ちゃん。確かにちよつと言い方が荒つぽかったか

な？これじゃまるで辻斬りだ。

「……でも、うん。分かりました。この新免武蔵守藤原玄信、君がいる限り絶対に剣では負けません。零へと至ったこの剣は立ちはだかる全ての敵を断ち斬りましょう」

スラツと音もなく抜き放たれた刀。それを青空へとかざす様に武蔵ちゃんは誓う。眩しく輝く研ぎ澄まされた刃は零の剣。究極まで無駄を削ぎ落としたその剣に、迷いなどあるはずもなかった。

「——君。もう少し私に付き合ってくれない？」

「付き合うってどこに？」

「この夢幻の空じゃなくて、本物の青空が見えるところ」

シミュレーションルームで武蔵ちゃんに誘われたオレは、大きな窓が設置されているカルデアの廊下へと来ていた。今日は珍しく天候も良いようで雪雲も少なく蒼海を連想させる青空が広がっていた。

「私、青空が好きなの」

「そうなのか？」

「うん、草の上に寝っ転がってお天道様の光を浴びながら流れる雲と透き通った青をジーツと眺める。時間がゆつくりと流れていくみたいですよ。ごく気持ちいいの。だから好き」

「昼寝にはもってこいだな」

「でしよっ！でもさ、最近別の理由で青空が好きだつて分かったのよ」

「ふーん。何、別の理由って」

何だろう。細長い雲がうどんに見えるとか？そんなしょうもない理由を考えていた時だった。

「——君の眼と同じだから」

「——ッ!？」

「君の綺麗な青い眼が青空と同じ色だから。あの焼け落ちていく城の中で私、実は少し

だけ後悔があったのよね。最期に見る光景は真つ赤に燃える炎とかじゃなくて、綺麗な青が良かったなって。あの時は私自身が青空が好きだからって思っていたんだけど、本当は違ったみたいです」

「あ、あの武蔵ちゃん？」

「青は君の色だったから。最期は君の眼を見て死にたかったなって。無意識で思っちゃったみたいです」

「えつと……」

完全に不意打ちだった。あの小次郎も美しい華と称えるほどの美貌。自然と浮かべるその笑みにオレは完全に見惚れてしまっていた。

えつ？なにこれ。武蔵ちゃんこういうこと言う性格だっけ？いや、意外と乙女チックなことを偶に言うことは知ってたけど、どちらかというところと美少年大好きだったり、実は同性もいけたり、酒？ちゃんやばらきーを見て生まれる時代を間違えたとかいうちよつと危ない変人（変態）だったはずでは？

「——君？どうしたの？何だか顔が赤いけど。もしかしてまだ疲れが抜けきつてないんじゃない」

「……武蔵ちゃん、意外とそういう照れくさいこと平気で言うんだな」

「えつ……？あつ……」

オレの指摘でようやく自分の言った恥ずかしい言葉を理解したらしい。一瞬で顔を真っ赤に染め上げ、全力でオレから目を逸らした。

「ち、違うのです！今のは別に深い理由があつたりしたわけじゃなくて、ただ単純にそう思っただけだから！そういう色っぽいやっじゃないから!!第一、そういうの剣が鈍っちゃうし！」

「お、おう」

あまりの剣幕に一周回つて冷静になる。自分よりもパニックつてる人がいると逆に冷静になるって本当なんだね。照れが一気に引いたわ。なんだか気持ちも落ち着いて腹も減ってきたし。

「とにかくもうすぐお昼だし食堂に行こうか」

「う、うん……」

すっかりしおらしくなつてしまった武蔵ちゃん。こうコロコロと表情が変化するのも彼女らしいな。オレの後ろを少し離れてついてくるその姿は本当に初心な少女のようだった。

「なあ、武蔵ちゃん」

「な、なにかしら？」

「——ありがとな」

「——あはは。どういたしまして、マスター」

——おまけレベルの召喚——

「で、今から召喚に付き合ってください」

「唐突ねえ。別にいいけど身体の方は大丈夫なの？」

「身体に関してはカルデアの優秀なスタッフ達が万全に整えてくれたから問題ない。それよりもオレは早く召喚に挑戦したい」

「うーん、君がそう言うならいいけど」

「今回は一点狙いでやってみようと思うんだ。んで、狙うのは段蔵ちゃん。小太郎君に会わせてあげたいからな！」

「気持ちは分かるけど、そううまくいくかしら」

「やってみなきゃ分からん。さあ、それじゃ行くぞっ！」

グルグルと召喚サークルが回転し、パアツと一際大きく輝きを見せる。現れたのは英霊召喚を示す3本ライン。激しく発光を続けた召喚光は少しずつその光を収めていき、召喚された人物へのスポットライトのように照らされるもその姿をハッキリと認識することができない。そして――

「——我が名は蒸気王。ひとたび死して空想世界と共にある者」

「知ってた」

現れたのは華奢で可憐な絡繰娘ではなく、どう考えてもバーサーカーな肉体（メタル）を持つキャスターことチャールズ・バベツジさんだった。

「段蔵ちゃんって蒸気で動いてたのね」

「おう、その弄り方すげえ刺さるからやめーや」

うん、だって召喚されたクラスカードキャスターだったもの。銀色だったもの。おまけに絡繰の段蔵ちゃん召喚しようとしている時点で（白目）

なんだか悔しかったのでバベツジさんのモードチェンジ案を武蔵ちゃんを含めて話し合った。ちなみにオレと武蔵ちゃんの同意見として美少女に変形するという案が出た。どうですかバベツジさん。あつ、流石に無理ですかそうですか。

狂気の地に足を踏み入れたんだけど、絶望を乗り越えることこそ人間の底力だよな？

「なあ、ロビン。玉乗りってどうすりやできるの？ バランスをとるコツつつーか」

「おたく、この前の特異点で芸事に目覚めたのか？ 第一、俺はアーチャーであつてピエロじゃねえのよ。せめて弓の使い方にくれねえか」

「あつはつはつは！ おかしなこと言うなーアーチャーが弓使うわけないだろ！」

「おかしなことを言ってるのはおたくだっての……」

だつて剣、槍、銃、銃、杖、石、雷、水鉄砲、羊、豎琴、棺桶等々。ほら、弓とか使つてねえじゃん（真理）

「——とまあ冗談は置いていて」

「おい待て。一体どつちが冗談なんだ？ 玉乗りを教えて欲しいことか？ それともアーチャーが弓を使う云々か？」

「後者」

「前者はマジなのかよ……。いきなりなんで玉乗りなんて教えて欲しいとか言い出したんだよ。まさか本当に芸事に目覚めたわけじゃないんでしょ？」

「……ほら、子どもを喜ばせるためには芸事の1つもできないやダメかなって。この前の特異点で旅の一座をしたけど舞台ばかりだったから他にもできないかなあと思ったんだよ」

「——ああ、なるほど。そういうことですか」

ポリポリと頬を掻きながら白状すると、義賊の青年は納得したようにしよがないなと苦笑する。くつ、何だその笑みは！察しが良すぎるのも良くないと思うぞ！いや、どうせ説明するつもりだったけどなんだか恥ずかしい！

内心悶絶しながらつい先日まで行っていた特異点のことを思い出す。今までの特異点とは違いこれまた異質を極めた狂気の地『セイレム』。その特異点を修復し、完全に人理修復が成ってから数日が経過していた。セイレムを突破しての今日まではひたすら身体と精神の休息にあて、ようやくこうして召喚に赴こうとしていたのである

そう、それぐらい過酷な特異点だったのだ。マサチューセッツ州のセイレムに上書きされたその土地は文字通り”狂っていた”。天候が狂い、精神が狂い、思考が狂い、空気が狂い、そして人間が狂っていた。ここにいるロビンを始めとするサーヴァント達や同行してくれたマッシュがいなかったらオレは数日と保たず狂気に飲まれて首を吊る羽目になっていたかもしれない。何が正しくて何が間違っているのか、善も悪も分からなくなりそんな混沌とした探索だった。

そんな狂気に支配され呪われた土地でオレは一人の少女と出会う。年相応に好奇心旺盛で友達想いで……だけど外界なる神の依代として魔神柱に選ばれてしまった少女。「あの『嬢ちゃん』の召喚にチャレンジする前に、前もって芸事を習得しておきたいってことだろ？うちのマスターは生真面目というか面倒見がいいというか。それにまだ召喚できると決まったわけじゃねえでしょ」

「確かにそうなんだけど、少なくともあの子はあの地でサーヴァントだったわけだし可能性は十分にある」

「そりゃ見事な確証ですこと」

本来英霊の座というものは過去の偉業や功績によって登録されるものではあるが人理焼却や亜種特異点の出没によりそこらへんの基準が曖昧になっている。特異点を巡っていくうちにそれは人類滅亡への一種のカウンターの的なものであるというものは理解できていた。素養のある者、力のある者、正邪も問わず何でもござれなため、件の少女——『アビゲイル』も登録されている可能性が高いと踏んでの頼み事だった。

「とにかく。玉乗りなんてしなくても大丈夫だと思えますがねえ。あの嬢ちゃんなら今までのマスターの旅とかサーヴァントのこととか話してやればそれで十分だろ」

「うーん、やっぱりそうかな」

確かに思い返してみると、アビゲイルは曲芸よりも物語を聞く方が好きだったか。マ

シユと一緒に旅のことを話してあげていた時は嬉しそうに聞いてたもんな。……まあ、隔絶された土地だったら仕方がないのかもしれないが。

「じゃあ、普通に召喚にチャレンジしてみようかな。ロビン」

「へいへい、分かってますよ。護衛として付き合えてことだろ」

面倒だけどもマスターからの直々の命令とあっちゃ逆らえませんかね、と皮肉っぽい言葉を吐いてはいたものの特に嫌がっている様子は無かった。

ロビンってかなり世話好きだね。バトルスタイルに関しては確かに罨や奇襲、闇討ちと卑怯と取られがちなものではあるけど、内には騎士道を重んじる意思があるのか面倒見もいいし。

「ホント、ロビンは良い奴だよ」

「いきなりどうしたよ。そんなこと言ってチヨコぐらいしか出ねえぞ」

「チヨコ出るんだ……。1個頂戴」

「はいよつと」

マントに包まれた懐から一口サイズのチヨコを渡してくるロビン。なんでこんなものを持つてんのと聞くと小さいサーヴァント達——特にばらきーが良く出会い頭にせがんで来るかららしい。いや、準備万端かよ。

子どもの扱いに慣れまくってる義賊と共にセイレムでの出来事を話ながら召喚部屋

へと向かう。一応ロビンの下へと訪れる前にダヴィンチちゃんに召喚の許可ももらっておいたし石も準備しておいたからすぐに召喚へと取り掛かれるのだ。

「そういや、今回はあのマシユの嬢ちゃんは？」

「マシユなら今頃訓練中。この前のセイレムでの出来事からさらに熱が入るようになってみたいだ」

「もう特異点は修復し終えて旅も終わったってのにか？」

「確かに旅は終わったけど、まだ一応はオレのサーヴァントって扱いだからな。マシユと彼女の中のサーヴァントとの繋がりもまだ切れてないし、何よりマシユ自身がジツとしていられないんだって」

オレのサーヴァントを名乗った以上、鍛錬を怠ることはできない。いついかなる時に不測の事態が起ころうとも対応できるようにしておきたいというマシユの強い希望により鍛錬は続いていた。オレとしてはあんまり無理をしてほしくないのだけれど、やはりそこは彼女の意思を優先させたかったのだ。

「あの嬢ちゃんも健気なもんだねえ。まっ、そこが良いところだし眩しいところでもあるんですがねえ」

「うん。オレもそんなマシユが誇らしいよ」

そこでオレが胸を張るのもおかしな話かもしれないがロビンは優しく口元を綻ばせ

た。

「つと、今の会話で思い出したぜ。特異点の修復も終わってカルデアのサーヴァント達も年末には退去することが決定したんだろ？なんで今更召喚なんてするんだ？」

「——最後かもしれないだろ？だから、全部回しておきたいんだ」

「大丈夫かマスター？セイレムから戻ってこれたつてのに狂ってねえか？」

失敬な。何事も全てが終わったからといって油断してはいけないんだ。ポケットなモンスターだつてチャンピオンを倒してからが本番だし、クロノなクロスだつて周回プレイをしないと全員仲間にならないんだから（廃人感）

「とにかくいいんだよっ！ほら、早速10連いっくぞー！」

「分かりましたよつと。……おっ？こりや良い反応なんじゃねえか？」

「キタツ！金色回転キタツ！これで勝つるツ！」

おりやーという気合と共に投げ込まれた聖晶石達。雪が解けていくように召喚サークルへと溶けていったそれらは、やがて最近ではよく目にするようになった金色の光の帯となって顕現する。間違いなく高レアサーヴァント召喚の兆候だ。

「クラスは……クラスカードを見る限りランサーか。俺の苦手なクラスじゃないですか」

「最近の流れから察するにエリちゃんの可能性が大——」

「わりいマスター、俺急用思い出したわ。部屋の中に避難するって用事できたわ。じゃあこれで」

「逃がすわけねえだろ、令呪使うぞコラ。皐月の王も使おうとすんな」

もちろん冗談のつもりで言ったけど本当に来たらどうすんだ。オレが死ぬぞ（聴覚的な意味で）

グルグルと回転して召喚サークルの上を漂っていたクラスカード。一際大きな光を放ち、その中から召喚された人物が現れる。あの特徴的なドラゴンテールは——ないっ！

「サーヴァント、ランサー、？。……………それだけ」

「スリットから見える足が眩しい子キタアア!!」

見ただけでどこ出身の英霊か分かるチャイナ服。燃ゆる炎を象った刃を持つ槍、『火尖鎗』を手に持ち、足元からは実際にメラメラと炎を揺らめかせながらホバリングをするように近づいてくる。生前には傍若無人の暴れっぷりにより神々すら殺し、仙人によつていくつもの宝具パオベエを贈られた人ならざる蓮華の精。齊天大聖・孫悟空の敵としても名高い『』の姿がそこにあつた。

ますた
「主、久方ぶり」

「おう！久しぶり！会いたかつたぞ？」

「うん、ボク、同意」

くう〜この片言喋りが可愛いんだもう！分かるよね（真顔）

「おい、マスター。確か？つてすでにカルデアにいたじゃねえか。セイレムに連れて行つただろ？なんでそんな初召喚みたいな反応してんの？」

「ロビン、1つ教えてやろう」

「なんだ？」

「——細かいことを気にしてはいけない」

「お、おう……」

例えいつの間にか在籍していたことになっていたとしてもうちのカルデアには？
はいなかったんだ。良い例としてはエミヤがそれに該当する。

「主、主」

「うん？どうした？？」

いつの間にか炎によるホバリングをやめた？がオレのそばまで来ていた。それにしてもパツクリ開いた胸元といい、ミニチャイナ服から覗く太ももといい、それを包む網タイツといい、仙人は良い趣味してんな！ちよつと語り合いたいぜ！これで元少年神とかもう意味分からんですわ。

「サンソン、どうなった？ボク、気になる」

「サンソンは……とりあえず無事だよ。霊基にも何も異常は無いし今頃医療スタッフと一緒に医療室の整理をしてると思う」

「それなら、良かった。ボク、心配してた」

「うん、ありがとな？」

言葉は片言だが表情は結構豊かな？は安堵したように笑みを浮かべる。生前はかなりの暴れん坊だったと聞くがこうして見るとそんな様子は皆目見られない。

そういえばセイレムでもアビゲイルのことも常に気にかけていたつけ。お芝居に彼女を引っ張っていこうとしていたし、外界の神に獲り込まれた時は彼女を救うために槍

も振るっていた。やっぱり仲間想いの？
自身は紛うことなき英霊なんだと再確認する。

——そして、
が気にかけていたサンソン。今でもあの光景を浮かべると背筋が凍りつくぐらい思い出したくない記憶。英霊にはすでに死んでいる身であるため本来であれば仮に死んでも霊基パターンさえ分かれば再召喚は可能である。だがあの特異点では死は平等だった。生者も死者も、人間も英霊も。死ねば死ぬ。2度と会えない。

だからセイレムから帰還後にサンソンが前触れなく再召喚された時は驚いた。誰も想定していなかったし、召喚を試みたわけでもない。それでもサンソンは戻ってきてくれた。あの時はつい溢れる感情を抑えきれなくて泣いてしまった。それぐらい奇跡的な事だったのだ。その代償か、サンソンはセイレムでの記憶は全くない。セイレムに行くまでのカルデアでの日々のは覚えているものの、あの狂気に染まった地でのことを一切忘却忘れてしまっていたのだ。理由は——いまだに不明だ。

だが、別れる前にアビーが言っていたことを思い出すと、もしかしたら彼女がサンソンを……。

『死は明日への希望なり』か……」

「……主？」

サンソンの宝具名。彼にとつての死とは絶望ではない。処刑人としても名高い彼に

とつて死とは罪と罰を切り離し、それをもって贖罪とするものだ。だからこそ、未練を残して死んだ場合グールとして蘇ってくるあのセイレムの地でも彼は蘇らなつた。つまりは、そういうことなのだろう。

サンソンのことを考えていると、がオレの顔を覗き込む。彼女は心配そうに大きな瞳を揺らしていた。

「……いや、何でもないよ？。それよりこれからどうする？オレとロビンはまだ召喚を続けるけど、先にカルデアの中を探検してきてもいいぞ」

「ううん。ボク、マスターのこと守る。だから、一緒にいる」

「いいだろう、存分に守られてやろうではないか」

「おたく、数秒前までのシリアスが息してねえぞ」

シリアス？そんなもんはこの前散々味わつたわ。今のオレに必要なのは癒しだ。狂気に晒されて黒く荒んでしまったこの精神を癒してくれる存在が必要だ。つまり可愛いは正義（錯乱）

ということとで急遽？も参戦して召喚の続きを執り行うことに。とはいっても次の10連で終わりなんだけだな。つーわけで、聖晶石をシューティングサモンサークル！

「何が出るかな♪何が出るかな♪」

「ライオンとか出るんじゃないか？」

「ごきげんのようなライオンが出てきたらジャガーとの戦争が起こるな」

「主ツ！主ツ！これ、すごい！綺麗！すごく綺麗！」

サイコロを振っている時のノリで歌ったら意外とロビンが乗ってきてくれた件。あの長寿番組知ってんのかい。あと？☒ちゃん純粹過ぎか。オレはもう見飽きるほど見たこの召喚光の光をここまで楽しめるとは。

「おっ！これはまた運がいいじゃないですか。金色の反応……しかもクラスはキャスターときた」

「うおおおおお！フオーリナーじゃないけど今日は随分と順調じゃねえか！どっちだっ！どっちが来るんだ!？」

「きやすたー……ということはティテユバ？それともキルケー？」

「そいつは召喚されてからのお楽しみってやつだ！さあ、来るぞ！」

女性としてもかなり小柄な体軀にその身の丈を超える長い杖を手を持って彼女は現れた。ギリシャっぽい少し露出度が高い服装に合うのか合わないのか分からない厚底を履いている。美しいショートの髪にその隙間から伸びる人外の長い耳、背中から伸びた鷹のような翼が特に目を引く。惚れっぽいくせに自身の恋愛が全く成功しないことを気にしている乙女。

「——やあ。もうきみを寂しくはさせない。この魔女キルケーを呼び招いたのだからね。ふふっ」

あのメディアさんの姉弟子に当たる大魔女にして、月と愛を司る半神。キルケーさんだった。

「あつ、なんか髪短いですね」

「……君、一番最初に言うことがそれかい？ほら、あれだけロマンチックな別れ方をしたんだし他に言うことあるだろう？」

「あれ？何か言っていましたっけ？」

「まさか違う選択肢を選んでいたのかい……？」

もしかして豚小屋の方かッ……!?!と声を荒げるキルケーさん。一応冗談のつもりだったんだけど、なんだよ豚小屋って……。

「嘘ですよ、ちゃんと覚えてますから。それで、結局これはどちらから会いに来たことに

なるんでしょかね？」

「私にそう気楽に嘘を吐く人間なんて君とオデュッセウスぐらいだよ……。まあ、君の方が実害はない分何百倍もマシだけど。で、会いに来たのはどっちかって話だけでもうそんなことはどうでもいいさ」

思ったよりも早く再会できたと、揶揄われたことを根に持っているのかブツとした表情で答えるキルケーさん。なんでか分からないけどニトちゃんと同じ匂いがします。

「よお、魔女さん。おたくもついに来ちまったか」

「なんだい、誰かと思ったらあの時の弓兵じゃないか。相変わらず毒ってるかい？」

「人を毒殺魔みたいに言うのやめてくれませんか。あくまでアレは戦いの手段の1つだったの」

「まあまあ、いいじゃないか。同じく毒を扱うサーヴァント同士仲良くしようじゃないか」

「だから変な括りに俺を含めないでくださいませんかねえ……」

確かに互いに毒を扱うサーヴァントだし、ロビンに至っては毒状態か否かで宝具の威力がまるつきり違うからな。セイレムでもキルケーが毒した相手にロビンが宝具ぶつ放すつてことが多々あったし。

「鳥……肉……?」

「待て待て! 君はまた空腹なのかいつ!? 確かに私には羽が付いてるけれど別に鳥なんかじゃないからな!」

「? □ステイ。あとでおいしいご飯をブーディカさんやキャットに作ってもらうからもう少し待って」

「なら主、ボク中華料理を希望する」

今にも涎を垂らしそうな? □を見て全力で距離をとるキルケー。その必死の形相からどれだけ怖がっているのかがよく分かったのでやめておけと? □を止める。

それにしても中華料理か……あの2人なら大丈夫だと思っただけオレも手伝うか。ただし麻婆はダメな。

「まったく、君のいるところは本当に騒がしい限りだよ。これじゃあ、のんびりと過ごすこともできないじゃないか」

「でも退屈に過ごすよりかはマシでしょ?」

「……ま、まあ、あの島に捕らわれているよりかは、そうだねマシだとも」

「なら良かった。ここにはメディアアさん以外にもキルケーさんの知己もいるし、きつと寂しい思いはしらないと思うよ」

「さ、寂しいとは言っていないじゃないか! 勝手な解釈をするんじゃない!」

「どうやら凶星だったらしい。ガアー!と怒るキルケーさんはその見た目も合いあまって大変可愛らしく、ふんっ!と鼻を鳴らしながらも顔を逸らす姿は年頃の少女のようだった。」

「マスターも罪作りな男だなあ。あんまりそういうことを軽々しく言っていると何か刺されても文句は言えねえぞ?」

「……?別に普通のことだろう?」

「アンタちよくちよく鈍いよなあ……」

「むう、ロビンが一体何のことを言っているのかさっぱり分からない。キルケーの逸話的にそうなんじゃないかと思って言っただけなんだけど。」

「主、すまない。ボクお腹空いてしまった」

「おっと、さっきの鳥肉発言はマジだったのか。じゃあ、カルデアの案内の前に食事だな。キルケーとロビンも行こう」

「そもそもサーヴァントが空腹ってどういうことなんだよ……」

「いいじゃないか。私もこの時代の料理には興味があるし、なんならキュケオーンをご馳走してもいい。安心して良いよ、毒は抜いておくから」

「その言い方だと誰も安心できないんですけどねえ。対毒持ちのマスター以外全滅とかシャレにならないですわ」

「そもそもそんなことしようなものならブーディカさんとキャットが黙ってないからな」
「ふふふつ……さあ、どうだろうね」

何とも意味深な笑みを浮かべるキルケーにオレとロビンは顔を見合わせ苦笑する。
そんな和やかなオレ達を見て小さく？も笑う。

狂気の地を乗り越え、オレ達はそんな何気ない時間を過ごしていくのだった。

—おまけ—

「それで、アビーさんは召喚できなかったということですね」

「うん、？にキルケーさんは来てくれたけどアビーは来てくれなかった。あとティテュバ——じゃなかったシバの女王も」

「……アビーさん、元気でしようか」

「それは正直分らないな。あの子が旅立ったのは果てしなく続く外界の海だ。そこで何に触れているのかオレには到底思い浮かばないよ。だけど……」

「先輩？」

「きつとあの子なりに満足のいく道を探しているんだと思う。好奇心旺盛な子だし、もしかしたら色んな事に興味を惹かれてなかなか進めていかないかもしれないけれど」

「ふふつ、そうですね。アビーさんは私や先輩のお話にもよく耳を澄ませてくれましたから。知らないことを知るその幸せは私にも理解できます。……そうですね、私にとつてこの旅が世界を知るきっかけだったようにアビーさんにとつても彼女の旅路は世界を知るきっかけになっているんですね」

「いつかまた、会えたらいいな」

「はい、その時はもつともつとお話をしましょう。私達の旅路はきつと長いお話になると思いますが、アビーさんは最後まで聞いてくれるでしょうから」

今年もお正月召喚に挑戦してきたんだけど、新年だし大盤振る舞いで大丈夫だよな？（前編）

——目が覚めると知らない天井でした。いや、正確には天井じゃなくて真つ白な空（？）がずっと続いているようなそんな感じ。

「OK、なるほど。まるで意味が分からん」

おかしい。オレは先程まで夢の中で新年恒例の巻き込まれ系イベントに挑んでいたはず。そこで妙に色っぽい絵師に出会って、何か外的な邪神の力を目覚めさせた彼女と共に真つ黒なノツブと戦い、そして別れを惜しみつつ現実世界に戻ってきたはずだ。そのはずなのに何故また謎空間？

「やあ、——君。起きたかい？」

「おはようございます、先輩」

もはやこういう謎空間に引きずり込まれることに関して定評のあるオレ。寧ろ先程までそんな感じだったのだが、立て続けに放り込まれることは流石になかったので状況理解に頭を悩ませていると、聞きなれた声が背後から聞こえた。

「ダヴィンチちゃん、それにマシユまで。2人がいるってことはここはカルデアなのか

？」

「それが私も分からないんです。私もベッドで眠っていたらいつの間にかここにいました。ダヴィンチちゃんとはつきつき出会って、そして今先輩を発見したんです」

ふむ、マシユもこの状況はよく分かかっていないと。ということはその傍らに立つ天才様が何か知っているのだろうか。

「じゃあ、ダヴィンチちゃん」

「なんだい、——君？」

「全然動じていないことから察するに、ダヴィンチちゃんはこの状況を把握していると思っただけでこれってどういうこと？」

「ふっふっふっ。天才として答えを求められた以上答えないわけにはいかないな。ここはズバリ——お正月召喚の特殊空間さ！」

ドヤア！と笑顔で答える万能さん。うん、意☆味☆不☆明。

「いや、いきなり何でそんなメタチツクな感じになつてんの？色々すつ飛ばし過ぎな上に超展開過ぎてマスターついていけないんだけど。」

「そうです。納得のいく説明を要求します」

「うーん、もつと深く説明してもいいんだけど出来ればさせないでほしいかな。きつと今の君達を知るのはまだ早いと思うから」

「なにそれ本気で怖い」

「というか、結局一切説明になってない。そのことを指摘するとふんわりと説明をしてくれた。その内容を要約すると、なんか時間軸のズレた不思議空間に飛ばされたらしいということ。その不思議空間はお正月の召喚に適した場所であること、とにかく召喚しようぜっ!ということらしい。うん、本当にそれだけの説明だったんだすまない。」

「じゃあ、一応新年は迎えているということでもいいのか?」
「ああ、それに関しては確実だよ。時間的に言えば今は2018年だ」

「じゃあ、明けましておめでとう……ってことでもいいのか?」

「えっと、先輩? 明けましておめでとう……ぎいます……?」

「明けましておめでとう、——君」

「ああ、うん」

全くそんな気分になれねえぞ、おい。

「まあまあ、細かいことを気にしすぎているとストレスばかり溜まってしまつて福が逃げてしまうよ。せつかくの正月なのに。ここは思い切つて召喚と洒落こもうじゃないか。マシユ、召喚用に盾をセッティングしてもらえるかい? ここでいいから」

「えっ? あっ、はい」

ダヴィンチちゃんに言われるままに謎空間に盾を置くマシユ。本来であれば霊脈や

らなんやらの集まっている場所を選ぶはずなんだが、どうやら今回に限っては構わないらしい。

「よし、じゃあ召喚してくれたまえ——君。君自身、この正月の召喚は楽しみにしていたのだろうか？」

「そりゃあ、もちろん」

正月つてのは福が高まるせいか、限定的なサーヴァント達の召喚にチャレンジすることが出来る。その中にオレが召喚したい彼女も含まれているのだ。福袋もあるし、今こそねらい目。これに備えずして何とする、ということと石を貯めに貯めたり事前にダヴィンチちゃんから石も買っておいて万全の準備をしていた。

「星5確定召喚用に有償石が30個、それ以外に10連召喚約10回分に呼符も相当集まっている。君にしてはよくここまで貯めたものだね」

「どうしても召喚したい奴がいたからな」

感心するダヴィンチちゃんの言葉を聞きながら、オレは集めた石の山と呼符の山を見る。ダヴィンチちゃんではないが本当にここまでよく集められたもんだと思う。ぶつちぎりで過去最高である。

「そういえばどなたなのでしようか、その先輩の召喚したいサーヴァントとは。私は存じ上げていないのですが」

誰かってそりゃあ——

「ツンツンしてて素直じゃない白鳥だよ」

「……??」

「ほう、いったい誰のことだろうね。私も知らないし興味があるね」

「説明すると長くなるんだけど、メルトリリスっていうアルターエゴクラスのサーヴァントだよ。前にすげえ世話になったんだ」

「メルトリリスさん、ですか……? 私は聞き覚えがないのですが……」

むむむ……と頭を悩ませるマシユ（可愛い）とは裏腹に、ダヴィンチちゃんは目をキラキラさせながら早く召喚してくれ! と無言の期待を込めてきていた。まあ、アルターエゴのクラスは珍しいからね。

さて、まず挑戦するのは福袋召喚、俗にいう星5確定召喚のことだ。これは10連1回しかできない代わりに必ず星5を呼ぶことができるという破格の召喚である。以前は同じように召喚してアーサー王を呼べたことはいまだに鮮明に覚えている。

「今回の召喚は全クラスを2つに分かれていてね、3騎士＋ルーラーとアヴェンジャーの召喚と4騎士＋バーサーカー＋その他のエクストラクラスの召喚がある。——君はどちらを選ぶかい?」

「勿論、後者で」

アルターエゴを狙うんだ、当然の選択である。それに今のところうちは4騎士とバーサーカー、他のエクストラクラスの星5と言えど酒呑ちゃんしかいないからな。仮にアルターエゴの彼女が来なくても他のクラスのサーヴァントが来てくれれば十分な戦力になってくれるだろう。

「これで酒呑童子をもう1度召喚したりしたら面白いね」

「ダヴィンチちゃん、流石にそれはないんじゃないでしょうか。何故なら先輩の選んだ方の召喚だと星5のサーヴァントの方は30人。その中から酒呑童子さんをピンポイントで召喚するような運は先輩にはありませんよ」

「あははっ！それもそうだよね！ごめんごめんマシユ。いくら——君でもそんな確立引き当てないだろうね」

「はい、いくら先輩でも無理です」

楽し気に話す2人の会話のせいでフラグが立ちそうで恐ろしいのはオレだけですか……？（恐怖）

いやうん。ないない、いくらなんでもそりやないって。だって確率的に3%ぐらい……あれ？意外と高い？（星4引くのと同じぐらい）

「……あ、あつははは。ふ、2人ともそんなギャグみたいなこと起きるわけないだろ……」

！

「あの、先輩。大丈夫ですか？すごい汗ですが」

「気にしないでいいからっ！」

大丈夫、大丈夫……。この際アルターエゴの彼女じゃなくてもいいからダブリは……！ダブリだけは勘弁してくれ……。宝具レベルが上がるのは嬉しいんだけどせっかく他の星5を召喚できるチャンスなんだから……！

いや、高望みしていいなら白鳥の彼女がいいんだけど！

「……おし、いくぞ」

「なんだか先輩に静かな闘志オーラが見えます……」

「気合十分だね。これは期待してもいいかもしれない」

ダヴィンチちゃんの工房から買い取った聖晶石を召喚サークルとなつていているマシユの盾に投げ入れる。盾の表面にぶつかると直前に空間に溶け込むように石は消え、やがてお馴染みの光の回転が発生した。最初は白い光、しかしそれも虹色の色へと変化して高密度の魔力が漏れ出し始めた。

「星5サーヴァント召喚の兆しです！」

「早速来たかっ！さあて、誰の登場だろうね！」

「クラスは……アサシン、でしょうか？」

現れたクラスカードに刻まれていたのは暗殺者の刻印。色はもちろん金色。つまり

アサシンの星5サーヴァントが召喚されたということになる。

「あの、先輩これは……」

「いやいやいやいや！まだ大丈夫っ！ワンチャンジャックちゃんかもしれないし、フアラオとかじいじとか謎のヒロインとかニート姫かもしれないじゃんっ!?まだ分かんないじゃんっ!」

「アサシン、酒呑童子。またまた登場やあ」

「いやあああああつ！なんか恒例のレアサーヴァント召喚直前のタメも無しで普通に出てきたああああ!!」

なんとということでしょう……（絶望）

かなり際どい服装、手には果物と酒。小柄な体から発せられているとは思えないほどの鬼気。召喚されたのはこの短期間で2人目となる鬼の頂点の一角、酒呑童子その人（?）だった。

「あらあら、旦那はん。またうちを呼んでくれるなんて嬉しいわあ。そんなにうちが欲しかったと?」

事故です、とは言えない。何か言ったら食い殺されるような気がする。性的に。

「あつはつはつはつ!!ひいー!ひいー!くっ、くふふふ……!お、お腹痛い……!さ、流石だよ——君!君は本当に私の期待を裏切らないね!」

「そこで大爆笑してる万能っ！だまらっしやい!!」

「確率にして約97%を外してくるとは……今年も絶好調ですな先輩!」

「後輩のフォロワーがフォロワーじゃなくてトドメになってる!!」

なんでだよっ!逆に外す方が圧倒的に難しいだろうがよっ!相変わらず意味不明な召喚運だなおいつ!?

「旦那はんはそんなに求めてくれるなら、うちもまんざらではないし今晚美味しくいただかせてもらおうわあ」

「新年早々死んでしまうので勘弁してください」

その前にすでにカルデアにいる酒吞ちゃんの所へ行ってくださいお願いします(必死)

「なんや、うちら二人で攻め立てて欲しいんかあ?旦那はん、可愛らしい顔してなかなか『まにあつく』やなあ」

「ええい!このエロ鬼ツ!マシユの教育に悪いからやめなさい!」

「2人で攻め立てるとはどういうことでしょう……?」

「なんや小娘知らんのかあ。ええか、それは?——本当にやめんかつ!!」——ふふふつ。まあ真つ赤な顔の旦那はんが見られたから行幸とするわあ」

その後散々オレをからかい倒した後(やつぱり鬼だ)、酒吞ちゃんは姿を消した。ダ

ヴェインちゃん曰く、ちゃんとカルデアのもう1人の彼女の下へ行ったらしい。

うん、まあこういうこともあるさ。宝具強化ができたと考えよう。寧ろ考えなきや心が折れそうだから（自己暗示）

「あの、先輩。結局先程酒吞さんが言っていたのはどういうことでしょう」

「うん、知らなくていいんだ。マシユ、お願いだからそのまま真っ白でいてくれ」

「は、はあ……？」

さあ、次はどうとう彼女の召喚にチャレンジだ！前回は失敗したが今回はそうはいかないぞ！何故なら今回は石が大量にある。これならいけるはずだからな！

「では、早速やってみたまえ——君。君に幸運があらんことを」

「ありがとうダヴィンチちゃん！よーし！記念すべき新年最初の10連だっ！」

あつ、福袋はノーカンで。あれは星5確定だから。

グルグルと光を放つ召喚サークル。今年もおそらく見飽きるほど見るのだろう景色を眺めていると、バリバリと金色の光を放ち始める。

「高レアサーヴァント召喚反応！これは……！キヤスタークラスです！」

「おおっ！いきなり星4以上とは幸しいじゃねえかつ！さあ、誰だっ？」

金色のキヤスタークラスのカードが現れ、大きな光を発する。眩い光の中から何者かが歩いてくると気配を感じた。白い光のキャンパスに黒シルエツトが現れ、その形から召喚されたのが女性だということが分かった。

ピンと立ったウサギのような耳の形の被り物を頭に身に着け、手にはキヤスターらしい杖。彼女が歩きたびに足元まで伸びた髪が別の生き物のように揺れる。どう考えても布面積が足りていな服と、その褐色の肌の色から彼女がどこの英霊なのか理解することとは難しくないだろう。

「サーヴァント・キヤスター。天空の神ホルスの化身、ニトクリス、召喚に応じました。このようにファラオではありませんが、私はあまりに未熟の身。故に、今回だけ特別に貴

方を「同盟」の相手と認めましょう。……ですがその前に、言うべき事は言っておきま
す。コホン、頭を垂れなさい。不敬ですよ！」

皆大好き『全体即死させるウーマン』『出ませい！』『メジエド様ごっこ』等々の愛称
で知られるエジプトのファラオ。ニトクリスだった。

「ニトちゃんだああああ!!出ませいしたあ！」

「なっ?!いきなりなんですか貴方はっ!不敬ですよっ!そのような名で呼ぶことを許し
た覚えはありません！」

「あっ!ごめんっ!でもやっぱりニトちゃんって呼び方の方がしっくりくるからさー！」

「ふ、ふふふ不敬ですっ!不敬です不敬です!貴方、そこになおりなさい!サーヴァント
である以前に私はファラオです!きちんとした立場を分らせてあげます!」

「やりましたね先輩っ!」

「おおっ!これで周回がグツと楽になるぞっ!」

「そこお!話を聞きなさいッ!」

褐色の肌を赤に染め上げニトちゃんが大声で怒鳴る。もちろん彼女の声は聞こえて
いたがここは弄り倒すべきだと思っただ（使命感）

ほら、彼女すごく良い人なんだけどちよつとポンコツなところあるじゃん?あまりに
も可愛らしくてつい、な。決して先程の憂さ晴らしとかではない（確信犯）

「ごめんごめん。でも来てくれて本当に嬉しいよニトちゃん」

「ですからっ！そのニトちゃんって呼び方はやめなさいと言っているでしょう！鏡取り出しますよー！」

「それは死ぬからマジ勘弁」

一般人にニトクリスの鏡とかオーバーキルどころじゃないから。

「まったく、貴方は相変わらず不敬です。不敬の塊です。もつと私のように気品のある行動をしてほしいものですね」

「そうか、気品のある行動をするとメジエド様ごっこし始めるのか」

「あつ、あああれはそういうイベントだったからです！楽しいイベントなのに堅物のような態度をとる方がかえって失礼に当たるでしょう!?!」

羞恥心にさらに顔を真っ赤に染め上げるニトちゃん。うん、流石にこれ以上は可哀想だ。臍を曲げられて契約を無しにされても嫌だからここらへんでやめておこう。

そう考えたオレはその場に跪き、ニトクリスに頭を垂れた。突然の畏まった姿勢に「えっ？ええっ？」と彼女が動揺しているのが分かる。

「偉大なるファラオ、ニトクリス様。先程までの無礼な言動、大変申し訳ありませんでした。しかし、そのナイルの川のような寛大なお心を信じお願いがございます。ぜひ、私に貴方様のお力をお貸しください。天空、冥界の神と名高き貴方様にこのような申し

「出は不敬以外の何物でもないとは重々存じております。ですが、貴方様のお力が必要なのです」

「あ、あの……いきなりそんな畏まられても困ると言いますか、調子が狂うと言いますか……」

「お願いします、ファラオニトクリス！偉大なるホルス神っ！どうぞ、この小さき人間にお力を！」

「ああもうっ！分かりました！分かりましたからっ！ちゃんと力をお貸しますっ！だからその妙に畏敬を持った態度はやめなさい！私がやりにくいっいたらありやしません！」

「……よろしいのですか？」

「ファラオが許しますっ！だから頭を上げて普通にしなさい普通に！」

ちよろい（確信）

「ここらへんでやめておこうといったな。アレは嘘だ。」

「じゃあ、これからよろしくなニトちゃんっ！そのうちなんとかオジマンとかクレオパトラとかも呼んでみるから！」

「急に変わり過ぎでしょうっ!!?あとそのニトちゃんはやめなさいっ！私と貴方はあくまで同盟者っ！ファラオとしてそこは譲れません！」

「えー、可愛いなー」

「やーめーなーさーい！」

ギヤーギヤーと騒ぐこと約5分。結局ニトクリスが折れることでこの契約は終了し、恨み言を吐きながら彼女は姿を消した。酒呑ちゃんと同様にカルデアへと行ったようだ。

相変わらず押しに弱いというか、人の好きが滲み出ているというか。本当に良い女王様なんだけどもなあ。

「先輩、ニトクリスさんに失礼ですよ」

「すまんすまん、つい嬉しくてやりすぎちゃった」

「あれがフアラオニトクリスの本性、というか素なのかもね。史実では冷酷な復讐の女王だったみたいけどこうしてみると普通の少女じゃないか」

「できればカルデアにいる時ぐらい、本当のニトクリスさんでいて欲しいですね」

「ああ、そうだな」

「先輩はやり過ぎないようにしてくださいね。ニトクリスさんも人類史に名を刻んだ立派な英霊のお一人ですから」

「うっ、反省します……」

マシユにメツと怒られる。はい、すみません。次に会った時にちゃんと謝ります。

さあて、じゃあニトちゃんへの謝罪の言葉を考えつつ次の召喚にいつてみようか！今回は結構いい流れが来てるみたいだし、次の10連もワクワクしながら回すぞー！！

——と、意気込んでみたものの。

「まあ、そううまくはいかねえよな」

「恒常星4礼装が1枚にお正月のマーリンさんとアルトリアさんの礼装が1枚。あとは通常の星3サーヴァントの方ですね」

「さつきまで妙に良い引きだったから落差を大きく感じるのはいしょうがないと思う」

「もしかして先程の召喚で先輩の今年の運氣を使い果たしてしまった可能性が……」

「頑張れオレの運氣！今年はまだ始まったばかりだぞ！！」

こんなところでくたばってたまるかっ！うおおおおお燃え上がれオレの中の運氣いいいい！！

ということとでせいっ！！と次の石を投球。バラバラに召喚サークルに突っ込まれていく魔力が込められた石の力により光の帯が力強く輝いて金色の輪を生み出した。

「おやつ？これは良い反応が来たみたいだね」

「おっしやああああ！！」

「これは今までにない頻度の高レアサーヴァント召喚回数ですね！先輩、ちなみに育成用の素材の貯蔵は大丈夫ですか？」

「大量に確保してあるぞっ！何故なら常日頃から新規サーヴァント引かないからなっ！育成素材には困らない！」

「ものすごく高いテンションでもものすごく悲しいことを言うね、君……」

ただしQP、お前だけはダメだ。最初のうちは『全然余るわあw』とか思ってたのに気が付いたら底を尽きかけてて宝物庫周回をすることになったんだぞ。誰でもいいから5000兆QPくれないかなあ。

新年早々しようもないことをいえるかも分からない神に祈っているとやがて光の中からクラスカードが現れる。刻まれていたのは騎兵の刻印。つまりライダークラスだ。召喚サークルを中心に放たれていた光が靄が晴れるようにその濃度を薄めていく。

「一体誰……ああ、いや。もう分かっただな」

「はい、はつきりと姿が見えなくてもあの特徴を持つサーヴァントは御一人、いえ御二人しか知りませんから」

現れた影は2つ。本来の召喚であれば同時に2人の英霊が召喚されるということはある得ない。10連召喚はあくまでそれぞれが1度の召喚として扱われ、召喚されるのも1人だ。

だが、今召喚されたサーヴァントは1度の召喚で2人召喚された。つまり2人で1人のサーヴァント。ここまで分かれば誰が来たのか推測するのは容易いもの。

1人は赤い装束を身に纏い、胸元を大胆に開いた背の高い女性。もう1人は黒い装束を口元まですっぽりと覆い、顔を二分するような大きな傷跡のある小柄な女性。世界にその名を轟かせた、間違いなく史実における最高レベルのコンビ。

「ビックリした？　僕達は二人でサーヴァントなんだ」

「彼女はメアリー・リード、私はアン・ボニー。宜しくお願ひ致しますね」

生きた時代では異例中の異例であった女海賊、アン・ボニーとメアリー・リードだった。

「おおおおおっ!!ようやくうちに黒髭以外の海賊が来てくれたぞっ!!」

「ドレイク船長も我がカルデアにはいませんからね!」

これは嬉しいぞ!なんせオレだって男だ、海へのロマンとか憧れとかそういうのもある。あの大海原を駆け抜けた無法者にして冒険者達の話を直接聞きたいと思ってもしょうがないだろう。

だが、肝心の黒髭はあんまりそれ系の話をしてくれないんだ。大体が途中でモーレッツなパイレーツやらひとつなぎの大秘宝とかの話になってしまい全然続かない。いや、その話はその話で楽しいんだけどよ、違うんだ。女子高生海賊とかゴムゴムの少年の話じゃなくて本当の冒険譚が聞きたいんだ。

「やあマスター。あの異質過ぎる特異点以来かな？ 元気にしてたかい？」

「ご機嫌麗しゆうマスター。ようやく出会えたこと嬉しく思いますわ」

「召喚に応じてくれてありがとう2人共。オレもまた会えてうれしいよ。もちろん絶好調だ」

「こんにちは、メアリーさん、アンさん」

「うんうん、マスターも盾の娘も元気そうで何よりだ。海賊は基本的に海の上にいるからね、調子を崩して船医にすら手に負えなくなったらイコール死だからね」

「そうですね。ましてや今は新年なのでしよう？ このおめでたい時期に病氣なんて面白くないですもの」

なんだろう。すごく平和な会話だ……。鬼にフアラオと続いてネジがぶつ飛んだようなテンションだったけど、この親戚のお姉さんに久しぶりに会って新年のご挨拶をしているような気分はなんなんだ。

「ところでマスター。さっきのセリフから察するにここにはあの髭がいるのかい？ いる

のなら今すぐに細切れにして魚の餌にしないといけないんだけど。ああ、ごめん。それだと魚が可哀想だ。灰も残らず燃やした方がいいね」

「そうですわね。どうせ居たところで周りに悪影響しか与えないのですし、ここは思い切って風穴開けてあげるのはいかがでしょう。幼い子達に変なことしていませんか？ロリコンの魔の手にかかっていませんか？」

「嫌われすぎでしよ黒髭……」

いや、気持ちは分かるけどよ。でも、あれだよ。一応黒髭も最低限の決まりというかマナーは守ってるよ？Yesロリータ！Noタッチ！だから物理的な被害は出てないんだ、意外な事に。でも視線が気持ち悪いかかデュフデュフ言ってるのが気持ち悪いかもう存在が気持ち悪いかかそういう報告は上がってる、主に某女神様から。アステリオス君がその度に『まもる……から……』と言ってるのを聞くと不謹慎ながらほっこりするんだよね。

「まあ、もしそういう場面に出くわしたら対応は任せるよ。ガッツ持ちとはいえあんまりやりすぎないでね」

数少ないオタトークができる相手だし、戦力としても星2とは思えない火力を叩き出してくれるからね。つか、スキルが回復に攻撃バフにガッツに宝具威力アップって割と万能なんだよ黒髭。

「分かりましたわ。では、風穴ということでもよろしいですわね」

「うん。細切れからの消し炭ということでもいいね」

「先輩先輩！御二人が全く答えを変えてくれてないんですが……！」

「もうそれでいいんじゃないかな……」

微塵も分かってくれてねえが、日頃の行いの悪さだ。成仏しろよ黒髭。生きていたら

またアニメDVD一緒に見よう（フラグ）

今年もお正月召喚に挑戦してきたんだけど、新年だし大盤振る舞いで大丈夫だよね？（後編）

それから、黒髭への殺意を一切隠そうともしない2人をカルデアへと見送った後、少し休憩して再び召喚に挑戦する。が、思うような成果を得られなかった。

「それにしても、これだけ召喚しているのに——君が召喚したいと言っているそのメルトリリスとかいうサーヴァントは来ないね。嫌われてるんじゃないのかい？」

「いや、それはない」

「すごい自信ですね、先輩」

「だってお墨付きだからな」

「……………」

以前オレがメルトに会えなくて落ち込んでいた時にラスボス系後輩からもらった言葉。今でもその言葉を信じている。メルトと共に過ごした時間を信じている。だから断言しよう、嫌われてるとかそういうのは絶対ない。

「——だから、来てくれ、メルトっ!!」

そうして投げ込まれる石達。すぐさま魔力へと変換され、光の玉が回転を始める。1

つ目、礼装。2つ目、礼装。3つ目——っ!!

「金色反応来ました!高レアサーヴァント召喚されます!!」

金色に発光した魔力はやがて光の柱となるよう一際強い輝きを見せる。やがてその中から1人の影が現れた。

その人物こそ、オレが待ち焦がれた——

「——サーヴァント・アーチャー。召喚に応じ参上した」

「そこはメルトが来る流れだろうがこのドンファン顔オオオオ!!でもやつと来てくれたなこのやろおおお!!」

赤い外套に白髪の逆立った髪。やや褐色に染まった肌に鍛え上げられた肉体。雰囲気から皮肉屋で愛想無しというのが嫌でも分かるが、同時に心優しき英雄であるということも伝わってくる。『錬鉄の英雄』、『贗作者』、『^{フエイカー}紅茶』、『カルデアのオカン』とこれでもかと異名を持つ弓兵のサーヴァント。

「やれやれ、呼ぶのが随分と遅い上、ようやく呼ばれたと思つたら君はいきなり一体何を言つてるんだ。それに誰がドンファン顔だ」

「仕方ねえだろう！オレだつて召喚できたことへの感動と、あんたが来てメルトが来なかったことへの絶望感でいっぱいなんだっ!!」

「ふむ、何やら機嫌損ねてしまったようだ。全く心当たりがないのだがね」

名を『エミヤ』。オレの最初の特異点である冬木において敵として立ち塞がったこともある英霊だった。確かBBにメルトとエミヤは多少なりに関わりがあると前に聞いたがそれ関係か？

「くそう、エミヤさんが来てくれたことは嬉しいのに素直に喜べない……!」

「その少女——マシユといったか。マスターはいつもこんな感じなのかね？」

「今日は殊更テンションのアップダウンが激しいですね。喜ばしいことがあつたり悲しくなるようなことがあつたりしたので」

「新年早々おめでたいものだな。いつかの聖杯戦争の召喚を思い出して心配になつてき

たぞ。いや、彼女はもう少し魔術師らしかったか？……ええいマスター、少しはシャキツとしたまえ。それでも君は人理を救った人間か」

「……そうだ、いつそのことエミヤさんを触媒にしてしまえば可能性は上がるんじゃないか？」

「待て、私の顔を見て物騒なことを呟くんじゃない」

「エミヤとエミヤオルタを2人並べればもしかしたら効果はさらに倍……？」

「さらに恐ろしいことを口にするんじゃない。君はあれか、戦争でもしたいのか」

何とか今召喚できたエミヤさんをメルト召喚に活かせないかと考えていたが全て却下されていく。うーむ、おかしい。何となく女難っぽいエミヤさんがいれば来てくれそうな気がするんだけど……。まあ、確かにエミヤさんとエミヤオルタさんを同じ空間においたらそこら辺が剣の残骸でいっぱいになりそう。固有結界のバーゲンセールが起きそう。

「——よし、分かった」

「そうか、ようやく分かってくれたか。そうとも、私は戦場で生きる者であり剣に過ぎない。だからこそ——」

「エミヤさんにはうちのカルデアの料理長をしてみらおう。おーし！これでオレもようやく肩の荷が下りたぞ——」

「待て待て待てマスターア！何故私のポジションニングが厨房なんだ！私が持つのは剣であつて包丁やおたまではないぞ！」

「えっ？」

「えっ？」

いや、貴方は誰よりもまず厨房に立つべきでしょう。カルデアのオカンの異名は飾りではないことを見せてくださいよ。うちには少ないとはいえ、セイバーオルタさん、ランサーオルタさん、サンタオルタさんとアルトリアさん達がいるんですから。というか反転してる腹ペコ王しかいねえことに今気づいた。

「じゃあ、お願いなエミヤさん。時々水着着た女神とか小悪魔チックなエミヤさんと似た褐色少女とかジャガーとか来るかもしれないけどよろしく！」

「猛烈に逃げたくなつてきたうえに寒気までしてきたぞ……」

大丈夫大丈夫！たぶんどうにかなるって！という我ながら完全に棒読みのエールを送る。ぐうううう……と何かに耐えるかのような唸り声を上げていたエミヤさんだったが、やがて何かを悟つたかのように静かにカルデアへと消えていった。帰る際の大きな背中から哀愁が漂っていたのは間違いないだろう。

「これでカルデアの食事情に大きな一手を打てそうですね」

「アルトリアさん達の食欲はすさまじいからなあ。料理ができる英霊が増えたのはデカ

い」

も、もちろん戦闘でも頼りにさせてもらうぞ？ エミヤさんは戦闘と家事全般をこなせるオールマイティーサーヴァントだからな！ バトラーだからな！……過労死だけはないように気を配ろう。

それから召喚を続けたものの、限定礼装やすでに我がカルデアにいる星4のメンツばかりでメルトが来る気配は全くなかった。

「先輩、いよいよもって次が最後の10連召喚になるのですが……」

「星4のサーヴァント達がかかなり増えたとはいえ、いまだに——君のお目当てのサーヴァントは召喚されていない、か。物欲センサーというものは須らく恐ろしいということだね」

「うーむ、ここまで召喚してみてもすんとも言わないのは何かしら不具合でもあるんじゃないかと思いたくなるな。そこんところどうなのダヴィンチちゃん」

「はっはっは！ 今更カルデアの召喚術式に不具合なんてあるわけだろう。ここは特異な空間とは言え術式には何ら問題はないよ。問題があるとすれば君以外にあり得ないからね！」

「くそうっ！ きつぱり言い切られてしまった！」

「ということやはり先輩は今年も……」

いやいや星4がいっぱい来ている時点で去年よりは随分とマシだからね!? そんな悲しい顔をされても困るからね!? 泣きたいのはオレの方だよっ! 違うよっ! オレの運気は謙虚なだけだよ! どっかのナイトと同じレベルで謙虚なだけなんだよ!

「そうですかありがとう強がりすぎいですね」

「マスターは深い悲しみに包まれた……」

「先輩とダヴィンチちゃんと言語が何やらおかしくなっちゃいました……」

うん、黄金の鉄の塊でできているナイトごっこはここまでして、最後の召喚と行こうか。まあここまでトライしてみてもダメだったら、今回はまだその時じゃないってことなのだろう。その場合は潔く諦めるさ。

「じゃあ、新年最初の召喚チャレンジ、最後の10連の石達よ! いっけー!」

ポイポイと放り投げて召喚サークルへと吸い込まれていく石達。そういえば今までどれくらいの石達を召喚に使ってきたのだろうか。うーん、去年の途中まで石を購入したりすることなく無償石のみで頑張っていたから……3〜4000個ぐらいだろうか? あくまで推測なので分からないが。

そう考えると結構な召喚にチャレンジしてきたんだと思う。まあ、結果はお察しだが。

「あつ、先輩! 金色反応来ましたよ! 高レアサーヴァントです!」

『あなたは今まで食べてきたパンの枚数を覚えてるの?』『13枚。私は和食ですわ』つて会話のキャッチボールをしてる吸血鬼と魔法使いがいたなどかなり適当なことを考えていたのだが、マシユの鋭い声にハッと我に返る。

「おっと、最後の最後でこの反応か。これはもしかしたらもしかして良い締めになるんじゃないかい?ここで——君のお目当ての『白鳥』とやらが来たら何ともドラマチックだ」

バチバチと反応する反応は今までの星4のサーヴァント達のそれに比べて桁違いに強い。肌を刺すような圧倒的な魔力、強者らしい後退してしまいそうなプレッシャー、手の甲に刻まれた令呪がドクンドクンと脈を打つ。

——間違いない、これは星5のサーヴァントが召喚された反応だ。

「クラスカード現れます!これは……!な、なんですかこのクラスは……!」

「見たことがないクラスカードだね。ローブを被っているが、中身の造詣が人間に見えない。周囲に描かれているのは星……いや、宇宙かな?現在カルデアにいるどのクラスにも該当しないということは、残された可能性は1つだ」

「もしかして、『フォーリナー』のクラスということですか!」

『フォーリナー』。セイレムという特異点で出会った新たなエクストラクラス。外宇宙、別次元より降臨した存在を指すということとは分かったのだが、いまだに謎の多いクラス

だ。

「ということとはアビーさんが来られるということですね！やりましたね先輩！」

「いや……もしかしたら違うかもしれない」

「えっ？ですが、現在確認されている『フォーリナー』にクラスはアビーさんのみだったはずでは……？」

確かにあの夢を体験していないマシユからしたらそうなのだろう。だが、オレも一人知っている。セイレムで出会ったあの少女とは別の、もう一人の『フォーリナー』クラスの霊基を持つ存在を。

身の丈もある大筆を携えて彼女はやってきた。花札で言う芒に月模様の着物を着こなし、帯には華を象った装飾が施されている。同じ華の装飾を用いて髪の毛を結っており、ニヤツといたずらつ子のように小さく笑う笑みは大変可愛らしい。そして、何よりその彼女の隣にいる宙に浮いた黒い蛸が異常だった。

「——葛飾北斎。しがない画工サ。お手前様が『ますたあ』殿で？ま、勝手気ままにやらせてもらうサ」

彼女と彼こそ。日本のみならず世界にその名を轟かせている最高峰の芸術家。ありとあらゆる絵画を網羅し、和に洋と節操がない超有名絵師、『葛飾北斎』その人だった。「……まさかこんなに早く再会できるとは思わなかったよ」

「おうとも、おれもまさかこうしてますたあ殿に会えるとは思ってなかったよ。こつちにはいつ戻ってきたんだい？」

「ほんのついさつきだよ」

「そうかい。そこら辺の時間の感覚がおれはいまいち曖昧でなあ。まあ、何せよこの出会いに感謝感激雨霰ってか」

カツカツカツ！と見た目に似合わない男勝りな笑い声を上げる北齋さん。いや、お栄さんか？まだ和服の姿をしているということはたぶんお栄さんのはずだ。北齋さんである蛸が隣でフヨフヨしてるし。

「せ、先輩。この方は一体……？」

「おおっ！何やらめんこい美人がいるじゃねえのサ!!名前は何んていうんだい!」

「は、はい！マシユ・キリエライトといいます！えっと、貴方があの有名な葛飾北齋氏なのでしょいか？」

「そうかいそうかい！ましゆつて名か！いい名前じゃねえか！で、おれが葛飾北齋かって？まあ、一応おれとと様は一人と一匹で一つみてえなもんだから間違っちゃいねえが、正確にはこの蛸坊主がそうサ。おれはとと様がいなかったらただの娘サ」

「そ、その宙に浮いているのが……!?!」

目まぐるしく進行していく事態にマシユがアワアワとテンパっているのがものすごく伝わってくる。まあ、そりや見たことのないクラスが召喚されたと思っただらそれが『フォーリナー』のクラスで、それならアビーが召喚されたと思っただら、いきなり新たな『フォーリナー』クラスのサーヴァントが召喚されて、しかもそれがあの葛飾北齋で、かと思っただら実はその傍らにいる蛸が北齋本人で……うん、マシユじゃなくてもこんな混乱するわ。オレだって初見でこんな状況になったら思考を放棄するレベル。

「まさか2人目のフォーリナーが葛飾北斎とはね。——君、いつの間に縁を結んだんだい。」

ついさつきです、とまだ説明していなかった初夢の内容を2人に説明する。また自分達の知らない間にオレが厄介ごとに巻き込まれていたことに驚いていたが、特に口を挟んだりせずに静かに聞いてくれた。

「——なるほど。よもやそんなことが君の身に起こっていたとはね。というか、確か去年もそんな感じのことにいくわしていなかったかい？」

「武蔵さんとの出会いの時ですね。先輩、新年早々からお疲れ様です」

「なんだい、ますたあ殿は去年も似たような目に遭っていたのかい。そりや随分と厄介ごとの神様に好かれちまったようだねえ」

「は、ははは……」

その厄介ごとの一端は少なからず貴方が関わってるんですけどね……と口に出すものの、はっはっはっ！そりや確かに！これは一本取られたねえ！と軽く笑い飛ばされてしまった。くっ、そんなに楽しそうに笑われてしまったら何も言えないじゃねえか。やっぱ美人はズルい。

「じゃあ、改めてこれからよろしく頼むよますたあ殿。絵を描くぐらいしか能がねえおれ達だが、逆にそこだけは誰にも負けねえ。漫画でも屏風絵でも今時の萌え絵？でも何

でもござれてんだ」

「うん、よろしくお願ひします。北齋さん、お栄さん」

「あと、そのかたつ苦しい喋り方。おれとお前の仲だろう。もつと楽にいこうじゃないか」

「分かった。じゃあ先にカルデアに行つてくれ」

「おうよ。じゃあな。あつ、それとそのまじゆと別嬪さん。後で一筆描かせてくれよな」

ヒラヒラと手を振つて消える北齋さんとお栄さん。なんというか、芸術系のサーヴァントは独特の雰囲気を持つているからいなくなつた瞬間の空気の変化がすごい。

「す、すごく豪胆な方でしたね……」

「あれが葛飾北齋とその娘か。——君も奇特な人物に出会つていたものだね。というか私をモデルに選ぶなんてやはり超一流は分かつてる！まあ、私のモナ・リザよりも上手いとは思えないけどね」

「ダヴィンチちゃんも北齋氏の絵対決とか次元が違いすぎるだろ……」

誰が判定下せるんだよ。少なくとも人間には無理な気がした。こういう時にギルガメッシュとかいるといいのかもしれないなあ……。

「ふふつ、それも楽しみだけれど今は置いておこう。これにて新年の召喚は終わりつて

ことでいいのかな？」

「うん、まあ石も呼符も使い切っちゃったしね。1番召喚したかったサーヴァントが召喚できなかったのは残念だけど、これも星の巡り会わせてやつだろ」

また新しいピックアップに備えてコツコツ石を貯蓄するよ。慌てなくてもきつといつか出会えるさ。

「私も先輩のいう白鳥さんという方に会ってみたいです。きつと素敵な人なんでしょうね」

「さっきも言ったけど素直じゃないけどな。でも、なんとなくマシユと気が合うんじゃないかな。何か根っこの部分が似てるなって思うからさ」

誰かのために戦える、そんな強さを2人は持っている。だからきつと仲良くなれると思う。いや、やつぱりメルトは素直じゃないしツンツンしてるからマシユが苦労してしまいか？でも、冷たくあしらわれてもマシユならスツと寄り添えるんじゃないかな。

そんないつか訪れて欲しい夢は描きながら、オレは明日からの日常に思いを馳せるのだった。

何故忘れていたのか、まるで意図的に記憶を一時的に消されていたようだった。次に目覚めた時にオレは全てを思い出した。自分達の現状、これから立ち向かう強大な敵のことを。

——オレ達の旅路の終着点は、いまだ見えない。

「現実世界に帰る直前の話」

「よし。じゃあ——君、マシユ。君達は先に戻ると良い」

「あれ？ダヴィンチちゃんは？」

「いいからいいから。私はまだここの処理が残っているからね。先に君達だけで帰還し
たまえ」

「それなら私もお手伝いしますよダヴィンチちゃん」

「なあに私は万能の人だぜ？これくらい1人で十分十分。さあ、帰った帰った。適当に
目を瞑れば戻れるからさ」

「ふーん、そんなもんなのか」

「便利な空間ですね……」

軽く会釈をしてこの空間からの退去を試みようとする少年少女。そんな2人を愛お

しそうに見つめる英霊がいた。英霊は知っている。これが、今の自分と彼らとの別れになることを。

——彼らとずっと共に戦ってきた。どんな状況でも決して諦めずに歩んできた彼らを見てきた。グラントオーダーというあまりにも重すぎる旅路にゲーティアの残した4つの異種なる特異点の修復。それ以外にも世界の危機が訪れる度に果敢に立ち向かっていった。

そしてそれらを乗り越えてなお、少年少女に新たな苦悩が降りかかろうとしている。本当はもう安息の日々に戻ってもいいのに、これ以上戦わないでいいのに、それでも彼らは立ち向かうと決意した。その心はあまりにも気高く、尊く、レオナルド・ダ・ヴィンチにとつて美しいものだった。

「——君、マシユ」

「うん？どうしたのダヴィンチちゃん」

「どうかしましたかダヴィンチちゃん」

「……………いや、なんでもないさ」

「なんだそれ」

「おかしなダヴィンチちゃんですね」

少年は怪訝な顔をし、少女はクスリと笑う。浮かべる表情は最初の頃と何も変わって

いなかったが、それでも彼らは随分と強くなった。身体だけではなく心も。

——これなら、あとは任せても大丈夫かな。

万能の人は何も言わず、ただ笑う。自身の信じた最高の美しさで笑みを浮かべる。奇しくもそれは、あの時霊基を貫かれた時と同じ笑みだということを本人は気づいていない。

「じゃあ、先に戻ってるから早くダヴィンチちゃんも戻って来いよなー」

「お先に失礼しますねダヴィンチちゃん」

「……ああ。またね2人共」

そうして戦友でもある少年と少女がこの空間から消えた。無事に現実の世界に戻れたのだろう。ただ1人残された存在は、自身の身体が僅かに光を放ち徐々に消えていつていることに気が付く。

「なんとももつてくれていたが、流石に限界か。——君、マシユ。これから君達の進む先はこれまでとは全く違う戦いが待っているだろう。一応バックアップを残してはいたけど、君達と共にいけなくてすまないね。でも、私なりに完璧なフォローはしたつもりだ」

消えていく。女性の美しさの究極のような身体が、その手に持つ杖が。少しずつ消えていく。

「——ロマニ、君もこんな気持ちだったのかい？だとしたら、君はズルいな。こんな気持ち
ちを先に味わっていたなんて」

臉を閉じると、あのヘタレでかつこ悪くておつちよこちよいで、だけど勇気を振り
絞って消えていった悪友の姿が映る。

「後を託せる相手がいるってことがこんなに嬉しいなんて、君は本当に幸せ者だよ。ま
あ、これで私も幸せ者の仲間入りだけどね」

白い空間に同化していくように薄れていく。もうほとんど消えかかっている彼女は
ニコリと聖母のような笑みを浮かべた。

「——君。マシユ。君達の旅路はこんなところじゃ終わらない。愛と希望の物語の完結
にはまだ早すぎる。定番のセリフだが、だからこそ響くというものだろう。——2人
共、頑張りたまえ」

——そして、カルデアを支え続けた万能ウオモウニヴエルサーレの人は静かにその身を消滅させた。その
大きな存在は、彼女が託した少年少女へと受け継がれる。世界を、人類を、何より大切

な人達を守るために。

百重塔を登ってきたんだけど、踏破云々よりも英霊達の温泉シーンの方が魅力的だよね？

突然だが『法隆寺』という建物をご存じだろうか？その中の金堂、五重塔を中心とする西院伽藍は世界最古の木造建築物と呼ばれる日本を代表する建築物である。いきなり何を歴史の勉強を始めているのかと疑問に思うだろうがもう少しだけオレの話に付き合ってほしい。

今回のポイントは五重塔という部分だ。下から地（基礎）、水（塔身）、火（笠）、風（請花）、空（宝珠）といった区分に分かれておりそれぞれが5つの世界・思想を表している、らしい。Wikipedia先生が言っていた。いかにも厨二心をくすぐってくる設定がある塔なのだがその階層がもっと増えたらどうだろうか。具体的には百階ぐらいにうん、メツチャ高いね。

さて、ここまで長々と中身の無い話をしてきたわけだがいい加減結論を言おう。つまりオレが何を言いたいのかというと——100階層+ α の建物とか足腰が死ぬ。

「あ、あ、あ、あ……生き返るううううう」

自然と口から溢れた言葉を湯船にポロポロと零し、溜まりに溜まった疲労が少しずつ薄れていくのを感じながら凝り固まった筋を伸ばしていく。いつも以上に足腰に負担が掛かった今回の特異点攻略だったがその分達成感も大きく、口元も無意識のうちに綻んでいた。

『節分酒宴絵巻 鬼楽百重塔』と銘打たれた今回の特異点。いきなりレイシフトしたかと思えば歴史上存在しなかった百階建ての塔が現れ、何人ものサーヴァントが行方知れずになった異変だった。実行犯は羅生門の時と同じく酒？童子と茨木童子。この2人の鬼が起こした騒動だったため、一応彼女達のマスターとしてお灸を添えなければいけなかったオレはどうやって建てたのか分からない百重塔の踏破に挑み、襲い掛かってきた彼女達を撃破した。まあ、結局その後もう百層上ることになって合計二百階層上つ

た。馬鹿かと思った（疲労困憊）

「せんぱーい、温泉気持ちいいですねー!」

温泉を区切るように備えられた壁の向こうから飛んでくるマシユの声。そう、この場にはオレだけではなくマシユもいるのだ。いつものカルデアの制服でもサーヴァントとしての装備でもない生まれのままの姿の彼女が。

いやまあほらオレだって男だから意識すんなってのは無理な話でどうしてもオートマチックに想像してしまうわけでもそれも悪いと思っっているわけでしか本能というか^{さが}性というか制御しきれない部分もあるわけでとりあえずありがとうございますというかごめんなさいというかおい馬鹿変な想像すんなオレ煩惱退散っ!!（高速詠唱）

今もこの壁の向こうで後輩の少女が生まれたままの姿でいるという事実に色々と意識してしまいそうになるがそれは素数を数えることで誤魔化す（誤魔化せるとは言っていない）

「2、3、5、7、11、13、17……!!」

「せ、先輩?大丈夫ですか?」

「大丈夫っ!大丈夫だから!」

な、ならいいんですけど……と薄い壁一枚で隔たれた向こうから聞こえてくる。温泉に浸かって火照っているせいとか妙に艶めかしく聞こえてしまう。なんだろう、話しかけ

られるたびにオレの中の何かがすり減っていく気がする……。

だがこの場にはスタツフ達が気を使ってくれてオレ達2人しかいないため、このまま黙っているというのも居た堪れない。なので少し会話を展開していくことにした。

「マ、マシユこそどうだ？温泉初めてだったんだらう？」

「はい！バスルームでお風呂に入ることにはあつても天然の温泉に入ったことはなかったのですごく気持ちいいです！ジャパニーズの素晴らしい文化ですね。オンセンタマゴなるものも試作しているので後で食べましょう先輩」

「何それ美味そう。それもこれも巴さんの怪力様々だな。あれ？そっぴや件の節分女将はどうしたんだ？」

「そういえば番頭にもいませんでしたね。どちらへ行かれたのでしょうか？」

おかしいな、さつきまでいたのに。……ん？いたよね？オレ召喚できた覚えがないけどいたよね？一緒に二百層駆け上がったよね？いた……よね？（震え声）

「先輩ストツプです。それ以上はいけません」

先輩ストツプがかかる。そして巴御前がいたと思っても実際にはうちのカルデアにはいないので、そのうちマスターは考えるのをやめた（究極生命体感）

というか、いい加減この手のネタ飽きてきたな（呆れ）

「巴さんと温泉と言えば……知ってますか先輩」

「ん？」

「元暦元年（1184）の1月、朝廷や源頼朝から追討された巴さんの夫である義仲は近江栗津の戦いで頼朝から派兵された源範頼、義経軍に敗れ自害する際に巴さんに逃げ延びるように命令したとされています。巴さんは数人の家臣と共に戦場を離脱し白根山麓の湯の池……つまり現代で言う草津温泉まで辿り、傷ついた体と義仲を失った心の痛みを癒したと伝えられているそうですよ」

そう言った経緯があり、巴さんは草津温泉の象徴的存在である湯畑の石柵にその名が刻まれているそうですよとマシユペディアの知識を惜しみなく発揮してくれるマシユ。「へー、じゃあ今オレ達が入っているこの温泉は草津温泉とも言えるわけか」

「い、いえ。流石にそれはこじつけが過ぎるか……」

「あつ、やつぱり？でもご利益は自体はありそうだしゆっくり癒させてもらおうぜ。霊泉なだけに傷や魔力の回復も早いし」

「ふふつ、そうですね。この特異点が修復されるまでの少ない時間をのんびり過ごしましょうか」

取り留めのない会話を続けながらこの自然の癒しに身を委ねる。聞こえるのは互いの声と身体を動かした時に聞こえる湯船の音、そして僅かに吹く風によつて揺れる木々の音のみ。いつかの海とはまた違った穏やかな時間だった。

『ゆったりしているところ申し訳ないが通信させてもらうぜ——君!』
「のおわっ!?!」

「先輩!?!」

うおおおおおおい!?!あんた一体何しちやってんの!?!こちとら今すっぱんぼんだぞ?!湯船にタオルをつけるのはマナー違反だからマジですっぱんぼんだぞ!?!

『大丈夫さ!温泉の濁りのおかげで見えないしどうせ映像フィルターで服着てるようにしか映してないから。この天才に抜かりはない!』

「まさか映像も繋いでるんですか!?!何やってるんですかダヴィンチちゃん!うらや——
んんっ!?!破廉恥ですよ!」

「ねえマシユ、今なんか変なこと言おうとしなかった?先輩すごく不安になったんだけど」

『あつ、さつき清姫が突撃かまそうとしていたけど安心してくれ』
「すっぱえ不安になったんだけど?!?!なんでそれ今言ったの!?!」

大丈夫大丈夫。ルーラーのダブル聖女に止められてたからと空中に浮かんだモニター内でカラカラと笑う万能の天才。いや、全然笑えないんですけど。安珍にはなりたくないんですけど……!?! (必死)

「それで、結局一体何の用?まさか、実はあの塔三百階建てでしたーなんていうオチを言

うつもりじゃねえだろうな」

『その点については断言しよう。あれ以上の階層は出現していないし順調に修復は進んでいる。そのことで提案をさせてもらおうかと思ってるね』

「提案？なんでしょう？」

『まあ、聞きたまえ——』

話を要約すると、巴御前が泉脈に刺激……喝を入れてくれたおかげでそこら一体の霊脈も活性化しており、召喚にはもってこいの環境が整っているからせつかくだしチャレンジしてみないか？ということらしい。

ふむ、まあ悪くはないと思う。今のところ10連を1回するぐらいの聖晶石はあつたはずだしダヴィンチちゃんの話曰く、日本の土地らしく頼光さんや金時さんが召喚しやすくなっているらしい。星5のバーサーカーは今のところうちにはいないのだからちようど良いタイミングだ。

「OK。じゃあそろそろ温泉から上がって準備するよ」

『うむうむ、そうしたまえ』

「……………」

『うん？どうしたんだい？』

どうしたじゃねえよ、通信切れよ。フィルターしているとはいえ見えちゃうかもって

気になるだろ。あと、何で男であるオレでそういうことすんの？百歩譲って普通女性のサーヴァントでするだろ。

「先輩……エッチです」

「いや、やんねえよ。やろうとしている奴がいても全力で止めるわ。特にムニエルさんとかにはピースサインで目潰しスマッシュだけわ」

『だそうだよ、ムニエル』

『——君、心外だよ。紳士である僕が女性のお風呂を覗桃源郷こうとするわけないじゃないか』
「あんたモニターしながら泣いてたよね？バッチリ聞こえてたからね？」

あと本音聞こえてんで、欲望ダダ漏れじゃねえか。頼むぜスタッフ一同……。

『うむ。じゃあ始めてくれたまえ』

モニター越しに天才殿がニツコリと笑う。温泉から上がったオレ達2人はその隣の少し開けた場所へと移動し、召喚の儀式の舞台を整え終えていた。手元にはカルデアから転送されてきた聖晶石が光り、目の前にはマシユの盾による召喚サークルが置かれている。

「オンセンタマゴも温泉上がりの牛乳も大変美味でした。このマシユ・キリエライト、いつも以上に絶好調です。いつでもどんどこいです」

「そうか。でもなマシユ、気合十分なのは頼もしいが白い御髭ができてるから早く拭きとると良いぞ」

「ええっ!?!」

慌ててポケットからハンカチを取り出し口元をゴシゴシと拭うマシユ。実はさつきから気づいていたのだがいつ言い出そうかタイミングをうかがっていたのだ。可愛いわー、キリツと決めてたのに指摘された瞬間ボツと頬を赤らめるの可愛いわー。

ちなみにオレは温泉上りはコーヒー牛乳派です。

「ううっ………どうして早く言ってくれなかったんですか………」

その表情が見たかったからです（ゲス顔）

『マシユの御髭がとれたところで始めてくれ——君』

「御髭じゃないですっ!!」

「ほらほら始めるぞー」

もちろんモニター越しにこちらの様子をうかがっていたダヴィンチちゃんも気づいていたのだろう。というかカルデアのスタッフ全員が気づいてたであろうということに改めて思い立ったマシユは赤くなつたまま必死に言いつくろう。もうっ!とブンスコと頬を膨らませる後輩に苦笑しつつオレは聖晶石30個を召喚サークルへと投げ入れた。

「……そういえば今回は護衛のサーヴァントの方がいませんが大丈夫なんでしょうか?」

「二応カルデアの方で警戒はしてもらっているよ。でも、今回の特異点攻略はサーヴァントの皆にもかなり負担を強いちまったしなるべく休ませてやりたくてな」

「サーヴァントを酔わせる……霊泉で身体を休めれば回復するとはいえなかなか厄介でしたね」

「でも、悪いことばかりじゃねえぞ。限られた戦力の中どう戦闘を組み立てていくかでサーヴァント同士の思わぬ力を発揮してくれたりしたからな。戦闘回数が桁外れだつ

た分、良い鍛錬になった」

出撃できるサーヴァントをその都度選び直し、最高の成果を目指す。まるでゲーム廃人のような感覚で階を進めていった。おかげで今いるサーヴァント達のスキルや宝具を改めて見直すことができたのは僥倖だっただろう。もつとも特異点を発生させたという時点であの小鬼達に情状酌量の余地はないわけだが。

そうこう言っている間に召喚は進む。ポンポンと先程から礼装が飛び出てきているわけだがサーヴァントの兆しはない。これは今回は外れかと落ちている礼装を拾っていく。相変わらず新規の礼装はなく、すでに限界まで強化した礼装ばかりで目ぼしいものはなかった。

「どれもこれもすでにカルデアで登録されている礼装ばかりですね」

「だな。どうやら今回は空振っちまったみたいだ。新しく手に入ったのは酒呑とばらきーの礼装だけだったな」

でもあの礼装は良かったと思う。クリティカルの発生率とスターの発生率が15% up、おまけにNPチャージ50%からスタートなのだ(メタ)

スターを稼いで宝具とクリティカルで殴れと言われているような礼装である。うちだと沖田さんやランサーオルタにさんにピッタリな礼装だ。いやうん、良い礼装だよ。ホントホント。別に2人の鬼のいつもと違う雰囲気にときめいたりしてないから。舌

出してお酒差し出してくる酒？をエロいとか思っていないから。眼鏡最高かよとか思っていないから。

「先輩、なんだか顔がニヤけていてやらしい空気を感じます」

「き、気のせいだよ気のせい」

「ものすごい汗ですが」

「温泉上りだからね、しょうがないね」

「……本当ですか？」

「本当本当。マスター嘘吐かない」

「……………」

「……………」

「実はムニエルさんから先輩とは酒呑さんとぼらきーさんの礼装について熱く語ったとお聞きしたんですが——」

「ムニエルてめえ裏切り者オオオオオオオ!!」

まるでチームサティスファクションのリーダーのように憤怒する。ふつぎけんなよっ！オレたち同志だっただろうがっ！なに勝手に裏切ってやがんのっ!? マシユには絶対内緒だつて言っただろうが！

『おや、ムニエルココソしてどこへ行くんだい?』

『殺気を感じ——あつ、いえ。ちよつとデオン君ちゃんに癒されに行こうかと』

『そうかい。だがシュヴァリエ・デオンは塔攻略で疲れているだろう。だから諦めて大人しくモニターの前に座るんだ』

『……はい』

『というわけで裏切り者はこちらで拘束しておいたから安心すると良い』

「ありがとうダヴィンチちゃん」

『あとはマシユへの言い訳を頑張りたまえ』

「ということですので後でみっちりとお話を聞かせてくださいね、せ・ん・ぱ・い？」

「……はい」

どうやら逃げ道をふさがれたのはムニエルさんだけではないらしい（白目）

ちやうねん。魔性の妖艶さに惹かれただけやねん。

『むっ？——君、こちらのほうで高レベルの魔力放出を感知した。召喚サークルを見てもたまえ』

なんだかハイライトが消えた目で見てくるマシユに冷や汗を流しているとダヴィンチちゃんから空気の変わった一言が入る。言われた通りに召喚サークルへと目をやるとそこにはクルクルと回転する金色のクラスカードが現れていた。刻まれているのは

——『狂戦士』の刻印。

「バーサーカーのクラスカード……」

「先輩、これは……」

「いや、まだ分からねえ。ダヴィンチちゃん、一応警戒はしといてくれ。頼光さんとか金時さんならまだ話は通じるけど、それ以外だったらどうなるか分からないから」

『了解だ。いつでもサーヴァントをレイシフトできる準備をしておこう』

「サーヴァント召喚されます！」

マシユの鋭い一声が辺りに響く。さて、おふぎはここまでだ。召喚されたのがバーサーカークラスとなるとこちらとしても油断はできねえからな。

召喚された人物は美しい女性。見事なプロポーションを持ち絶世の美女と言っても過言ではないその人物だが纏う空気が刃物のように鋭く、薄い桃色の髪の下から覗くその眼光は相手を射殺すが如く光っている。真つ赤な軍服を身に纏い腰元には明らかに護身用ではない銃。バーサーカー特有の狂気を醸し出すその女性が、かの有名な天使だと誰が思おうか。

「私が来たからにはどうか安心なさい。すべての命を救いましょう。すべての命を奪つても、私は、必ずそうします」

クリミアの天使と名高き世界一有名な看護婦。伝承自体も相当ぶつ飛んだ逸話が多く存在する患者殺してでも絶対救うウーマン。特異点を巡る旅ではアメリカでお世話になった『フローレンス・ナイチンゲール』さんだった。

「完全に予想外の星5バーサーカーキタアアア!!」

ええええええええええ!!これ流れ的に頼光さんか金時さんが来るんじゃないの?!節分どころか日本と全く関係ない人來ちやったよっ?!いや、初星5バーサーカーだから嬉しいんだけどさっ!最近すり抜け仕事しすぎイ!!

「ナ、ナイチンゲールさん!?! どうしてこのタイミングで?」

「何やら不穏な空気を察してやってきました。間違いありません、アルコール中毒の気配です」

「この看護婦こわっ!?! なんで分かんのか?!」

「ここにはもう酒気に酔ったサーヴァントいないんだけど!?! 直感!?! 直感なの!?! それとも千里眼(狂)なの!?!」

「まさかと思いますがマスター、貴方お酒を呑んだりしていませんよね? マスターの国ではお酒は20歳からと記憶しています。他の国々ではそれぞれに飲酒の解禁年齢にバラつきはありますが今のマスターのご年齢では早すぎます。それに若いうちからの飲酒は肝臓へと多大なるダメージを与えかねません。肝臓は病変の予兆が出にくいため沈黙の臓器と呼ばれますが人体において脳や心臓と並ぶほど重要な臓器です。もしマスターがそれでもお酒を嗜みたいとおっしゃるのであれば、私はマスターを殺しても飲酒をやめさせます」

「怖い怖いっ!?! そして長いっ!?! 第一飲んでませんよっ!」

「安定のナイチンゲールさんですね……」

次から次へと捲し立てるようなマシンガントークを繰り出す看護婦さん。この強引な会話の仕方が非常に懐かしく感じる時点でオレもなかなか末期である。

『ほう、ここでフローレンス・ナイチンゲールを召喚するとは、——君の召喚運も改善しつつあるということかな』

「……………？ 貴方は？」

『これは失敬、自己紹介が遅れてしまった。私はレオナルド・ダ・ヴィンチ。皆からはダヴィンチちゃんと呼ばれているよ。一応現カルデアの所長代理ということかな』

「つまり貴方がカルデアの最高責任者だと」

『うん？ 厳密にはその言い方は正しくはないけど大雑把に括るとそういうことになるね』

「では貴方にお聞きします」

「あつ、先輩。私この後ナイチンゲールさんが何を言うか分かった気がしますー」

奇遇だなマシユ。オレも分かったような気がするよ。

「カルデアの衛生管理にはどうなっていますか。きちんと手洗いうがいといった感染予防の徹底を行い、殺菌消毒を行っていますか？ 毎日換気を行い空気の入替えを行っていますか？ 組織に属する人々は入浴を行い清潔を保っていますか？」

『わーお、噂に違わぬ衛生管理狂だねえ』

「当然です。戦場において感染症はもつとも危惧する問題であり、決してその対策を蔑ろにしてよいものではありません。1人の感染者からその組織が全滅することだった

大いに考えられます。カルデアにはそういった者はいませんか？もしいるのであれば今すぐに隔離室に入れ厳重に管理してください。あとは私が適切に処置します。殺しても救ってみせましょう」

『そうだねえ。カルデアには国籍、時代、人間、神、獣問わずたくさんの者達がいるからね。流石にその全部を把握するのは苦勞する』

「つまり何も対策を講じていないと……？」

『あつ、いや最低ラインはやってるよ。マニユアルもあるし』

「あつ、先輩。私この後ナイチンゲールさんが何をしようとするのか分かった気がします」

奇遇だなマシユ。オレも分かったような気がするよ（2回目）

だってダヴィンチちゃんの話の途中からナイチンゲールさんが拳をぎゅって握りしめてるんだもの。その手からミシミシってすごい音がしてるんだもの。

やがて、何かを思い至ったのかナイチンゲールさんは素早く腰元の銃に手をやりモニター越しのダヴィンチちゃんをドオン！とためらいなく撃ち抜いた、つてええええええええ!!それは予想外だったっ！

『うわっ！いきなり何をするんだいっ！』

「甘いつ！甘すぎますっ！今すぐ私をカルデアへと案内しなさいっ！全ての衛生管理を

ブラッシュアップし堅牢なものへと変えます！異論反論は許しません！私は全ての病変を許さない！そのためならばカルデアという組織をひっくり返してでも救います！」
『いや、どうせもうすぐ——君達もレイシフトさせるし一緒に帰って「早くしなさいっ!!」——今すぐ彼女を帰還させるんだ！ムニエル、君にはカルデアを彼女に案内するという任務を与えよう』

『そんな後生なっ!!』

言うが早いのか、向こうでんやわんやしているのを感じているうちにナイチンゲールさんはこの場からいなくなつた。残されたオレ達は互いに目を見合わせ、何とも言えない微妙な表情を作る。

「——とりあえず向こうが落ち着くのを待つてオレ達も帰ろうか」

「そうですね……」

後日、カルデア内で全スタッフ及び全サーヴァントの健康診断が行われたことは言うまでもないだろう。何名か目に余る不摂生を行っていた者達^銃が天使の矢の^弾前に倒れていたが、とりあえずカルデアの崩壊は免れたのでよしとしよう。

ある日の医療室にて

「ナイチンゲールさん、これ読みましたよ」

「これは『看護覚え書』ですか。随分と懐かしいものですね」

「病変の蔓延の原因は病院の不衛生によるものだと見抜いて、兵舎病院での死亡率約42%を約5%まで抑えた。貴方によつて救われた人々がどれだけ多いか想像に難くないです」

「……マスターはそれを読んでみてどう思いましたか」

「えっ？そりゃ、ナイチンゲールさんのおかげで当時たくさんの人が救われて、そしてその理論や思想は現代でも引き継がれているわけですからすごいことだと思います。紛れもない人理の英雄だと」

「英雄……ですか。しかしマスター。私は絶対に自分のことをそう思うことはできません。少なからず私の看護を目の当たりにしてきた貴方ならその理由が分かるのではな

いでしょようか」

「……オレが思っていること、言ってもいいんでしょうか」

「構いません」

「……確かにナイチンゲールさんは約42%の死亡率を約5%まで落とした。しかし、逆に言うると約5%の人を救えなかった。そういうことですよね」

「その通りです。どんなに英雄と言われようと、天使と言われようと、私が救えなかった人々がいたので。私はそれが許せない。だから私は今度こそ全ての人々を救う。ありとあらゆる疾患を殲滅する。それが例え世界であろうと人理であろうと。そう、例え『殺して』でも」

「……ええ、きつとそれがナイチンゲールさんとしての存在証明なんでしょうから。ただしほどほどにブレイキは掛けさせてもらいますからね。それが貴方のマスターとしてのオレの役割でしょうから」

番外編 M a t t h e w  s D i a r y 2

薄暗く照らされた通路を歩き自室の扉を開ける。私は馴染みのあつた部屋とは幾分も狭くなつた部屋の数少ない家具である机の前へと進み、キシツと音を立てる旧式の椅子へと腰掛けます。一緒についてきたフオウさんが机の上へと駆け上り、そんな私の様子を静かに見守っています。

あの事件から数日。カルデアを襲つた未曾有の侵略からたつたそれだけしか経っていないというのに、もう何年も経っている感覚でした。その感覚も凍傷のように胸の奥を疼かせる痛みによつて思い直されます。ほら、今の様に。

ギユツと心臓を鷲掴みにされる不快な感覚は徐々に身体を侵食していき私を苦しめます。自分の家とも呼べる場所、大切な人達、つかみ取つたはずの未来。それらを僅か数刻のうちに奪われた痛みは決して消え去ることはありません。

疼きを吐き出すようにふうと深呼吸をします。気持ちはどうよりとしていましたが身体は慣れ親しんだ習慣をなぞるために机に置かれた日記帳を開いていました。ルーティーンワークである日記。しかしそれは、ここ数日同じような内容ばかりで何の展開も書かれていません。

もつとも、ようやく浮上地点を見つけたため明日には何か進展があるだろうとMr. ホームズがおっしゃっていたので、代わり映えのしない内容は今日までかもしれない。ん。

日記帳を閉じ、今度は古いそれを手に取ります。カルデアから避難する際に監禁される時に持ち込んでいたそれを私は結局そのまま持つてきてしまっていました。全部ではなくその時にまだ書いている途中だったもののみですが。

読み返してみるとまだカルデアが健在だった頃のことか書かれています。この乗り物——『シャドウボーダー』に乗るようになってから読み返す回数明らかに増えていきました。それが偏に口では強がっていても心の奥底ではあの頃に戻りたいと願っているのだと痛感します。

外でガタガタと音がしました。虚構の世界のことはあいにく理解が浅いため、シャドウボーダーがどこを進んでいるのか私には分かりません。もしかしたら宇宙空間のように小さな石でも浮遊していてそれにぶつかる音なのかなと考察したりしました。

「この前はどこまで読みましたっけ……？ああ、このページからですね」

夜という概念がない世界だけれど、時刻的には深夜と言える時間です。フォウさんがもう遅いよと指摘するように一度だけ鳴いてくれました。あまり遅くならないようにしますと小さな存在へと伝え、私——マシユ・キリエライトは思い出の中へと沈んでい

○月×日　クリスマスという祝福の時期に何も起こらないわけがないと分かっていた。ました。

昨日までカルデアに蔓延していた謎の熱病は先輩の手によって無事に解決されて、サーヴァントの皆さんはすっかりいつも通りの元気を取り戻していました。幼いサーヴァントの方々はカルデア内を走り回り、戦闘好きの方は動けなかった鬱憤を晴らすためにシミュレーションルームで思いっきり身体を動かし、文系のサーヴァントの方々は遅れ気味になってしまった執筆作業や音楽活動へと取り組んでいるご様子でした。熱病に斃されたカルデアは不気味なほど静かだったのでやはりこれぐらいにぎやかな方がいいと思います。ただし廊下を走るのはいただけません。

今回の異変の際に私も42度の気温に夏のシユメル熱と、他の方々同様床に伏してしまっていたのでマスターである先輩のお力になれなかったことは非常に歯がゆかったです。何しろ熱病の原因は冥界にあるというのですから心配するなという方が無理という話です。アルテラさんがサンタにクラスチェンジ？して同行してくれたとはいえ、気が気ではありませんでした。

しかし、そこは流石は先輩です。無事に冥界での異変を解決してカルデアへと帰還。なんでもエレシユキガルさんと再会できたそうです。しかも今回はしつかりと縁を結んできたとか。エレシユキガルさんにはバビロニアでは大変お世話になりました。あの方がいらつしやらなかつたらきつとティアマトとの戦いは乗り越えられなかつたでしょうから。

——あつ、先輩早速召喚にチャレンジするんですね！私も全力でサポートします！

と、意気込んでみたものの結果としては惨敗という感じでしょうか。一応クリスマス限定の礼装は来ましたが、新しいサーヴァントの方も来ず先輩も非常に落ち込んでいました。『(スカートを)履いてない……金髪ツインテ……冥界の赤い天使……』と最早うわ言かどうかとも怪しい言葉を吐露していました。これには護衛を引き受けてくれた

アルテラ・ザ・サンタさんも苦笑いしつつ羊で先輩を包んで慰めていました。『あつたかいメエ……』と効果は抜群のようです。

……あの、アルテラさん。先輩の後で構いませんので私もモフモフしてもらっていいですか？

○月×日 今年も甘い匂いが漂い始めます。同時にトラブルの匂いも仄かに漂ってきました。

今年もバレンタインの季節がやってきました。私にとって先輩に日頃の感謝を伝えるとても大事な日です。去年はたくさんのサーヴァントの方々に協力してもらいましたが、今年はその経験を活かしながら自分一人でチョコ作りを頑張ってみようと心に決めています。

そんな折です。ジャガーマン氏のスタンプ交換で仕入れていたゴッドなカカオの供給がストップしてしまつたと報を受けたのは。正直愕然としました。いえ、他のサーヴァントの方々のように魔術的な加工をするつもりは毛頭なかつたのですがやはり対等な条件でと言いますか、先輩のたつた一人の後輩としての意地と言いますか……。

しかし清姫さんが（勝手に）レイシフトをして歴史に名高き女帝——セミラミスさんの宝具『ハンギングガーデンズ・オブ・パピロン虚栄の空中庭園』にて労働を条件にカルデアにチョコの供給をしてくれると話をつけてきてくれたのは助かりました。その、やはりバレンタインにチョコがないというのは寂しいですから。

それからはまるで台風のように時間が過ぎていきました。チョコレート製造特命大臣に任命された先輩はチョコレートの製造設備を次々に開発していき、徐々にチョコの供給も十分なものになっていきました。いえ、むしろ多すぎる、というか明らかに過多になってしまっていました。こんな事態になるまで気づかなかったのは完全にオペレーションのミスでした。反省します。まさかチョコによってカルデアが滅ぼされるなんて言うトンデモ案件になるとまでは思いませんでした。セミラミスさんに化けていた意思を持つチョコレート——チョコラミスさんのチョコ王国建国への執念に脱帽です。

さて、そんな一連の騒動ですがチョコラミスさんを無事に倒したことで終幕を迎えました。結局セミラミスさんが誰のためにチョコを作ろうと考えていたのか、そのことは分かりませんがそれがそれでいいと思います。女性としての秘めたる想いを暴き出すなんて失礼に当たりますから。私も去年よりさらにグレードアップしたホワイトチョコケーキを先輩にお渡しすることができました。かなり気合を入れて作り自分

でも力作だと胸を張れる逸品です。先輩は労働に戦闘と忙しく、今年はチョコの制作を行えなかったたので、このケーキを2人で食べました。先輩と一緒に食べるケーキはとても美味しかったです。

その後先輩は意気揚々とセミラミスさんの召喚へと挑んでいました。口調は厳しいものの、うっかりしているところがあつたりちよつぱり可愛らしいセミラミスさんを是非ともお呼びしたいと先輩もかなり意気込んでいました。グルグルと回る召喚サークルの光。最初はワクワクしながら見守っていた先輩でしたが、徐々にその表情が曇り始めます。何故なら10連で召喚した内4枚が『愛の霊薬』の礼装だったからです。もちろんセミラミスさんのセの字もありませんでした。『愛の霊薬……きよひ……純度百%……うつ、頭が……!』と先輩は頭を抱えていました。

えつとその、清姫さんも悪気があるわけではなくむしろ妄執的に一直線なだけですか……が、頑張ってください!

○月×日 マンションにて不思議なサーヴァントと出会いました。

それは小さな揺らぎでした。特異点Fが確認された日本に現れた極微小の特異点、しかしその規模に反して次々に英霊達が行方不明になっていく事件が発生しました。マスター及びカルデアはこの事態を重く受け止め調査に乗り出しました。特異点自体は一部の地域のみの本当にスケールの小さなものだったのですが、その限られた箱庭には呪いと呼べる程のどす黒い憎悪と殺意が渦を巻いていました。現地で協力関係になった魔眼持つサーヴァント・両儀式さんのお力を借りて先輩は箱庭の中心地であるマンションの探索へと赴きます。私はモニタールームでその動向をサポートしていました。式さんは非常に気さくな人で、ぶっきらぼうな態度とは裏腹にうまく言葉で表現できない『華』がありました。彼女の持つ『直死の魔眼』も絶大な力を持ち、ナイフ片手に次々にエネミーを屠っていく姿はとてまかつこよかつたです。

マンションを攻略していくにつれて行方不明になったサーヴァントの方々とも再会していききました。狂気に飲まれた方、それを押し留めようとする方、事態を混乱させようとする方、ユニバースな方と多種多様なサーヴァントの方々がいきました。一部を除き狂気に飲まれたその姿は日頃カルデアで見かける姿とをあまりにかけ離れていて背筋が凍り付いた感覚を今でも覚えていきます。

いくつもの戦闘を乗り越えてようやくたどり着いた屋上にて巨大なゴーストと――

いえ、魔術王の残り火とも呼べる存在をマスターと式さんは打ち倒しました。吐き気を催す憎しみも霧散していき無事に特異点の修復を達成。先輩とそして今後力をお貸ししてくれることになった式さんもカルデアへと帰還しました。

ここまでの流れから分かると思いますが、この後先輩は早速召喚にチャレンジしていました。もちろんエミヤさんとキャットさんに頼んで温かい食事を用意してもらって一休憩を終えた後に、ですが。式さんは料理に関して腕に覚えがあるらしく秘かに対抗意識を燃やしていましたが、食後のアイスに目をキラキラさせて喜んでる姿は年相応に見えて大変可愛らしかったです。

ちなみに召喚ですが、誰を召喚するのかと尋ねると先輩はマンションで出会った不思議な女性が気になっていたらしいです。不思議な女性とは焼却炉跡で突然現れた女性を指しているのだとすぐに分かりました。まるで式さんと入れ替わるように突如現れた着物姿で一本の刀を持つ見目麗しい女性。顔は式さんとそっくり、というより同一人物にしか見えないんですが纏っている雰囲気は式さんの逞しく少し男気のある雰囲気とは正反対の舞い散る華のように上品な方でした。が、その実力は他のサーヴァントと

比較しても桁外れの実力でした。サーヴァントでも長期戦を強いられるほどの耐久力を持った亡霊達を刀の一振りで蹴散らしたのです。すぐにその女性は消えてしまい、入れ替わるように式さんが登場したので全く無関係ということはないと思いますが結局その正体は特定できず、とにかく不思議で雅という言葉がピッタリの綺麗な女性ということしか分かりませんでした。

そして召喚の結果なんですが、まあ先輩の召喚運がナイチンゲール女史以降下降気味なので予想はしていましたが誠に残念な結果になりました。とにかくメツフィーさんが多かったです。10連召喚で3人来ました。笑い声が召喚ルーム内に三重で響きたり混沌とした空間が出来上がっていました。護衛を引き受けてくれた式さんが堪らずナイフ片手に次々に成敗していかなければもつとシユールな光景が出来上がっていたに違いありません。ちなみにメツフィーさんは速攻でダヴィンチちゃんの工房へと送られました。

だから先輩落ち着いてください。冷静になってその手に持つメツフィーさんの遺物(仮)であるチクタクボムを捨ててください。ダメです、メツフィーさんに八つ当たりをしてはダメです。あの方はたぶん爆発に飲み込まれたとしても笑いながら生還とかいうギャグ補正なるものを持っているはずですから。余計ストレスが溜まるだけです。ので心を落ち着けて私とお茶でもしましょう。

○月×日 騎士姫さんと鍛錬中、ユニバースでギャラクシーな自称スペースセイバーさんに出会いました。

きつかけはセイバーリリイさんから相談された宝具レベルが上がらない問題でした。かのアルトリア・ペンドラゴンのIFな存在である彼女は非常に実直で素直な方で日々の鍛錬も怠らず行っていました。そんな彼女なのですがなかなか宝具レベルが上がらないという悩みを抱えていました。どんなに鍛錬しても宝具が強くない、その理由が分からないとマスターに相談しに来たセイバーリリイさんのお話を聞いた時、私にビッと電流が走りました。何故なら私もセイバーリリイさん同様宝具レベルが上がらないという悩みを抱えていたからです。すかさず私は宣言しました、ここに『宝具成長しない同盟』を結成すると！

……コホン、お話が逸れてしまいましたね。とにかく、宝具を強くするためにはその器である自分自身を鍛える以外ありません！ええ、ええ！レオニダスさんも言っていました！鍛錬は自分を裏切らないと！

そうと決めた私は先輩と彼女を連れてレイシフトをし、日頃どんな鍛錬をしているのか見学させてもらうことにしました。ずっと鍛錬している姿を見ていたのですが、そこ

は流石騎士王に名高いアルトリアさんのIF。一見可憐な少女でしかない騎士姫さんはその細腕で聖剣カリバーンを巧みに操っていきます。正直私は剣術に関して疎いため何とも言えませんが多くのセイバークラスのサーヴァントを見てきたマスター曰く、すごく綺麗な型をしているとのこと。基本に沿った真つすぐな剣筋はセイバーリリイさんにピッタリな剣だと思いました。

そんな時でした。空から……いえ、正確にはそれよりもはるかに遠い銀河から『それは流星の如く私達の下へと降ってきたのです。最初は見間違えかと思いましたが、小さな点から徐々にその大きさが理解できてくるに連れてこれは笑えないやつです！と直感し先輩と共に全力で回避しました。なんとか衝突は避けることができましたが、今度はその落下物の中から現れた人物に更に驚くことになりました。なんと落ちてきてたのは人類の科学の結晶、果て無き空の海へと駆ける一艘の船、またの名をロケットだったのですっ！しかもその中から現れたパイロットらしき人物は、ジャージに帽子、明らかに自己主張の激しいアホ毛がトレードマークのアルトリアさんだったのです！

そのアルトリアさん、もといヒロインXさんはセイバーリリイさんの真つすぐな意志に賛同し、彼女を鍛え上げることを決意したようです。その裏にはアルトリウムという故障したロケットを修復する謎物質を集めるといふ思惑があつたようですが私にも先輩にもバレバレでした。しかし、セイバーリリイさんを鍛えるという考えは本当のよう

だったので一先ず彼女に付き合うことに。

ヒロインXさんの指導の下、現れるサーヴァントの方々を相手にセイバーリレイさんはさらなる経験をハイスピードで積んでいきます。同時にアルトリウムもすさまじい勢いで確保していくことになりました。おかげで私も先輩も疲労困憊でへとへとになっただけでいたのですが、お二方はいつまでも大変元気で現れるエネミーをちぎ^カり^リバ^イン^ンちぎ^ッては^ス投^スげ^ス、ちぎ^ッつては^ス投^スげて^スおり、きつと私や先輩にはアホ毛がないためこんなに疲労しているのだと思いました。

最期にはヒロインXさんと全く同じ容姿のヒロインZさんが現れたり、それを見た先輩が『2Pカラーか……』と何やら嬉しそうな表情をしていたり、力を合わせてヒロインZさんを倒し、ついでに一緒に現れた巨竜も倒したりしているうちに無事アルトリウムが必要分溜り、セイバーリレイさんの宝具もようやく強化しました。……あれ?ここまで書いてみて気づいたのですが、目的が入れ替わってませんか?!度重なる周回のせいで感覚がおかしくなっていたみたいですよマスター!

カルデアへと帰還後には様式美となっている召喚に先輩がチャレンジすると口火を切りました。ここまで苦労して周回し、アルトリウムを搾取し、石を溜め切り、正直疲労感から休みたい気分ではあったのですが妙に血走った眼で『さいっこうにハイつてやつだあああ!!』と叫ぶほどテンションの高い先輩を止めることは叶わず、セイバーリ

リイさんを護衛に召喚に臨みました。結果は——召喚後に真っ白に燃え尽きた先輩の姿からお察しというやつです。今日も平和ですね。

「最近思うのですが、私も随分先輩に毒されてしまっていると思います」

「ここまでにしようと区切りをつけたところまで読んだ私はポツリと呟く。いえ、それが別に不快だとか迷惑だとか思っているわけではないのですが、先輩の時々発するよく分からない発言に振り回されて、しかもそれにどこか納得している自分がいるのです。そして間違いなく変な影響を受けています。」

「うーん、このままでいいのでしょうか？ どう思いますかフォウさん」

「……フォウ。フォウフォウ」

「……どうやら反対とかではなさそうですね」

ふふつと笑みを浮かべながらフォウさんの小さな体を撫でる。ふわふわしている毛並みに癒された後、今日の分の日記を書いた私はフォウさんと共にベッドへと移動しました。横になった私は近くに丸まったフォウさんの温かさを感じながら瞳を閉じます。その時にふと浮かんだのはMr. ホームズのおっしゃっていた『何かしらの進展』のことです。

——明日からはきつとまた新しい戦いが待っています。今の私にできること……ギリギリデミサーヴァントとしての力を使えるとはいえ、その頻度は決して多くはありません。以前の様に頼もしいスタッフの方々もいません。霊基グラフパターンの記録媒体こそあるもののサーヴァントの再召喚もろくに行えません。

先が見えないことが怖くて私は震えてしまいます。怖くて怖くて、そして過去に縋るように日記を開いてしまいます。自分に出来ることが分からなくて迷ってしまいます。

——そんな時はいつもあの人を思い浮かべます。私なんかとは違ってとても強く、敬愛している大切な人のことを。

きつとどんなに困難な状況でもあの人は諦めない。

いつも迷って苦しんで、その度にボロボロになりながらも答えを出してきた先輩は
きつと。マスター

それならば、私にできることは1つだけですよね。

私は貴方と共に『戦います』。

サーヴァントとしての力も無く、オペレーションだつてまだまだ未熟でも。

ただ、貴方の傍に居させてください。

だつて、それが私の選んだ世界未なんですから。

第2部

極寒の地で奪う覚悟を決めたんだけど、生の意味を証明することも戦う理由だよね？

凍てつく風が頬を撫でる。強大な魔力が肌に突き刺さる。荒れ狂う吹雪に指示が聞き消されないように声を張り上げる。

ここまで来るのに随分魔力を消費した。山の様な巨体のイヴァン雷帝、共闘し道を違えてしまった麗しの弓兵、そして今戦っている新たな皇帝ツッパリにしてこの異聞帯に君臨するマスターとサーヴァント。主を守るかように氷の騎士が辺りを取り囲み次々に襲い掛かってくるが、邪魔はさせないとベオウルフ、サリエリ、ピリーが応対している。

「くっ！さっきまで意気消沈していた素人のくせにしぶといなっ！アナスタシアッ！」
「ええっ！」

「生憎それぐらいしか取り柄がないもんでねっ！マシユ！」

「了解ですマスターッ！」

ガキンと金属音のような音を響かせ飛翔してきた氷の刃をマシユは盾で防ぐ。その

脇を二対の刀を閃かせた武蔵ちゃんが駆け抜けた。

「武蔵ちゃんツ！」

「疾ツ!!」

「チイツ!!アナスタシア！騎士を盾にしろっ！」

この異聞帯のクリプター——アナスタシアのマスターであるカドックが舌打ち混じりに指示を飛ばす。指示を完全に聞ききる前にアナスタシアは既に騎士を作り出し神速の斬撃を間一髪で防ぎきる。距離を取るように身体を浮かせると一瞬で約50にものぼる騎士を新たに生み出し、武蔵ちゃんへと猛襲をかけた。

もつとも相手は剣を極限まで極めた剣鬼だ。例えば数で圧倒しようとも数秒あれば騎士達はただの氷の残骸へと変えられる。数度の瞬きの間に雑兵を殲滅した武蔵ちゃんだったが、その表情は苦虫を噛み潰したようにしかめられていた。

「……また仕留めそこなつた。剣士として魔術師に接近戦でここまで粘られると流石に屈辱ね」

「何という魔術行使速度でしようか。これが皇帝ツァーリの力」

正直舌を巻いていた。オレが知る中でも武蔵ちゃんは最強の剣士、もちろん接近戦においても全サーヴァント中トップレベルだろう。だが、アナスタシアはこれまでの交戦で幾度となく武蔵ちゃんの間合いに入ったにも拘らず一太刀も受けていない。全て己

が魔術を行使して捌ききっているのだ。

それができる理由は――

「カドックさんが最後に切った令呪の力ですね」

「ああ。あの令呪によつてアナスタシアは皇帝になった。魔力量だつてこの国丸ごとだと言つても過言じゃねえだろうな」

カドックが切つた最後の令呪はシンプルなものだった。『皇帝になれ』、ただそれだけである。しかしこの雪に閉ざされた地においてそれは全てを支配する意味を持つ。つまり魔力量もその質も一人の英霊が持つものとは比べ物にならない。文字通り『獣国』という怪物を相手にしている気分だった。

「いい加減諦めろ素人。お前じゃ僕達に勝てない」

カドックの言葉を引き金に彼らの周囲で暴風のような魔力が巻き起こり、槍の形状の氷刃が雨の如く降り注ぐ。本来の霊基とは違う、『オルテナウス』となつたマシユがその刃の雨を盾で防ぎ、武蔵ちゃんも風となつてアナスタシアへと迫る。そんな単純な接近は許さないと雨が一層激しくなると、小さく舌打ちをした剣士はこれ以上は踏み込めないと判断し一度マシユの盾の傘まで後退した。

「もう打つ手は無いのだろうか？それが君の限界だ。確かに僕に令呪を使い切らせたことは称賛に値するが、結局はそこまでだ」

暗に降伏しろと告げるカドック。確かに今の戦況はどう考えてもオレが不利だ。令呪を全て切らせたとはいえそれはオレも同じことで、相手の守りを突破する決定的な策がない。今切れる手札はせいぜいサーヴァントに魔力を回すことでの強化のみだ。^{ブースト}

「それが何だつてんだ。こんなもんオレにとつちや日常茶飯事なんだよ」

打開策がない？令呪がない？んな状況は今までにいくらでもあつた。それを死ぬ気で足掻いて乗り越えてきたんだ。今更追いつめられたくらいで諦めるかよ。

「そのウザいぐらい前向きな考え、鼻について憎たらしい。魔術も碌に扱えない素人のくせに口先だけはよく回るな」

「ああ、そうだよ。オレは魔術に関してはお前の足元にも及ばねえさ。礼装他方の手が無けりや何一つ使えねえ。素人どころか無能も良いところだ」

「開き直りか？」

「いや、違う」

「……イライラするな。結局何が言いたいんだ」

「——これがオレの”覚悟”だつてことだよ」

「覚悟、だつて？」

「ああ。世界を壊す意味なんて本当に理解できてねえのかもしれない。喪われる命の重さが分かつてねえのかもしれない。これから先、ちゃんと前に進めるのか不安でしょう

がねえよ」

どうしようもないと頭を振る。オレ達人類史がこれから成そうとしていることは今までとは全くの真逆。世界を救う旅ではなく、世界異国帯を滅ぼす旅。生きとし生ける命の灯を消すための旅だ。悪と呼ばれても当然だろう。

だけど――

『……負けるな。こんな、強いだけの世界に負けるな』

『だって、お前たちの世界の方が――きっと、美しいんだ』

『だからこそまだだ。まだ、たたかえ生きろ』

『この、辛かっただけの生に意味があるとするなら……』

『それはきつと、幸福に溢れた正しい世界があると、証明されたことだ』

——言われたんだ、間違つた世界で出会つた『友達』に。自分達の世界が無くなるつていうのにそれでもオレ達が生きる世界の方が美しいんだから生き残れつて。歪な存在として生を歩んでしまつた俺達ヤガ達にも生きてきた意味があるのだと証明してほしいつて。

「——だから、オレはオレ達の世界を取り戻す。友達が美しいと言つてくれた世界を。素人だろうが無能だろうがそんなことは今更諦める理由にはならない」

オレに出来る精一杯の覚悟。これからいくつもの世界の未来を奪つていくオレの覚悟だ。

減らず口をと吐き捨てるカドックと彼の傍らに佇むアナスタシアの周囲で爆発的に魔力が高まつていくのを感じ取る。この魔力の高まりは——遂に切つてくるのだ、英霊としての最大にして最強の『切り札』を。

「アナスタシア、準備はいいかい？」

「ええ、カドック。ここで全てを終わらせましょう。彼らを打ち倒し、貴方の力を証明するのです」

「違うよ、アナスタシア。終わりじゃない、始めるんだ。ここから、始めるんだ」

「——ええ。そうね、カドック。私のマスター」

カドックが魔力回路を回し、国そのものの力を得たアナスタシアの魔力に更なるブーストをかける。呼応するように彼女の背後で佇んでいた精霊——『ヴィイ』の姿が徐々に巨大化していき、秘められた魔眼が絶対零度の圧力でオレ達を見下ろしていた。

「——宝具を開帳してきたってことはどうやらあちらもここで終わらせるようね。どうしましうかマスター」

「あの精霊は明確な意思を持っています。回避しようとも追尾してくるでしょうし、そもそも逃げ切れるような攻撃ではないでしょう。マスター、どうしますか」

いつも頼りにしていた剣武蔵と盾マシユが指示を仰ぐ。が、さつきも言ったがこちら側にアレをどうにかする名案などない。ならば、取れる選択肢はたった一つしかないことは分かっていた。

「——退いたらその瞬間にあの宝具に食われる。マシユ、武蔵ちゃん、ここが正念場だ。真つ向からあの宝具を打ち破るぞ」

「あつははっ！そうこなくっちゃねマスター！シンプルで私好みの指示だわ！」

「確かにそれがこの状況で最も勝率のある選択だと私も思います。やりましょう！ マスター！」

カドック達に倣うように回路を回し、2人にありつただけの魔力を注ぐ。魔術礼装によるバックアップも加えた。これが今オレにできる最高の一手。

刹那。極限まで高められたアナスタシアの魔力、大気すら凍てつく絶対零度の力が解放される。

「アナスタシアアツ！」

「ええっ！—— ヴィイ、全てを見なさい。全てを射抜きなさい。我が墓標に、その大いなる力を手向けなさい。疾走・精霊眼球!!」

「宝具発動ツ！ マシユ！」

「はいっ！ 必ず防ぎきつてみます！—— 真名、凍結展開。これは多くの道、多くの願いを受けた幻想の城。呼応せよ、いまは脆き夢想の城！」

因果すら捻じ曲げる精霊の魔力。その魔力に僅かにでも触れようものならありとあらゆる弱点を曝け出し、容赦なく命を狩りつくす全力開放の魔眼。

立ち向かうようにマシユは詠唱ののち、以前よりも無骨で機械的になった盾を雪原へと突き立てる。瞬間オレ達の周囲を暖かな魔力が包み込む。以前の様な白亜の城ではなくその面影のみを残す城だったが、これこそがかの雷帝の一撃をも防いだ今のマシユ

の盾。力を失おうと、決して折れることのない彼女の心。

「アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「そんな未熟な宝具で私のヴィイを止められるとお思いですかッ!!」

ぶつかり合った2つの宝具、しかしやはり相手の方が上手だった。圧殺するように魔眼の力が城を侵食していき、突き立てられた盾が徐々に後退しマシユが苦痛の声を上げる。

「マシユッ!!」

ギギギイと嫌な音を響かせつつも必死に宝具の一撃に耐えていた。オレも少しでも助力しようとその背中を支える。

——微かに声が聞こえてきた。

マシユだ。彼女が攻撃を防ぎながら何かをひたすらに呟いていた。

「嫌です……!私……!」

胸が締め付けられる痛々しい声だった。

「もう、嫌なのです……！失うだけなのは……！」

彼女の家はカルデアだった。少し前まではカルデアこそが彼女の世界であり全てだった。それを僅か数刻の間に奪われ、破壊され、殺戮された。

「先輩も……！ダヴィンチちゃんも……！シャドウ・ボードアの皆さんも……！」

どれだけ胸を痛めたことだろう、どれだけ悔しかっただろう、無力な自分にどれだけ怒り狂っただろう。その激流の様な感情がマスターとサーヴァントの繋がりを経て流れ込んでくる。

「もう2度と、私の大切な人達をオ……！！」

——瞬間、展開している幻想の城が一際大きく輝いた。

「——奪わせたりしないッ!!」

「なっ——!?!」

ガキーン！とマシユの城によりヴィイの魔力が跳ね除けられる。まさかはじかれると思っていなかったカドックとアナスタシアが驚愕の声を上げた。自分達の全力を込めた宝具が、未熟に尽きるマシユの宝具によって僅かにでも後退させられたのだ。

しかし、はじいただけでヴィイ自体が消え去ったわけではないため、すぐさま魔眼の力を開放し追撃。マシユも今の攻防で力を使い切ってしまったのかその場に崩れ落ち

てしまう。

慌ててその身体を抱きかかえるオレ達に魔眼の魔力が迫るが、傍らで待機していた彼女が遂に動いた。

「武蔵ちゃんッ！」

「——南無。天満大、自在天神。仁王俱利伽羅聖天象！」

貯めに貯めた闘気を一気に解き放ち、剣鬼は雪原を駆ける。オレにとってマシユが最高の盾なら彼女は最高の剣だ。不動明王像の4つの剣が地水火風の剣戟を精霊の魔力へ叩き込む。一撃一撃を加えるたびにほんの僅かに魔眼の威力が減衰していく。

「くっ!!」

このままではマズいと判断したカドツク・アナスタシアは限界まで魔力を注ぎさらに宝具を強化。しかし、それでも最高宮本武蔵の剣は止まらない。彼女の剣は『天眼』によって常に勝利の未来を手繰り寄せそれ以外を全て無かったことにする『究極の一』。

故に——

「——ゆくぞ、剣轟抜刀！ 伊舎那大天象ッ!!」

——その剣に、断ち斬れぬもの無し。

「そんな……馬鹿な……！」

「まさか、今のヴィイが真つ向から破られるなんて……」

魔眼によつて捻じ曲げた因果を斬り捨てられたカドックとアナスタシアはその場に崩れ落ちる。アナスタシアは汗を大量にかき両膝をついて手に持ったぬいぐるみを強く抱きしめ、カドックは片膝をつき息も絶え絶えだ。いくら皇帝とそのマスターといえど消費した魔力が膨大過ぎたのだ。戦場においてこの隙は致命的——勝敗は決していた。

「——オレ達の、勝ちだ」

静かに告げた言葉にカドックの答えは射殺さんばかりの視線だった。

——夢を見ていた。夢想到に浸る淡いものではなく、決して忘れるなと告げる夢を。才レが覚悟を決めたあの日の夢を。

「——輩。——きて——い。——先輩」

「ん？マ、シユ……？」

「——先輩、おはようございます。もう朝ですよ。お日様もすっかり昇ってしまってます」

「ん、そうか。すまん、ちよつと寝過ぎました」

もぞもぞとベッドから起き上がり大きな欠伸を一つ。そんな寝坊助の傍に居たマシユはクスツと小さく笑った。

「今日は新たなサーヴァントを召喚する日ですよ。霊脈のラインは既に確保しており、召喚の準備はばっちりです。いつまでも起きてこない先輩にゴールドルフ新所長がお冠ですよ」

「おっと、そりやマズい。すぐに準備してくるから少し部屋の外で待つてくれ」

「はい」

マシユに部屋の外に出てもらったオレはすぐに礼装を着用し、備え付けの洗面台で癪を直し顔を洗って歯を磨く。時間が無いとはいえ身だしなみを整えないと新所長はうるさいからな。とは言え男の準備時間なんてたかが知れてるので10分程で終えたオレはマシユと合流してシャドウ・ボーダーの外へと向かった。

外に出るとここ数日代わり映えのしない光景が広がる。砂漠の様な真つ白に漂白された地表に雲一つない青空。世界に2色しかないと言われれば信じてしまふような光景だ。もつともそのキャンパスにはオレ達という異物が混じっているわけなのだが。

「——やあ、ようやく起きたのかいマスター。随分と深く眠っていたようだがまだ疲労が残っているんじゃないかい？」

「先生、すみません。お待たせしました」

「……前にも言ったが先生はやめてくれマスター。僕にはそう呼ばれる資格はない」
「あつ、すみません『アヴィケブロンさん』。なんだか先生というのがしつくりきて」
シャドウボーダーの外で待つていたのはあの獣国で消滅した一番の立役者——ゴ
レムマスター、アヴィケブロンさんだった。

彼はあの異聞帯を突破した後最初に発見した召喚^霊ポイントで再召喚したのだ。再
会できた時は本当に嬉しかったもんだ。あの極寒の異聞帯でオレ達が生き残れたのは
彼がいたからなのは間違いない。もうこれでもかというほどお礼を言った。

そんなゴレムマスター、何故か先生という言葉がしつくりくる。本人はそう呼ばれ
ることに難色を示してんだけど、こう何というかもものすごく先生。そんなアヴィケブ
ロンさんが今回の召喚の護衛ということだ。

「では、早速始めようかマスター。今日はどれくらいやるつもりなんだい？」
「とりあえず今持つてる石を全部使ってみようかなと。大体20連分ぐらいです」
「シャドウ・ボーダーにある召喚資源も今は多少余裕がありますからね。思い切つて
やつちやつてくれとダヴィンチちゃんが言っていました」

2人に促されるようにオレは石を持って地表に置かれたマシユの盾へと歩み寄る。
恐らくその真下にここら辺の霊脈の中心点があるのだろう。盾の周囲には幾何学的な
魔法陣とシャドウ・ボーダーへと繋がる何本ものコードが張り巡らされている。カルデ

アの召喚部屋とは違った簡略化された使い捨ての召喚サークルということだ。今回はこれで問題ないとのこと。

「おーし、じゃあ早速10連目言ってみましょっつー！」

そりゃあ!と30個の聖晶石を召喚サークルへと投げ入れる。盾の上で光へと変わった石達は場所が変わったにも関わらずいつもの回転を始めた。グルグルと回り続ける召喚光。やがて少しずつ礼装やサーヴァントが召喚され始めた。

その中でもひととき大きな輝きが起き、光の玉が金色に輝きだす。去年からよく見るようになった高サーヴァントの召喚反応だ。

「これは……今までとは違う反応だがどうということかな?」

「金色の光は高レアサーヴァントが召喚された兆しですアヴィケブロンさん。クラスは……どうやらバーサーカーのようですね」

「ふむ。ということとは僕の出番かな。一応警戒はしておいた方がよさそうだね」

マシユの説明を聞いたアヴィケブロンさんは一度だけパチンと指を鳴らす。すると白く染まった土壌がもこもこツツと盛り上がったかと思うと、あつという間にゴーレムを5体生成してしまった。ゴーレムマスターの異名は伊達じゃない。

オレはというと、そのゴーレム達に守られながら誰が召喚にに応じてくれたのかを考える。もしかしたらという考えが浮かび、頭の中で狂化してしまった麗しの狩人の姿が

過った。最後の最後で戦いの末に分かれてしまった優しすぎる英霊。

次に会えた時は今度こそ本当の意味で共に戦える、そう思っていたのだが召喚された人物のシルエットが見えた時に召喚されたのが彼女ではない別人物だということに気づいた。

現れたのは白い少女だった。白ドレスに装飾を身に着けた姿は一見花嫁のようだが、その考えはすぐに否定される。側頭部から金属の部品が覗き、額にはこれまた金属の何かが取り付けられている。彼女が歩きたびにその足元からパリツと僅かな電光が発生している姿は純粋な人間ではないことを物語っていた。

「……ウウウウウウ」

唸るように召喚に応じた彼女は『フランケンシュタイン』。かの有名なフランケンシュタインの怪物と呼ばれ、悲しき末路を辿った人造生命体。

「フラン、君だったのか……。召喚に応じてくれてありがとな」

「ウッ！」

「フランさん、お久しぶりです」

「ウウツ！」

「ふーむ。相変わらず低燃費な話し方してんな。できればきちんと会話もしてほしいんだけど」

「イヤ……つか、れる……」

「ありや、残念。でもマスターになったからか何となく言っていることは分かるし別にいいか。つて、うん？」

省エネコミュニケーションについて納得しているとフランが何やら急に慌ただしく両手をバタバタと振り、「んっ！」とオレの手元を指さしてきた。おおう？どうした？うん？なに？その手に持つてる礼装を見せてくれって？

彼女が指さしたのは召喚された礼装の束である。どうやらその中の『何か』をフランが感じ取ったらしい。オレが何枚か召喚された礼装を彼女に見せると、花嫁の如き少女は迷うことなくその中の一枚を抜き取った。

「ウツ！ウアウツ！！」

「フランさん、その礼装がどうかしたんですか？」

「ウツ！ウアツ！！」

「それが欲しいって？別にいいけど、なんでだ？」

「……………」

オレとマシユの疑問に彼女がとった反応は沈黙だった。いや、よく見るとほんのりと頬を染めているようでどうやら恥ずかしがっているらしい。まあ、話したくないって言うなら無理に聞き出すつもりはねえけどさ。

「じゃあ、それはフランにあげるよ。でも無くしたりしちやダメだぞ？あともし必要になつた時は貸してくれ。必ず返すからさ」

「ウツー」

それでいいっ！と言っているのだろう。フランはその礼装を胸に抱く。大切に、大切に。泡沫の夢を離してしまわないように、優しくそれを抱きしめていた。その姿は決して怪物などではない。ありふれた一人の女の子の姿だった。

抱かれる礼装は『最後の語り部』。花畑に座る眼鏡をかけた少年が、その優し気な眼差しでフランを見つめていた。

それからフランは『電力が来ただつて！——君ッ！ちょっと彼女を借りるよッ！』とテンションアゲアゲなダヴィンチちゃんに連れ去られていった。資源はあるもののエネルギーに余裕はないシャドウ・ボーダー。確かに電力という力を操れるフランは戦力以外でも大きな力になってくれるだろう。……あとはPCのコンセントを勝手に抜いたりしなきゃいいけど。

「……………」

「あの、アヴィケブロンさん。どうかしましたか？フランさんが召喚されてからずっと黙りっぱなしでしたか」

マイルールのPCについて考えているとアヴィケブロンさんの様子がおかしいことに気づいたマッシュが気づかいの声かけをした。ちなみにゴーレムはそのまま待機状態になっている。

「アヴィケブロンさん、フランがどうかしましたか？」

「……彼女とは少しばかり縁があつてね。彼女自身は僕には興味が無いようだったが、僕自身は彼女という存在が少し気にかかつていてね」

「と言いますと?」

「僕の望みはアダムを生み出すことだ。すなわち人工の命を生み出すということもいい。出来損ないや怪物と言われていたが、人造生命体として確立している彼女はイヴと呼ばれるにふさわしい存在なんだ。彼女を造り出したヴィクターは本物の天才だったということだよ」

「アダムとイヴ、か。そういえばフランの望みは確か……」

「はい、『自身の伴侶を得る』ということでした」

「ヴィクターも原初の夫婦の創造を目的としていたようだね。だが、その計画も頓挫してしまい、彼女は孤独になってしまった……というのが僕の認識だったんだが」

「どうやらあの大战で良い縁を結べたようだ……とポツリ呟くアヴィケブロンさん。それが、どこか羨望を含んだ呟きだったのが印象的だった。」

「さあさあ、あと1回10連にチャレンジですよっとー」

残りの礼装を回収し終えたオレ達は少し小休憩を取った後、2回目の10連召喚へと望んでいた。できることなら、ここでもう1度高レアサーヴァントを召喚して戦力の強化を図りたい。異聞帯を渡り歩くのなら戦力が多いことに越したことはないし、それから最前線で戦う武蔵ちゃんの負担も減る。

ちなみにその件の剣士様は今頃エミヤ特製のうどんを頂戴しているところだろう。頼むからオレ達の分も残しておいてくれよ……。

武蔵ちゃんとはあの極寒のロシアで再会した。彼女は実は英霊の座に戻ったはずなのだが、気が付くと漂白され極寒の地となったあの異聞帯のど真ん中にポツンと召喚されてしまったらしい。これに関しては彼女が元々が放浪者ストレンジャーということ、そして宮本武蔵のありえない可能性という剪定世界の存在としての性質が関係しているのかもしれないとカルデアの賢人2人は述べた。武蔵ちゃんには本人が制御できない、世界を渡り歩くという性質がある。契約中はマスターによってそれは縛られていたが、契約が途切れたことで再びその性質が現れたのでは、ということだ。そして剪定世界が現れたこと

で、剪定世界の存在として強く引き寄せられたのではないかと。如何せん放浪者については情報が無きすぎるから推測の域を出ていないがらしいが。

なににせよ、そのお陰で窮地を救ってもらい数か月ぶりに再会を果たせたので万々歳だろう。

武蔵ちゃんとの縁深さに改めて感心しつつ聖晶石を召喚サークル内へと放り投げる。先程と同じようにグルグルと光の帯を出現させたそれは再び金色へと変化していった。

「あつーまたまた金色回転ですよ先輩！今回はかなり調子が良いようですね！」
「ちよつと良すぎて怖いぐらいまであるんだが……」

というか、最近前みたいに金色召喚に一喜一憂しなくなってきたなあ……。以前なら『金色回転キタコレッ！これで勝つるッ！』とかハイになってたのに、最近じゃ『おつ？金色回転か。誰かな誰かなー？』ぐらいにしか思わなくなってきたしな。慣れつて怖い。

「あの……先輩。その召喚されたサーヴァントのクラスなんですけど……」

「どうし……マジかよ……」

「ふむ。これは随分と意外なクラスが来たようだね」

それは過去に2度だけ見たことがあるクラスカード。あの真つ黒サーヴァントを2回召喚した時のみ見たクラスだ。あの時は銀色のカードだったが、今回は金色。刻まれ

るのは復讐者の刻印。

そう、アヴェンジャー・クラスのサーヴァントが召喚されたのだ。

——ひたすらに巨大な狼。グルルツと豪快にして戦慄するような唸り声を上げ、こちらを見つめる鋭い視線には憎悪と殺意しか込められておらず、刃物のような鋭さを持つた牙と爪は今にも命を刈りとらんと鈍い輝きを見せている。その背中には逸話にのみその存在が語られている首なしのドイツ軍人一人。死神の鎌の如く両手に剣を構えた彼も狼と同様にこちらに殺気を漂わせていた。

「グルルウウウ!!ガアアアアア!!」

「——ッ!!マスターッ!!」

「ゴーレム達よっ!マスターを守れッ!」

狼と軍人——『ヘシアン・ロボ』の殺気が爆発し、すさまじい勢いでその巨体がオレ達——いや、オレへと襲い掛かってくる。それを見たマシユが悲鳴を上げるもアヴィケブロンさんが一番早く反応していた。彼はゴーレムを起動してオレ達の前へと踊りださせるとその剛腕で彼らをギリギリで拘束した。

ガキン!と巨大な口が目の前で閉じられ、ならばと振るわれた爪も虚空を斬る。正直キヤスターであるアヴィケブロンさんではかなり厳しいところなのだが、召喚したばかりで霊基も未熟だったということが幸いだった。

「先輩大丈夫ですかッ!?お怪我は!?!」

「……………」

「先輩……………」

反応のないオレを心配したマシユが顔を覗き込んで来るが、オレにはそれにしつかりと受け答えをする余裕がなかった。何故なら、オレは今彼らだけには会いたくなかったのだ。

「マスター、大丈夫かい?顔色が優れないが」

「……………いえ、大丈夫です。ありがとうございます」

それが助けてくれたことへのお礼なのか、それとも気遣ってくれたことへのお礼なのか曖昧なままオレは言葉を吐き出す。

見つめる先にはロボの憤怒の視線。今もなお喉を鳴らし、ゴーレムの拘束から逃れようと必死に足掻いている。『殺す、お前を殺す』と、言葉が分からなくともそう言っているのは伝わってきた。

——その顔が、オレが奪った命ヤガ達とダブった。

よくも俺達を殺したな。

「先輩ツ!?!」

足に力が入らずグラツとその場に倒れそうになる。慌ててマシユが身体を支えてくれたおかげで尻餅をつく程度ですんだが、頭はガンガンと軋み吐き気が止まらない。新宿で彼に遭遇した時も真つ黒な殺意を向けられたがここまで身体が過剰に反応することとはなかった。今の彼はあの時の彼と比べても圧倒的に靈基は劣っており、大人と赤子程の力量の差がある。

にも拘らず、オレは気圧されていた。理由は……考えるまでもなかった。

「ふむ。とりあえず今回の召喚はここまでにしておいた方がよさそうだね。マシユ、マスターを自室へ。このサーヴァントは僕が責任もって抑えておこう」

「はい、分かりま——待ってください——先輩?」

ダメだ。ここで折れたらダメなんだ。まだ、オレが背負^奪つた世界は1つ。これからもつと多くの命を背負うことになるんだ。それなのに、こんなところで立ち止まってるんかいられないんだよ……!

「先輩駄目です!無理をしては……!」

「いや、いいんだマシユ。ありがとう」

オレはフラ付く足に活を入れてなんとか立ち上がる。もちろん立ち直ったわけでは

ない。今でも頭は割れるように痛いし、目の前も少し霞んでいる。吐き気だつて収ま
てないし、喋ることも億劫だ。だけど――

”――まだ、生きろ”
たたかえ

胸倉を掴み、血みどろになりながら射殺す視線を向けてきた友達が浮かぶ。そうだ、
オレは生き戦わなくちゃなきやいけない。あの世界を壊した者として目を逸らしちゃいけないだ。
「……ロボ、お前が人間を憎んでいることは知っている。愛する存在を奪われる苦しみ
はオレにだつて痛いほど分かる。それを理解した上で敢えて言おう。――オレに力を
貸してくれ」

「グルルウ……」

唸り声を上げロボはオレを睨みつける。先程とは打つて変わったオレの様子を見て
彼は見極めようとしてた。いくつもの幻霊を掛け合わせ聡明となった復讐の獣がオレ
の心を覗き見ていた。背に乗るヘシアンはというと静観を貫いており、どうやら判断を
ロボに委ねているらしかった。

この狼王を令呪で縛ることは簡単だ。ただ一言『オレに従え』、そう言えばいい。しか
し、そんな状態で戦えるほどこれから先の旅路は甘くない。いや、それ以前にそんな悲
しい関係にオレはしたくない。

「勝手なことと言っているのは重々承知だ。だけど、オレはあの世界で生きてきた命を

救いたい。そのためには少しでも多くの力が必要なんだ」

「グルウア……!」

「悪いがオレの命はあげられない。こんなちっぽけで弱いオレでもできることがあるから」

「グル……」

「——だから、頼む。オレ達の世界を取り戻すために力を貸してくれ」

「……………」

途中からロボは唸ることすらしなくなった。ただ真つすぐにオレを見つめている。憎悪は今もなお健在のようだがさつきよりは随分と収まっているように感じたオレは傍らで待機するゴーレムマスターへと視線を移した。

「アヴィケブロンさん、ロボとヘシアンの拘束を解いてください」

「先輩ツ!」

「いいのかい? 離れた瞬間、君にまた襲い掛かってくるかもしれないが?」

「かまいません」

「だ、駄目です! 危険すぎます!」

「いいんだ。頼みごとをするんだし、オレだつてちゃんと覚悟を見せないと」

オレの言葉が伝わったのか、マシユは口を噤む。暫しの沈黙、やがてアヴィケブロン

さんがパチンと指を鳴らすとロボ達を抑えていたゴーレムがその場で崩れ去った。自由になった狼王とその背に乗る首なしの死神はゆっくりと立ち上がった。

「——ガアツ!!」

「先輩ツ!」

「——ツ!」

近距離で丸のみに出来そうな大きな口が開かれ、両の剣がオレへと振り下ろされる。それを避けることも逃げることもせず、オレはただ彼らを見つめ——

「……………グルルルウ」

——ピタリと。三つ首の死が止まった。正面からはロボの鋭い牙、左右からはヘシアンの巨大な剣。それらが触れるギリギリで止まっていた。数秒の後、彼らがゆっくりと後退し己が武器牙と剣を取めた瞬間、手の甲に刻まれた令呪が熱を持つ。契約完了の証だ。

今の行為は彼らなりの確認だったらしい。一応契約は結ぶ、だが自分達の憎しみを忘れるなという。

「——ありがとう、ロボ、ヘシアン。お前達が認めてくれたこの命、決して無駄にはしない」

「……………ガウツ」

オレの言葉に小さく唸りを上げたロボはノツシノツシと歩みだし、やがてシャドウ・

ボーダーの隣で丸くなった。召喚をコックピットから見ていたムニエルが、近づいてきた彼らにビツクリして椅子から転げ落ちるのが見えて思わず苦笑してしまった。

なんだか締まらないなと思いつつも、ホツと息を吐きだす。見上げた空は透き通る青色。この空が繋ぐ新たな異聞帯へとオレ達は再び進み始める。

——世界をチップにした聖杯戦争は始まったばかり。新たに動き出した運命の歯車は、止まることはない。

「貴方は一人じゃない」

「先輩ッ！大丈夫ですかッ！怪我はしていませんか!？」

「ああ。心配かけたなマシユ」

「~~~~ッ!! 本当です! なんて無茶をするんですかッ!!」

「ごめん。でもあれくらい覚悟を見せないと認めてくれないと思ったからさ」

「それでもッ！それでも……！」

端正な顔に涙が浮かぶ。頭の良いマシユのことだ。マスターとしてサーヴァントに覚悟を見せなければならぬという理屈は分かる、だけど方法に納得ができないといった感じなのだろう。何を言えいいのか分からずグチャグチャなまま感情が爆発してしまっているんだと思う。

「……僕は席を外すよ。だからマスター、しっかりと話すといい」

「気を使わせてしまつてすみません、アヴィケブロンさん」

「気にするな。……その子のこと、ちゃんと見てあげなさい」

そう言い残し、アヴィケブロンさんはシャドウ・ボーダーの中へと戻っていった。残されたのはオレとマシユの2人のみ。その片方は両手で顔を押しえ嗚咽を漏らしており、オレにそんな彼女へポツリと口を開いた。

「……マシユ。オレさ、気づいてたんだ。異聞帯を壊すつてことはそこで生きるヤガ達の命を奪うことになるんだつて」

「……………」

「正直キツかった。今までのどの旅よりも辛かった。だつて、オレはただ自分達の世界を取り戻したかつただけで、誰かの世界を踏みにするつもりなんてなかつたんだから」

「……………」

「止めてしまいたいって本気で思った。……でも、パツシイが奮い立たせてくれた」

「……………ッ！」

「パツシイはあの時オレを助けてくれた。自分達の世界が滅ぼされると分かっているが、それでもオレの盾になって、怒鳴りつけて、伝えてくれた」

「せん、ばい……」

獣国を出て何度も何度も反芻した彼の言葉。それは楔の様にオレの胸に突き刺さっていた。

「だから、オレは生きるよ。命を賭けて生きる」

改めてもう一度誓いを立てよう。今度は揺るがないように。断固たる覚悟を以って。

「——オレは誓う、世界に生きる命を背負うことを。そして、必ずオレ達の世界を取り戻すことを」

「……分かりました」

マシユの口から言葉が零れる。それは何かを決意したように強いものだった。

「ですが、1つだけお願いがあります」

そう言いながら静かにオレの両手を取る。顔を上げた彼女は涙を零しながら少しだけ口元に笑みを浮かべていた。

「その誓い、一緒に誓わせてください。私だってちっぽけで弱い存在ですが、0と1には絶対的な差があるように、こんな私でも先輩の背負うものを少しは軽くすることはできません。貴方だけに全てを押し付けたりは絶対にさせません。——だから、ずっと一緒に歩いていきましよう」

涙によつて董色の瞳を潤ませ、しかし優しく微笑むマシユ。オレは、そんな彼女に見惚れていた。

——綺麗だった。ただただマシユは綺麗だった。命の尊さを知り、美しさを知る少女

には似つかわしくない誓い。そんな誓いを立てても尚、この少女は綺麗だった。

救われたような気持ちだった。貴方は一人じゃないと大切な人が言ってくれた。それだけで、オレには十分だった。

「ありがとう、マシユ。ありがとう……！」

胸に込み上げてくる温かさに声を震わせながら、ひたすら感謝の言葉を伝える。

——目の前で笑みを浮かべ、共に歩んでくれる少女の存在が何よりも愛おしかった。

夢幻の聖杯大戦を駆け抜けてきたんだけど、採集大戦になつたのは不可抗力だよね？

——『聖杯大戦』

それは本来あり得ない事変。とある世界のとある時間軸によって行われた異色の聖杯争奪戦。ある魔術師の一族と魔術協会が大聖杯を巡って2つの陣営に分かれ、七騎と七騎のサーヴァントがぶつかり合った空前絶後の規模の戦争。戦地に赴いたマスターと彼ら彼女らと契約したサーヴァント同士の戦いは魔術師としての意地の張り合いから次第に逸脱していき、ある一人の英霊の理想と野望を巡る戦いへと変化していった。

その結末がどうなったのか、語り部である青年は多くを語らない。邪竜としての絶大な力を宿した彼曰く、その英霊の理想通りの世界にはならず、大聖杯自体も青年の本体がここではない世界の裏側で管理しているということを告げられた。

——世界を塗り替える力を持つ神秘の力は、今も尚眠り続けている。聖女との再会を願う邪竜と共に、永遠の如き時間を。

「素材とQPが激うまで半端ない」

「あのマスター、助けを請うた俺が言うのもなんだがもう少し加減をしてあげてもよかったですんじゃないだろうか」

「いやいや、半端なやり方は逆に相手を苦しめることになるって。それならいつそのこととスパツとやつちやつた方が楽だって」

「だからと言って開幕宝具開帳で容赦なく吹っ飛ばすのはどうかと思うんだが……。いくら本物ではなく虚像のサーヴァントだとしても、知り合いが根こそぎ屠られていく光景は見ていて気持ちのいいものではない」

「あー、うん、それに關してはすまんかった。でもな、ジーク。時にマスターは今後のことも考えて行動せねばならんのだよ。素材とQP的な意味で」

「生々しいな……」

そういつて彼のドラゴンスレイヤーの力を秘めたホムンクルスの青年——ジークは苦笑いをする。

オレ達はシャドウ・ボーダー内のマイルームにてジーク君と先日 of 夢の中の大戦のことを語り合っていた。唐突に導かれた幻想の聖杯大戦、押し迫るサーヴァントの幻影達との戦いは熾烈を極めたものだった。

が、肝心の会話の内容には緊張感がまるでない。あの戦いは確かに緊迫としていたし、大聖杯に取りつかれた男の執念もすさまじいものだったし、夢の中の出来事とはいえ一歩間違えれば命を落とす可能性だってあったのは分かってるんだ。うん、それに關しては重々分かってる。

しかしだ。目の前に潤沢な素材やらQPを引つさげた獲物がいたとして、それを我慢できるマスターがいるだろうか？ いや、いない（反語）

そんなわけで、危険ということも若干忘れてヒヤッハー！ 素材がガツポガツポじゃあつ！ とハイになってしまったオレは悪くねえ！（親善大使）

「まさかアヴィケブロンに対してあんな仕打ちをするとはな」

「本気でごめんなさい」

ライダー勢で一斉に踊りかかって本当にすみませんでした……。だって歯車が……

歯車が……！

今は靈基グラフとして待機状態にあるゴーレムマスターに頭を下げていると、ジークが壁に掛けられた時計を見た。

「もうこんな時間か。マスター、そろそろ召喚に向かう時間だ。この俺もあまり長くは現界してられないからな」

「うん？おつ、確かに。じゃあ、今回は護衛よろしくなジーク」

「出来ることはたかが知れているかもしれないが、全力でマスターのことは守ろう」

「いやいや、邪竜が護衛とか過剰戦力過ぎるから」

同じ年ぐらいいに見えるジークはマイルームから出るオレの後ろを従者の様に歩く。普通に隣を歩いてほしいが何度そう告げても彼が遠慮してしまうのだ。マスターとサーヴァントという関係上これが正しい形と言えばそうだけど、オレ自身そんなもの気にしないんだけどなあ。

テクテクとシャドウ・ボードアの通路を歩き、外へと出る。相変わらず辺りは真っ白な地表が遥か彼方まで続いており、点々と建物らしきものが立っているのが見える。もつともその中で生命体を発見できたことなど今のところ一度も無いのだが。慣れとは怖いもので、この光景に慣れ始めている自分がいる。

「そっういえば盾はあるが、あの少女はどうしたんだ？」

「マシユはダ・ヴィンチちゃんに色々チェックを受けてるよ。ロシアじゃ戦えたとはいえ急造な部分があったらしくて、オルテナウスも含めてチェック中」

「なるほど。俺がもう少し早くこちらに来ていれば手伝えたんだが」

「ありがとな、ジーク。じゃあこれから先頼りにさせてもらおうぜ」

「さあ、早速召喚だ。今回は30連分の石がある。一応狙い目としては大英雄アキレウスさんが来てほしいところだ。うちにはまだ星5のライダークラスがないし。」

「……でもワンチャンジャックちゃん来ねえかな（願望）」

「そんな秘かな欲を込めつつ石を盾の召喚サークルへと投入。お馴染みの回転の後、どうだ！我こそが高レアサーヴァントなるぞっ！と自己主張の激しい召喚反応が現れる。早い話金色回転である。」

「これが召喚の光……。話には聞いていたがすごいな」

「カルデア式の召喚術式はかなり特殊らしいけどな。というかジークは召喚に立ち会うのは初めてか？」

「そう、だな。俺の場合確かにサーヴァントと契約を結んでいたが、それはあくまですでに召喚されている英霊との再契約という形だったから、一から立ち会うのは始めてだ」

「赤い瞳を僅かに輝かせながらジークは答える。えっと、確かライダーと再契約したんだっけ？彼自身は邪竜として存在するジーク本体の端末的存在のため、自分の記憶とい

うより記憶という本を読んでそれを覚えていく感覚らしい。自分自身で体験したわけではないためいまだに不思議な気持ちなんだとか。

ちなみに彼が当時再契約したサーヴァントは理性蒸発騎士ことアストルフオ。ご、ごめんなうちにはいなくて……。

「ところでマスター、これは弓兵のクラスカードだからアーチャークラスのサーヴァントということではないのか？」

現れたクラスカードを指さすジーク。彼の指が示しているのは確かに弓兵のクラスカードだ。

……ところで彼から聖杯大戦の話聞いて超ビックリしたんだけど、赤陣営黒陣営共にアーチャークラスは弓を使っていたんだとき。えっ？マジで？随分珍しいなと言うと『そ、そうか？すまない、俺は知識が偏っているからこれが普通だと思っていた』と申し訳なさそうに謝ってきた。寧ろオレが謝った。

「——サーヴァント、アーチャー。ケイローン、参上しました。我が知識が少しは役立てばいいのですが……。ともあれよろしくお願ひします。あなたのため、力を尽くしましょう」

古代ギリシヤの装いに身を包んだ男性。物腰は非常に柔らかく、執事のような凛とした佇まいで礼儀正しく挨拶してきた。肉体は武を修めていると分かるほど屈強ではあるが、纏う雰囲気からはそのような気配は微塵も感じない……。否、感じさせない。その正体は、女神アルテミスから弓と狩りの技を授かり、そして数々の大英霊が教えを乞うたと言われるケンタウロスの大賢者にして完全な神霊。

——あの幻想の聖杯大戦でもオレ達を導いてくれたケイローン先生だった。

「ケ、ケイローン先生！お久しぶりです！」

「はい、お久しぶりですねマスター。またお会いできて私も喜ばしく思います」

ガバツと頭を下げるオレの顔を上げさせながらケイローン先生は優しく微笑みかけてくる。やっぱいい、この人マジ先生力半端ない。無意識に敬愛しつつ教えを乞いたくなくなるレベル。ある種の魅了じゃねえか！

「賢者ケイローン。貴方が来てくれるとは。俺としても心強いよ」

「おや、貴方はジークではありませんか。……なるほど、あの騒動の後にそのままこちらへ来ていたのですね」

「ああ。これからよろしく頼む。俺はまだまだ未熟だから、マスターの為に貴方から教わりたいことはたくさんあるんだ」

「ふふつ。やる気がある生徒というのはどれだけ長い生を生きても眩しいものです。分かりました、私に教えられることを全て教えましょう。学ぶということはあらゆる生物の特権ですから」

別にオレ自身勉強が好きというわけじゃないし、寧ろ苦手な分類に入る。それでもこの大賢者様の授業は聞いてみたいと思うのは彼の先生としての魅力なのだろう。

よーしっ！やる気出てきた！あとでマシユと一緒に色々聞きに行こう！勉強好きの彼女だったらきつとノリノリで参加してくるはず！

その後、関係者に挨拶をしますとその場を後にした先生を見送り、オレとジークは召喚を続けることにした。今回はなんだか幸先が良い気がする。初っ端から星4である先生を呼ぶことができたし、まだ20連分も聖晶石が残ってるしな！

さあッ！次の召喚についてみよう！！

「——う、うん。マスター、俺にはいまだに召喚のことはよく分からないのだがこれはいわゆる爆死というものなのではないだろうか」

「言わないでくれジーク……!!」

大量の召喚結果礼装の山にガクリと膝を折りながら項垂れるオレにジークが気を使った言葉掛けをしてくる。

は、恥ずかしいいいいい!!何が幸先良い気がするだよっ!本当に気がただけじゃねえかっ!!全っ然駄目じゃねえか!!

「これはすごいな。天草四郎時貞がこんなに……」

「1度の召喚で4枚天草礼装とかこええよこのキシタン」

「だが、ライダーの礼装も1枚あるな。ヒポグリフに乗って元気そうだ」

「そっちの方がレアリティ低いんですが、それは……」

誰かに膝枕されて穏やかな表情を浮かべる天草四郎時貞の礼装——『刹那のまほろば』。いや、お前さんそんな穏やかな笑み浮かべるキャラだっけ?ニコニコしながら腹の中じゃどす黒いことを考えているキャラじゃなかったっけ?暇さえあれば黒鍵磨きつつ聖杯をぶんどることを模索してるTHE 黒幕って感じじゃなかったっけ?

「おのれ……オレだつてまだ膝枕してもらつたことないのに……!!」

「マスター？ 邪竜に負けず劣らずの黒い何かが漏れ出てるぞ……?」

グギギギツ……!と歯ぎしりするマスターをどうどうと宥めるジーク。一体オレ達何やってんだらうね。

「さあ、次が最後の召喚になるのだろうか？ 希望をもつて挑んでみよう、マスター」

「ジーク君の声援に心洗われるわあ」

ガチャガチャと残りの聖晶石を召喚サークル内へと放り込む。頼む！ 次こそ良い感じのサーヴァント来てくれ！

「ん？ この魔力の大きさは……?」

「こ、こいつあ!!」

回転を続ける召喚光。いくつか礼装を吐き出した後、それは唐突に輝きだす。眩く光るその色は銀色でも金色でもない、そう『虹色』だった。

「星5ほぼ確定演出キタアアアア!! 誰だつ!!?」どのクラスだつ!!」

「これが星5の魔力……。なるほど、臃げだがあの聖杯大戦でも同じ圧を感じたことを俺の中の霊基が覚えている」

ということは大戦に関係あるサーヴァントってことか?! イヤッホオオオ!! 今年に入つて本気で運氣の上昇がすごくてたまんねえぜ! というか、この切迫した状況の中で

の星5召喚は本当に生命線になりかねないからな！

色鮮やかな光を放ちその中心からクラスカードが現れる。刻まれるのは——『暗殺者』の刻印。

「これは……アサシンのクラス、ということでもいいのだろうかマスター」

「アサシンッ！ジャックちゃん！」

「ちよつと落ち着いてくれマスター。語彙力のメーターが下方に飛んでるぞ」

つまりこれはあの幼女シリアルキラーがギターつてことでもいいんですよね！（激寒）

いいぜっ！来いよジャックちゃん！心臓の貯蔵は十分だぞっ！（150個超え）

ワクワクと胸の高鳴りが抑えきれないオレは随分気持ち悪い笑みを浮かべていたのだろう、ジークが素で引いていた。

と、そんな彼の傍らにチラリと見える物があつた。それは先程引いた礼装の山。その中で穏やかに微笑む天草^{黒幕}×4。

……うん。ちよつと待つてほしい、冷静になれオレ。現れたクラスカードはアサシンのクラス。そしてこつちにはオレとジークとそして礼装の山……の中に『天草四郎時貞』の礼装（×4）

いや、嘘やん？そんなことある？あの人限定だよ？気難しい『女帝』様だよ？まさかこんな触媒にすらならん物で釣られることある？確かにジークも微妙に天草とこの女

帝が組んでいたことは覚えていたけど……。えっ？マジで？

「サーヴァント、アサシン。セミラミスだ。さて……。まずは玉座を用意せよ。話はそれからだ。無いのであれば仕方ない、汝が椅子になるが良い」

黒のドレスに身を包んだ見目麗しい女性。アツシリアの伝説に残る人類最古の毒殺者。神と人間との間に生まれた半人半神の存在にして、アツシリアにその美貌と才色を轟かせ、そして残酷な暴君として君臨した女帝。アサシンとキャスターの両クラスの力を振るい聖杯大戦でも暴れまくったサーヴァント。

「やだ、この女帝チョロ過ぎ」

「このサーヴァントは……!?!」

女帝様の意外なチョロインっぷりに驚いているオレと、突然現れたかつての敵に目を見開くジーク。そしてあまりに対照的な態度のオレ達を切れ長の瞳で睨みつける女帝様。何このシニールな光景。

「汝ら、私の声が聞こえなかったのか？ 三度は言わぬ。玉座を用意するか汝らのどちらかが椅子になるが——ほお、誰かと思えば先の大戦で争ったホムンクルスではないか」「女帝、セミラミス。まさか貴方が召喚に応えるとは思わなかった」

「相変わらず不遜な口にきき方をする模造品よな。我は女帝なるぞ？ ならば膝をつき頭を垂れるのが当然であろう。——それとも、我が前で無様に死に絶えるか？」

「悪いが、今の俺の主はこちらのマスターなのでな。貴方に下げる頭は持ち合わせていない」

「ほう、模造品のくせに言うではないか。まあよかろう。今回は敵対しているわけでもないのだから、見逃してやろう」

ところで、とジークに向けていた鋭い視線をオレへと移すセミラミス。その瞳に込められている感情は生者に向ける物とは思えないほど冷たい。

これが最古の毒殺者にして女帝と呼ばれる存在。幻想の大戦でも相対したりもしたが、相変わらず噓せ返るような圧だ。

「汝が我を召喚したマスターか。ふむ、先の虚ろの夢の聖杯大戦でも思ったが、パツとしない面よな。とても人理修復を成したマスターとは思えぬ」

「あつはは……よく言われます」

「そんな下らぬ笑いをするでないわ。ほれ、早急に玉座を用意せぬか」

「いや、玉座とか無いんですけど」

なんか代用できるものあつたつけ？……あつ、そういえば！

ちよつとお待ちを！とマイルームに『ある物』があつたことを思い出したオレは一言伝えて急いでそれを取りに行く。ものの数分で戻ってきたオレは簡易のシートを敷き、持ってきた『ある物』を上置く。

「どうぞっ！」

「……何だこれは」

「これこそ『人をダメにするクッション』です！座ってよし、寝て良しの最高材質ですよ！」

「マスター、流星にこれは……。というか、何でこんなものがシャドウ・ボーダーにあるんだ」

えっ、いいじゃん『人をダメにするクッション』。これさえあれば疲れなんてあつという間に吹っ飛ぶぞ？寧ろ吹っ飛び過ぎて動く気力まで奪われるレベル。

「貴様、我を侮辱しているのか？こんな粗末なもので満足するとても？」

「まままつ！そう言わずに一度座ってみてくださいって！」

「……良かろう、そこまで言うのなら試してやろう。だが、我が満足できぬものであった場合、貴様の命はないと思え」

セミラミスは女帝らしい優雅な動作でクッションの前へと移動し、ゆっくりと腰を下ろす。彼女の存在を包み込むようにクッションは変形していき、やがてすっぽりとその身体を受け止めた。

「どうですか？」

「……………」

「セミラミス？どうした？」

「……………」

目を閉じた女帝様にオレとジークが話しかけるも一向に反応が返ってこない。先程まで眉間に寄せられていた皺が解れ、僅かに口元が綻んでいる。つか、ほぼ寝てる。

ふっ、落ちたな。

「……………ハッ!?我は何をつ!？」

「どうですか女帝様。その『人をダメにするクッション』もとい『女帝をダメにする玉座』の座り心地は？」

「ふ、ふん！このような粗末な作りの物に満足するわけなからう」

「なるほど、それは残念。ご期待に沿えず申し訳ありませんでした。では、すぐに撤去いたしますね」

「待て。確かに満足していないと言ったが、汝らは玉座を用意できぬのだろうか？で、であれば、器の大きな我はこれで今は我慢してやろう」

「いえいえ、女帝様に対してこれは流石に無礼千万過ぎますよ。代わりに普通の椅子でもお持ちしますから」

「か、構わぬと言っておろうがツ!!ええい！貴様も何故そのような目で我を見る！」

「すまない、あまりのイメージとの乖離具合に驚いてしまっていた。すまない」

「ジーク君ジーク君。中の人出てきちゃってるよ」

『人をダメにするクツション』に呆気なく陥落した女帝。やつぱこの人アレだわ。バレンタイン騒動の時から薄々感じていたけど色々残念というか可愛げのある人だわ。

「ところで女帝様」

「なんだ？我はこのひと時を満喫するので忙しい」

メツチャ寛いでるじゃないですかヤダー。

「実はいくつかお聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか」

「今の我は些か機嫌が良い。つまらぬことでないなら許してやろう」

「ありがとうございます」

そう言つてオレはクツシヨンと一緒に持ってきていたパッド状の機械を操作して『ある項目』を探す。この機械にはオレの特異点の道程がレポートとして記されており、当然『あの出来事』のことも克明に記録されている。おつ、あつたあつたこの項目だ。

「ではまず1つ」

——この瞬間、オレの脳内ではクイズ番組の出題前によくあるデデエン!という音が鳴り響いた。

「——寝るときはアイマスクがないと落ち着かないというのは本当でしょうか?」

「な、なに?」

「寝るときはアイマスクがないと落ち着かないというのは本当でしょうか?」

「何故貴様がそれを知つてい——ハッ!」

「あつ、どうやら本当みたいです。では2つ目」

「き、貴様一体何を……!?!」

「よくできたハトには名前をつけてくれると証言をいただいたのですが、本当ですか? ちなみにどんな名前を?」

「待て、少し待て! 誰だそんなことを言つたのは?!」

貴方の使い魔です、とニヤニヤしながらオレは告げる。そう、これはあのバレンタイ

ンイベで彼女の使い魔であるハトたちが大々的に公開されていた『ピジョンレポート』である。この真相をずっと聞きたかったオレは彼女に隙を与えず次々に質問を重ねていく。

ちなみに一部始終が以下のとおりである。

「——4つ目、でも、水着になるのは嫌いではないぞ?（自己アピール）とは誰に向けてののでしょうか?」

「貴様ツ! いい加減に……!?!」

「——6つ目、『花は良い、我の手で枯れぬからな……と寂しげに呟く』とありましたが、実際は普通に摘めるといふことらしいですが、何故それっぽいことを言ったんですか?」

「い、いや! もういいっ! もういいからやめろっ!」

「——真の秘密。チョコ大好きという意外と甘党女子なのは本当ですか?」

「やめろと……言っているではないか……!」

「では、そろそろ最後に。チョコラミスが言っていたとはいえ、自分と同じ姿が『ハ、ハッピバレンタイン!』と精一杯可愛く言おうとしていたことに対してどうお考えで?」

「ぐぬぬ……」

「意外とマスターは容赦がないんだな……」

いくつもの自分の秘密を暴露され恥ずかしさのあまりクツションに埋もれながらぶしゆくと頭から煙を上げる女帝様。それを見て愉悅に浸るオレ。そしてそんな2人を引き気味に見ているジーク。何このシユールな光景（2回目）

結局この質問攻めはセミラミスが我慢できずクツションを持って逃亡するまで続いた。涙目で怒鳴りながら逃げていく女帝様は結構可愛かったです、はい。

ちなみにこの後、正月のニトクリスの時の反省が全く活かされていないことに怒ったマシユによりお説教を受けました。ごめんて、何かこう湧き上がる衝動が我慢できなかったんだって。あつ、はいごめんなさい反省します。

「夜、シャドウ・ボーダー展望部にて」

「ごめんなジーク。また呼び出したりして」

「マスターか。こんな夜更けにどうした？早く休まないと明日に差し支えるんじゃないか？」

「少しくらいなら大丈夫さ。それにジークに聞きたいこともあったから」

「聞きたいこと？悪いが、聖杯大戦に関することなら数刻前にマイルームで話したことが全てだ。俺はあの大战を生き残った『ジーク』の端末にすぎないから、覚えていることも多くはない」

「ああ、いやまあ聖杯大戦に関係するってことは間違いないんだけど。ちよつと別方向というか」

「ん？なんだ？」

「……オレ達が今まで召喚した英霊の霊基グラフを持つていることは知ってるよな？」

「ああ、マスターが今まで数々の英霊達と結んできた絆の結晶だろう。俺の霊基もそこに保管されていると聞いている」

「その中にな、あるんだよ。『聖女ジャンヌ・ダルク』の霊基パターン。だから僅かな時間とはいえ召喚しようと思えばできなくはないんだ」

「なるほど。考えれば当然のことだな。彼女ほどの人物が人理の危機に駆けつけられないわけがない」

「……会いたいのと思わないのか？」

「それは……確かに会ってみたいとは思う。だが、彼女はあの大战の時の彼女とは別人で俺のことを知らないだろう。何より『ジャンヌ・ダルク』という少女が会おうべき

『ジーク』は俺じゃないんだ」

「ジーク……」

「気遣い感謝するマスター。だが、彼ら彼女らの再会はきつとここじゃないどこかで叶うはずだ。端末である俺が言うのもおかしな話だが2人の再会を心から願っている」

「そっか。うん、ジークがそう言うなら分かった。悪かったな、おせっかいだった」

「いや、マスターの気持ちは嬉しかったよ。やはり貴方についてきて正解だった。改め

「これからよろしく頼むマスター」
「ああ、オレの方こそよろしく頼む」

ぐだぐだ帝都で斬り結んできたんだけど、魔神とか言うわりには沖田オルタって純粹さの塊だよな？

——ある日のこと。カルデアの召喚部屋では1人の剣士が大層大騒ぎをしておったそうなの。

「——龍馬アアア!! 今日という今日はおまんを斬り殺しちやるけ覚悟するぜよ!」

「まあまあ以蔵さん。せっかくこのカルデアで再会できたんだからそういう血生臭いことは止めよう。マスターや他の職員の人達の迷惑になるからね」

「そうだぞクソ雑魚ナメクジ。龍馬はお前の相手をするほど暇じゃないからな」

「誰が雑魚じゃ女ア! わしやあ天才じゃあ!」

「そうだね、以蔵さんの剣の腕前はピカ一だ。僕も今までたくさんの剣士を見てきたけどそう思うよ」

「まあ、龍馬の1番はお竜さんだけだな」

「そりゃ、僕達は2人で1人の英霊だからね」

「そうかそうか。ならお竜さんの頭を撫でろ」

「はいはい、お安い御用だよ」

「なに惚気とるんじやおまんらああ!!」

マスターです。帝都の特異点を解決して早速召喚にチャレンジしているマスターです。たった今召喚された『岡田以蔵』さんが護衛役の坂本龍馬さんとお竜さんに絡んでいて非常にやかましいとです。

帝都で起こった特異点——否、新たなぐだぐだイベントを突破してきたオレは早速召喚にチャレンジしていた。目当てのサーヴァントが誰かというのとははや語るまでもないだろう。あの純粹で抑止力なんて大層なものを背負わされて消えていった彼女。帝都の平和は魔神さんが守ること『沖田オルタ』の召喚だ。

今回用意してきた石の数は40連分。そのうちの20連分が今終了したところである。帝都でも斬り結んだ『岡田以蔵』さんが召喚されたのである。というか、この人星3のサーヴァントだよな?普通の星4サーヴァントよりもずっと召喚しづらかったんだけど確率どうなってるの?

寧ろ最初の10連で金色回転が来て、『キタ!コレキタ!!』って感動してたらエミヤさんが来たことにびっくりだよ。本人も突然のことにあんぐり口開けてたし。

ちなみにその時にワンシーンが次のとおりである。そくれ回想シーン行くよお(ホワンホワンホワン)

金色の回転より出現した弓兵のクラスカード。そこから現れたのは沖田オルタと同様に抑止力としての役割を持つ赤い弓兵だった。彼の姿を見た瞬間、沖田オルタではなかったことに少しばかり肩を落としたオレだったが、あることに気が付いてエミヤさんに提案した。

「ねえ、沖t——エミヤさん」

「どうしたマスター。というか、今何か間違った人物を呼ぼうとしなかったか?」

「気にしない気にしない。ちよつと頼み事あるんだけど、小次郎さんのあの長い刀を投影できる?」

「彼の刀をか? 確かにあの刀は業物ではあるが妖刀や魔剣といったものではないから可能だが、何故だ?」

「いいからいいから」

「ふむ、君が何を考えているのか分からないがいいだろう。 トレリス・オン 投影開始」

突然の提案に困惑していたバトラ——失礼。エミヤさんは短い詠唱を紡ぐ。すると投影の光と共に彼の手の中に小次郎さんの刀を同じものが出現した。刀としては異様に長いことが特徴の小次郎さんの刀。うん、装飾云々は置いといて『長い刀』ではあ

るな！

「じゃあ、それを逆手にも持つて。あつ、鞘はそのままでもいいから」

「マスター、一体何を考えて——はっ！まさかつ！？」

「オラアア!!褐色！白い髪！逆手に持った刀ツ！なんか赤っぽい！そして同じく抑止力！完璧な沖田オルタじゃああ!!」

「やはりそういうことか!!待ちたまえマスター！私は弓兵であつてアルターエゴではないぞー！」

「ようこそ沖田オルタ！カルデアは君を待つていた！」

「流石に正気に戻れマスター！性別やらクラスやら武器やらそもそも間違いだらけではないぞ!!」

「無穹三段！無穹三段！無穹三段！」

「飲み会みたいなテンションで言うのはやめたまえ!!」

「いいんだよ！諸々に目を瞑ればほとんど沖田オルタ（の要素）に被つてるからそれでもいいんだよっ！（錯乱）

それから護衛を務めてくれていた龍馬さんが止めに入ることと同時にオレ達は一時休戦をすることになりました。

ええ、エミヤさん完全に巻き込まれたただけけどまあ大丈夫だろ。宝具レベルも上

がったしね。

ということで回想シーン終了。(ホワンホワンホワン)

そして続けて20連目に挑戦すると1発目から彼がやってきた。幕末の畏怖の存在として恐れられ、対人型に対して絶大な力を発揮する天才剣士だがどこかポンコツ臭も漂う弄り甲斐のある人物。自称人斬りクラスの『岡田以蔵』さんだ。

さて件の人斬りさんだが、召喚された時の様子は冒頭の通り。龍馬さんの姿を見た瞬間ヒートアップしお竜さんの煽りという油が注ぎ込まれ斬らせるだのなんだの騒ぎ立てているのだ。ギャーギャーギャーギャーやかましんですよ、発情期ですかコノヤロー。

「以蔵さん、ステイ」

「誰が始末犬じゃあ!？」

「言ってねえよっ!？」

なに? なんの電波キャッチしたの? つか始末犬って……始末犬……あれ? なんかピツタリ? (失礼)

「ほら以蔵さん。マスターだってまだ召喚の途中なんだから静かに待っていよう」

「おまんの指図は受けんがじゃ!! いいからさっさと斬らせんかッ!」

「困ったね、完全に頭に血が上ってる。どうしようかマスター」

「この際殴っちゃっていいんじゃないかな?」

「ふんっ! (腹パン)」

「ふおおっ!!」

「あっ」

冗談で言ったのにお竜さんが本当に腹パンしちゃった。女性の姿をしているとはいえその正体は竜であり、今は英霊でもあるお竜さんのパンチは十分強力だ。完全に不意を突かれた以蔵さんはそのパンチをもちろに受け白目を向いて気絶してしまった。一応クラス相性的に優位だったからか消滅は免れたらしいが致命傷ギリギリである。

「……ごめん、以蔵さん。オレが不用意に発言したばかりに」

「お竜さん! いくらなんでも駄目ですよ!!」

「うっ、すまん龍馬……」

このまま放置というのはあまりにもアレだったのでとりあえず彼が目を覚ますまで休憩することにした。なお、目を覚ました以蔵さんが刀を振り回し暴れだしたので再びお竜さんに殴られるという事態が発生したのはまた別の話。

「頼みますからジツとしてくださいな。また騒ぎ立てるようならその口にニンニク突っ込みます」

「おまん、わしが匂いのキツイ野菜ちや嫌つちよること知つとろうが……」

「お竜さんも喧嘩吹っ掛けたりしないでね」

「仕方ないな」

ようやく共々落ち着いたところで30連目の召喚へ挑む。石を投げ入れてその反応に期待を込めるが召喚されるものは礼装がほとんど。召喚されるのもすでに宝具レベルMAXの帝都でお世話になったサーヴァントばかりだった。余談だが召喚されたメドウーサさんを見た瞬間以蔵さんがいらん事言つて腹に飛び蹴り食らっていた。何でこの人自分から地雷を踏み抜いていくの？

「おいマスター。またあの反応が来てるぞ」

「えっ？ おおっ！ また金色来てる！ 今回調子がいいな！」

な、なんじゃああ……と蹴られた箇所を押さえてうづくまる以蔵さんに意識が向いているとお竜さんがポンポンとオレの肩を叩いて召喚サークルへと意識を向けさせる。召喚光は金色へと輝きその中心からは光と同色のカードが現れる。刻まれる刻印は――

—『バーサーカー』だ

「これはもしかして鬼の副長殿かな？」

「分かりません。ただバーサーカーのサーヴァントの中には突然暴れだす人もいるので一応警戒をお願いします。まあ、その際はすぐに令呪を切りますけど」

「任されたよマスター。ということでお竜さんも警戒態勢をお願いしますね」

「まかせろー、お竜さんがどんな奴でも丸呑みにしてやろう」

「サーヴァントだから食べちゃダメだよ」

2人の和むやり取りに癒されつつ、オレもどんなサーヴァントが来てもいいように身構える。部屋の隅でピクピクしていた以蔵さんもいつの間にかオレの達の下へと戻ってきており、腰に携えた刀に手を添えていた。

やがて大気中に溶け込むようにクラスカードが霧散し、光の中心から召喚されたサーヴァントが現れる。

彼のことを一言でいうのなら『黒い騎士』だろう。『負傷したケイ卿に代わり彼の武具を身に着け馬上試合に赴いた』、『負傷したパロミデス卿を見かね、彼の衣装を纏い代わりにトリスタン卿と決闘した』という他の騎士のふりをしたという逸話から宝具化した『フォーサムワンス、ゾロウリ己が栄光の為でなく』の霧がその正体だ。霧を纏っている限り誰も正体に気づけないという宝具だがオレは既に彼のことは知っていた。今となっては随分と昔になってしまったオルレアンでの戦い。まだまだひよっこだった当時のオレがぶつかつた強敵にして、マシユにとつて特別な英霊。

「Shrrrrrrrr……」

円卓最強と名高く、しかし栄光の円卓を崩壊させた裏切りの騎士。『ランスロット』がそこにいた。

「ランスロットさん……」

「えっ? ランスロットで、あの円卓最強にして最高と言われる騎士ランスロットかい?」

「そうです。セイバーのランスロットさんにも会ったことがあるんですけど、こちらは、その、色々と狂ってしまったランスロットさんです」

「英霊召喚では自身とは別側面も召喚されるとは聞いていたけどこういうことか。しかし、バーサーカーという割には随分物静かだね」

「ええ、バーサーカーのランスロットさんは確かに狂化が入ってますけど、ぶっちゃけセイバーのランスロットさんより（女性に対して）理性的です」

「素の方に問題があるって大丈夫なのかい円卓」

いや、まあ大丈夫じゃなかったから崩壊したんですけどね。

「なんじゃああのごつうて真つ黒なやちゃあ。わしがいつちよ斬り合いでもして確かめちゃろうか」

「龍馬、あいつ変な煙出してな。食べていいか？」

「2人共どうしてそうすぐ事を構えることを選んじやうんだい？どちらにせよ駄目だよ」

「ちつ！つまらん奴じやのう」

「うむ、龍馬がそう言うなら分かった」

実は仲良いだろ貴方達。つと、いかんいかんランスロットさんをほったらかしにしています。相変わらず唸るだけで何もアクションを起こさない湖の騎士だったが、暴れたりしないってことは少なくとも会話はしてもらえる余地はあるということだ。

えっ？会話できるのかって？ふっふっふっ！オレを舐めてもらっちゃ困る。以前ヘラクレスさんを召喚した時に会話できずに困ったからな。こんなこともあろうかとバーサーカー語（仮名）はばっちり勉強済みだ！

ロットさんも紳士的（女性限定）ではあるんだけども、彼の紳士的行為はマッシュがブンブンしちゃうのでノーカン。

「おい、龍馬。マスターはどうしてあの真っ黒なやちやあの言うてることが分かるんじゃない？」

「僕も驚いてるよ。流石は人理修復を成したマスターということかな。意思疎通の難しいバーサーカー相手でも恐れることなくコミュニケーションを取れるのはすごいよ」

ふつ、伊達に今まで多くのバーサーカーと共に戦場を駆け抜けておらぬわ!!ヘラクレスさんを筆頭に呂布さん、ダレイオス王、カリギュラさん、スパさんといった会話困難なサーヴァントがうちには多過ぎるんだ。フィーリングだつて鍛えられるつてもんよ!

ということでランスロットさんと無事契約完了。彼は以蔵さんとは違ってこの場に残らないこと選択したのでせっかくだからマッシュをカルデア案内役に任命。ランスロット（狂）さんを召喚したと連絡を取ったらニコニコ顔で引き受けてくれた。

……これがセイバーのランスロットさんだったら渋ってたんだらうなあ。

さて、微笑ましい2人を見送ったところで最後の召喚に挑戦である。今のところ帝都の特異点に関連したサーヴァントは以蔵さんだけ。安定の召喚運である。いや、エミヤさんにランスロットさんが来てるんだから寧ろ良い方か。

「ということではラスト10連召喚行くけど準備はいい？」

「僕は問題ないよ。お竜さんも大丈夫だよな？」

「もちろんだ。お竜さんはいつでも準備万端だぞ」

「わしもじや。変なやちやあ来たらずぐに叩き斬ってやるだけじゃえ」

うんうん、気合十分なようでOKだ。でも以蔵さんはだ霊基が脆すぎるから戦闘は禁止な。その鯉口をチャキチャキ切るのやめなさい。

何だかんだで息の合った3人をから視線を移し、召喚サークルへと30個の石を投げ入れる。そろそろ魔神さんに来てほしい。そしてすでにいる沖田さんと並べてダブル沖田してほしい。無明三段突きでエネミーを突き刻んだ後に絶剣・無穹三段で丸ごと消し飛ばすような合体宝具が見たい（願望）

サークル内へと吸い込まれていく聖晶石。ぐるぐると回転するそれはいくつかの礼装を吐き出した後に唐突に金色に回転を始めた。

「やばい、今日マジで召喚運が良すぎる……。いつかに反動がありそうで怖い」

「おい、龍馬。マスターのやつ急にガタガタ震えだしたぞ」

「彼は聞くと所によると随分と召喚に苦しめられたみたいだからね」

「けっ！軟弱なやつぢやなあ!!」

うっさい！本当に怖いんだよ！この世の中うまくバランスがとれるようになってん

の！召喚には本当に気を遣うの！

「召喚されたクラスは——これはライダークラスだね」

「ライダー？そんなやつ龍馬以外に帝都のおったか？」

「茶屋の女性——メドゥーサさんは確かにライダーだったけど星3。ということはこのは……」

つまりはすり抜けということだと言外に龍馬さんは語る。さて、こんな時に来てくれたライダーさんは一体誰なのやら。

赤い海賊衣装を身に纏いその女性は現れた。女性として恵まれたプロポーションを持つているが、その美しい顔にはそぐわない大きな傷跡。ワイルドな表情を浮かべ堂々とした足並みでオレの下へと歩み寄ってくる。人類史で初めて生きたままでの世界一周を達成し、そして当時無敵と誉れ高かったスペイン艦隊の悉くをドーバー海峡に沈

め、スペイン人から「エル・ドラゴ」の仇名で恐れられた英国海軍提督。

「アンタが新しい雇い主かい？アタシはフランシス・ドレイク。まあ仲良くやろうじゃないか」

かつてオケアノスの海で死闘を共にしたサーヴァント。見事なまでの船長としての器っぷりを発揮し、特異点修復の為に戦ってくれた偉大な海賊、フランシス・ドレイク船長だった。

「せ、船長おおお!!会いたかったよおおお!!」

「おうさ!ようやく私を呼んだねマスター!随分と待たせたじゃないさ!」

「すんません!呼びたくても呼べませんでした!運的な意味で!」

「あつはつはつは!正直なところも相変わらずじゃない!いいねいいねえ。やつぱりあなたはそうじゃなくちゃ」

がしつと力強く握手を交わす。ライダーで非常に優秀なドレイク船長が来てくれたのは大変ありがたい。宝具の連発も可能だしクリティカルも狙いやすい。そして火力も申し分なくバランスの良い能力を持っているためこれから頼りにさせていただく。

「ほっほう!こりや見事な美女じゃな!!顔に傷があるのがちと残念じゃが、良い身体つきをしちよる」

「以蔵さん、それはセクハラだよ。しかし、彼女がフランシス・ドレイク?あの有名なマ

ゼランですら成し遂げられなかった当人での世界一周を達成した？あれ、僕の記憶では彼は男だったはずだけど……」

「だが龍馬。あれはどう見ても女だぞ。胸にでっかい餅を持つてる」

「そういえば他にも性別が史実とは異なるサーヴァントがいたね。うーん、これはどういうことなのかな」

龍馬さん！龍馬さん！たぶんそれ考えても答え出ないよ！沖田さんとかノツブとか色々いるけどたぶん分かんないよ！

「ところでマスター。あの嬢ちゃん——マシユは元気かい？」

「マシユ、ですか？ええ、今頃は他の新参サーヴァントにカルデアの案内をしていると思います」

「そうかいそうかい。2人共元気でやってるようで安心したよ」

ニカリと男勝りの豪快な笑みを浮かべる船長。そうそうこれだよ。このどんな障害だろうと笑って乗り越えていきそうな頼もしい笑顔。流星は星の開拓者のスキルを授けられるほどの人物だ。

「それにしても、まだまだ青二才だと思っていたあんた達がいつの間にか随分と大きくなつたもんだ」

「船長のおかげでもあるんですよ？あの時の啖呵。オレは忘れていませんよ」

思い出されるのはオケアノスでの戦い。再び目の前に立ち塞がった魔神柱の前に竦んでしまっていたオレ達の中で、船長は誰よりも早くそのおぞましい巨体に銃弾をぶち込み吼えた。彼女に胸の内に秘めていた思いを吐き出したマシユへの鼓舞として。

『——マシユ、これが真正銘最後の戦いだ！ほらほら、しつかりしな！コイツをぶつ倒すためにやってきたんだろう!?ならシャンと胸を張りな！こいつはアンタのための大一番だ！不敵に笑ってこう返してやんな！'化け物なんかには用はありません！いいから素敵な王冠を渡してちょうだい！'ってな！』

並の英霊ですら圧倒されてしまいそうな敵を目の前にして、この女性は誰よりも強かった。まだ神秘の力を宿していなかったにも拘わらず彼女は恐れてなどいなかった。どんな強大な敵だろうと決して臆するな、ただ笑って打ち負かせと。

そしてその意志の強さは、今も尚オレ達にとつての道標の1つになっている。

「な、なんだい覚えていたのかい。あの時忘れろって言ったじゃないか」

「あれを忘れるなんてとんでもないっ！ってことです」

「まったく。仕方のないマスターだよ」

再び豪快な笑い声をあげるドレイク船長。だがその耳元はほんのりと赤くなっていたことから本気で忘れていてほしかったらしい。生憎ですがこんなに大切な言葉忘れたりしませんから。

「ところでさつきから獲物を狙う海鳥みたいにくつちを見てる3人は誰なんだい？」

「ああ、紹介します。白い軍服の人が坂本龍馬さんです。今回の召喚の護衛を引き受けてくれました。そしてその隣にいるフヨフヨ浮いている女性がお竜さん。龍馬さんの相棒ですね。アンさんとメアリーさんの様な感じだと思ってください」

「これからよろしく頼みます、ドレイク船長」

「お竜さんのことはお竜さんと呼ぶがいい」

「リヨーマにオリヨーサンだね。よろしくだ」

「そして最後に――」

「おうっ！わしやあ岡田以蔵ちゆうもんじゃ。見りや分かると思うが劍士ぜよ。それもただの劍士じゃなか、幕末最強の劍士じゃ！」

「最強とはこれまた大層な発言じゃないか。あいつの言っていることは本当かいマスタ―？」

「最強かどうかは置いといて、以蔵さんは幕末に世間で人斬りと恐れられたほどの劍士です。少なくとも実力に関してはトップクラスですよ。――書文先生曰く惜しいらしいですが」

「人斬りとはこれまた物騒な奴だねえ。まっ、大砲ぶつ放して数えきれない船を沈めてきた私が言うのもなんだけど」

片や京の人々を震え上がらせた人斬り、片やスペイン人を震え上がらせた『エル・ドラゴ』。こう考ええると意外と似ているところがあつたりする、のか?

「おおっ! 意外と合うな女ア。どうじゃ、一緒に酒でも飲まんか?」

「女じゃなくて船長と呼びな! でも酒盛りと聞いたら断れないね。いいさ、いっちよ付き合つてやるよ」

じゃあ、マスター。あとでまたマシユに会わせてくれよと言ひ残し、ドレイク船長は意気投合してしまつた以蔵さんと共にはそのまま召喚ルームを後にした。あとに残されたのはオレと龍馬お竜さんペアと礼装の山。てかあの2人、片付け一切手伝わずに行きやがつた……。

「——以蔵さん、どこでお酒が飲めるのかとか一切聞かずに出て行つちやつたね」

「やつぱりあいつアホだな」

「まあまあ、そんなこと言わないでさ。せつかくだから後で僕達も同伴させてもらえなにか聞いてこよう。世界一周を成し遂げた人物の話、正直かなり興味があるんだ」

「龍馬も仕方がない奴だな。アホだな。だがそんなところも気に入ってるぞ」

「ありがとね、お竜さん。さてマスター、礼装の片づけ手伝うよ。それが終わつたら僕達あの2人のところへ行つても大丈夫かい?」

「ありがとうございます。ええ、大丈夫ですよ。じゃあ、お願いしますね」

その後、3人で手早く礼装を回収し龍馬さんお竜さんは2人の下へと向かって行った。あとで聞いた話だと以蔵さんはドレイク船長の思わぬ酒豪具合に敗北しデロデロになったらしい。何やってんだあの人斬り……。

—ボーラー室にて—

「マスターアアアアアアアア!!あの娘の召喚に挑戦したというのは本当ですかっ!?!どういうことですか!?!すでに私という沖田がいるのに!純粋さですかっ!純粋さが負けるんですか!?!それともビームですか!?!普通剣からビームは出ませんからね!それで結果は!?!」

「おうおうおう、見りや分かんでしょうが。傷口抉ろうとすんなや」

「しかし、沖田オルタとは別におっぱいの大きな奴が召喚されたんじやろ?マスターも嬉しいんじゃないかの?」

「人をおっぱい星人みたいに言うのやめてくれませんか?んなわけねえでしょ」

「本音はどうなのマスター?」

「褐色おっぱいも欲しかったです。——ハッ!?!」

「うわー。冗談で聞いたのにこれには茶々ドン引きー」

「ちっ、ちげえし!別に胸とか興味ねえし!」

「うっそだー!茶々知ってるもん!マスター時々ママ・ハリとかブルーデイカとか武蔵とか胸元開いてる系サーヴァントのおっぱいに目が行ってること!」

「おいしいおいしい!!茶々さん!あんた何言っちゃってんの!?!」

「マスターアアアア!やっぱりあの娘の胸目当てだったんですね!言つときますけど胸

のサイズは一緒のはずです！サラシで分からないだけです！なんなら確かめますか！
今っ！ここっ！

「沖田さんストップストップ!!なに服脱ごうとしてんの！落ちついて！」

「私はいつでもクールドです!!」

「バーキヤロウ！叫ぶクールドがどこの世界にあるんだコラっ！」

「沖田の奴いつもよりさらに暴走しとるんじやが。発言を思い出して後で死ぬほど恥ずかしくなるやつじやな。まあマスターも男ということでは是非もないよねっ！あつ、あと胸はオルタの方がデカかったはずじやぞ」

「そんな!?!発育ですらあの子に負けると言うのですかっ!?!マスターアアアアア！沖田は私一人ですウウウウ!!」

「マスターのエッチ！スケッチ！ワンタッチ！（死語）」

「ええいつ!!お前らうるせえええええええ!!」

神々の黄昏を越えた女神の世界で手を取りあったんだけど、人の可能性は無限大だよ？

「ダ・ヴィンチちゃん、マシユの様子はその、どうかかな？」

「本人は大丈夫って言ってるね。嘘もついている様子も無いから本当にそうなんだろう。辛いはずなのに、強い子だよ」

「……そっか。ごめん、シャドウ・ボーダーの制御で疲れてるのに」

「なあに、私の仕事は君達のサポートだけ？メンタルケアだって喜んでさせてもらうさ」
そう笑う小さな少女だが、疲労の色を隠せていない。碌に睡眠もとらずあっちへこっちへと奔走しているのだろう。ましてや今はもう1人の要であるホームズが負傷から回復しきっていないから余計に。

「それにしても——君が真っ先に私に頼るなんて珍しいね。いつもならとつくに君自身がマシユの下へ行っているだろう？」

「……オレだってできればそうしたかったさ。でもさ、オレはオフエリアさんのことを何も知らないんだ。彼女がどんな人物だったのか。カルデアに居た頃にマシユとどんな関係だったのか」

少しでも彼女のことを知っていれば、まだ掛ける言葉を見つけれただろう。けど、ずっと敵対していて、そしてようやく少しは彼女のことが分かるかもしれない、そう思えた時にはもう手遅れだった。

『オフエリア・ファムルソローネ』という一人の人間を知らないオレの言葉は——
きつと軽い」

あの巨人との戦い。その中で命を賭してオレ達の勝利を導いてくれたオフエリアさん。その死に際に静かに交わされたマッシュと彼女の会話。死という終わりを迎えようとしてもなお最期の最期まで輝いていた命の灯。紡がれた言葉がどれだけ尊く、美しかったことか。

「……そう。でも、もう少し落ち着いたら彼女の下へ行ってみるといい。なあに、別に難しく考えなくてもいい。ただあの子の傍に居てあげて欲しいだけだ」

「……分かった、ダ・ヴィンチちゃん」

頑張りたまえ、若人！とふりふりと手を振ってコックピットの方へ歩いていく小さな万能の人。自動ドアの向こう側へと消えていった背中を見送ったオレは自室へと戻り、金属製の椅子に腰かける。ギシツという音を奏でながら背もたれに体重を預け、天井を見上げた。吐き出した息は重く、気分はどうにも優れなかった。

「傍に居てあげて、か……」

——ごめん、ダ・ヴィンチちゃん。今のオレには、それが何よりも難しいよ。

太陽が在る。絶氷が在る。それは太陽と氷山の融合体にして大いなる破壊の王。北
歐に於ける神代の終焉、『神々ラグナロクの黄昏』にて世界と神々を焼き尽くした業火。火の巨人達
の王『スルト』が氷雪の魔狼を食らった姿であり、ありとあらゆる世界に干渉し星その
ものに終焉をもたらす存在。

ただひたすらに強大な力だった。巨人の王に真つ向から戦いを挑むなど、ましてや

相手は大神オーデインと相討った存在だ。巨人王と名高い彼の前に今なお立っていることさえ、ただの人間にすぎないオレにとつては奇跡だった。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

「全員回避イ!!絶対にあたるなっ!!」

「はいっ!先輩は私がつ!」

「ブリュンヒルデッ!」

「はいっ!」

それぞれが互いのパートナーへ合図を送り全力でその場を離脱する。刹那、オレ達がいいたところを超弩級の大剣が通過した。炎によつて構築されたそれは破壊力、熱量ともにまさに太陽。斬るという以前に灰も残さず一瞬で無へと変える絶対破壊の一撃。素早い回避のお陰で掠りもしなかったが、熱風だけで燃え尽きてしまいそうだった。カルデアのスタッフ達の研究の結晶である礼装が無ければ余波だけで消し炭にされていただろう。

『オノレエエエ!!脆弱な人間どもがアアアア!!』

「次!ブレスッ!マシユは盾で防衛っ!魔力ブーストを掛けるから直撃は避けて角度を付けて受け流せッ!シグルド!大剣を持つてる腕を狙えっ!再生されるとはいえ短くても隙を作るッ!ブリュンヒルデは直接槍を叩き込めっ!少しでも魔力を消費させ

ろっ!!」

「了解ッ!!」

ゴオオオオオッ!!と特大の炎がスルトから放たれる。それをブーストされたマシユの盾が絶妙な角度で受け流した。狙いのズレた炎は空へと進路を変え、その隙にシグルドさんが魔剣グラムを用いた連撃を大剣を持つ腕に叩き込む。彼とピツタリのタイミングでスルトの背後へと回ったブリュンヒルデさんも同じようにその無防備な背中を自慢の槍で何度も貫いた。

『グウオ……!!オオオオオ……オオオオ!!』

流石は大英雄として名高い英霊だ。シグルドさんによつて瞬く間にスルトの腕が切り落とされ、炎の塊となったそれも魔力の残滓となり消滅する。反撃とばかりに残された腕で彼を掴もうとするが、その腕もブリュンヒルデの巨大化した槍によつて両断された。

「いいぞつ、もう少しだつ!これだけのサーヴァントなら消費量も桁外れのはずッ!」

「はいっ!あと僅かで巨人王スルトの魔力も枯渇すると推測されます。このまま押しとおりましたよ!!」

両腕を失い、武器も失ったスルトは唸るような悲鳴を上げる。間違いなく追い込んでくる。このまま速攻で畳みかければ勝てるっ!!

「——駄目です、マスター」

「その通りだ。焦ってはいけない」

が、追撃をかけようと前へと飛び出そうとしたオレとマシユを英霊夫婦が止める。その先ではこれ以上食らってなるものかとその場で暴れまわり、辺り構わず熱線を吐き出すスルト。彼が暴れるたびに地表は震え、氷樹が燃え尽き、大地が死ぬ。

「あれはどこまでも諦めの悪い王です。最期の最期、息の根を完全に止めるまで決して油断してはなりません。焦って行動した結果、訪れるのは死です」

「かの王には死のルーンもある。一瞬の気の緩みが命取りになることもあるだろう。焦るな、好機を探すのだ」

あそこまで無差別に動き回られては予想外の一撃を受けてしまう可能性がある。一撃でも受けてしまえばこっちは終わりだ。だから落ち着くと、大英雄と戦乙女は告げてきた。

「…………ごめん、ちよつと焦ってた。早くあいつを倒さないとして」

「すみません。戦場では常に冷静にいなければならぬのに私は……」

「良いのです。貴方達が焦る気持ちも分かります。地上で力を貸してくれたクリプターの彼女のことが気になるのでしょうか？」

オレ達の内面を見透かすようにブリュンヒルデさんが優しく微笑む。チラリと地上

へと目を向けるが高高度過ぎて下の様子はよく分からない。だが、地上にはオレ達の戦いを見守ってくれている面々がいるのは確かだ。この世界で出会った女神スカディとその娘であるフレイヤの神力を宿したシトナイによる加護が保たれているのがその証拠だ。

「……すみません」

口から出たのは謝罪の言葉だった。ブリュンヒルデさんの言うクリプターの彼女——オフェリア・ファムルソーネは敵だ。目の前で腕の再生が進んでいるスルトの『二元』マスターだ。オレ達が討たねばならない……いや、討たねばならなかった人物。

「敵に対して情けが過ぎることは承知しています。でも——」

「大令呪シリウスライトを使ってまでスルトとの契約を断ち、自分達の勝機を作ってくれたから敵として見れなくなってしまったのですね」

「……はい」

「盾の少女、貴殿もか？」

「シグルドさん……はい、そうです」

隣でマシユが俯きながら答える。2人揃って甘い話だ。敵として相対したはずなのにそうは思えなくなってしまう。そして気になるのは『大令呪』を使用した後の彼女の異様な疲労状態。まるで、今にも——

だからこそ気が急いでいた、急いでスルトは倒さなければと。反省して俯いていたオレ達だったが、不意に肩に手を置かれたことに気が付き顔を上げた。

「マスター、マシユ。それでいいのです」

「そうだ。貴殿達はそれでいい」

肩にシグルドの手が置かれていた。数多の強敵を退けてきた大英雄の逞しい手だった。隣ではマシユの頭をブリュンヒルデが優しく撫で聖母が如き笑みを浮かべている。

「それが貴方達の強さです。敵対する人物すら想うことのできる『優しさ』。私は貴方達がかれまでどんな旅路を歩いてきたのかはつきりと存じません。しかし、数えきれないほどの思いと衝突し、乗り越えてきたのでしょうか」

「中には唾棄すべき悪意もあったはずだ。だが、貴殿達はそれでも『慈愛』を忘れていない。戦場にしか身を置けなかった当方達に勝るとも劣らない尊ぶべき強さだ」

「シグルドさん、ブリュンヒルデさん……」

「忘れてはいけません、失つてはいけません。貴方達の強さを。想いは時に悪意すら優しく包み込むのですから」

「貴殿達の強さは貴殿達だけの特別だ。大切にするといい」

2人の言葉にオレとマシユは顔を見合わせる。互いに何も言わずに一度だけコクリと頷いた。思うことはたくさんあった。だけどそれを口にするのは今はやめておいた。

それぞれが目の前の大英雄へと視線を送る。自分達はもう大丈夫、貴方達に認められた強さがあるからと。2人はそんなオレ達の様子に満足そうに笑みを浮かべた。

『グオオオオオオオオオオ!!おのれおのれおのれエエエエエエ!!たかが神秘如きがアアアア!!』

遂に再生を終えたスルトが猛々しく吠える。切り落とされた腕には炎の大剣が握られ、揺らめく瞳が怒りの業火に燃えている。

『ムスペルヘイムウウ!!我が身体アアア!!』

荒れ狂う炎がスルトから放たれ生き物のように宙を漂ったかと思うと、次の瞬間手に持っていた大剣に吸収されていく。集結する炎に呼応するように徐々に大剣が巨大化していき、ついには巨人王スルトの体格と同等の大剣へと変化した。

「くつ、巨人王スルトの魔力の集束を感知!恐らく最後の一撃を放とうとしていますッ!」

「いよいよ時が来たようだな。カルデアのマスターよ、準備はいいか?」

「はい。いつでも」

マシユは盾を構え、ブリュンヒルデさんは僅かに飛翔し槍を構える。シグルドさんは魔剣グラムを持ちいつでも宝具を開放できるように備えていた。3人の臨戦態勢に相應るように令呪が刻まれた右手を前に差し出す。

「——令呪を以て命ずる。マシユ宝具展開。全力で敵の一撃を防ぎきれ」
 「はい！シールダー、必ずマスターの御身をお守りします！」

「——続けて令呪を以て命ずる。ブリュンヒルデ宝具展開。彼の敵を打ち破れ」
 「お任せください。我が槍にて全てを貫きましょう」

「——最後の令呪を以て命ずる。シグルド宝具展開。魔剣の力にて巨人の王に絶対なる敗北を」

「承知した。我が魔剣、太陽すら討ち落とすことを証明しよう」

令呪によつて解放された魔力が3人へと伝わりとそれぞれが宝具を展開。スルトの大剣を対立するように輝きを増していく。

——そして、ついに終末をもたらす獄炎の剣が生命を刈り取る矛となつて振り下ろされた。

『星よ、終れ……灰塵に帰せ!!太陽を超えて輝け、炎の剣!!』

「真名、凍結展開。これは多くの道、多くの願いを受けた幻想の城——呼応せよ!
 モールド、キャメロット
 いまは脆き夢想の城!!」

「届け、届け、届け、私の——死がふたりを分断つまで!!」

「絶技用意。太陽の魔剣よ、その身で破壊を巻き起こせ!壊劫の天輪!!」

1つの破壊とそれを止める3つの宝具。

『クツ……！グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

「いつけええええええええ!!」

振るわれた超巨大な大剣は3つの宝具とぶつかり合う。衝突から数秒間は完全に互角だったが徐々にオレ達の宝具が押し始める

ある意味必然と言える結果だったのかもしれない。スルトはその存在の大きさから忘れそうになるがサーヴァントだ。魔力の供給源がなければ実態を保つことも困難であり、ましてや今までの戦闘での攻撃、防御、再生にほとんどの魔力を消費していた。否、させられていた。

——それは彼の『皇帝』の力と、スルトと契約を切るために文字通り身を引き裂いたオフェリアさんの功績だろう。不可能すら塗り替える希望の快男児——ナポレオン。彼が自身の霊基の許容すら超えた虹を撃ち放ちスルトへの突破口を開いた。そして、オフェリアさんはスルトとの契約の要石である自身の魔眼を、呪いすら乗り越えて破棄することで魔力の供給手段を断ち斬った。前者はそのせいで身を朽ち果てさせ、後者は決して軽くない傷を負った。

しかし、そのおかげでスルトは大幅な弱体化をさせられる。先程振るわれた大剣も、破壊力こそ恐ろしいものだったが到底星を破壊しつくせる程の威力は持ち合わせていなかった。

対してこちらは消耗はしていたものの、令呪と女神の加護によるバックアップ付きの全力全開の宝具。込められた魔力量はスルトの大剣をも超えていたのだ。それでも大剣と宝具が僅かにも拮抗したのは偏にスルトの執念だろう。

3つの宝具に防がれていた獄炎の剣は戦乙女と竜殺しの宝具によって完全に消滅し、なおその勢いを劣らせない槍と剣がスルトの身体を貫く。今までで一番大きな手ごたえを感じた。

『オオ……オオオオオオ……！何故、だ……？この俺が……オ、フェリア……！オフェリア！オフェリアアアア！！』

目の前で起こったことが信じられないと言うようにスルトは叫ぶ。彼の口から出たのは敗れたことへの悪態でも悔しさでもなく信じられないという疑問だった。自分のマスターであったオフェリア・ファムルソーネへの悲痛な叫びだった。

その叫びも徐々に小さくなっていく灯の様に宙へと消えていく。フェンリルの力は剥がれ落ち炎より先に消え去った。魔力も失い、魔狼の力も失った太陽は、やがて、地天を焼却しようとしたのが嘘のように静かに消滅していった。

——異聞帯だけでなく世界を焼き払おうとした巨人の王。彼が何を思い破壊の限りを尽くそうとしたのか、そして何故最後にオフェリアさんの名を口にしたのか。それを理解できる者は、誰一人居なかった。

スルトを倒した後、シャドウ・ボーダーに戻ったオレ達に告げられたのはオフエリアさんの命が残り僅かしかないという残酷な報告だった。女神スカデイや戦乙女にすら治療できない手遅れの状態。これこそが『大令呪』シリウスライトを使う代償。術者の命を糧として発動する大魔術だった。

焦点の合わない目を天井に向けて静かに横になる存在に真っ先に駆け寄ったのはマシユだった。他のスタッフは気を遣ってくれたのか、この部屋にはオレとマシユとオフエリアさんのみ。

マシユは温もりを失いつつある手を握り、少しづつ言葉を交わす。ぼつりぼつりと小さく、しかし互いの言葉を胸に刻みつけるように交わされるその時間は人としての尊厳に満ちていた。

「あの、雪と氷に閉ざされたカルデアで、ずっと窓を見ていた、もうひとりのわたし。

……毎日怯えて暮らしていた私なんかと一緒にしては、迷惑でしょうけど……ずっと、アナタと——」

オフェリアさんはそこで一度言葉を切る。『もうひとりのわたし』。彼女は目の前を手を握る少女のことをそう言った。そして、自分との違いを示すように言葉を紡ぐ。

「……アナタは、進んで。踏み出して。マシユ・キリエライト」

「はい。はい、オフェリアさん。わたしたちは、進みます。きつと止まりません。きつと人理を守って、生き残って、そして……世界を……」

命の灯火が消えようとしている。気づかないうちに視界が歪んでいた。駄目だと思ふものの、それでも溢れ出るものを止めることができなかつた。相手は敵だつたはずなのに、悲しくて辛くて、胸が締め付けられた。

何か一つ。たつた一つでも違つていたのなら、オフェリアさんはオレ達と共に在れたのかも知れない。それが夢想の物語だとしてもそう思わずにはいられなかつた。

オレはマシユは泣いていると思つた。人づての話だが、2人はそれなりに仲が良かったらしい。マスター候補同士、訓練の話をしたり、一緒に食事をしたり。そんな時間を作つていたと。だから、今のオフェリアさんの姿に、マシユは泣いていると。

——だが、違つた。彼女が浮かべていたのは笑みだつた。満面ではない、氷雪の時期を超え、春に小さな花がふわりと芽吹くような柔らかな微笑み。

「ええ。アナタたちなら、やれるかもしれない。私としては……少し、複雑、だけど……。ああ、そうだ——あの英霊……に……もしも、また、出会えたら……彼、私を、覚えていないでしょうけど……。ありがとう、って。結婚は、お断りする、けど……。アナタの虹、綺麗、だった、って、伝え——」

オフェリア・ファムルソーネは眠りにつくように静かに息を引き取った。最期に孤独から救い上げてくれた英霊への感謝の意を口にしながら。

——そして、それでもマシユは、最期まで笑みを無くすことはなかった。

オフェリアアさんを見送った後。消沈しきったシャドウ・ボーダーの面々だったが、オレ達にはやらねばならないことがあった。

——『空想樹の切除。及び異聞帯の消滅』

つまり、女神スカデイと衝突。思えばこれはこの異聞帯のたどり着いた時から決まっていたことなのだ。ここは女神の世界、『神々の終焉』より唯一生き残った存在が作った最後の楽園。決して時代が進むこともなく、決して滅びることもない。生まれた生命は女神と御使いによって統治され、変化も何も生まれない日々が過ぎていく。

この世界に生きる生命にとつて何も間違つてはいない、間違つてなどいないのだ。ただ、汎人類史とは違い、行き止まりに到達してしまった世界。女神スカサハスカディは先が無くなってしまった世界を必死に守ろうとしただけ。それだけの話だ。

女神と、彼女に最後まで付き従つた戦乙女を激闘の末打ち倒したオレ達は空想樹を切除。崩壊を始める世界を見てズキズキと痛む胸を抑えながらシャドウ・ボーダーへと帰還し、異聞帯を去つた。

——そう、この世界で僅かながらも共に過ごした住人の少女——ゲルダに別れも告げずに。

もし最後に彼女に会っていたら、オレは何を告げられただろう。関わつた時間は決して長くはなかつたけれど、あの子なら自身の常識から外れていることでも必死に理解しようとしたんじゃないだろうか。それが例え、どんなに残酷な事でも。

だけど、じゃあ少女に何を言えというんだ。これから君達の世界は崩壊する、君達の存在も何もかもが無くなる。そう告げればよかつたというのだろうか。それとも明日も遊ぼうとまやかしの希望を与え、今日はゆつくりお休みと静かに最期を迎えさせればよかつたのだろうか。

答えは今だ出ない。出るわけもない。たがそれでも、オレはそこで生きる人々との関わりをやめたくないと思う。ホームズも言っていたが、次の異聞帯の住人達もオレ達に

対して友好的とは限らない。石を投げられたり命を狙われたりすることもあるかもしれない。そのせいでクリプターに敗北してしまうかもしれない。

——だけど。そうだとしても、オレは止めるわけにはいかないんだ。際限なく胸に痛みを感じようと、全て壊す者として背負うべきものだから。それが異聞帯を破壊し汎人類史を救うと決めた誓いだから。

「……思ったよりも時間が経ってたな」

パチリと閉じていた目を開く。マイルームに備えられえた時計を確認してみるとダ・ヴィンチちゃんとは別れてから1時間ほど経過してた。そこまで長い間考えに更けていたわけではないと思ったのだが、どうやらあの世界の光景はよほどオレに鮮烈に残っているらしい。

「マシユの所、行ってみるか……」

正直、掛ける言葉は見つかっていない。だけど、そろそろ一度は行くべきだろう。この旅はいつ何が起こるか分からない。話せるときに話しておかなければ。

そう腹を括ったオレはマイルームを後にしてマシユの部屋へと向かう。コンコンコンとノックをすると、「はい、どなたですか?」といつも通りの声色が聞こえてきた。

「マシユ、オレだ。今ちよつといいか?」

「先輩? はい、大丈夫です。今開けますね」

ルームのロックを解除したのだろう。開閉用のセンサーがオレをとらえ、最近慣れしてきた開閉音と共に扉が開かれる。その先には眼鏡を身に着け、カルデアスタッフ用のパーカーを羽織ったいつものマシユがいた。

「突然悪いな。休んでいただろ?」

「いえ。私も十分休ませていただきました」

あつ、今お飲み物淹れますね、と部屋の隅に備えられた紅茶セットの下へ行くマシユ。その背中を眺めながらオレは部屋の中央に置かれたテーブルの席に着く。少し待っているると紅茶をいれたマシユがカップを置き、オレと対面するように席に着いた。

「どうぞ。エミヤさんの様に上手には淹れられないのですが」

「いや、そんなことないよ。すごく美味しい」

嘘ではない。オレには紅茶の種類などよく分からないが、鼻腔をくすぐる茶葉の匂いや深くほんのりと甘い味いは心を落ち着かせてくれる。

「良かったです。それでどうされたんですか？先輩が私の部屋を訪ねてくるなど珍しいので少し驚いてしまいました」

「まあ、いつもはマシユがオレの部屋にるのが普通だしな」

「はい」

「……………」

「……………」

「……………」

気まずい沈黙の中でカップのカチャという音だけが響く。マシユも何となくオレがここに来た理由を察しているのかもしれない。カップ内で揺らめく紅茶の波紋に視線を落としていたオレだったが、やがて重たい口を開いた。

「——ごめんな、マシユ」

「先輩？」

「オレさ、マシユに何を言つてあげればいいのか分からないんだ。何か君に言わないといけないって分かっているのにどうしても言葉が出てこないんだ。ごめん、本当にごめん……………！。ロシアの後にオレの背負うものを一緒に背負ってくれるって言ってくれたの

に。なのに、オレは……!」

ダ・ヴィンチちゃんも傍に居てあげればそれでいいと言ってくれた。だけど、駄目なんだ。オレはマシユにそれ以上のことをもらって来たんだ。傍に居るだけでは伝えきれないんだ。

情けない。本当に情けない。オレは誰かに助けられてばかりだ。誰かが、ましては大切な女の子が大事な人を失った直後だというのに何もしてやれない。それが、悔しくて悔しくて、狂いそうなほど辛い。

だけど、泣きそうな顔をしているだろうオレを見て、マシユはふつと笑う。

「——先輩は、やっぱり先輩です。私の敬愛する先輩です」

「えっ……」

「これがシグルドさんやブリュンヒルデさんが言っていた『優しさ』という強さなのですね」

「違う、オレは……!」

「私のことを心配して気遣ってくれているんですね。オフエアアさんのことで私を傷つけてしまうんじゃないかって。だから、そんなに苦しんで悩んでくださっているんですね」

「ありがとうございます。すごく、嬉しいですと笑うマシユ。掛け値なしの本心からの

笑顔だった。

「オフェリアさんのこと、正直すごく考えてしまいます。辛くないのかと問われれば……辛いです。もう、大切な人達を失いたくないと思つていましたから」

きつと、マシユは対峙している時でさえオフェリアさんのことを心の底から敵とは思えなかつたのだろう。味方になつてくれた時は心の底から嬉しかつたのだろう。かつてのカルデアの日々が、その気持ちを形作つていたので。

「なあ、マシユ。1つ聞いてもいいか？」

「はい、どうぞ」

「どうして、あの時笑つたんだ……？」

オフェリアさんの最期。彼女にずっと微笑みかけていたマシユの笑みを思い浮かべる。てつきり泣いてしまうと思つていたあの瞬間のことがオレには分からなかつた。

「どうして、でしょうか」

「えっ？」

「私にも正直分らないんです。悲しかつたはずなのに涙は出ませんでした。オフェリアさんの言葉を聞いていたら自然と、という感覚です」

「オフェリアさんの言葉……」

『あの、雪と氷に閉ざされたカルデアで、ずっと窓を見ていた、もうひとりのわたし。……毎日怯えて暮らしていた私なんかと一緒にしては、迷惑でしょうけど……ずっと、アナタと——』

『……アナタは、進んで。踏み出して。マシユ・キリエライト』

『ええ。アナタたちなら、やれるかもしれない。私としては……少し、複雑、だけど……。ああ、そうだ——あの英霊……に……もしも、また、出会えたら……彼、私を、覚えていないでしょうけど……。ありがとう、って。結婚は、お断りする、けど……。アナタの虹、綺麗、だった、って、伝え——』

「正直、先輩に出会い人理修復の旅が始まる前までの私は機械染みた人間だったと思います。他のマスターの方々は任務のこと以外ほとんど会話はしませんでしたし、必要以上の接触もありませんでした」

「……………」

「そんな日々の中でも、オフエリアさんは私に特に良くしてくれました。お食事に誘ってくれたり何気ない日常のことを話したり。——同性の『友達』というのは、きつとこういう関係を言うんだと」

「『友達』……」

「はい、私はあの最期の瞬間にようやく気づきました。オフエリアさんと私は互いに『友達』だったのだと。その友達が、進んで、踏み出してと言ってくれたんです」

マシユはあの時と同じように笑みを浮かべた。暖かくて美しい綺麗な表情。悲しみに染まっっていないオレが大好きな笑顔。

「だから、私は笑ったのかもしれませんが。あの言葉に応えるのは涙ではないと。前に進まないといけないとそう思ったのかもしれませんが」

「そう、か」

なんて強い人だとオレは思った。あんなことがあつた直後だというのに、それでもマシユは前に進むことを止めないといった。これから彼女が対するのは元カルデアの人々だ。ほとんど奪い、奪われ、殺し合いも同然の戦いだ。それでもマシユは真つすぐだった。

「——でも、きつと私だけではどこかで挫折してしまうかもしれません。だから先輩……」

「……なんだ？」

「もし、これから先異聞帯を巡る旅で私が立ち止まるようなことがありましたら、この背中を押してくれませんか？」

「背中を、押す……」

「はい、特別な言葉が欲しいとかそういうわけではないんです。私は先輩がただ傍にいてくれれば。貴方が居てくれれば、私はどんな相手でも、何度挫けても立ち上がれます」
その言葉にハツとなる。オレはずっとマシユに伝えるべき言葉を探していた。音にして彼女に伝えなければ何も意味がないと、そう考えていた。でも、違ったんだ。この少女が求めていたのは言葉なんかじゃなくてもっと簡単に大切なことだったんだ。

もちろん、思っているだけでじゃ伝わらないことはたくさんある。でも、それが全てではない。ただそこにいるだけで満たされるものだってある。マシユが求めているのはそういうことだ。たったそれだけのことだったんだ。

「——ごめんな、マシユ。オレ、難しく考え過ぎてたみたいだ」

「いいんです。先程もお伝えしましたが、それも先輩の『優しさ』という強さですから」
『優しさ』という強さ、か。それならマシユの方が強いよ」

「いいえ、先輩の方が優しいです」

「いいや。絶対マシユの方が優しい」

「先輩の方が優しいです！」

「マシユの方が優しい！」

「先輩！」

「マシユ！」

おかしい。さつきまでものすごく真剣な話をしていたはずなのにいつの間にかどつちが優しいかの応酬になってしまっている。だが、なんだかここは譲れないような気がしてつい熱が入ってしまう。

「プツ……！」

「ふふっ……！」

もつともこんな単純な言い争いが長続きするなんてこともなく、オレ達はやがて互いに噴き出し笑いあつた。まるで子供みたいに何を言い争っていたんだとおかしくて、笑いを収めるのに少し時間がかかってしまった。

「はあく……。まったくもう、何やってんだらうな」

「ふふっ。本当ですね」

喧嘩両成敗。ここ数日鬱屈するような事ばかり考えていたから、こうして笑えたのはとても気持ちすが晴れ晴れとした。

「なあ、マシユ」

「はい、何ですか先輩」

「ごめんな。逆に気を使わせちゃって」

「いいえ。全然大丈夫です。なんてったって、私は先輩のサーヴァントですから！」

待ち受ける困難はもつともつと過酷になっていくだろう。今までの様にクリプターとなつたマスター達を敵として見れなくなるかもしれない。異聞帯の人々に虐げられるかもしれない。

——— だけど、進もう。オレはロシアで出会つた友の言葉を。マシユはカルデアで出会つた友の言葉を。そして2人で誓いあつた誓いを胸に。オレ達の世界を取り戻すまで、進み続けよう。

く憩いの時間く

「マシユ、もし良かったらなんだけどさ。Aチームの人達のこと、もつと教えてくれないか?」

「皆さんのこと、ですか?」

「ああ。何ていうかオレは彼ら彼女らのことをあんまりよく知らないからさ。前に少しだけ教えてもらったけど詳しくは聞いてなかったし」

「……先程も言いましたが、私は極力交流を避けていたのであまり話せることはありませんよ?」

「いいんだ、それでも。オレは少しでも知らなくちゃいけない、これから戦う人達のこと。きつとそれも汎人類史を見限った彼らと戦う上で必要なことだと思う」

「先輩……」

「……助けられる人を喪うって、やっぱり辛いからさ」

「——分かりました。私の分かることは全てお話しします。ですが、その前に紅茶のおかわりはいかがですか?」

「ああ、いただきますよ。マシユの紅茶は美味しいから」

女神ピックアップと福袋で盛り上がったんだけど、思い通りにいかないからこの縁だよね？

季節は廻り、オレ達の旅が始まってそれなりの時間が流れた。いくつもの特異点を巡り、数多の英霊達と出会い、いくつもの強敵と相對してきた。春が過ぎ、夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が来る。そして、再び春が来る。時の理にして絶対不変の摂理。いや、四季折々なんて日本ぐらいのもんなんだけど。

——まあ、何が言いたいのかというのだ。

「3周年記念ガチャ及び福袋の時間だよオオオオオオオオオ!!!」

「わ、わーい」

パチパチパチとものすごく気のない拍手音がどこともつかない空間に溶けていく。おいおいマシユ！もう少し乗り気になりなさい！せつかく記念すべき3周年なんだぜ！?

「いえ、あの。前回のシリアスはどこに行つたのかとか、これはどういう時間軸なのかとか、ここは一体どこなのかとか色々ツツコミたいところが多すぎるんですが」

「あれだよ、ここは隔離された時間軸だから。無理矢理ねじ込まれた時間だから。あんまり深く考えないで、いいね？」

「アツハイ」

無理矢理マシユを納得させたオレは盾が置かれた召喚サークルに向き直る。さあさあ今回の記念ガチャ。目玉は2つあり、1つはもちろん女神スカサハスカディだ。聞くところによると、女神の名に恥じないぶつ壊れ性能を持っているらしい。キャスタークラスの星5がないうちには是非とも呼びたい人物だ。

そしてもう1つは福袋ガチャ。今までに何度か挑戦したが、今回はクラスを限定して挑戦できる。そしてオレが引くのはもちろんエクストラクラス。狙うはアルターエゴ、『メルトリリス』。いい加減来てくれないとそろそろ君でシリアスできなくなってくるからはよ来て!!

どうでもいいけど、福袋ガチャ引くためにダ・ヴィンチちゃんから聖晶石を買う時、彼女の見た目も合い余って犯罪臭がしたんだけど。すっごくいけないことしてる気持ちになったんだけど。

「と、とにかく！今回は潤沢な召喚素材を用意した！これで召喚できなかつたらマジ泣くからな！」

「いえ、非常にみつともないのでやめてくださいね。他のスタッフの方々に示しがないので」

「お、おう……。この毒舌感久しぶりだぜえ……。！」

と、とにかく！今回用意した聖晶石は福袋分の30個とスカディ用に100連分および呼符10枚！これだけあれば引けるだろ！（フラグ

オレ達にとつての初星5キヤスター。このチャンスを逃してなるものかあああ!!

「ああアアあんまりだアアア!! おおおおおれエエエエのオオオオいしイイイイ
がアアアアア~~~~!!」

「現在50連目が終了。ですが、星4以上のサーヴァント0とは。久しぶりに先輩らし
さが垣間見えて私は嬉しく思います」

「慰めてくれよ!?! なんで追撃かますのこの子はっ!?!」

「おいおい既に突っ込んだ石の数150個やぞ!?! そんなに簡単にスカデイさん来ると
は思ってたなかったけど流星にこれおかしくない? 星5どころか星4すら来ないってお
かしくない!?!」

しかも――

「……なあ、マシユ。1つ聞いても良いかな?」

「はい、何でしょうか」

「キヤスタークラスのサーヴァント、何人来たっけ……?」

「……0人、ですね」

これである。50連してそもそもキヤスタークラスのサーヴァントが来ない。あの

魔術師の刻印が記されたクラスカードがそもそも出ない。これってスカディピックアップだよな? 星3のキャスターすら来ないってオレ嫌われ過ぎじゃない? やだ、シヨック。

「ええええ……このあと福袋ガチャもあるんだぞ。幸先真つ暗すぎやしませんかね……」

「これは今までの中でも上位レベルの爆死結果ですね。先輩、大丈夫ですか?」

「一応。でも早くも心が絶対零度だよ……」

「意味分らないですね」

だから慰めてくれよ……。ええい、畜生! このまま爆死に負けるか! 石はまだあるし呼符もまだ残ってる! そう簡単に諦めて堪るかっつてんだ!!

「うおおおおお! 唸れ! オレのレインボーストーン!!」

ぼーいと次の石を放り込む。グルグルといつも光の球が回転を始めるのを眺めていると、遂に待ち焦がれていた反応があった。

「あつ! 先輩ようやく来ましたよ金色反応! 高レベルサーヴァント召喚の兆しです!」

「おおおつしやあああ! 来た来た来たア!!」

ワクワクしながら現れるクラスカードの確認を行う。金色のカードに刻まれるのは魔術師の刻印——ではなく、暗殺者の刻印だった。あれれおつかしいぞ?!

「これはアサシンクラスのサーヴァントですね」

「う、うん。ま、まままっ!! 来てくれただけでもありがたいから! さあ、いったい誰かな?」

パアツと光を放つクラスカード。その中から現れたのは小柄な体躯の人物だった。

黒い長い髪を翻し少女は現れた。暗殺者らしい軽装、というか身体中に黒い帯を巻いて網状の何かで覆っている。ほとんど裸同然といえるその格好でも、携えた苦無や腰に差された忍者刀から少女がくノ一ということが分かる。

「甲賀上忍、真名を望月千代女。クラスはアサシン。どうぞ拙者に、主命をお与えください」

禍々しい悪意が充満していた世界、下総国でオレ達の前にアサシン・パライソとして立ちはだかった存在。大蛇の呪いの力を振るう忍であり、巫女でもある望月千代女がオレの前でかしづいた。あの時とは違う、敵意ではなく心からの忠誠を表現するその態度には忍の誇りを感じる。

「——マシユ、ちよつと叫んでもいいかな?」

「は、はい?いきなりどうしたんですか?」

「いやこれは言っておかなければいけないとオレの中の何かが訴えるんだ」

「そんなに大事な事なんですか?!?せ、先輩がそこまで言うなら……」

「ありがとう」

マシユの承諾を得たオレはすううと大きく深呼吸をする。望月千代女、彼女を見た瞬間これだけは言っておかなければというある種の使命感のようなものが沸き上がった。さあ、もしよろしければ皆さんもご一緒に!!

「YO!SAY夏が胸を刺激す r ぶふっ!!」

「ストツプっ!!ストツプです先輩!それは色々とマズいです!!」

全力でマシユに口を塞がれました。くうっ!ほんのちよつとしか歌えなかった!!
おのれマシユめ!!

「あ、あのお館様?突然歌われていかなさったのですか?」

「駄目です!望月さん!今の歌に触れてはいけません!」

「なんでやつ!西〇アニキ最高やろっ!!」

「少し黙ってください!今ここでTでMなRevolutionの話は駄目です!!」

ものすごく怖い顔で止めてくるマシユに思わずヒエッ!となってしまう。くっ、仕方がない。ここは引いてやろうではないか。だが、1つだけ分かってほしい。ちーちや

ん見たらこれはもう当然の反応だ(断言)

「ごめんね、ちーちゃん。つい湧き上がる激情を抑えきれなくて」

「いえ、私は構わないの——待ってください、お館様。今何と？」

「えっ？湧き上がる激情を抑えきれなくて？」

「いえ、その前です」

「……ちーちゃん？」

「それです！ち、ちーちゃんとはどういうことでございますか？」

聞きなれない名を聞いたせいとか、ほんの少し頬を赤らめて問いかけてくるちーちゃん。どういふこともそのまんまの印象なんだけど。

彼女が持つてる属性的な？だつてくノ一で巫女に加えてこの少女っぽい見た目に反して未亡人だよ？玉藻さんやエリちゃんも真つ青な属性盛り盛りだよ？

「ちーちゃんはちーちゃんだよ。千代女だからちーちゃん」

「そ、そのような可愛らしい名など私には似合いません！普通に千代女でお願いします！」

「えー、ちーちゃんが良いよ。ねえマシユ」

「そこで私に振られても困つてしまうんですが……。しかし、親しみを込めるという意味では大変可愛らしいと思いますよ？」

「そ、そんな……」

顔だけではなく身体全身を真っ赤にするちーちゃん。こんな格好をしているが意外と恥ずかしがり屋さんなのかもしれない。最早決定事項なちーちゃん名に顔を押しえて悶える姿はメチャかわでした。眼福眼福。

さて、ちーちゃんを見送ったオレ達は早速次の召喚へとチャレンジする。ようやく金色が来たし、このままいいペースでいってほしいものだ。

と、思っていたら――

「おおっ！また金色回転来たぞ！」

「ようやく調子が上がってきた、という感じでしょうか。この調子でどんどん行ってみましょう先輩！」

グルグルと回転する白色の光が鮮やかな金色へと変化する。さあ、今度こそスカディさんかな？

「えっと、これは――どうやらまたアサシンクラスのようにですね」

「あ、あれ？キヤスターは？」

現れたクラスカードは先程見たものと全く同じもので暗殺者の刻印が刻まれたものだった。ちなみに現段階でもキヤスタークラスのサーヴァントは0である。やっぱりおかしい。

中国に伝わる衣装を身に纏いながら衣擦れの音と共に彼女は現れた。長い髪をツイーンテールの様にまとめ、勝ち気そうな眼は爛々と輝きを放っている。先程のちーちゃんよりも更に小柄な体躯を持ち、『にぱー』という擬音が付きそうな笑みを浮かべる彼女が中国史における唯一の女性皇帝とは誰が想像できようか。

「妾の名は武則天。妾を使役しようとするなど……不遜過ぎて逆に興味が湧いてきたぞ？」

デイスガイー—ゲフンゲフン。不夜城のアサシンとして異種特異点アガルタでオレ達と敵対した拷問女帝——武則天。新たな拷問系サーヴァントの登場である。

「今度はふーやーちゃんのご登場とは……。あれ？これってロリピックアップだったっけ？」

「そんな黒髭さんが歓喜しそうなピックアップはありません」

そうかな？そのうちありそうな気がする（未来視

「ふーむふむふむ。なんじゃ、妾を召喚したマスターがどれほどの賢人かと思いきやただの凡夫か。この聖神皇帝を使役できるとは到底思えんが」

「……なあ、マシユ。オレってそんなに一般人臭漂わせてる？結構な確率で召喚した時に凡人とか凡夫とかパンピーとか言われるんだけど」

「そ、そんなことありませんよ！私は今まで先輩がどれ程の偉業を達してきたのか知ってます！ですから先輩は素晴らしいマスターです！私の中で世界一です！」

「お、おう。ありがと」

まさかそこまで必死に言われるとは思わなかったのどつい照れてしまう。まあでも、ぶつちやけ魔力だつてほとんど持つてないし、扱いてもカドックに言われたようにまだまだ未熟だしな。英霊達の第一印象がパツとしないのも当然かもしれない。

「むう。そなたら！妾を置き去りにして勝手に盛り上がるでないぞ！盛り上がるなら妾を中心に盛り上がらんか！」

「こ、これは申し訳ありませんでした武則天様。先輩、早く契約の話を」

「おつといかんいかん。ごめんな、ふーやーちゃん。飴あげるから契約して？」

「こいつ不敬すぎてビックリするっ!?!たかが凡夫が妾を馬鹿にするかっ!?!拷問してグツチャグチャにするぞ！」

「あれ？いらぬ？甘くてすっごく美味しんだけどなー」

「……いらんとは言っておらんじゃ。ほれ、早急に寄越すがいい」
「はい、どうぞ」

持つててよかったエミヤ印の飴ちゃん。ブスツと不機嫌そうにしていた武則天だったが口に飴を含んだ瞬間。アアツと表情が晴れ渡り、ニコニコしながら中でコロコロしながら飴を堪能していた。うん、特異点の時同様飴好きでよかった。

この武則天はどうやら特異点での記憶が無いようだ。7つの特異点とは別の異種特異点で出会った英霊達はその時のことを覚えている者と覚えていない者がいる。ふーやーちゃんはどうかやら後者だったらしい。

「ということでお飴食べたし契約完了ってことでいいかなふーやーちゃん」

「……いいじゃろう。ただし！これからも定期的に妾に捧げ物として飴を寄越すことが条件じゃー！」

「あの、武則天様。先輩からの呼び方はいいんですか？」

「それは別に良い！なんか可愛いし！」

いいんかい。カーミラさんグツジョブ。

「正直そこまで物資に余裕がないから保証ができないんだけど、なるべく頑張るよ」

「うむうむ。じゃが、あまりにも期間が空き過ぎたらこちらから酷使を送るからな！命の保証はせんでー！」

あの拷問に特化した奴ら、アガルタのせいでトラウマなんだけど。あれ？割とトンデモない条件でOK出しちゃった？皇帝様、恐ろしい子……！

ふーやーちゃんとの契約が完了し、まだまだ残っている聖晶石で追加の召喚を行う。が、さつきまで良い流れで来ていたのに、ここでまたパツタリ途絶えてしまった。ちよつとペースを変えてみようと呼符を10枚回してみたが、これも見事に爆死。あつ、ようやくキャスタークラスのサーヴァント来たよ！既に宝具レベルMAXジエロニモさんだけどな！アサシンの星3はボロボロ出まくってるのにどういふことだつてばよ……。

「残り10連分だけですか……」

「呼符合わせて100連やったのにキャスター1人つて、もはやピックアップ間違つてんじやねえかってレベルなんだけど。ねえ、マシユ。オレ何かピックアップで間違えたかな？」

「ピックアップで間違いとかさういふのはよく分かりませんが、これはある意味快挙ですな」

「快挙まで言うか」

うへーと項垂れつつ最後の石を投げ込む。なんか、ここまで酷い状況だともう誰でもいい気がしてきたな。とりあえず一旦アサシン枠は保留してもらつてそれ以外の星4以上来てくれ。もうそれ以上は望まないから（諦観

「あつ！先輩先輩！来ましたよ！金色回転です！」

「おしおしおし。ここまではいいんだ、ここまでは。あとはクラスだ。アサシン以外アサシン以外アサシン以外アサシン以外……!!」

が、呪詛の様な願い虚しく刻まれた刻印は暗殺者。なんでや。

「……いや、うん。もうここまで来たら何となく分かつてたけどね。寧ろここまで来て他のクラスが来たらビックリなレベル。七騎＋αクラス分あるうが関係ねえから」

「凄くピンポイントですね……。今日の先輩は異常なまでにアサシンに好かれてるみたいです」

「アサシンに好かれるなんて物騒過ぎやしませんかねえ。光栄ではあるけども」

まあ、所詮オレの幸運ガチャ運ランクなんてこんなもんだろ。星5キャスターは魔境だしね。そう簡単に来ないもんね。マージンだつて掠りもしなかったもんね（古傷

そんなこんなで一際輝く召喚光。白い光に染め上げられた空間の奥に黒い影がスツと現れた。

気配遮断を発動している『彼』の歩みには物音一つしない。くすんだ赤いフードを目深に被り口元は暗闇に紛れられるように黒い包帯で覆っている。腰元にはナイフを携えているが、恐らく彼の武器はそれだけではないだろう。本当に生きているのかどうかすら怪しいほど生気を感じさせず、もし仮に夜に彼に出会おうものならその存在すら気づかないだろう。

「また汚れ仕事か……まあいい。いつものことさ」

「貴方は確か……」

「冠位時間神殿でお会いしたサーヴァント、ですよね」

「——そうか、僕はアンタに召喚されたのか。どうやら人理焼却を防いでも僕のやるべきことは残っているらしい」

いや、生気を感じないのは存在だけではなかった。彼の発する言葉一つ一つにも何一つ気持ちに乗っていない。機械と会話している気分だった。

「あの時はありがとうございました」

「僕は僕の抑止力としての使命を果たしたただだ。感謝など無用でしかないし、聞きたくもない」

「そ、そうですか。すみません。あの……とところであなたはなんと呼んだらいいですかね?」

「呼び方なんて好きすればいい。アサシンでも抑止でも。勝手にしてくれ」

「アサシンも抑止も被ってしまふ人がいるんで……。ちなみなんですけど、本名とか聞いても良いですか？」

「……さあな、そんなものは忘れてしまったよ」

何か仕事があれば呼べと言い残し彼は消えてしまった。気配遮断スキルを発動したのかももうどこに行ってしまったのか分からず、残されたオレとマシユはしばらくの間無言だった。

「——不思議な人でしたね」

「ああ。でも、よく分からないけど怖くはなかったんだよなあ。抑止力って言ったし、もしかしたらエミヤさんか、もしくは沖田オルタの関係者かもしれないねえな」

世界と契約し、人類の護り手となった存在『抑止力』。エミヤさんに少しかだけ話を聞いたことがあるが、彼自身あまりそのことを語りたがらなかったたので深くは知らない。

「あんまり詮索するのも失礼だとは思うけど、後で少しだけエミヤさんに聞いてみようか。沖田オルタはうちにはいないし」

「そう、ですね」

よし、じゃあ切り替えて次行ってみよう。これで100連+10枚呼符は終了だ。結果的にスカディは来てくれなかったし、そもそもキャスターすら碌に出なかったけど結

果オーライ! あつ、最後の10連でもキヤスターでも来たよ! 蒸気王宝貝レベルMAXだったけどな!

「——では、ついにやるんですね」

「ああ、本日のメインイベント。福袋召喚だ」

さつきも言ったが狙うは『メルトリリス』一択。エクストラクラスに限定された今回の召喚はビッグチャンスだし、この機会を逃すわけにはいかない。ただでさえ彼女は召喚しづらいしな。

先程までとは桁違いの丁寧さでダ・ヴィンチちゃんから買い取った召喚石をサークルへと入れていく。すぐさまバチバチと煌き始めたそれは、やがてサーヴァント召喚の兆候である三本ラインを刻む。金色や虹色回転ではなかったので星3のサーヴァント召喚ということになるが……はて? エクストラクラスで星3って確か……。あつ(察し)

「「「私は、死だ。私は、神に愛されしものを殺さねばならぬ。……我が名はサリエリ。いいや。違う。私は、私は誰なのだ……」」」」

赤と黒を基調とした某仮面なライダーの様な出で立ちで彼は現れた。どこかの音楽家の様な仮面を被り、その手には細剣を手に持っている。神に愛された音楽家——ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトを毒殺したと人々の間で囁かれ、無辜の怪物となつてしまったアマデウス絶対殺すマン。

真名『アントニオ・サリエリ』。かつて神聖ローマ・オーストリア帝国の宮廷楽長というヨーロッパ音楽界のトップに居た人物である。ロストベルトでは最終的に味方になり共に戦つてくれた偉大な音楽家。

そんな人物が召喚されたのだ——一気に5人も。いや、すまん。何かシリアスな感じなんだけどこれだけ言わせてほしい。

「多いわっ!!いきなり宝具レベルMAXできるじゃねえか!!」

「なんとというアマデウス戦線。これにはアマデウスさんもドン引きだと思います先輩！」

オレもそう思うよ!

「「どこだアマデウスウウ!!殺す殺す殺すう!!」「」」

「待つて落ち着いてくださいサリエリさん!言つてることペンテシレイアさんと似てるのにギャグにしか聞こえませんか!5人でハモつて殺意振りまいてもシユールなだけですから!!」

「なんとという見事なコーラス。これが音楽史に名を残す音楽家なんですわね！」

「悠長かッ!？」

必死になってビークール、ビークールとサリエリさんを宥める。メルトを召喚するために意気込んでいたのに何でオレは暴走した音楽家を宥めてるんでしょうかねえ……

!!

「いい加減落ち着いてくださいサリエリさん！マリーさん呼びますよ！」

「………」

「効き目すげえ！流石に予想外だわ!!」

「マリーさんの兄、ヨーゼフ2世はサリエリさんを宮廷楽長に任命した方ですからね。

恩義を感じると以前ロストベルトで聞いていましたが……」

とりあえず落ち着いてくれたサリエリさん。このままだと話しづらいしアマデウスがマジで蹂躪されかねないので人数を減らす意味でも宝具レベルを強化して、その場を後にしてもらった。アマデウスは霊基で待機状態だし不意にかち合ったりすることはないだろう、たぶん。

「あつ、先輩。虹色回転来ましたよ！」

「盛り上がりも何もねえなおい」

荒れ狂う音楽家を抑えるのに辟易していたオレはマシユの指摘により召喚サークル

へと目を向ける。なるほど、確かにここでは召喚の光が七色に輝いていた。つまり星5サーヴァント召喚の兆候である。高魔力の紫電を発しながら現れるクラスカードに刻まれた刻印は――

「2人のピエロ……つまりこれは……!!」

「うおおおおおつしやああああああ!! ついにキタアアア!! この時をどれ程待ったことか!! 待ちに待って待ちわびたぞあの白鳥めええ!! ツンデレここに極まりかよおお!!」

刻まれた刻印は『アルターエゴ』。そう、あのメルトリリスと同じクラスのカードだ。そしてこれは星5確定召喚、つまりはつまりそう言うことで!!!

「ううっ……! 長かった……本当に長かった……!!」

「先輩が本気で泣いていらつしやいます……。むう、なんだかすごく複雑な気持ちです」
ごめんなマシユ! テンション上がり過ぎてもうよく分かんねえや! でも、今までの召喚もこの結果の布石だったんだな! やっぱりオレの幸運も上がってきてるってことだな!

――そうやって、オレが歓喜に震えている時だった。

——
ゾクリと。身の毛もよだつ妖艶な気配が背中を撫でた。

「——アルターエゴ、殺生院キアラ。救いを求める声を聞いて参上いたしました。でも、ふふ……。私のような女を呼ぶだなんて、なんとという方なのでしょう。私は生きとし生けるもの、有情無情の区別なく味わい尽くす魔性菩薩。これはもう、地獄の底までお付き合っていたりいたくありませんね？」

現れたのは白鳥の主役^{プリマ}ではなく、尼の風貌をした一人の美女。男の心を驚掴みにする美貌に所作。動作の1つ1つに毒の様な色香を漂わせ、あらゆる生命への欲を許容する女性。彼女の言葉は精神を汚染する呪いの如く空气中を漂い、標的と見なした相手を犯し尽くす。

——かつて海洋油田基地セラフィックスにて行われた死闘。誰にも知られず、誰にも語られることのない虚数の世界にて魔神柱に支配され、そしてその魔神柱すら手中で弄んだ狂人。己の快楽のために人類を抹殺しようとした人類悪。『ビーストⅢ』の名を冠する、真正正銘の獣^{ラスボス}。

「ということで、マスター。改めてよろしくお願ひしますね」

「召喚！ ハンス・クリスチャン・アンデルセン!!」

最早反射だった。以前キアラのことをBBから聞いていたオレは速攻で童話作家を

召喚した。いや、これマジで無理。本当に無理。つか、寄りにもよって三分の一の確率を外したってことかよ！地雷どころか核爆弾すら生易しい超危険物じゃねえか!!

「いきなり召喚とはどういうつもりだ貴様。俺は忙しい——おい、今すぐ仕事場に戻せ。今ならいつもの数百倍のスピードで仕事が進む気がする。悪いことは言わんからすぐに俺を消せ。寧ろこの場で殺せ」

「絶対逃がすか!!知ってんだからなお前がこのやべえ奴とかなりの関係だったこと！全部聞いてんだからな！」

「馬鹿か！まさかだから俺ならこいつをどうかできるとでも妄想しているのか！頭が不安ならあの殺戮看護婦にでも見てもらったらどうだ能無しが!!ただの三流サーヴァントがどうこうできるわけがないだろう!!」

「どっちにしても死じゃねえか！いいからおめえが手綱を握るんだよ！オレは逃げる!!」

「逃がすかア!!」

「ぶへっ!?おいしい!!なにマスターに光弾撃ってんだこの不良作家っ!!」

「限界まで抑えてやったんだから感謝したらどうだ、醜いアヒルにすら劣るチキンハート!!」

「そのアヒルのクライマックスである白鳥が来なかったからこんなことになってんです

けどねえ!」

売り言葉に買い言葉。お互いに頬を引つ張りながら我先にと逃げようとするオレ達。いや、ホント醜いな。

「あらあら。殿方達は勝手に盛り上がってしまったているようですし、私達も勝手に盛り上がりますかお嬢さん」

「えっ? いや、あの私には何が何だか分からないんですが……。というか盛り上がるとはどういうことでしょうか?」

「おいこら全宇宙エロスの化身がああ!! マシユに気安く話しかけてんじやねえぞゴラアア!! 穢れたらどうしてくれんだああ!!! 自害させんぞ!!」

「あら、自傷プレイだなんてマスターもなかなかコアな趣味をお持ちなんですな。いえいえ、私は菩薩。全てを受け入れる者。それがマスターのお望みとなれば快く受け入れてみましょう。そして全てを我が快樂へと」

「もう嫌だ、この快樂天……。アンデルセン、本当にどうにかして……」
「断固拒否する!」

「あ、あの。結局この方はどこのどなたなんでしょうか……。? 私だけ見事に置き去りにされてしまってるんですが」

ひたすらにカオス。2人はこの状況に嘆き悲しみ己が不幸を呪い、1人は現状を全く

把握できず右往左往。そして最後の1人はこんな状況すら愉しんでいるように悦びに身をくねらせている。

——はあ、くっそうもう自棄だ。召喚してしまったのはオレだし、今はあの時と違って令呪もある。ある程度彼女の行動を縛ることは可能だろうし、いざという時はカルデアの全サーヴァントで対応すれば何とかなるだろう。いや、何とかしたい（切望

ぶつちやけ、かつてピーストにまでなった存在が身内に居るとかブラックジョークにすらならないんだけど彼女の実力はそりやもう桁外れだ。戦力として手綱を握ることができれば異聞帯側にとつてもとんでもないカウンターになり得る。ようは全てオレ次第……。

「もうどうとでもなーれ」

「ああーよく分かりませんが先輩が最高にやる気のない顔に!」

「まあ、気持ちは分からんでもない。今だけは同情してやるマスター」

「うふふふ。私はこれからが非常に愉しみですわマスター。貴方が私に溺れるその日まで、付き従うと誓いましょう」

……できればそんな日が来ないことを祈る。

— i f 快樂の海を渡航した者達（もし記憶を保持していたら）—

「えっ!?あのエロ尼召喚しちまったんですかい……?おいおい、マスター。おたく世界を滅ぼす気ですか?」

「うっひやー!マスター、いくらなんでもそりやないっしょ。流石のアタシもテンサゲっていうか?マジ無理」

「うむうむ、マスター。流石にキャットでも拾い食いするものは選ぶ。せいぜいお腹を壊さないように気を付けるのだな」

「おい、アンタがどんな英霊を呼ぼうと俺には関係ないが人選は慎重にするべきだろう。仕事に邪魔が入ったら非効率だ。いざという時はあの女、俺が殺すが文句はないな?」

「ええっ！マスターさん、メルトを召喚してくれるって言ってたじゃないですか！私
せっかく感動の再会の時にこの手で潰——じゃなかった抱きしめる練習してたのに！」
「あの、マスターさん。流石にこれにはBBちゃんもドン引きなんですけど。寄りにも
よってキアラさんとか殺されたいんですか？寧ろ殺されたいんですか？悪いことは言
いませんから、キアラさんと会う時は童話作家さんと一緒の方がいいですよ。ナノレベ
ルで生存率がりますから」

「——みんな辛辣ツ!!!」

南国の島で水着を堪能する予定だったんだけど、いつの間にか同人誌で世界を救うことになってるとか意味不明だよな？

心地の良い波の音がする。押し返す水の音は今だ微睡みに抱かれるオレにとってこれ以上ない子守歌だった。高級ホテルの名に相応しい上質なベッドに身体を沈ませ、一度だけ寝返りをうつ。

「——ッ!!——ッ!!——ッ!!——ッ!!」

「……う……ん？」

不意に子守歌の中にノイズが走る。先程まで聞こえていた音が柔らかいと例えるならば、聞こえたノイズは刺々しい。同時にガクガクと揺らされるのを感じるも、この心休まる時間を手放したくないと身体を縮こませ抵抗する。

「——な——いッ!!——よ!!——来——ッ!!」

「んん……」

だが、抵抗すればするほど聞こえるノイズと揺らしは激しくなってくる。もはや波の

音などかき消すような勢いで聞こえてくるそれは、徐々に覚醒していく意識で認識するに怒声のようだ。

「さっ——きな——さいッ!!——くし——と!!——っ!!」

昨日は色々あつて疲れたんだし頼むからもう少し眠らせてくれよ……と耳に手を当てて怒声をカットしようとするもそんなものは無駄だとばかりにとんでもない力で引き剥がされる。くっ、何が何でもオレの安眠を妨害するのか。いいだろう、そこまで言うのならこつちだつて手加減してやんねえ。全力で寝てやる、そう決意を固めた時だった。

「——さっさと起きなさい!!あの馬鹿聖女が今日こそ弟にするって部屋の前まで来てるわよッ!!」

「おい何してんだオルタッ!!さっさと逃げるぞ!!」

コンマー秒で起床した。もうそりやりミッターを外させてもらった空気王の如く全力で。

が——

「おはようございませす!オルタにマスターもとい弟君!今日こそは2人にお姉ちゃんって呼ばせてみませすよ!」

「おいしい!!オルタお前部屋の鍵かけ忘れてんじゃねえよ!普通に入つて来ちゃつてる

じゃねえか!!」

「ちよつ! 誤解よ! 私はちゃんと鍵かけたわよ!」

「あつ、ごめんなさい。ドアノブ回したら鍵壊れちゃいました」

「何してんのツ!?!」

「何してんのよツ!?!」

ちよつとツツコミが追い付かねえよ! こちとら寝起きだぞ!?! 頼むから普通に起床させてくれよ! 300BB\$あげるから!

「まあまあ、そんな些細なことは置いといて。2人共おはようございます! 朝ごはん食べに行きましょう!」

「器物破損を堂々と些細な事と言い切ったぞこの聖女」

「クラスチェンジしてそこらへんだいぶ適当になったわね。いえ、元々こんな感じだったかしら?」

起床したばかりなのに1日の体力をゴツソリと持っていかれたオレとオルタ——バーサーカーとなり水着姿となったジャンヌ・ダルク「オルタ」は、目の前で楽しそうにニコニコと笑う水着姿のジャンヌ・ダルク(第2再臨ver)にため息を吐く。

こうしてオレとオルタは自称姉を主張する女性の勢いに押されるがままに連行されるのであった。

さて、突然のシチュエーションに戸惑っている人もいるだろう。何故オレがWジャンヌとラブコメの波動が感じられそうなり取りをしているのかというと、つい昨日解決した特異点事案に関連する。

世界有数の観光名所であるハワイ諸島で観測されたフォーリナー反応。それと同時

期にサーヴァントがカルデアから続々と姿を消す異常事態が発生した。

こりや絶対なんかあるだろと考えたオレ達はハワイ諸島——に行くはずだったのに何故かハワイ島とホノルルが合体したルルハワへ来てしまう。そこで見たものはカルデアから姿を消したはずのサーヴァント達がサマー・フェスティバルという名の夏コミを楽しんでいる姿だった。何それと思うだろう、オレもだ。

それから色々と省略するが、特異点を修正するにはフェスでサークルとして売上トップにならなければならぬという状況になった。しかし、オレを含め護衛として一緒に来たサーヴァント達はサークル活動なんて素人も素人。当然トップなど取れるわけもなく呆気なくドンケツ。すわ絶体絶命かと思っただがその瞬間何とルルハワに訪れた時まで時間がループ。この事態の説明役の小悪魔系後輩という名のBB曰く、修正できるまで何度でもやり直してもらおうとのことだった。エンドレスエイトかな？

しかし、やり直しが利くからと侮ることなかれ。オレ達は同人誌を作ることになったのだがこれがまた血反吐吐きそうになるほどきついなの。楽しくなかったのかって言われると否定はするが、考えることややるが多すぎて肉体も精神もダメージも凄まじく、日本で行われる夏コミと冬コミに毎年参加するサークルの方々へのリスpekトが天元突破した。文字通り命懸けの作業だったぞ同人誌づくり……。

それから何冊もの同人誌を書いてはトップになれずループを繰り返しまくったオレ

達はつい昨日、ようやく売上トップになり起点となっていた聖杯を回収し、そして全ての黒幕であるラスボス系後輩（お前か）に説教（鉄拳制裁）をかましこの事態に終止符を打ったのだ。

「——つたく、何で私がこの女と朝食を食べなきゃいけないのよ」

「こらオルタ、ちゃんとお姉ちゃんと呼びなさい。この女なんてそんな他人行儀はお姉ちゃん悲しくなっちゃいますよ」

「誰が姉よ誰が！この際だからハッキリ言うけど、アンタのことは姉だなんてこれっぽっちも思っていないわよ！」

「あつ、弟君。おかわりいりますか？朝ごはんは1日の元気の源ですし、しっかりと食べてくださいね」

「聞きなさいよこの脳内バカンス聖女ツ!!」

「オルタ、ご飯を食べる時は静かにしなさい。お行儀が悪いですよ」

「こ、この女……!!」

「あつ、あははは……ありがとうございます。あと弟じゃないです」

「もう、弟君つたら。恥ずかしがらずにお姉ちゃんと呼んでくれていいですよ？」

「やっべえ、この聖女様全然話聞いてくれねえ」

夏の島国に来ているからだろうか（そうだと信じたい）、いつの間にかアーチャーになつていたジャンヌさんのテンションがヤバい。ルルハワに来ていつの間にかクラス

チェンジして水着になっていたことにも驚いたのだが、それ以上に性格が御転婆＋姉屬性になっていたことに驚愕した。

本来のルーラーのジャンヌさんだったらこういうことは決してしないのだがこの水着ジャンヌさん。意地でもオレを弟に、オルタ（＋リリイ）を妹にしたいらしい。というか一回話し合いによりさせられた。次の日には正気に戻れたが、あれはもう洗脳レベル。

一応言っておくが、ジャンヌさんの弟が嫌と言うわけではない。流石はオルレアンの聖女と呼ばれるだけあってものすごい美人だし、性格だつていいし、器量も申し分ない。彼女が本当の姉だったらオレはシスコンになっていた自信がある。彼氏なんか連れてきた日には血の雨が降るだろう。

しかしだ。なんというかこのジャンヌさん。さつきから述べているようにブレーキがないのだ。御転婆と姉にステータス極振りしてるのだ。自分の弟妹にするために容赦なくファミパンし、聖杯への願いは何かと聞けば世界中を海で満たすと宣言し、クリスマスも水着で過ごしましょうとか言い出すなど夏に浮かれまくつていてぶつちやけ危ない人になってしまつてる。

……まあ、彼女の人生を考えると海への憧れは仕方がないのは分かっているんだ。流石にリアル弟は無理だが、偶にならお姉ちゃんと呼んでもいいかもしれない。

「ちよつとマスターちゃん。あんた今『偶にならお姉ちゃんと呼んでもいい』とか考えた
でしょ」

「何故分かったし!？」

「顔に出てんのは馬鹿。やめときなさい、この女のことだから一度認めたら逃げられな
いわよ。マシユや他の皆の前でも平気で呼ばされる羽目になるわ、絶対」

「……やつぱ止めときます」

そうしなさいな、と食後のアイスティーを飲むオルタ。こちらはバーサーカークラス
チェンジしているもののいたっていつも通りだ。どちらかと言うとジャンヌさんの方
がバーサーカーしてる。

まあ服装が如何にも中学2年生が発症するアレ的な意味でバーサクしているが。
だって宝具見ました奥さん、アレどう見ても邪王なんちゃらでしょ。ちなみにオレは最
初見た時メツチャ興奮しました。しょうがねえよ、あれは男のロマンだもん。オルタ女
の子だけど。

「それで弟君、今日の予定はありますか？良かったらお姉ちゃんと一緒に遊びませんか
？」

眼鏡の下で輝くサファイアのような綺麗な瞳がオレを見つめてくる。僅かに顔を傾け
つつ微笑を浮かべながら誘ってくる姿はまさに聖女と呼ばれるにふさわしい美しさ

だった。

うっ……この人本当に美人だな……。おまけに今は眼鏡というダブルコンボ付き。オレへのときめき破壊力も2倍だ。

「お生憎様。マスターちゃんは私と一緒に用事があるのよ。アンタに付き合ってる暇なんてないわ」

思わず赤面してしまっただろもどろになっただろもどろに業を煮やしたのか、オルタが間に割り込んできた。助け船に感謝しつつ、続けてオレも謝りつつ言葉を続けた。

「すみませんがそうなんです、ジャンヌさん。あと弟じゃないです」

「用事？まだ何かするんですか？一応この特異点の修復は終わったと聞きましたけど……」

用事と言っても特別どこかに出向くと言うわけではない。というか、聡明な方々ならもう何をするかお気づきだろう。特異点の修復が終わったらやることと言えば恒例のアレしかない。

「この後は英霊召喚に挑戦します。オルタには今回の護衛をお願いします。場所は先日と同じ場所をダ・ヴィンチちゃんに確保してもらっているのです。そこで行おうかと」
「ああ！私が召喚された時と同じ場所ですね！」

パンと軽く手を合わせて笑うジャンヌさん。彼女の言う『時』とは、まだルルハワで特異点修復に挑んでいる頃に何となく召喚にチャレンジした時のことを言っているのだろう。あの時はまあ記念にという感じで単発で3回ほど回したのだがなんとその時に目の前の彼女、星5アーチャーであるジャンヌさんが来てしまったのだ。

いやーあれは本気でビビった。初めての星5アーチャーが思わぬ形でできてしまったから冗談抜きで数分間思考停止した。そして我に返った後にとんでもねえお姉ちゃんムーブに別ベクトルで思考が停止した。

「そういうことなら私も一緒に一緒に！いいですか弟君？」

「はあ？何言ってるのよ。アンタなんか必要ないわ。こいつのお守りは私一人で十分だったの」

「えー、そんな冷たいこと言わないでくださいよー。お姉ちゃん寂しいです。ほら、リースだつて寂しいーって言ってますよ」

「キューキュー!!」

「ちよつ！そいつを正面から見せるな！歯並び怖いのよ！そんなことしたつてダメだから！こいつは今日は私と過ごすの！アンタは邪魔なのよ!!」

わつちやわつちやと騒ぐWジャンヌ（＋イルカ）の何だかんだで仲がよろしいやり取りにマスターは癒されつつ傍観する。結局このやり取りはオルタが折れるまでの数

分間続き、最終的に今回の護衛はWジャンヌということになった。

あと、ジャンヌさん？さつきから言ってますけど弟じゃないです。お願いですから話聞いてください。

ということで訪れた召喚ポイント。今回もマシユの盾を使わせてもらっているのだ

が、肝心の彼女はというと他の女性サーヴァント達とルルハワ観光に朝から出向いている。お土産を沢山買って来ると言っていたので楽しみだ。

えっ？ナンパの心配は良いのかって？それについては問題ないと思うぞ。牛若丸とロビンとあとホテル従業員のモーさんを買収して護衛につけてるのでもし何かあっても彼ら彼女らが話し合い（物理）してくれるから大丈夫だろう（過保護）

「それじゃさっさと終わらせなさい。私だって早くルルハワ巡りたいんだから」

「あれ？オルタは護衛は嫌だったんですか？それならこの場はお姉ちゃんに任せて遊びに行つてきてもいいですよ？」

「嘘、マジで？もしそうならゴメンなオルタ。遊びに行きたかったのに連れてきちゃつて……」

「べ、別に嫌だなんて言っていないわよ！憶測で物を言わないでくれる!?私は結果なんてどうせ爆死だつて分かってるんだからさっさと終わらせなさいって言ってるの!」

うっ……それを言われると何も言い返せない。そうだよなあ、この前弓ジャンヌさんが来てくれたわけだしそう立て続けにレアサーヴァントが来てくれるわけないよなあ……。今回だって40連分用意したけど、この前のスカディさんピックアップじゃ見事にやらかしたもんなあ……。

「こら、オルタそんなこと言っちゃいけません。彼だって頑張ってるんですよ」

「いいんだジャンヌさん。悪いのはオレの召喚運なんだ……」

「そ、そんなに本気で落ち込むんじゃないわよ！ああもう！悪かったわよ爆死なんて言つて！」

なかなか辛辣な言葉にネガティブホロウを受けた並に落ち込んでいると慌てたようにオルタは素直に謝ってきてくれた。なんか、こんなことで謝らせてしまった自分が情けない……。

彼女の謝罪を無駄にしないためにも今回はしつかりと召喚にチャレンジしよう。さつきはああいったが、逆に弓ジャンヌさんを引けたということは運気が向いてきているとも考えられるしな！

あつ、ちなみにジャンヌさんにはマスター呼びするように説得した。本人すごく不満そうだったけど。

「よし！じゃあ見てろよオルタ！お前のマスターはやる時はやるつて所を見せてやるぜー」

「はいはい、期待しないで待つててあげるわ」

「頑張ってくださいね！」

最初の10連分の聖晶石を召喚サークルへと放り込むといくつか礼装を召喚し始める。ウィンドサーフィンを楽しむ武蔵ちゃんと柳生のお爺ちゃん、胤舜さんが描かれた

『疾風怒濤』、夜にダンスを踊っている褐色女性サーヴァントが描かれた『オールナイト・フィーバー』、そして星5礼装である超イケメン王子様が描かれた『ヒーロー・オン・ザ・ビーチ』等々。

どのサーヴァントも夏の海ということで非常に開放的になっており、特に女性陣はヤバイ。英霊は美少女美女ぞろいでナイスバディが多いから見るところに困るというかすつごく綺麗ですねというかぶつちやけエロいですねというかありがとうございます！！

「マスターちゃん？何をニヤニヤしてるのかしら？ものすごく不快なんだけど」

「マスター？そういうのはお姉ちゃんいけないと思います。嫌われちゃいますよ？」

「ごめんなさい……」

いや、だってこればかりはしょうがないじゃない。皆開放的なのが悪いん——あつ、はい。本当にごめんなさい。お願いですからマッシュに密告するのだけはやめてください。ランスロットみたいな目で見られたくないです。

——2人の聖女に土下座をかまして懇願している時だった。召喚サークルが一際大きな金色の輝きを見せる。つい先日も見た高レアサーヴァント反応の兆しを確認したオレはクラスを見極めるために出現したクラスカードに目を凝らす。刻まれているのは——暗殺者の刻印。

「こらそこ!! 『またか』とか言わない!!」
前日も見た

「水着に着替えたら、不思議なことに修業時代の私に近付いてしまったようです……。鞍馬の山では、遊びこそが修行である、と教えられました。故にこれが今の正道。主殿、牛若といっぱい遊んでくださいませよう、お願いします!」

ピョンと光の中から飛び出したのは今朝も見かけたサーヴァント。サイドテール風にとまとめた長髪を揺らし、子犬のようなニッコリ笑顔を浮かべる水着姿の少女。程よくついた筋肉は健康的で山で遊びながら修業をした彼女らしい肉体。

星4アサシンとなった牛若丸参上である。

「主殿主殿! 召喚してくださいませ!」

「おおー! 牛若丸か! 召喚に応じてくれてありがとうございます!」

「いえいえ! 主殿がいるところならこの牛若が行かない道理はございませぬ! いつもと霊基が変わってしまっていますがこれからよろしくお願いしますね!」

ニコニコで近寄ってくる大変可愛らしい少女。水着姿だがこれでも普段のライダークラスよりも露出が減っているとまで言われているから驚きだ。金時さんがアレはや

べえじゃんという気持ちも分かる。

「相変わらず謎の原理よね英霊召喚って。普通に考えて同じサーヴァントが1つの地に2人いるって相当おかしいでしょ」

「カルデアの召喚式が特別ということもありますよ。それに厳密に言えば元々マスターと一緒に来た牛若丸さんは元々ライダークラスの彼女がクラスチェンジした結果ですから、正確には違うのでしょ」

まあ、深く考えてもよく分からないしそういうのはダ・ヴィンチちゃんにお任せだ。

「それで主殿！早速私と遊びませんか？」

「あー、ごめんな牛若丸。まだ召喚が残ってるから今すぐは無理なんだ」

「あう……そうですか。残念です」

明らかにシヨボンと落ち込む牛若丸。彼女に尻尾でも付いていたら間違いなく垂れ下がっていただろう。

あの、そんなに落ち込まれると反応に困るんですが……。というか、これ完全に遊んでももらえないって捉えてないか？彼女に伝えたことに誤解があると分かったオレはそれを訂正しようとするが、それよりも先にオルタが口を開いた。

「ほら、元氣出しなさいよ。別にマスターはあんたとは遊ばないって言ったわけじゃないでしょ。今すぐは無理って言うてるの。後で時間ができた時にでも遊んでもらえば

いいじゃない」

「えっ？いい、いいのですか主殿！」

「お、おう。もうちよつと後なら大丈夫だと思ふ。その時にいっぱい遊ぼうか」

「や、やりました！ありがとうございます主殿！この牛若丸、一日千秋の思いでお待ちしています！」

「まったく、遊び程度で大げさね」

一氣に元気になった牛若丸はそのままマシユの護衛へと参加することになり、その場を後にした。これによりW牛若にロビンにモーさんという護衛どころじゃない戦力が少女の下に集うことに。ナンパ野郎の命は間違ひなく南の海に沈むことになるだろう。

「ふふふっ」

「どうしたんですかジャンヌさん？」

「ちよつと嬉しくなつてしまひまして」

「嬉しく？」

「ええ。オルタのああいうところが見れたのは姉として微笑ましいです」

ぶんぶんと身体全体で手を振る牛若丸を見送りつつ小さく手を振るオルタの背を見ながらジャンヌさんは呟く。

オルタはジャンヌさんの別側面、それも復讐者としての側面を持って生まれた存在

だ。憎しみや恨みの炎を燃やし、敵を傷つけることしかできなかった少女。そんな少女が他人を思いやる気持ちを見せてくれた、そのことが嬉しいのだと。

「そう、ですね。オレはこれまでの旅でオルタの色々な面を見てきましたけど、やっぱり彼女は貴方と同じ優しい人ですよ」

「ええ。そして、あの子は私とは『違う存在』です。あの子にはあの子の生き方がある。私はその先を見てみたいと思います」

聖母のように微笑む女性。もしかしたら、彼女が姉というものに拘るのはもつと一緒に居たいという願望の表れなのかもしれない。英霊と言う特別でしかし不安定な存在。いつ終わりを迎えると知らないその身だけど、それでも最後まで共に居たいと、そういう願い。そんなことをふと考えた。

「あら？どうかしましたかマスター？」

どうやら知らぬ間にジャンヌさんを見つめてしまっていたらしい。

「いえ。ただ、貴方に想われる人達はきつと幸せなんだろうなと思ひまして」

「……………」

「ジャンヌさん？」

「——その言葉はついに弟になってくれるということでもOKですね!!お姉ちゃんと最高の姉弟ライフを送りましょう！」

「ノーセンキューだよ」

色々台無しじゃねえか。

「つたく、人が見送りしてるってのになに後ろで騒いでんのよ」

「気にしないでくれ。夏のテンションって怖いなって痛感してただけだから」

「はあ？ 頭大丈夫？ 熱中症とかじゃないでしょうね」

大丈夫大丈夫とオルタにヒラヒラと手を振りつつ次の召喚へとチャレンジする。ジャンヌさんは再度弟化を拒否されたせいでむくれていたが2分もあれば機嫌を直してくれるだろう。

さて、次は20連目になるのわけなんだけどどんな結果になるかな？ できれば他の水着サーヴァントも来てほしいな。特に気になっているのは謎のヒロインXX。あの女性は（衣食住的な意味で）救わねばならぬ。

グルグルと回る召喚光。しかし、特に目ぼしい礼装はなく、当然のように星4以上のサーヴァントも召喚されなかった。うむ、安定。

結果が振るわなかったことをオルタにからかわれ、ジャンヌさんに慰められたところで30連目に突入。今回はこの召喚の為に石は蓄えてきたから使い切っていくつもりで召喚する。必死になって集めたんだよ……あのスカディ事件に負けずに……（遠い目）「さあ、次こそは良い結果を見せてくれるのかしらマスター」

「それはオレの運気に聞いてくれ。なんなら『頑張れー!』って応援してくれ」

「はっ?嫌に決まってんでしょ。誰がそんな恥辱に塗れたことするのよ」

「頑張れ頑張れマスター!フレツ!フレツ!フレツ!マスター!!」

「キューイ!キューイ!キューイ!!」

「……自分で提案しといてなんだけどもつちや恥ずかしい」

「この馬鹿聖女!!もつと恥じらいを持ちなさいよ!!そしてあんたはあんたでなにデレデレしてんのよ!」

「デ、デレデレとかしてねーし!!冗談でエールを要望するとオルタではなくジャンヌさんとリースがピョンピョン跳ねながら応援してくれる。その際豊満な二つの果実がリズミカルに揺れてるのを見てしまい思わず赤面してしまったのは仕方がないと思う。あれはアカンて……」

「あつ!マスターマスター!召喚サークルがさつきと同じ色で光ってますよ!」

「ん?」

「あら、また金色?やるじゃないマスターちゃん」

ピョンピョンと跳ねていたジャンヌさんが突然止まったかと思うと何気なく召喚サークルを指さす。金色反応でもきたかーと思いい目を移すと、案の定そこでは高レア確定の金色の光が溢れていた。

「おー、この夏は随分と調子が良いな」

「まあ、私のマスターだしこれくらいできて当然よ」

「オルタ、素直にすごい！つて言ったらどうなんですか？本当は嬉しくせに。お姉ちゃん、ツンツンしてる妹の将来が心配です」

「う、うううるさいわね！余計なお世話よ！というか、いい加減姉と言いい張るのやめなさいよ！」

ぎゃーぎゃーと騒いでいるうちに金色の光の中からクラスカードが現れる。さてさてどのクラスかなーと思つて確認してみると刻まれていたのは——魔術師の刻印。できればひとつ前のピックアップで見たかったキャスタークラスのカード。やがて、そのカードが消失するとともに召喚されたサーヴァントが姿を現した。

「カランカランと女性用の下駄で軽い音を奏でながら彼女は現れた。日本伝統の和服を軽く着崩しつつも上品さを損なわない所作。その背後ではフリフリと一本だけ生えたふさふさの尾が揺れ、頭部ではピコピコと耳が動いている。オレは彼女を知っている。度重なる旅路の中で幾度となく出会った、日本における三大妖怪の一角。神霊の領域にまで到達している最強クラスの妖怪だ。」

「ご用とあらば即参上！貴方の頼れる巫女狐、キャスター降臨つ！です！」

白面金毛九尾の妖狐にして天照大神の分御霊。その際限ない美しきで国すら滅ぼした反英霊。星5キャスター、『玉藻の前』その人だった。

「えええええええええええええええええつ！！！」

「あら？どなたかと思えば玉藻さんじゃないですか！」

「おやおや、そちらこそいつぞやの聖女様じゃないですか。なかなかアダルティックなイメチェンですね」

「夏ですのー！」

「わーお、この聖女様開放的過ぎイ！でも、そう季節に身を任せるのタマモ嫌いじゃないですよー！」

「アンタら好き勝手に話し過ぎイ！！」

「そもそも完全に星4のキャスターだと思ってたわ！！いくらなんでも不意打ち過ぎて」

ビックリだよ!!?というかそっち!?そっちなの!?ランサーの方じゃなくて普通にキャスター!?えっ!?スカディさんはこれの前フリだったの!?

オレとオルタが絶叫する中、ジャンヌさんがゆる〜い感じで玉藻さんに対応する。冷静かよお姉ちゃん!?!あつ、言っちゃった。

「それにしてもまつたく、なんで呼び出す霊基がこれなんですかー。自分で言うのも何ですけど南の島ですのような恰好じやないですよ。タマモちゃん、汗だくになりたくないです」

「いや、そんなこと言われても無理だから。召喚なんてランダムだから。というか、マジで玉藻さんですか?」

「こーんな良妻賢母な狐が私以外にいますか?貴方様が召喚したのは間違いない『玉藻の前』さんですよ。というか、疑われると私寂しくなっちゃいます」

「あつ、いやすんません!完全に予想外だったんでテンパってました!もちろん、信じますから!」

「ふふふつ、冗談です。慌てふためくマスターもなかなか可愛げがあるじゃないですか。では、私のことよろしくお願いしますね!いざという時はミコツとお力になります!あつ、でも私紙装甲なので物理的な力添えは期待しないでくださいね!」

去勢拳使うサーヴァントが物理に期待しないでくださいねとかただのギャグなんだ

よなあ。

ということでも完全に予想外の召喚となつてしまった玉藻さんは他の方々にも挨拶してきますーと言い残してその場を後にした。神霊クラスの大妖怪でもその辺はしっかりしているらしい。流石、自分で良妻賢母と言うだけでもあつて基本的には礼儀正しいな。元も子もない発言して空気ぶち壊すこともよくやるがな！

「それで、あの女狐を召喚できたわけだけどまだ続けるの？」

「石が余つてるしできればあと10連だけしておきたいんだけど……いいか？」

「何で私に聞くのよ。ここまで来たらきちんと最後まで付き合うから勝手にしなさいな」

「ありがとう、オルタ」

なんとなくオルタに確認を取ると呆れたような返事が返ってきた。ここで玉藻さんを召喚できた以上、これ以降に高レアサーヴァントを召喚できるとは到底思っていない。だつてほら。オレだぜ？（説得力）

でも、このために貯めてきた聖晶石だしどうせなら使つてしまおう。こんな機会滅多にないからな。

「弟君と妹が仲良さそうでお姉ちゃん大満足です！」

「はい、この馬鹿聖女の妄言は無視してさっさと終わらせなさい」

「はーい、りよーかーい」

「むう、とうとうマスターもオルタが全然反応してくれなくなりました。これはこれですまらないです」

知りません。

「じゃあ最後の10連分ほーい」

最後の聖晶石を召喚サークルへと放り込む。まあ、良い感じの礼装でも来てくれれば御の字、出なくても別にいっかぐらいの気持ちで召喚へとオレは赴いた。そう、本当にそれぐらい軽い気持ちだったんだ。

——召喚サークルが虹色の反応を示すまでは。

現れたのは見たことがない金色のクラスカード——いや、正確には口頭で聞いた情報
だけは持っていた。刻まれるのは1人の少女の刻印。長髪にリボンを結び、一見制服の
ような服装の上にロングコートを纏った、月の海を支配して溺れる夜が始まるきっかけ
となった人物。

——ビリビリと令呪から伝わる高魔力と目の前の光景に目を見開いていると、光の中から

少女は現れた。

「私を呼びつけるなんて身の程知らずの人間もいたものですねえ。もしかして、自分からブタさんライフ志望の困ったちゃんなんですかあ？な—んて、ご褒美めいたトークはこのヘンで。ムーンキャンサー、B B、アナタの願いを聞き届けてやってまいりました☆観念して私のオモチヤになってくださいね、セ・ン・パ・イ？」

ラスボス系後輩、黒幕、邪神の接触者と言った異名を持つ黒を黒で塗りつぶしたようなまっくろくろすけ後輩。いつもの衣装とは違い、露出度高めの水着を身に纏い、パーカー、帽子、スニーカーといったパリピっぽい服装をしている少女。何故か星5のムーンキャンサークラスとして顕現した傍迷惑なサーヴァント。B Bの登場だった。

「は—い、センパイ。まさか私を召喚してしまうなんて本当にセンパイは私のことが大好きなんですわね。でも—お気持ち自体は嬉しんですけど—？やっぱり私には心に決めた人がいる——「はあっ!!」——ってきやあ!!い、いきなり何するんですか!!」

「ちっ、外したか」

「外したか、じゃないですよ!?!今避けなかつたら本気で斬り捨ててましたよね!」

「当たり前じゃない。目の前に敵の親玉が来たら悪・即・斬。こんなの常識でしょ?」

「それ幕末の常識じゃないですか!!え—ん、センパイこの野蛮な人に殺される—」

「もしもし、マシユ?大至急マルタさん連れてきてくれない?激しくいってもらわない

といけない人がいるんだ」

「あつれー!?もしかしてセンパイまでそつちですかー?きゃー!BBちゃん野蛮な人達に襲われるー!エロ同人みたいに!エロ同人みたいに!」

パタパタと腕を振り回し、ふぎけた態度でキヤーキヤー騒ぐBB。しかし、オレ達は騙されない。このどこか人を食ったような態度も全て演技。一見するとただの可愛らしい少女が実は邪神を身に宿し、簡単に世界を滅ぼせる力を持っていることを。

……前回のキアラさんといい、うちのカルデア、世界壊せそうな超危険人物増えてきたなあ(白目)

「すんまつせーん!サーヴァントのクーリングオフってどうやればいいんですかー?」

「残念あらぬ光栄ながら返品は受け付けておりませーん!ほーら、両手を上げて絶叫しながら豚のように鼻を鳴らして喜んでくださーい」

「ガッテム!!」

おいおいマジかよ。こいつは本気でシャレにならんぞ。

「あの一、マスター?とりあえず召喚してしまったのは仕方ありませんし、ひとまずきちんと契約を結んでどうですか?」

「いや、しかしジャンヌさん……」

「カルデアには沢山の人達が溢れかえっているんですから巨大隕石級の人が増えたって

今更ですよ。それよりもしつかりと手綱を握っておいた方がまだ安心というものじゃないですか？」

「ほらほらセンパイ、その聖女さん……聖女さん？の言う通りですよ。観念して契約を結んでください。——つてあれ？私今遠回しに危ない人つて言われました？」

「まあ、確かに……」

「流石センパイ！そこは否定してくれないんですね！」

いつものより更にテンションが高いBBと正式な契約を結ぶ。その際オルタがものすごく渋い顔をしていたが、この契約の必要性を理解したのか1度大きくため息を吐いただけで止めはしなかった。

「これで契約完了です！じゃあ、センパイ遊びに行きましょう！あつ、もちろんセンパイの奢りですよ？」

「だが断る」

「そのセンパイの断るを断ります」

「何それ卑怯」

「この後滅茶苦茶奢らされた。

732 南国の島で水着を堪能する予定だったんだけど、いつの間にか同人誌で世界を救う
なってるとか意味不明だよね？

— 月光が照らす浜辺にて —

「ここにいたのか、オルタ」

「……なによ」

昼間散々BBに付き合わされ、そのことで合流したマシユに機嫌をそこなわれ、牛若を含めた年少サーヴァント達と遊びまくったその日の夜。オレは夜の浜辺へと来た。た。

「よくここが分かったわね」

「ジャンヌさんが教えてくれた」

「ったく、アイツ勝手なことを……」

「『お姉ちゃんは妹のことなら何でも分かるのです！』ってドヤ顔で言ってたぞ」

「普通にストーカーじゃない、それ」

砂浜で三角座りをしている彼女の隣に片膝を立てて座る。夜の海の波に耳を傾けると、今朝聞いた波の音とはどこか違った感じがした。海は昼間と夜とでは表情を変える。と聞か、これもそういうことなのだろうか？

「それで、わざわざ私を探して何の用よ」

「いやその……なんか召喚が終わってから元気がなかったように思ったからさ」

「……気のせいよ」

「今一瞬間があった。何かあるんだろ？」

「うっ……」

「凶星だったらしい。これくらいのことには既にお手の物だ。何度ループを繰り返して同人誌を書き続けていたと思うんだ。互いに意思の疎通ができていなければ最後のあの同人誌は決して作れなかっただろう。」

「なあ、何かあるなら言ってくれないか？そりゃ、言いたくないことだってあるかもしれないけどさ、今回の特異点で一番頑張ったのはオルタなんだ。そんな君が元気がないのを見るのは心配になる。オレに出来ることなら多少の我儘だって聞くぞ？」

「アンタね……」

「お前はいきなり何を言っているんだと言わんばかりにオルタは呆れた表情をする。」

「本当にいいの？」

「おう」

「私が誰だか分かっている？復讐の炎にその身を委ねた竜の魔女よ？」

「だからなんだっつーの」

「自分に害する要求をされるとか思わないの？」

「オルタはそんなことするやつじゃないってことぐらい知ってる」

「何でそこまで私を信用してんのよ」

「信用じゃない、信頼だ。オルタは大事な仲間だから。だから信じられる」

矢継ぎ早に交わされていく問答。やがて諦めたように彼女はもう一度大きくため息を吐いた。

「——じゃあ、明日私に1日付き合いなさい」

「えっ?」

「だから! 明日1日私に付き合いなさいっ! 買い物荷物持ち!」

「えっ……と、そんなことでいいのか?」

「我儘聞くんではよ? これでいいわよ」

そりゃ、それぐらいならいくらでも付き合つてやるけどよ。もっと贅沢なことか言つていいんだぞ? とオルタに言うと、そんなもの趣味じゃないわと拒否られた。

「大体、本当だったら今日——あつ!」

「今日?——ん?もしかしてオルタが召喚を早く終わらせたかつたのつて……」

「う、うううるさいうるさいうるさい!! その変な妄想今すぐ頭の中から消去しなさい! 鼻から脳みそ引きずり出して燃やすわよ!」

「こええよっ!! 何ミイラ作りにアレンジ加えてんだよ!」

「アンタがつまんないこと考えるからでしょ! ほら! そうと決まればさっさと部屋に戻つて寝るわよ!」

「あつ、ちよつ待てよ!」

「グズグズしないの!!」

「おいっ! ったく、なんだよいきなり元気になりやがって……」

パパッと立ち上がりホテルへと歩きだしてしまったオルタを急いで追いかける。

——もしこの時彼女に追いつけていたらオレは見ただろう。

言葉では乱暴なことを言いながら足早に去る彼女。その口元が僅かに弧を描き、どこか嬉しそうに破顔していたことを。

番外編 M a t t h e w  s D i a r y 3

「それじゃあマシユ。今日の訓練はここまでにしようか」

「了解です、マスター。マシユ・キリエライト戦闘態勢を解除します」

「おう、お疲れさん」

シミレーシヨンルームにて仮想の敵を討伐し終えた後、先輩が一息吐きながら私に笑顔を向けてくれる。私も機械的に生まれ変わった盾を下ろすと視野を保護してくれているゴーグルを外した。

「んんー!! 久しぶりに満足のいく訓練ができたな」

「シオンさんには感謝しなくてはなりませんね。彷徨海に我々を受け入れてくれただけでなくこのような訓練設備まで完備してくれて」

「内部にカルデアを再現するとかアトラスの魔術師はぶっ飛んだ発想をするよな。過ごしやすいから助かるんだけど」

それぞれの自室へと繋がる廊下を歩く先輩は手を組んで一度大きく伸びをしました。先程まで張り詰めた緊張感を持ち、的確な指示を出していたマスターとは思えないほど今の先輩はどこか幼い笑顔をしています。

この彷徨海にたどり着いて10日程立った現在。以前、シャドウ・ボーダーで過ごしていた私達の日々は十分な環境が整っていたとは到底言えませんでした。寝食を過ごす分には十分な大きさを持つシャドウ・ボーダーですが本来は移動用。もちろん訓練だって満足に行えませんでしたし、きちんとした食事を摂れることも少なかつたです。ですから、こうして腰を落ち着ける拠点があると精神的にも安心できます。

「今日の夕飯は何だろうな」

「最近ではエミヤさんを筆頭にキャットさんやブーディカさんもすごく気合が入ってますからね。シャドウボーダー内だと節約のため霊基での待機ばかりでしたし、料理をする余裕もありませんでしたから。また思う存分腕を振るえる場所ができて喜んでいました」

「料理人達は思いっきり料理ができてオレ達は美味しい飯が食える。なんてwin-winなんだろうな。これこそまさに幸せスパイラル」

「ふふつ、そうですね。私も嬉しいです」

かつては食事など必要な栄養分を補給するための手段としか考えていませんでしたが、今となっては私の秘かな楽しみになっています。ただ、料理当番のサーヴァントの方々の料理は本当に美味しいので食べ過ぎには注意です。体重が増えてしまつては目も当てられません。食べた分はしっかりと動く。当然です！

「……どうしたマシユ？急に拳を構えたりして」

「いえ！これは乙女としての決意表明です！」

「お、おう。よく分からんが頑張ってくれ」

はい！マシユ・キリエライトは決して怠惰な生活は送りません！

内なる悪魔（補助）と戦い続けることを決めているうちに先に私の部屋へとたどり着いてしまいました。自室で訓練で掻いた汗を流し、あとで食堂の前で合流することにした私達は一度そこで別れます。

シャワーを浴びて時間を確認してみると合流する時間までまだ少し余裕がありそうでした。早く行っても良かったのですが手持ち無沙汰になってしまいそうだったのでやめました。

「さて、何をしましょうか……」

ふと部屋の中を見渡すと備え付けられた机に置かれている日記が目にとまりました。この彷徨海を訪れた頃にシオンさんに追加でいただいた新しい日記帳。環境が変わり心機一転として日記帳を新たにして書き始めたその隣にカルデア時代、そしてシャドウボーダーで旅をしていた時代の使い古された日記帳が並んでいます。

「最近は何れも彷徨海の改装や訓練でゆっくりと読み返す暇がありませんでしたし、少し読み返してみようか」

新しい日記帳ではなくその前の日記帳を開きます。書かれている内容はもちろん覚えていますが、こうして読み返してみるとどこか新鮮味があります。生憎、私にはアンデルセンさんやシェイクスピアさんのような文才はありませんので面白いかと言われれば否定するしかありませんが……。

以前読み返し終えたページを見つけると椅子に座りタイマーをセット。先輩との約束に遅刻してはいけませんからね。念のためです。

——そして、私は記憶の海へと三度潜っていきます。

○月×日 ネロさん、これでよかったですか？

今年もこの日がやってきました。カルデア中のサーヴァント達が血肉湧き上がり、同時にカルデアの職員一同が過労でバタバタと倒れていくイベント。そこまで言うのならいつそやらなければ？と誰もが思いながらも結局開催してしまう1年に1度の祭典。そう！『ネロ祭』の時期です!!

……と、例年通りなら言っていたのですが、今年は事情が違いました。何と今年は主催がネロさんではなくギルガメッシュユさん。しかも場所もローマではなくニューヨーク。ネロ祭が晴天の真下で熱く燃え上がる祭典としたら、ギルガメッシュユ祭——ギル祭は眠らない街の光に照らされた煌びやかな祭典でした。

もつとも内容自体はいつも通りバトルをひたすら勝ち抜く方式だったので戸惑いはしませんでした。ネロ祭と同様にもう大変でした。ええ、誰がと言いますと私達のマスターである先輩が大変でした。

お祭りにも関わらずひたすら林檎のみをモグモグしながらバトルに挑み続け、そうして確保したA U Oくじを持ちボックスガチャを管理するシバの女王様の下へ特攻してひたすらガチャを回し、更に日に日に公開されていく超高難易度のバトルに挑んでジャガーさん相手に発狂したりと、まるで何かに憑りつかれているみたいでした。

——すみません。冷静に考えたらこれも例年通りです。何も心配ありませんね。

その後、何とかバトルを勝ち抜いた私達は決勝戦でギルガメッシュユ王と戦い、勝利。見事第一回ギル祭の優勝者になったのです。やりましたね先輩！

今回のお祭りも急な変更があり色々と大変でしたがすごく楽しかったです。

お祭りというものは始まれば必ず終わるもの。だからこそ一瞬一瞬がとても眩しいひと時なのだと思えます。しかし、サーヴァント達やスタッフの方々のお祭りが終

了しても先輩にとつては少しばかり続くようでした。

——そうです、召喚のお時間です。今回の先輩の狙いは彼の英雄王ことギルガメツシュ王。今まで散々お世話になってきましたがいまだにカルデアにはギルガメツシュ王がいらっしゃりません。英霊として間違ひなく頂点に君臨される英雄王が召喚に応じてくれたのならもはや私達に敵は無しですよね先輩！

ということでは30連分ほどの聖晶石を貯石してきた先輩は早速召喚へと赴きました。その結果は——残念ながらギルガメツシュ王は来てくださりませんでした。恐らくまだまだ私達を見定めている段階なのでしょう。ですが、いつか力添えをいただけると信じて精進していきたいと思えます。別に先輩の召喚運のせいだとかは思っていません。はい、思っていませんとも。

ところで、今回の召喚で新しくカルデアに加入された方がいらっしゃいました。今回のボックスガチャ担当でもあったシバの女王様です。それも2人。ギルガメツシュ王が来て下さらなかつたことは少し残念ですが、またシバの女王様と共に戦えると思うと嬉しく思います。

……しかし、先輩。1つ疑問に思っていたことをお聞きしてもいいでしょうか？

ボックスガチャを回す時にシバの女王様のお胸ばかり見ているのは何故ですか？——えっ？そこに回すためのボタンがあるから？一体何を言ってるんですか？ガチャを

回すためのボタンが女王様のお胸のところにあるわけないじゃないですか。ちよつと後でルーラーのジャンヌさんやマルタさんと一緒にお話しましょうか。場合によつてはカルデア裁判を開廷しなければなりません。——逃げないでくださいね？

○月×日 ハロウィンと鬼と遊園地の融合とは一体……

今年には毎年恒例のイベントに転機が訪れる年なのかもしれませんね。かつてハロウィンと言えば破滅的なライブと混沌とした建物の融合が定番となっていました。1年目、謎の招待状からのチェイテ城でのライブ。2年目はそのチェイテ城にピラミッドが突き刺さるという悪夢。そして3年目には更にその上に姫路城が降臨されるという混沌とした状況に。

……文章で書いてみて改めて思いましたがやはりおかしいです。おかしい、ですよ？ 私の感性はまだ真つ当ですよ？これが当たり前ではないですよ？

迎えた今年のハロウィン。今年には謎の招待状もピラミッドが降つてくることも巨大

ロボが襲来してくることもありませんでした。何も起きないことに歓喜していた私と先輩ですが、ハロウィンが間近となったある日に特異点の発生を知らされました。

ああ、今年も先輩と私と他数名の鼓膜に深刻なダメージを負うことになるのですねと悟っているとどうやら事情が違おうようでした。なんでも今回の特異点はチエイテ城のポイントではなく日本の北海道、しかもそこでは鬼達による遊園地が開かれているというではありませんか。その瞬間私は確信しました。いつもと違うけど今年も決して平和には終わることはないだろうなど。

とにかくこの特異点をどうかしないといけないと思つた私達は鬼関連ということであ木童子さん、そしてもう一人護衛として望月千代女さんと共に現地へと乗り込んだわけなのですが、早速鬼達からの襲撃を受けました。その諍いの中で私達は一人の鬼、いえ魔法少女、いえいえ護法少女——『鬼救阿』に出会います。

はい、すでに意味が分かりませんが私達は数々の『何コレ特異点』を乗り越えてきた身。今更魔法少女だろうが魔砲少女だろうが護法少女だろうが動じたりしません。見た目も中身も完全に酒呑童子さんでしたし。一応肩書としては『人を救う英傑が英霊ならば、鬼を救うモノ、其れすなわち護法少女——鬼救阿』とのことです。凄く日曜日感がします。そして先輩、理由は分かりませんが私に変な呪文を言わせようとしないうでください。なんですか『ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!』って。

出会ったのは鬼救阿さんだけではありませんでした。もう一人、あの雪と灼熱の大地で出会ったハイ・サーヴァント、『シトナイ』さんとも再会しました。残念なことに彼女は私達のことを覚えていませんでしたが、それでもこの特異点の修復に手を貸してくれました。特異点の力の源であるカムイの黄金。そしてそれを守護するサーヴァント達との戦いに勝利した私達はついに鬼達の親玉である『鬼王朱裸』と決戦を迎えます。『鬼王朱裸』との激戦の中でついに討ち取った私達でしたがそこで衝撃の事実が判明します。なんと『鬼王朱裸』の正体は記憶を失ったエリザベートさんだったのです。

——はい、この瞬間先輩が叫んだことはもはや記すまでもありませんね。いつものあの台詞です。

その後は色々とすったもんだありまして、エリザベートさんを倒し事態は収束しました。結果的に例年通りエリザベートさんに振り回されるハロウィンとなりましたがやはり遊園地というのは気持ちも高揚しますし非常に楽しいです。……次はぜひ先輩と2人で巡ってみたいですね。

さて、こうして今回のハロウィン騒動は無事解決したのですが、恒例の召喚結果を記しておきます。先輩はシトナイさんを召喚しようと躍起になっていましたが見事に失敗されました。具体的に言うとなら30連して女性サーヴァントすら来ませんでした。見た目が幼いシトナイさんの名前を連呼する先輩からは危険な匂いがしました。

余りにも可哀想でしたので慰める意味を込めてお菓子をあげました。その際泣いて大歓喜された時にはこの人はもう駄目なんじゃないかと思いましたが、次の日にはケロツとしていましたので流石日頃から慣れていらつしやると思いました。そう伝えたらまた泣き始めてしまいました。

○月×日 今年のクリスマスはサンバでサンタです

クリスマスの時期です。毎年毎年新たなサンタを誕生させている我がカルデアチームですが、今年も先人達と同様に新たなサンタが誕生しました。去年のアルテラさんからサンタの力を引き継いだとある女神。一応常識人の範囲に入る彼女が『任せてください！そういうの得意デース！』と意気込んでいましたので今年はまだ平和に過ごせ

るだろうと思いましたが、まるで何かの因果に引きずられるかの如く事件が起きました。

……何故サーヴァントの方が季節のイベントに積極的になった瞬間すかさず事件が起きるのでしよう。何か大いなる力が働いているとしか思えないのですが。

では、まとめる意味でも今回の事件の概要を軽く記しておきましょう。アルテラさんからサンタの力を引き継いだ女神様——『ケツアル・コアトル』さんはその力により『ケツアル・コアトル（サンバ／サンタ）』となりました。ここで常人ならサンタでサンバって何ッ!?とツツコミを入れるところなのでしょうが私は比較的冷静でした。何故なら慣れてしまったからです。人間の適応能力は自然界において最強です。先輩はその性分として即ツツコンでいましたが大変見事なツツコミでした。

話を戻しましょう。こうしてサンバ——間違えました。サンタとなったケツアル・コアトルさんでしたがその際に良いケツアル・コアトルさんと悪いケツアル・コアトルさんに霊基が分かれたれてしまい、さらに悪いケツアル・コアトルさんが聖杯を持つて行ってしまったのです。その後、メキシコにて特異点が発生。そこでは真つ白の雪が降り積もり、人々が大いに沸き、格闘大会開催の準備が進められていました。流星はプロレスに魂——ではなく神性を捧げているケツアル・コアトルさん。悪者になってもその点は変わらないみたいです。

調査を進めるとその格闘大会で悪いケツアル・コアトルさんを倒して優勝しなければ聖杯の回収もできないということ、タッグトーナメントである大会の為にケツアル・コアトルさんのパートナーを探すことになりました。しかし、この大会に参加するのはサーヴァントの方々です。並の実力では優勝など到底できません。

そんな時でした。私達は今まで出会ったことのないサーヴァントに出会いました。かのシャルルマーニュ十二勇士の紅一点、少女騎士として名高い『ブラダマンテ』さんです。空腹で路地裏に倒れていた彼女を助けた私達は、ブラダマンテさんも悪いケツアル・コアトルさんに下されてしまったという話を聞き協力体制を取ることに。真面目で一生涯懸命なブラダマンテさんはとても好感を持てる方でした。どんなに辛い鍛錬でも決して弱音を吐かずに諦めない姿勢や、トーナメントを勝ち上がるにつれて強力になっていく対戦相手にも一向に引くこともない英雄の姿は尊敬に値する騎士道でした。

いよいよ始まるタッグトーナメント。次々に私達カルデアチームの前にサーヴァント達が立ちほだかります。しかし、強敵の前にケツアル・コアトルさんとブラダマンテさんは臆することなく真正面から立ち向かっていきます。戦いの中で深まる友情、僅かな時間で積む鍛錬、そして生まれる究極合体技による勝利。先輩はこれをジャンプ三原則と言っていました。跳躍の三原則とは一体何でしょう？

そしてついに悪いケツアル・コアトルさんとの戦いの時が訪れました。一進一退の攻

防、共に体力も魔力も消費していきます。決して負けられない激闘の中、ケツアル・コアトルさんとブラダマンテさんの合体技が炸裂。このトーナメントの中で極限まで磨かれた合体技により悪いケツアル・コアトルさんに勝利しました。悪いケツアル・コアトルさんはそのまま良いケツアル・コアトルさんの霊基へと還つていき、聖杯を獲得してこの特異点の騒動は終了しました。

とはいえ、安定と言いますか恒例と言いますか、先輩の戦いはここでは終わりませんでした。特異点から帰還した後、早速ケツアル・コアトルさんを引き連れて召喚へと赴きます。今回の召喚は10連のみです。少ないと思いますがこれには訳があり、少し前に先輩は天啓を得たと言わんばかりに瞳を輝かせ『エレちやんのターンキタッ!』と興奮気味に召喚したからです。結局エレシユキガルさんは来ず石だけが虚しく散つていきました。あの時崩れ落ちた先輩の姿を私は忘れません。『エレちやああああん!!!』と泣き崩れる姿は少し言い方が悪いかもしれませんが黒髭さんに通じる何かを感じました。素直にギルティです。

話が逸れましたね。お待ちかねの召喚結果なのですが、意外と言いますか物事にはバランズというものが存在するのか星4のサーヴァントが来て下さったのです。——ドラゴンライダーとしても名高い聖女。今回の特異点でも神託を下す神の如く私達へ勝ち上がる力を授けてくださった英霊。『聖女マルタ』さんです。すでにカルデアには

ルーラーのマルタさんがいらっしやるのですが、これで2クラスのマルタさんが揃ったことになりました。非情に心強いですね、先輩！

——先輩？ですからブラダマンテさんは今回は諦めてください。どんなに願っても聖晶石を切らしてしまった以上どうしようもありません。エレシユキガルさんシヨツクがリターンしてますよ。

えっ？なんですか？雷帝と一緒にブラダマンテさんの臀部について語りたかった？悲観しすぎて欲望ダダ漏れになってますよ。先輩、最低です。

「気のせいでしょうか。日が経つごとに先輩の変態度が上がってきてる気がします」

確かにシバの女王様やブラダマンテさんはとても綺麗な方々でしたし、シトナイさん

も大変可愛らしい容姿をしていることは理解しています。かくいう私もお三方には女性としても憧れを抱きましたから。

しかし、しかしですよ。いくら先輩が女性の、その……お身体のことに興味があるからとはいえあからさまなのはどうかと思います！ダ・ヴィンチちゃんは『年頃の男の子だから』と笑っていましたが私は駄目だと思えます！こう、何だかモヤモヤしますので！

「やはり私がきちんとは見守らなければいけませんね！」

伊達に盾のデミサーヴァントをやつていたわけではありませんので！先輩が変態の道に外れたりしないように先輩である私が気を付けます！

「……………しかし、戦いとなると全然違うのは先輩らしいです」

日頃、召喚結果に落ち込んだり、ムニエルさんや黒髭さんと悪だくみしたり、女性サーヴァントの方々に弱かったりしている先輩なのですが、こと戦闘となると一気に変わります。前者がまるで子どもっぽい先輩なのに対して後者は歴戦の戦士のような先輩。優しそうな面持ちから英霊の方々にも劣らない真剣なそれへと変わる瞬間は何度見てもドキッとしてしまいます。

「ですが……」

異聞帯を巡る旅が始まり先輩はどこか辛そうな表情を浮かべる時があります。人理

修復の旅は世界を救う戦いでしたが、今回の旅は世界を壊す旅。結果的にそこに住まう命を奪ってしまう旅です。先輩の背中に降りかかる重圧は計り知れません。もしかしたら、日頃の態度は精一杯の空元気なのではないかと心配になってしまいました。

「……先輩、私は貴方の誓いを守れていますか？ 貴方の背負うものを共に背負えていますか？」

思い出すのは最初の異聞帯を突破した後のこと。あの時の先輩は一見すると覚悟を決めたように見えました。ですが、私には今にも壊れてしまいそうに映ったのです。このままではきつと先輩はいつか深く傷ついてしまう、私達の前からいなくなってしまうという不安に駆られたのです。だから私は共に誓いを立て、背負うと伝えました。貴方の傍にいたいと、貴方の心も守りたいと。

全てが始まったあの日、伸し掛かる瓦礫の山の中で今にも消えてしまいそうな意識の中、私の手を握ってくれた時から抱いている想い。生命を奪う炎とは違う温かな熱。自分の命すら危険だというのに私に微笑みかけてくれました。あの瞬間から、先輩は私にとつて――

——ピピピピピッ!!

「——ッ！もうこんな時間ですか」

鳴り響く電子音にハツとなり意識が戻る。いけません、すっかり思考に耽つてしまつていました。そろそろ行かなくては先輩との待ち合わせに遅刻してしまいます。

すぐに日記を閉じて机に戻し、愛用のパーカーを羽織ると自室を出るとカルデアとほぼ同じように建造された廊下を歩く。構造は全く同じですから迷うこともなく食堂には到着します。時間は大丈夫そうですね。

「今日は何を食べましょうか？先輩は……何でも喜びそうですね」

皆の料理は美味しいから何でもいい！と子どもの様にはしゃぐ先輩を想像しながら私は笑みを零します。どんな料理が出てきても幸せそうに食べるんでしょうね。戦いはこれからも続きますが、せめてその笑顔を私は守りたいと思います。

——さあ、今日は何を食べましょうか。

絶対統治の世界で憎悪に囚われた人と邂逅したんだけど、変わらぬ想いこそ真実の愛だよな？

—— 大気が震えた。

—— 愛する者を喪って泣いた。

—— 絶対統治の世界に、女の叫びが木霊した。

—— 2000年にもおよぶ人類への憎悪が、ただ殺すと刃を向けた。

黒く濁った厭悪が殺意の雨となって降り注ぐ。天の青を白き樹枝が侵食し、太陽の輝きを遮ろうとその腕を伸ばしていた。

—— 『空想樹メイオール』。第1、第2の異聞帯とは異なり完全に開花した空想樹は、『虞美人』の真祖としての力も取り込み天災の如く魔力を振りまいていた。ひび割れた幹には星々の輝きと見紛う銀河が渦巻き、虞美人の叫び憎しみを声無き殺意にのせオレ達へと浴びせている。

「チイ!!流石に一筋縄じゃいかねえってかあ!!?オラア!!」

今回の異聞帯を巡るにあたり、助っ人として召喚されたモーさんが一瞬の隙をついてメイオールへと肉薄する。携えた燦然と輝く王剣の刀身が血のように染まり、赤雷を纏った斬撃を放つが、樹の幹を僅かに傷つけるに留まった。

「かつてえなクソが!!」

舌打ちの後、吐き出すように悪態をつくど、反逆の騎士は持ち前の身体能力でその場をすぐに離脱。刹那、彼女がいた場所へ毒蛇のような魔力が解き放たれる。あのまま回避行動を取らなければ、セイバークラスの対魔力といえど消し炭にされていただろう。

「技能使用。しゃあっ!!」

モーさんと入れ替わるように、自身に道術を使って強化した? が、メイオールへ渾身の火尖鎗を突き付ける。螺旋状の炎を纏ったその一突きは、しかし鉄壁の護りの前に弾かれてしまう。さらに、お返しとばかりに数本の魔力を束ねた極大のレーザーが、神殺しを成さんが如く襲い掛かった。

「——ッ!!」

目の前に迫った憎悪の濁流を、? は足元の風火輪を全力で回転させることで回避する。空を舞う妖精のように天を駆けた彼女は、再び攻撃の隙を探るようにその周囲を飛び始めた。

「——マスター、この状況いかがなさいますか!?メイオールの耐久性は相当なもの。こ

のまま持久戦を強いられてしまった場合、我々の魔力が尽きる方が早いですが！」

オレとマシユを背中に乗せ、天空を走るケンタウロス姿のサーヴァント——三国史において呂布と共に戦場を駆け巡り、屈指の名馬と呼ばれた『赤兎馬』。文字通り人馬一体と化した彼が、メイオールのレーザーの合間を駆けながら問いかけてくる。マシユもオレ達の背後を警戒しつつ、アイコンタクトで訴えてきていた。

いまだに自身の身体を侵食している毒の倦怠感に抗いながら、思考を巡らせる。この毒を飲んでしまい、随分時間が経った。本来ならば毒など全く効かないのだが、今回はコヤンスカヤが調達した特別製。ゆつくりとだが、確実にオレの身体を蝕んでいつている。正直、今ではもう満足に歩くこともできず、礼装の力もろくに使えないほど衰弱しきっていた。

こうして2人^{一人と一頭}の力を借りることで、ようやく戦場に居られるのだ。このまま戦いを長引かせてはサーヴァント達よりもオレの方が先に力尽きてしまう。

「……この均衡した状況を打破するためには、あのメイオールの頑強さを貫いて、一気に勝負を仕掛けるしかない。そのためには、超高火力の一撃が必要。今この場で唯一可能性があるとしたら、それはモーさんだ」

だが、メイオール——いや、もはやあれは虞美人の意志そのものか。彼女もそれぐらいのことは分かっているのだろう。先程からモーさんへの手数が増え続けているのが

証拠だ。今のところ彼女自身なんとか捌ききっており、流石というべきか反撃まで加えている。もつとも、それも時間の問題だろう。いずれ圧殺されかねない。

「はっはっはっ!! たかが大樹と侮っていたわけではないがやるではないか!! これを賜わす!! ひれ伏すがよいぞ!!」

そんななか、上機嫌に水銀を操り、刃へ盾へと変化させ応戦するのはこの異聞帯の王——『始皇帝』。異聞帯の世界を賭けた戦いの中で、オレ達のことを認めてくれた偉大な帝は、暴走した虞美人と空想樹を止めるためにオレ達との共闘をかって出てくれた。その力は絶大で、細かい傷を幹へと次々に刻んでいき、豪雨の様に降り注がれる魔力を完璧に防ぎ傷一つ負っていない。

——しかし、そんな彼でも足りないのだ。

「始皇帝も力を貸してくれてはいるけれど、彼の宝具はそもそも補助系宝具だ。自身を強化できたとしても、メイオールの持つ耐性が硬すぎて意味がない」

一見して絶望的な状況。しかし、まるつきり手がないというわけではない。要はメイオールの耐性をブチ抜けるサーヴァントを今この場に呼び寄せればいいのだ。幸い、今のオレにはあと一騎分なら召喚できるだけの魔力と体力は残っていた。

そして、該当するサーヴァントも思い浮かんでいる。ダ・ヴィンチちゃんやホームズからは、通信で霊基の調整は完了しており、いつでも呼べるとも言われている。

だが、彼の者を今この戦場に、この相手に、敵対させるのはどうしても躊躇われた。

本当は、彼の力を借りずにこの異聞帯を突破する気だったのだ。

だって、それはあまりにも残酷な再会だったから。

相手の傷口を容赦なく抉る、外道だったからだ。

我ながらこんな発想しか浮かばない頭に吐き気がするが、他に方法がない以上、オレはこの手段を取ろう。

非情に、残酷に、悪辣に。身も心も傷つける手段を。

きつと虞美人さんにはさらに恨まれる。それでも、オレ汎人類史達は負けるわけにはいかないんだ。

「力を貸してください!!——ッ!!」

令呪によって結ばれた魔力の繋がりを辿り、霊基グラフに刻まれたサーヴァントがこの場に召喚される。一瞬の召喚光の後、思い描いた人物が戦場に降り立った。

赤兎馬と同様に、ケンタウロスのような風貌の巨体。霊基の再臨を繰り返すたびに増えた6本の腕にはそれぞれ長刀を持ち、機械仕掛けの身体は緑色の魔力が脈動している。空中で蹄の音を響かせながら目の前へと現れたサーヴァントは、無機質だがどこか人情を感じさせる瞳でオレを見た。

「——召喚に応じ『項羽』、今ここに推参した。主導者よ、指示を求む」

この異聞帯で何度も激突し、つい先程最後の力を使い切って倒れた楚漢戦争時代の武將。中国の四千年という歴史のなかで、類い稀なる武勇を刻んだ伝説的な猛將。そして、虞美人との絆をなによりも大切に想っていた一人の男。

「——この世界で主導者の召喚に応じた際、何か意味があると考えていたが……なるほど。これこそが、私の成すべきことだということか」

「項羽さん、貴方には辛い選択を強いてしまい、本当にすみません……」

「その謝罪は不要だ、主導者よ。私はただ、未だ彷徨える妻を救い出す。それだけだ」

「……はい。貴方の助力に心からの感謝を」

赤兎馬からマシユの手を借りながら下馬し、項羽さんへと頭を下げる。非道な手段を選んだオレを、偉大なる武將は許すと言ってくれた。オレなんかより彼の方が辛いはずなのに、その言葉は温かかった。

ならば、彼の覚悟に応えなければいけない。それが、マスターとしてのオレの役割だ。

「——令呪を以て命ずる。項羽さん、彼女を——貴方の愛する人の護りを振り払ってくださーい！」

「承知した」

——瞬間、彼の足元が爆発した。令呪のブーストにより、さらに靈基を強化された歴

戦の猛将は、空を裂くように戦場を駆け抜ける。

ピタリと、殺意の雨となつて降り注いでいた魔力が一瞬消失する。誰よりも身を捧げた存在に気付いたメイオール!!!!の挙動が、その瞬間だけ止まっていた。

『ッ!!——ッ!!!!』

だが、すぐさま空想樹自体がブルブルと震え、ドス黒い憎悪が辺りを支配する。声帯など持たないはずのメイオールが憤怒の限りを叫び、まだ『雨でしかなかった』魔力が、上下左右と四方から項羽さんへ牙を向け始めた。

——消えてしまえ……!! お前は偽物だ。私の愛する人はもう居ないので……!!

黒い雨が、彼女の流す涙のように止めどなく戦場を濡らす。だが、項羽さんは決して臆することなくメイオールへと接近し続ける。完全に躲しているわけではない。行動不能にならないギリギリのラインを見極めているのだ。オレには、まるで彼女の痛みや悲しみを受け止めているように見えた。

「——では、決着としよう」

重圧な声が響いた。迫る項羽さんに気付いたモーさんが驚きながらも、小さく舌打ちしてその場を譲る。? ☒はどんな状況になつても対応できるように周囲を飛び回り、始皇帝は小さく笑みを浮かべ、自身の操る水銀に乗り距離を取った。

「オ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

項羽さんは応えない。ただひたすらに全力でぶつかり、メイ彼女オールの守護壁を削り続ける。携えた剣が折れ、機械の身体が朽ちようとも、項羽さんは止まらない。

——彼にとって戦う理由など単純なものだった。汎人類史や異聞帯などではない。世界中の人々を救いたいわけでもない。

——ただ、愛する人がそこにいるから。絶望に囚われ、泣いているから。

——機械の身体で造られた彼が救うのは世界ではない。たった一人の、愛する人のみ。

「——ッ!!ハアアアアアアアッ!!」

そして、ついに項羽さんの宝具がメイオールの護りを全て破壊する。同時に、ギギとスクラップのように崩れ落ちる項羽さんは、一度だけ焦点の合わない視点をオレ

へと向ける。

——イマ、ダ

「——ッ!!サーヴァント最大火力!!この隙を絶対に逃すなあッ!!」

瞬間、モーさんの赤雷を纏った魔力が、?の燃え上がる火尖鎗が、赤兎馬さんの弓より射られた大槍が、始皇帝の水銀の波が、メイオールへと突き刺さる。その全てを、完全に無力化された状態で耐えきることなど、空想樹には不可能だった。

「先輩、お身体の調子はいかがでしようか？一応バイタルは正常値を示していますが、何か気になる点などありませんか？」

「いや、まったく問題ない。正直半信半疑だったけど、ちゃんとあいつも契約は守ってくれたみたいだ」

時間は過ぎて、現在ノウム・カルデア。シン国での戦いから5日が経過し、オレの身体を蝕んでいた毒も、検査の結果完全に消滅していた。

「さて、じゃあ行こうかマシユ」

「いつもの召喚、ですね。準備は既に完了してます」

あの方も召喚部屋で待機しているようです、とマシユは最後に付け足す。彼に召喚に挑戦すると伝えたのは、彼が霊基を修復しマイルームを訪れた時だ。あれはシン国から帰還してから2日目だったはずだから、3日前ということになる。まさか、ずっと待機していたのか？

「それにしても、虞美人さんは召喚に伝えてくれるのでしょうか？」

「分からない……。彼女は人間を恨んでいる。始皇帝が英霊になることを提案してはくれたけど、それに応じるかは虞美人さん次第だ。だけど——」

——きつと彼女は会いたがっている。世界すら巻き込んで守ろうとした、最愛の人

に。

マシユの問いかけにはつきりとした返答はできなかつたものの、一種の核心があつたオレは、新しく建造された召喚部屋へと赴く。扉の前には、まだ見慣れていない大きな体躯。あの戦いで傷（故障？）はすっかり修復された項羽さんが、眠るように静かに瞳を閉じていた。その閉じられた瞳が、オレ達の気配を感じたのかゆつくりと開かれ光を宿す。

「お待たせしました、項羽さん。すみません、回復が遅れてしまつて」

「今大事なのは主導者の休息。この程度の時など、私には瞬きに過ぎぬ」

「そう言つていただけると幸いです。早速召喚を始めたいと思います」

「承知。私も同行させてもらおう」

もちろんです。というか、今回に限っては貴方もいなくては。

簡単に言葉を交わしたオレは、マシユと彼と共に召喚部屋へと入室する。カルデアと同じように設計したというが、流石は魔術協会三大部門の一角アトラス院。術式だけでなく内装も完璧に同じにしたらしく、どこか懐かしさを感じた。

だがそんな懐かしさを感じると同時に、どんなに似せても幾度となく召喚に挑戦をしたあの部屋ではないことが、少しだけ悲しくなつた。

「——つと、いかんいかん。これから召喚に挑戦しようつてのにセンチになつてんじゃ

ない」

いつだって召喚には最大の警戒を。基本中の基本だ。こう、バーサーカー的な意味でも爆死的な意味でも。

今回挑戦するのは、もちろんあの女性——『虞美人』さんを召喚するためだ。彼女が人理の護り手に本当になってくれたのかは定かではないが、可能性はある。なによりここには項羽さんがいるしね。

「じゃあ、早速10連目いきます」

「先輩、頑張ってくださいー！」

「……………」

バラバラと聖晶石を30個召喚サークルへと注ぎ込む。すぐさま、あの部屋で見慣れた召喚光が辺りを照らし出し、礼装やら、すでに召喚済みのサーヴァント達が現れる。生憎、彼女のクラス暗殺者を示すクラスカードは出現しない。

「これは……………」

「う、うーん……………」

「……………」

残念、この10連では来てくれなかったようだ。

……………というか、さつきから黙っている項羽さんが地味に怖い。えっ？なに、どうした

の?もしかして怒ってる?嫁さん召喚できない不甲斐ないマスターに対して怒ってる?
?なんか緑色の魔力がピカピカしてるんですけど。

ヤ、ヤバイ……………!なんとか取り繕わなければ……………!

「まっ、まあ?初っ端からあの意固地な先輩さんが来るとは思ってたませんし?なんなら、
いつもどおりですし?」

「……………先輩、項羽さんからもものすごいプレッシャーを感じるんですが」

「シイイイイ!!動揺している姿を悟られるなマシユ……………!項羽さんはオレ達に期待して
くれているんだ……………!なんとしても成功させるんだ……………!」

「コオオオオオオオオオオ……………」

「先輩、先輩。項羽さんがなにか気を溜めてます。すごくピカピカし始めてます」

ス、ステイステイ!!落ちついてください項羽さん!まだ大丈夫!まだ石はあるからも
う少し耐えて、お願い!

「さ、さあ!気を取り直して次の10連いくぞー」

「そ、そうですね!ここからが本番ですよね!」

「……………(シユウウウウウ)」

よかった、ピカピカが弱くなった……………!

背後から感じる圧倒的威圧感にビビりつつ、オレは次の10連分の石をサークルへと

放り投げる。再び回転の後、いくつかの礼装やサーヴァントを吐き出すも、一向に金色のアサシンカードは来ない。

「……………」

「あつ、あつれー!?今日は調子が悪いのかなー?おつかしいなー」

「先輩、動揺しすぎて声が裏返ってます……」

「いや、違うから。これメツフィーの真似だから。急にやりたくなっただけだから」

ああつ!背後からの視線がすごい。メツチャ見られてるの分かるもん!あの人目からビーム出てんじやねえの!機械の身体だからありえるつて!

「あつ!先輩!きましたよ金色回転!」

「おおおつしやああああ!!空気読める先輩大好き!!」

良かった!マジで良かった!このまま頭に風穴空くんじやないかと思つた!!来てくれてありがとう!お礼といつちやなんだけど、これからここで項羽さんとイチヤイチヤするがいいさ!!

「あれ?ですが、このクラスは……」

助かったことに歓喜しつつ、2人のこれからのカルデア生活を想像していると、マシユがカードに刻まれている刻印に疑問を持つ。

えっ?なに?今更怖いんだけど、と震えながら確認してみると、刻まれていたのは――

「バーサーカー狂戦士だと……!!？」

「これは……虞美人さんではありませんね」

現れたのは期待していた暗殺者の刻印ではなく、まさかの狂戦士。つい先日項羽さんを召喚した際にも見た、あのクラスカードが光の中から現れる。

「コオオオオオオオオオオオオオオオオ……!!」

「ああっ! さつきよりも項羽さんの溜めが強くなつて、ものすごくピカピカしてます!」「ごめんなさい! 何かの手違いなんです! わぎとじやないんです!!」

ピカピカ再び。アワアワしながらなんとか猛将を抑えようと躍起になるオレ達。つたく!! 誰だこんな時に召喚された空気読めないバーサーカーは!!

「!!」

鳴り出してしまいました！」

「おいしいいい!!なんでオレも原因の1人になってんの!?!大合唱かちくしようめ!!」

何故かどつちがより雄たけびを上げれるか勝負する猛将と大英雄。だんだんと大きくなつていくアラートにてんやわんやするマシユ。もう何からツツコめばいいのか分からず自棄になるオレ。

ダ・ヴィンチちゃんやムニエルさんをはじめとするカルデア職員が駆け込んで来るまで、このカオスな空間は続くのだった。

「落ち着きましたか、項羽さん」

「謝罪しよう、主導者。突然の強者に将の血が高揚し、少々熱がこもり過ぎてしまった」

「少々」

いや、大惨事やったやん。貴方、前に自分がなぜバーサーカークラスにあてがわれたのか分からないって言ってましたよね？バリバリの肉体派バーサーカーですよ。演算はどうした演算は。

「とりあえずヘラクレスさんには強化のためにお引き取りいただいたので、マシユが戻ってきたら次に行きます。あと、無言でピカピカするのやめてください。メツチャ怖いです」

「私も虞との再会に冷静さを欠如していたようだ」

「あくまで冷静をお願いします。あとガン見はやめてくださいね」

マスターの心臓がもたないから。こちら一応病み上がりなんですからね。

ジトーと項羽さんを見ていると、管制室に行っていたマシユが戻ってくる。

「先輩、アラートで止まっていた召喚サークルが復旧しました。再開してもいいそうです」

「ありがとうな、マシユ」

「汝にも手間をかけさせてしまった。謝罪しよう、盾の少女」

「あつ、い、いえ！そんな、これぐらいへっちゃらです！」

（・・・）つばい顔をする項羽さんの態度に、マシユは慌てて返事をする。この人、機械の身体でなんか常時ピカピカしてるし、怖い顔してるけど、意外と表情豊かだよな。

興奮すると目が光るし、結構分かりやすい。

「じゃあ、再開しますよ。よっこいせ!」

一応最後の10連分の石をサークルへと放り込む。召喚光を眺めて召喚の過程を見届けているが、先程とは違って項羽さんからの鋭利な視線は感じない。どうやらちゃんと冷静でいてくれているようだ。

「あつ——!!来ました先輩!金色反応です!」

「——ついに来たかッ!」

マシユの声とともに、召喚サークルから感じていた魔力が高まる。ビリビリと部屋の空気が震え、令呪が燃えるような熱を持つ。間違いない、これはサーヴァントの中でさらに上級の反応だっ!

——つて、んん?

「おお、虞よ……むっ?」

「あれ?」

「あ……(察し)」

現れたのは金色のクラスカード。そこに刻まれるは暗殺者——ではなく、『騎士』の刻印。

「あの一、先輩これは」

「皆まで言うなマシユ……………」

「……………」

だから、黙らないで項羽さん！気持ちには分かる！すっげえ分かる！オレもメルト召喚に失敗した時そんな感じだったからすげえよく分かる！でも、お願いだから無言でピカピカしないで！怖いって！

というか、これもしかして『蘭陵王』さんか…………？先輩じゃなくて、彼女のサーヴァントの方が来たのかな。まあ、なにせよ。来てくれたのは大歓迎だけどな。

「——我が名はアルテラ。フンヌの裔^{すえ}たる軍神の戦士だ」

が、現れたのはあの美青年ではなかった。褐色の肌に幾重にも刻まれた印。白い髪の上にヴェールを身に着け、その下で揺らめく大きな瞳には星の輝きを宿している。手に

は虹色の光を放つ剣——『軍神の剣』を持ち、近年ではサンタにまでなった破壊の化身。『良い文明は許す。ただし悪い文明、テメーはだめだ』でお馴染みの絶対破壊ウーマン。アルテラさんの招来だった。

「そうきたかああああああ!!」

「アルテラさん!?!星5のサーヴァントじゃないですか!?!」

まさかのすり抜け召喚である。

「久しいな、マスター。ようやく私を呼んでくれたこと、感謝するぞ」

「あつ、う、うん。色んなところで会ってましたからね。こちらこそ、召喚に応じていた
だけありがたいとございます」

最初の出会いは鮮烈だった。いきなり登場したかと思えばレフ——フラウロスを
真つ二つにし、オレ達と死闘を繰り広げた。記憶に残らないわけがない。

そんな血生臭い出会いだったが、その後色々な特異点を巡る旅の中で、実は純粹で無
垢なだけの少女だということが分かった。つまり、力の使い方さえ間違わなければ基本
的に良い人である。

「私の力、これからはマスターのもとで存分に振るわせてもらおう。ところで……」

彼女の表情筋はあまり動いてくれないが、それでも僅かに口元を綻ばせた後、オレの
背後を指さす。

「その大きな、お前。見ない顔……顔？人間か？」

「いかにも。姓は項。名は籍。あぎなを羽。主導者からは『項羽』と呼ばれている。この姿は訳ありである」

「なるほど。いやなに、召喚に応じて来てみたものの、いきなり大きな凶体が目に入ったのでな。警戒してしまった、すまない」

「かまわぬ。我が巨軀が他者へ恐れを抱かせることは認知している」

「うん、そうだな。大きな身体というものは、知らないうちに他者を圧迫してしまう。私にも何故か分かる」

「不可解。汝は決して巨体とは呼べない」

「私にもよく分からないが、たぶんお前と同じなのだろう。訳あり、だ」

「承知。追究は避けよう」

「ありがとう。お前は良い奴だな。私はアルテラ、これからよろしく頼む」

そう言つて握手を交わす両者。あれ？意外とこの2人相性良い？アルテラさんは悪い文明絶対破壊するウーマンだし、項羽さんも山引っこ抜くぐらいだし、破壊系サーヴァントつてことで意気投合してる？

しかし、結局虞美人さんは来てくれなかったか……。やつぱり人間に味方するのは嫌だったのかな。それとも、まだ心の整理がついていないのかな。

もしくは——最後の戦いで項羽さんと戦わせてしまったこと、恨んでんのかな……。

——猛将との語らい——

「——項羽さん」

「主導者か。このような時間にどうした。ここに陽の輝きは無いが、程無く丑の刻へと

至る。早々に休息に入るがよい」

既に夜も更けた時刻。もつとも、ノウム・カルデアから空など見えるわけもないから、あくまで時計上の感覚だ。そんな時刻に、オレは項羽さんの下を訪れていた。

「お氣遣いありがとうございます。ただ、少しお話がしたくて」

「——我が妻に関連したものと推測」

「……流石です。それも演算ですか？」

「否、演算ではない。汝の表情から判断したことだ」

「そんな顔してますか……」

どんな顔をしているのだろう。きっと、随分と暗い表情をしているに違いない。そんな自虐とも取れることを考えつつ、オレはメイオールとの戦いを思い返す。

あの戦いで勝つためにとつた手段、間違っていたとは思わない。こちらにだって切れる手札は限られていたし、一番の打開策であったことは事実だ。やらなければこちらが殺される状況で、結果的にオレ達は勝った。

——だけど、感情は別なんだよ。

「——虞美人さん、泣いていました。そりゃそうですね。誰だつて自分の大切な人と戦いたくない。そんな当たり前のことを分かかっていて、オレはあんな手段をとつたんです」

「汝の迷いは不要だ。あれは戦、互いの存在世界を賭けた決戦であつた。然らば、汝は勝利を誇るがいい」

「ですが……」

「私こそ、汝に礼を言おう。鉄と鋼で構成されたこの躯体、我が妻の傍まで導いてくれたことを。主導者の導きにより、囚われた我が妻への救済を達成できたのだ」

「項羽さん……」

機械の身体に、人間の精神。そんな特例中の特例で召喚された項羽さん。彼がオレの召喚に応じてくれたのは全くの偶然だったけれど、彼自身にとっては満足のいくものになつたらしい。

彼だつて妻の涙など見たくなかつただろう。それでも、憎しみや恨みに囚われた愛する人を放つておくことなんてできなかつた。だから、彼は剣をとつたのだ。例え傷つけても、それでも大切だから。愛しているから。だから戦つたのだ。

「——項羽さん、必ず貴方の下へ虞美人さんを連れていきます。貴方とオレを繋いでくれるこの令呪に誓つて、必ず」

「感謝する主導者よ。ならば、私は汝のために我が機能を十全に発揮することを誓おう」
——いつか必ず、2人を再会させる。それが、今のオレに出来る精一杯のことだから。